

伊東静雄七周忌記念号



果樹園

第38号

追人とい口笛
詩人と口笛
奇人とい口笛
覚束ない記憶
その一
思ひ出

清栗山文雄
美堂正一
堀ノ内
田中克己
池田潤三
庄野三勉

絵のなかで
伊東さんのこと
早稲の春
美しい大きな魂
日のあたる
グラウンドで
療養中の伊東先生
受難者
文体について
妻の風邪
鯨視と陶酔

浅野雄晃
島尾敏
森東幸子
大沢茂
池野邦樹
福地三清
芳野三樹
服部三樹
山根忠雄
堀口太雄
上高根二郎
小高根二郎

伊東の文学歴

- 昭和三年十月…大阪三越主催、大塚俊徳の御大
礼記念児童映画脚本募集に「美
しい朋達」一等当選。
- 昭和四年三月…京大國文科首席卒業。卒業論文
「子規の俳論」。大阪府立吉中
学校に就職決定。
- 昭和五年五月…福田清人、蒲池歌一氏等の同人
雑誌「明暗」に参加。
- 昭和七年六月…青木敬齋、原野栄二氏等と同人
雑誌「呂」創刊。
- 昭和八年八月…保田与重郎氏の主宰せる「コギ
ト」に作品を発表し始める。
- 昭和十年二月…『日本浪移派』同人となる。
- 昭和十年十月…処女詩『わがひとに与ふる哀歌』
をコギト発行所より出版。
- 昭和十一年三月…『わがひとに与ふる哀歌』第二
回文芸汎論賞を受く。
- 昭和十三年六月…『新日本文化の会』の会員とな
る。
- 昭和十五年三月…詩誌『四季』の同人となる。
- 昭和十八年五月…『夏花』第五回透谷賞を受く。
尚、同賞を田中克己氏の「楊貴
妃とクレオパトラ」も受く。
- 昭和十八年九月…第三詩集『春のいそぎ』を弘文
堂書房より出版。
- 昭和二十二年二月…第四詩集『反響』を元元社より
出版。
- 昭和二十八年三月…十二日午後七時大阪府立国立病
院長野分院にて死去。享年數へ
年四十八。
- 昭和二十九年二月…郷里槻原市公園に詩碑建立さる
撰辭、柳菫三好達治氏。

追 想

栗山理一

○鷹の目

伊東さんは短軀瘦身であった。しかし、酒も一緒によく飲んだから、病弱という印象は残っていない。もつとも、終始端然として姿勢をくずさないというタイプではなく、しばしば横になったり、席を変えたりして動いていた。同じ姿勢ではやはり疲れたのである。後に死病となった呼吸器の疾患はまだなく、ただ胃腸が弱いように見受けられた。その伊東さんが欄干などにひよいと飛びあがり、両膝を抱きかかえるようにしてうずくまるのを、何度か見たことがある。酔余のこともあるが、そうでない時もあった。芸当というほどの危険も感じなかったが、なんとなく身軽な安定感があった。そんな折、数尺の高みから放つ伊東さんの射るような視線は、獲物をねらう鷹の目のような、なんとも精悍な気合にみちたものであった。

○毒 氣

大阪時代、週に一、二度は会うことになっていたが、伊東さんが私などに対して自家広告

らしい口吻を洩らしたことはたえてなかつた。さりとして謙抑であったというわけでもない。話題の多くは、すぐれた作家や作品を推称することで、その尽きることのない饒舌も楽しいものであった。

そんな伊東さんから倨傲という印象を与えられたことが一度だけある。どういふ事情であったか、もう忘れてしまったが、二人で上京し、青山の表参道にあった宿舎に泊ったことがあった。その夜、一人の白面の青年が伊東さんを訪ねてきた。夕食をすませたばかりのところだったので、その青年は食堂に案内されたが、佐藤春夫氏に師事して詩の勉強をしているとのことであった。伊東さんも初対面らしい。私は少し離れた椅子にもたれ、茶をすすったり、煙草をふかしたり、夕刊を読んだりしながら、聞くとともに二人の会話を耳を傾けていた。その時の会話の内容はほとんど覚えていないが、ただ、伊東さんの態度がかって接したことのないほどに倨傲尊大であったという記憶は、今でもあざやかによみがえってくる。それは、今日の真の詩人は伊東静雄ただ一人あるのみといった風な、傲岸きわまる内容であった。青年が辞去した後で、私がいささかその不遜をなじる気持を示したところ、伊東さんは、ああいう若い青年

にはあれ位でちようどいいんですよという返辞をした。その青年が林富士馬君であることを後日になって私は知り得た。これだけは、今になっても後味のよい印象とはいえない。伊東さんが不用意に吐き出した毒気というものであろうか。

○新大阪ホテルの一夜

いつの年、何の主催であったか、これも忘れてしまったが、大阪で文芸講演会があった。保田与重郎氏も講師の一人として下阪するといふので、伊東さんに誘われて、私も会場に出かけた。保田氏の講演がすむと、その宿舎である新大阪ホテルまで車で同道し、ロビーでお茶を飲んだ。雑談をしていると、小林秀雄氏の顔が見え、保田氏と一言二言立話をおかずと別席へ離れてしまった。朝鮮の講演旅行からの帰途ということだったらしい。保田氏がちよつと席をはずして自分の部屋へ行く後姿を見送りながら、伊東さんはしきりに小林氏と較べては保田氏の風姿挙措をほめそやし、嬉しくてたまらぬという風であった。小林氏は洋服であり、保田氏は和装であった。そのころ保田氏は三十歳前後であつたらう。ロビーでただ一人和服をつけ、額に長髪をたらし保田氏の若々しい風姿に伊東さんは何を見出したというのであろうか。

その後で、浅野晃氏も席に加わることになつたが、またまた、鑑真和尚の像を拝して詠んだという芭蕉の「若葉しておん目の零ぬぐはばや」の句について、保田氏と浅野氏の見解が岐れてしまった。伊東さんは口をはさんで保田氏に組み、浅野氏の解をしりぞけた。

詩人と口笛

清水文雄

雑誌「祖国」は昭和二十八年七月に伊東静雄追悼号を特輯したが、そのなかで私は、伊東さんと知り合ったのは、昭和九年の、たしか夏だったと思ふ」といつてゐる。ところが、これは私の記憶違ひであった。最近、古い日記が見つかったので、それを見ると、昭和十一年八月二日の条に、私はこんなことを書いてゐる。

……難波駅まで亀（注、大阪居住の舎弟）に見送られて、栗山の家に至る。十二時少し前。

蓮田がきてゐる。栗山は学校の蹴球試合を見に行つてゐて留守、やがて帰宅。蓮田は思ったより元氣。鼻下に髯を立ててゐるのには驚かされた。「これでない

といけない。必要に迫られたのだ」とも言つてゐた。

栗山の所の光嬢は可愛いさかり。笑顔をもつて一家内を明るくしてゐる。

夕刻、池田が詩人伊東静雄氏を伴つて来る。一同ビールを飲みながら、快談する。伊東氏大いに気焰をあげ、自作の詩や、他人の詩を朗吟して興をそへる。純粋の詩人らしさに打たれる。池田と伊東氏帰る。

十二時過ぎ就寝。

栗山理一は当時堺中学に教鞭をとり、学校に余り遠くない所に家を持つてゐた。蹴球試合云々は、彼が蹴球部長で、その日丁度対校

（元「文芸文化」同人
成城大学教授）

マッチか何かがあつて、監督に行つてゐたものであつた。池田勉も大阪の今宮中学に勤めてゐたので、同じく住吉中学の教諭であつた伊東氏とは、栗山同様既に親しくしてゐた。遙々台中商業学校から帰つて来た蓮田善明と、東京の成城学園に勤務してゐた私とが、この日栗山の家に落ち合ひ、そこへ池田が伊



高野遍照光院にて（昭和 12. 8）
前列左から、伊東、蓮田善明
後列左から、栗山理一、清水文雄、池田勉氏

東氏を案内してくるやうに、お膳立てが出来てゐたわけである。蓮田も私もこの時が伊東氏との初対面であつた。然し、その夜五人はビールも手伝つてか、早くも意気投合し、伊東氏の朗吟もきくことが出来たものらしい。

その夏、我々四人は高野山に籠つて、京都のH書店から出る作文教科書の編纂を始める

ことになってゐた。宿坊は刈萱堂に近い遍照光院と定められてあつた。奥の十畳と八畳の二間が、我々に当てがはれた。北側には低い欄干のついた瀟縁を隔てて庭があり、山裾を切り取つて出来た崖が、前方を遮つてゐた。金魚の栖む小池が中央にあり、萩や紅の花が咲き、夕方になると月見草も花をひらいた。どこかで鶯の音なほもしてゐるような静寂境であつたが、精進料理に明け暮れる二十日近くの籠居は、やがて四人を退屈させ、鬱結した態情をもてあまされた。

伊東氏の名は、山の生活の間、仲間の会話に何度か出てきた。特に初対面の蓮田と私は伊東氏から或る異常なものを感じとつたことを語り合ひ、すでに交遊の始まつてゐた二人から、貪婪に何かを嗅ぎ出さうとつとめたやうに記憶する。

翌十二年夏も、やはり遍照光院で同じ仕事の続きをしたが、我々四人はこんどは客分として伊東氏を山に招いた。時に、採用文の選択などについての伊東氏の短い意見は、我々の仕事に重要なヒントを与へた。

伊東氏は、我々が仕事をしてゐる間、所在なさうに煙草を吸つてゐることもあつたが、瀟縁の細い欄干に、小鳥が梢にとまつた感じで、小柄な体を器用に乗つて蹲つてゐ

ることがあつた。そして空ろな視線を庭の方にやりながら、嘔吐と口笛を吹くのであつた。若き日の寮歌でもあらうか、仕事に専念する振りによそほひながら、四人は心々に、詩人の吹き鳴らす哀愁のメロディーに聴き惚れてゐた。

伊東氏の第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」をもらったのは、その年であつたか、前年であつたか判然しない。
(元「文芸文化」同人
「広島大学教授」)

奇縁

美堂正義

南海高島屋の喫茶室は早春の午後の陽射しが暖く射込み、和やかな雰囲気醸し出してゐて、友人Mと伊東静雄氏と鼎座してゐる周囲にも、伸びやかな空気が漂つてゐた。第一印象は中学校時代のS先生に、顔も体付も良く似て居られ、親しみを感じながら話することが出来た。だが最初はなかなか口を切り出すことが難い思ひをしたが、そのうちに打融けてはづんで来た。

奇縁といふものは不思議なもので、BKで「現代詩の朗読と解説」の放送があり、西下した詩人を迎えて、詩人大会が開催され、友人Mと参加した。その時初めて尊敬してゐる

必ず認められます。あなたも良い詩を書いて詩集を出さない。決して無駄ではないと思ひます。」また「私は和漢朗詠集を読んできますが参考になります。朗詠集のリズムはいいですよ。良い詩には必ず心良いリズムがあり、それだけでなくは良い詩とは云へませんから、岩波文庫にありますのでお読みなさい。為めになりますよ。私は詩が出来たら必ず大書し、壁に張つて繰返し／＼朗読しますが、朗詠と云つた方がいゝでせう。日を経れば反省して、氣に入るまで語句を訂正し、推敲を重ねますが、一ヶ月もかかるものもあります。」

この言葉は氏の作品の秘密の一端を窺ひ得た思ひであるが、**べ**切に追はれてそこそこに出す私には、驚きであり、後めたい感じを持ったが、此の屈折の多いリズムは、この様にして生まれたのだと理解出来たが、今に至つても更められない性癖をもて余してゐる。短い時間であつたが、再び会ふ機会を楽しみお別れしたが、遂にそのことは永久に望みを断たれたいま、その時のことを懐かしく思ひ出してゐる。

その翌日従兄津村正光の手引きで、故松下武雄氏と逢え、「コギト」の存在を知り、その後会員となつて諸氏の作品に親しみ、氏の関懐のある「コギト」「四季」の流れをくむ

「果樹園」の同人に加つてゐることは、不思議な奇縁ともいふべきで、あの時の氏は夏花の油の乗つてゐる時代であり、今私は当時の氏よりも二十年位年長であるのに、非才で一冊の詩集も持たず、省みて恥ぢてゐるが、今も残念なのは、田中克己氏に御願ひして「わがひとに与ふる哀歌」を入手したが、友人に貸して紛失したことで、再び氏に会ふ日が無いと同様に、再び手にすることは出来ないのを悲しんでゐる。

覚束ない追憶

堀ノ内 歴

その頃十六才、私はF氏の身近にいた。其の書齋に一冊の薄手で大版の、危ぶげな詩集を見付けた。「わがひとに与ふる哀歌」だ。其は手に取るなり、**呼え／＼**した言葉で鋭く刃物のように胸を衝いて来たのを、今も覚えてゐる。目を追つてそれは心に拡がってゆく。

F氏は又其頃から、伊東静雄と云う詩人（氏はそう呼んだ）と急速に親しくなり、常F氏から出向くのだが、其の後で会つて來ての始終をば、声弾ませ愉しそうに細かしく傍の私共若輩に語り聞かせる。当時はF氏も

萩原朝太郎氏の姿を見て、大変嬉しく思ひ友人と顔を見合せたが、自己紹介の時に、「私は伊東静雄です」との声に注視した。それは氏の第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」を、萩原朝太郎氏が激賞された一文を読み、伊東氏はどんな人柄の人であらうかと、その風貌に接しられる日を期待してゐた。当時詩壇の公器と自称して二三発行されてゐたが、現在でも同様で、田舎住ひではそれらに散見しない詩人でなければ知る由もなく、それらの詩風でなければ駄目だといふやうな浅薄な先入感を持つて信じてゐた。萩原朝太郎氏に依るのでなければ、氏の名前も知ることはなかつたであらう。私は氏の処に行き面会を懇願して快諾を得て、日時場所を決めてお別れして、この日の会見となつた。

伊東氏は当時元氣よく、萩原朝太郎氏に認められたことを非常に喜んで居られ、「萩原先生が出席されるので出たのです。常日頃よく新人の作品に目を通して居られ、たまたま私の詩集が拾はれたのだと思ふ。未知の人で予期して居ないだけに、お褒めの批評を受けた時は驚きもし、喜びも一入大きく、詩に對して自信を持ち、一段と張合ひが出て、意慾的に書いて見たいと思ひます。詩集を出さなくてははいけません。良い詩を書いて居れば

年は若く傲岸不尊の風で、年長者には鬭争心を起こし易い人に見えたのに、伊東静雄との場合は先方が押つ被せる風なもの言いらしいにも抱わらず、不思議とF氏は逆な親愛感でそれらの言われ方を受け取つてゐるらしいかつた。先生が全く飾らぬ直さだつた事に依るだらう。日頃からF氏は、或る目的の為に生涯をかける決意、を語り廻つてゐたが、伊東静雄は其を言下に、「そんな報われぬ事は止めて御馳走を喰べて肥りなさい。損だから」と片附けると云うのだ。私は何時もF氏の話を素知らぬ態で聞き、実は伊東静雄の談の部分に密のよう集めようと、全身を耳にしてゐた。あの透徹した高みにいる「哀歌」の詩人への私の傾倒が、何故かF氏にさえ知られたくはない。そつと秘めて置こうと決意してゐたのだ。F氏に頼み一緒に伺候する等の考えは愚かしく思われた。ひどい自己嫌悪に陥つてゐた時だし遠い讃仰の方が好ましかつたからだ。それに又F氏談話での伊東静雄は、よく牙えて伝えられ、「病的な神経質者」と云い／＼するF氏の評にも抱らず、伊東静雄が生々と心ぞこから愉しげに振舞うらしい様子が、私には手にとれるようだし、又純一で柔軟、神の如く素直な一つの人格を私で作りに上げてゐた。F氏の行く何の度にも必ず

「君飲みに行きましょう。」とむこうから居酒屋へ連れ立つのだと云ひ、若れも微蕪での交情だと云う事であったが。

暫らく後「夏花」が出た。その中で伊東静雄はF氏を一人遊びの無心の童児に托して歌っているのである。私は思わず膝を叩いていた。

F氏の話に生かされる伊東静雄の天衣無縫さは、実はF氏を前に置いて詩人が心おきなくする自己解放の時間であるに異ならない。

一体F氏は衝動的個性を露呈させた人で、わが詩人が其の中で見ていたものは、猪突猛進の正直さの安心感と、そして淡い滑稽味であり、慈しみの念すら禁じ得なかつたのに異なれないと思われた。その時私の疑惑は氷解した。

「夏花」は又私の傾倒を一層決定的のものにし、短章な全作品はすぐ覚えて快よく、私は悴せになり、もう気持を誰にも秘めなくてもよい物となった。私は自分を開放し始めた。

間もなく訪れた夏の或る日、三国ヶ丘の伊東先生を「君も来ないか」と云うので私はF氏に従った。お住居は清楚な田園地に控え目に立っていた。玄関口で先生は驚りの無い微笑で招じられ、一瞬放心して私はお顔を見つめていた。その初対面の渋く小さいお顔は、見ていると実は其迄私が一人で描き続けて熟知している顔だと、即座にそう思えて来た。

それ程明かるく親しい顔であった。その日ずっと先生のお顔ばかり傍で眺めていたが、見飽く事を知らぬ程に。時々悪戯っぽく射す瞳の光も、奇異に底なく透明なその笑まいも、凛々朗々として凡て美しく思われたが。

戦後私がバラック住居の極貧の身となった時、其処へ突然伊東先生は足曳いて訪うて下さったが、見ればお疲れの色は重く、私は只オロ／＼した。寝付かれる寸前の八月の事。「貴方だけでも金を儲けて下さい。決つて楽をして下さい。」そのお声は悲痛に胸を撃つたが。逝かれて七年になる。人に云わぬわが暗い涙は何時か透明になっていたのだ。

その一言

田中克己

正直なことをいふと、伊東静雄とのつきあひではずいぶん神経を使った。これは比島で戦死した中島栄次郎が、まだ生きてゐれば、同感し、かつこまごまと実例をあげてくれると思ふ。中島も私も伊東と同じく詩人でありすぎたからかもしれぬ。ただ私の一言で、反対に伊東をびっくりさせ、その運命をさだめたやうにおぼえてゐるので、神経を使ったの

は、伊東の方でないかと、すまなく思ふ時がある。

それは私が昭和十三年に上京したあと、伊東も東京に転任したくなり、運動にやつて来た。どこだったか、これも小高根氏にはもうしらべがついてゐるだらうが、私のいま勤めてゐる成城あたり、蓮田善明氏のおかげでほぼ内定したのではなかつたかと思ふ。伊東は上機嫌で、私と新宿を歩いてゐた。いまもある高野フルーツパーラーの前あたりで、私は急に伊東の方をふり向いて、こはい顔をしていた。「あんた東京でそんなことをいつてたら、居れなくなりすよ。」伊東は急にかなし顔をした。伊東が何をいつて、私がたしなめたかは忘れたが、その時の顔だけは今もおぼえてゐる。

伊東はこのあと大阪へ帰って、出来てゐた筈の東京転任はつひに実現しなかつた。私にはがらされて、自分でこの話をこはつたのではないかと思ふ。昭和十四年から十六年までの間のことで、この期間の日記を私にもたないので、はっきりと云へない。

伊東がこの時、転任してゐたら、その生涯もずいぶん変わったと思ふ。どんな風にかはつたかはともかく、私は悪いことをしたと思つてゐる。

(元「コギト」同人誌)
(成城大、立教大講師)

薄情

池田勉

東京という所は、薄情な土地だ。青いイケガキを、家のまわりに、ぐるっと、めぐらせて……。そういう意味のことを伊東さんはいくらかいまいませぬ、はき出すような口ぶりで話した。ふるい話で、もう十七八年も昔のことになるだらう。どんなときの話のついでであったが、記憶も確かでないが、ただこのことばと伊東さんの口ぶりだけは、今でも私の思い出にあざやかである。というのは、今だに私は、そういう青いイケガキの家に住んでいるからである。いつも青々とした楡のイケガキが目に入ると、私は伊東さんの口調といっしょにこのことばを思い出して、やりきれぬつらい思いをする。まるで私ひとり伊東さんの東京の薄情をせおっている気持がして。日記がないので確かなことはいえぬが、昭和十六年ごろかと思う。伊東さんが何かの所用で上京してきた時であったようだが、ある日、突然、伊東さんが私の家をたずねてくれた。伊東さん一人でなく、うしろに東京在住の、伊東さんの詩の若い崇拜者と思える方が数人つづいて来た。伊東さんは、そうい

う方々を引きつれて現われたという感じだった。招じ入れた私の小さい部屋は、座布団も足りない有様である。そのとき伊東さんと何を話したか、全く記憶がない。若い方々は伊東さんと私との対話をただ謹聴しているとい



住吉中学校職員室にて

右から二人目が伊東。壁に大東亜共栄圏の地図がはつてある。一同の面持ちから戦勝のニュースでも聞いた後だらう。

う、窮屈な形になった。はるばる上京してたずねてきた伊東さんに、貧乏な妻はこの日はありきたりの茶菓の接対しかできなかつた。若い人たちはお茶ばかりを何ほいも飲まされる仕儀になった。その頃まだ北多摩郡千歳村などといつていた。世田ヶ谷はずれのこの田舎では、私どもの住む家はたいい青い楡の生垣をめぐらした貧乏貸家だった。だから東京の薄情が伊東さんにとって青い生垣と結びついていることは、私にはつらかつた。心にこたえた。薄情という、この関西ふうな色あいをもった言葉は、関西に生れ関西で育つた私には、人間評価として致命的な評言であるような気がしていた。そういう私に、伊東さんはこの言葉を投げつけてみて、東京批評の適確さをためしてみたのかもしれない。伊東さんの用語法では、薄情という言葉は単に道徳的な意味の用法ばかりではない。ときには伊東さんの対決物として、伊東さんの詩情をかえって安んじさせるものであつたらしい。

東京の薄情という言葉は、しかし東京批評として無類に適確である。さすがは詩人のことばだと思ふ。東京の貧しさ、心も身も貧しいこの野蠻さ。厚情の関西の文化伝統からみれば、薄情というほかはないだらう。

上京してきた伊東さんは、そのとき東京で

何か意に満ちたことがあつたらしい。その意が何であつたかは知らないが、とにかく東京は心たのしい印象を与えなかつたようである。それ以後、伊東さんは上京することもなかつたのではないかと思う。しかし伊東さんがもし東京に住むようになっていたら、東京の薄情は伊東さんの詩を、どのように変えていただろうか。そんなことも思つてみる。

(元「文芸文化」同人)
(成城大学教授)

思ひ出

庄野潤三

堺市の三国ヶ丘にある伊東先生のお家へ初めて伺つたのは昭和十六年三月である。先生は私がその二年前に卒業した住吉中学で国語を教へて居られたが、私は一年の時に文法を習つただけで、在学中には一度も先生と話をしたことがなかつた。

私はある日、本屋で河出書房から出てゐた「現代詩集」第二巻に伊東先生の名前を見つけ、最初の覚書と「夜の葦」、「夢からさめて」の二篇を読み、その本を買つて帰つた。それから間もなく、上町線の電車の中で先生に会つたので、「遊びに行つてもいいですか

？」と聞くと、先生は気軽に道順を教へてくれた。それで私は伊東先生のお家へずつと行くやうになつた。

戦争のためにおいしい生菓子がだんだん姿を消して行く頃であつた。先生は前からもさうであつたのかどうか知らないが、甘いものが好きだつた。私の母は「伊東先生の家へ行く」と云ふと、よく生菓子の箱を私に持たせ

絵のなかで

——伊東静雄の詩——

浅野 晃

詩人よ あなたの歌は

いつもすがすがしかつた

このからりとしなない大都会の片隅で

なにかぐじぐじしてゐるものが

いちどに風にふきやられ

さはやかな夏のはじめに遇つた思ひ

自然よ 汝への感謝こそは

尽きることはないものだ

汝からこそ会心の風はくる

まったくここはあの連嶺からは遠いが

つちりした、清新な感じの作りであつた。二人はコーヒーとぜんざいを食べて、文学の話をした。(私は復員してきて、中学で歴史の教師をしてゐた。)

伊東先生は「座右宝」に送つた「夕映」といふ近作の詩稿を見せてくれ、この夏休みはどこか田舎のお寺の離れでも借りて、合宿しよう」と云はれた。

「じゃがいもを持って行き、向うで買ひ出しをして自炊しませう」

さう云はれた。リルケは、「文学者は文学のために生活すればいい筈なのに、文学以外のことに時間を費してゐる。何故ひたすら文学のためにのみすべての時間を費さないのだから」と反問してゐる——とさう云はれた。

五月に伊東先生に会つた時は、「今度入ることになつた家は雨漏りのする幽霊屋敷のやうな田舎家だけれども、前の間借り時のことを思ふと大変楽しい。精神状態もよくて、ぼつぼつ独逸語の本を出して読んでみたりしてゐます」と話して居られた。このお家が入院されるまで居られた北野田の家で、後には「馬小屋のやうな」と云つて居られた。「反響」(二十二年十一月創元社)の最初に「小さい手帖から」といふ見出しでおさめられた一聯の詩は、全部このお家で書かれた。

よく晴れた日の

連嶺の雪をはこぶ風のおとろひ

りんだうの青の気が

ふかぶかと影し

水晶の流れに紅鱒おどり

夜の杯には黄金なす旋律

生きてゐるのではない 存在してゐるのだと そのやうに感ずるとき

人はアルプスの雪のやうにただ輝いてゐる

真昼の冷徹な太陽の下で——

セガンチニの絵のなかで いつもあなたと逢ふ

いまもあなたと逢つてゐる

三国ヶ丘の家は、私が海軍にゐる間に空襲で焼けてしまつた。一度、先生のお宅で夕食を御馳走になつた時、伊東先生は私が漬物を食べる音がとてもいいと云はれた。「僕のはあんない音は出ない」と云はれた。詩を賞められたのではなくて歯を賞められたのである。今でもその言葉を時々思ひ出すことがある。

(元「光雅」同人)
(作「光雅」家)

た。私の父が学校の校長をしてゐた関係で、普通手に入り難いやうな生菓子をよく人から貰つたからである。

次の年の四月に私は九州の大学に入った。

九月の試験休みに帰省した時、(夏休みには満洲へ旅行に行つたので、大阪へ帰らなかつた)伊東先生と二人で弁当を持って淀川の橋本の渡しから水無瀬神社へハイキングに行つた。この時は淀川べりをグリコを一個づつ口へ入れながら歩いた。弁当は水無瀬神社の境内で食べ、私の持参した小瓶のウイスキーを水筒の蓋に入れて飲んだ。あとで床几の上で寝ころんで昼寝をした。

大阪へ着いてから、御堂筋を歩いて、ガスピルの地下室でビールを飲んだ。しかし、先生はそこで売つてゐるあんみつの方に気を取られてゐた。もし私が止めなかつたら、ビールを飲む前に、あんみつを食べてゐるところだつた。最後に先生は

「ああ、到頭あんみつ売り切れた」と云つた。

戦争が終つた翌年の七月、私は難波で伊東先生と会つて、一緒に喫茶店へ入つたことがある。私はコーヒーの券を買つたが、伊東先生は長い間飾り窓を見てゐて、結局ぜんざいの券を買つた。その店は最近建つた店で、き

伊東さんのこと

島尾敏雄

伊東さんからは素手で敵の中で降参しないという方法をおそつたやうな気がする。こゝういうものだと手のうちを見せられただけで私も体得したわけではない。方法ということには、まだいくらかも眼覚めていなかったのだ、ぴしりとひと鞭くられたように、きおいたつたのだと思う。

もともとじぶんには詩は分らないとあきらめていたから、伊東さんをまだ見ない前のその名前は、立派すぎる本箱の、厚ガラス戸の中におさまつてゐる稀覯本のようにうつつていた。私のまわりで彼の名前が伝説となつて波紋を広げながらささやかれると、いっそその詩集から手をひっこめようとした。ところがはからずも、偶然がふきよせて新しい級友となつた庄野潤三が、伊東静雄の所に出入りしてゐるときいたとき、私はこう考えたはずだ。ちやうど渦巻のちよつと外側の、まだのんきなふくらみの輪であるところの、つかろうとしているやうなものだ。今ならまだそのふくらみからのがれることができるかもしれない。しかし庄野が西瓜をさげて伊東さ

早春

森 亮

好きこのみは人によって随分違ふものであるが、同じ一人の人間にとつても年月をへだてた昔と今とでは多少このみが變つてくるやうである。最近伊東静雄の「夏花」全篇を読み返してさういふ感想を得た。全篇と言っても正味六十頁ぐらゐであるから、それは大した努力が要る訳でもない。それゆゑ今までにも何回とも知れず通読したはずであるが、今回はいつもと違って一篇一篇を比較的丁寧に読んで行つた。

詩集「夏花」が出版されてからもう二十年近くなる。その頃とり分けて好きだったのは「夢からさめて」、「朝顔」、「水中花」、「夜の葦」の四篇あたりである。

六、七年後にはもう別の詩が一番好きになつてゐた。「早春」である。最後の時代の旧高校生たちにそれを叙情詩の典型として推稱したことを覚えてゐる。今度読んだときにも「早春」は矢張りよいと思つた。その他では「燕」が急によくなつた。同じやうに株が上がつたものに「若死」がある。実に上手な詩である。而も「若死をするほどの者は、自

員のままの服装でそして口ひげなどをたてていた。伊東さんからは一つの方法を、と書いたのはそのとき以後のことだ。女性的な人なつこいからかいの眼つきが、私を、叱られておどおどしている情緒的な顔付の少年を見るように見ていた。で私はしぜんに彼とのつきあいに詩を介在させることを拒否しようと考えはじめた。「もともとほくは詩は分らないのです」ということばによつてのみ、彼と詩によつてゆききしている四、五人の仲間たちのなかでじぶんの居場所をつくることができなかつた。私たちはこじぎのようになつて、よく彼の勤務先の中学校のあるあたりや心齋橋のへんやずつとへんびな彼の住居のあつた初芝の方を歩いた。でもそれは長いあいだ「私たち」であつた。私がひとりで彼と会うことに堪えられるようになったとき、あの周囲に嫌悪してみせる熱心な耳打ちの話じぶりが、耳たぶにこころよく、危険なよろこびだと思ひ、又月の出ない夜の冬のいなか道を懐中電燈の、眼られた然し確かな光の輪としばらく歩みを共にしたことが、なぞときの鍵のように感じられてきたようであつた。しかしまもなく伊東さんは病にたおれて再び立つことができなかつた。私はさいごまで多くのことが見ていて見えずきいていきこえなかつた。

んの所に遊びに行かないかと誘ひかけてきたとき、私はことわることができなかつた。私は庄野のあとにくつついて塀の彼の住居に行き、そこで戦場ではどんなすごいこともやつてきなさいとはげまされたつもりでいた。私がおそれるようなかぶつていた臆病な戦いへのおそれる伊東さんははぎとつてくれたのだと思つてた。旅順の海軍予備学生教育部の訓練でくたくたになつて私にも返事のはがきがいただけた。そのはがきは私の胸かざりであつた。重なつた偶然が、もうひとり今井とよぶ彼の教え子を、教育部の同じ境遇の下の予備学生の中に見出させた。又私は、そのひとの詩はじぶんに分ると思へた林富士馬さんが又伊東さんとかかわりあいがあることを知つていた。とにかくそんなふうで、私は詩が分るつもりになつて行つたのだつたらうか。

そして敗戦の日が来た。荒廢のなかでなおのぞみもてたとしたら私の場合それは詩をつくる人たちのことであつた。乱れたあわただしさの折から私たちはまずまつきに庄野の家で伊東さんと再会した。私たちはまるで野盜のように身軽に殺氣立つていたようだ。そして私はわかにおしやべりになり、伊東さんに話を起して行つた。そのとき私は復

にやつて来るだらうとの期待、いや寧ろはかない希望が詩人の胸を占める。つよい目とは斎藤茂吉の用語を借りれば実相に観入できる鋭い目、単純な魂とは *tabula rasa* と呼ばれるやうな無垢の魂、驚き易く感じ易い魂か。ドコカラ、ツヨイ、タンジュン、タマシイの

分のことだけしか考へないのだ」とずばりと言ひ切つた言葉などは小手先の器用さから生れるものではない。「氣疎いアロイデオになつてしまつて……」のやうに古語が現代詩に生かされた例はさう沢山はあるまい。尤もこの詩で一番感心するのは全体の隙の無い構成である。二つの主題を縋ひ交せて進行させる音楽的構成である。ついでに言ふが「夜の葦」の美しさも同様の音楽的效果に負ふところが大きい。さて問題の「早春」であるが、先づ本文をかかげよう。

野は褐色と淡い紫、

田圃の上の空気はかすかに微温い。

何処から春の鳥は戻る？

つよい目と

単純な魂と いつわたしに来る？

未だ小川は唄ひ出さぬ、

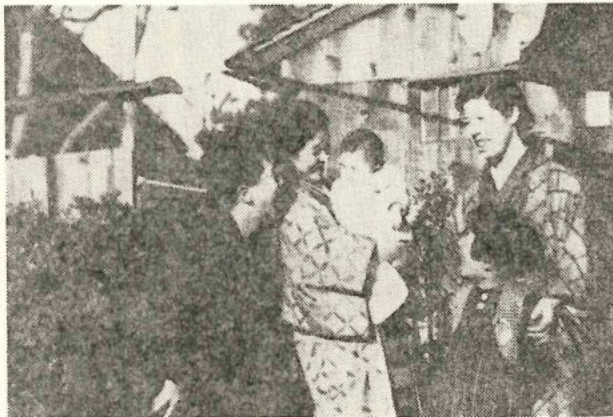
が 流れはときどきチカチカ光る。

それは魚鱗？

なんだかわたしは浮ぶ気がする、

けれど、さて何を享ける？

柔かい音調に包まれた初めの二行は早春の实景。春の鳥が其処に戻る期待が野に感じられる。戻るといふ言葉の聯想から、「つよい目と単純な魂」が詩人「わたし」の心の野辺



北三国ヶ丘の家の裏庭で（昭和19・4・29）

左から静雄（三九）花子夫人（三八）夏樹ちゃん（満八ヶ月）まきちゃん（九）妹りっちゃん。

t（とその濁音d）の頭韻がよく利いてゐる。

第二聯では、早くも春を察知した魚たちの動き、鱗がチカチカ光るのが小さい生命の躍動を思はせる。それに誘はれて詩人も浮ばれる（浮ばれないの反対）気がする。それは漠然とした幸福感——何かを享けるといふ幸福な予感であるが、受取るものが何であるかは彼にも分からない。文字通りにはさうなるが最終行は詩人のあなたまかせの、而も何物をも期待しない心持ちを表白した反語のやうでもある。いづれにしても、最終の行の「享ける」は、その前の行の「浮ぶ」と語呂が合ふために採用された思ひ付きの言葉である。思ひ付きだと言つて馬鹿にできない。かういふのが詩人のちからわざ、*tour de force* といふものである。この力業によつて結びの二行が強い牽引力で引き合ひ、詩人の心のあやぶい平衡が保たれる。彼の魂はひと時の鎮まる時刻をもつたのである。

私の趣味はこれからも幾らか動いて行くであらう。「疾駆」がもつと好きになるやうな予感があるが、将来のことは分からない。併し、「早春」は恐らく飽かず読み返すことだらう。

（元「コギト」同人）
鳥樹大学教授

美しい 大きな魂

大東 幸子

先生。今日は大変な事を御話しなければなりません。私が先生の思い出を書くのです。本当にどうしようかと思えます。先生はきつと御笑いになるでしょ。目を細めて、咽喉の奥で声も出さずに笑っていらつしやるのが私の耳にきこえて来る様です。

。およじなさい。ねえ、おかしいぢやあ、ありませんか。思い出を書くなんて。ほーらあなたは、とうとう僕の思った通りの生き方をしているではありませんか。それでいいのです。でもね。先生。何時か先生は、あなたが僕を知っていて、それを誇りに思ふ様な人に、きつとなりますよ。とおっしゃいましたわね。今はまだ、頭にリボンをつけて飛びはねたり、金魚の池に落っこちて泣いている私の二人の女の子が、やがて大きくなった日に、貴女方のママは人が一生の内にめぐり合う事が出来るかどうか分からない程美しい大きな魂に出会い、倅せな若い日々を過したのよ。と話して、やりたいと思えます。唯その為に今なお心の中に鮮かに生きている、先生の思い出を少しでも書いておこうと思っているのです。

先生にはじめて御会したのはまだ女学生だった十六才の秋でした。あとで、近頃奇妙に変った女の子だ。とおっしゃったとか、二年前位からひそかに詩の様なものを書いていた私でしたが、やがて先生がどんなに、すぐれた詩人であるかを知ってからは、絶対に詩を書いていることなど知られたくないと思えました。あのまじい詩を見たあとの骨身をさす様なつらい言葉と、ひどい白い目をした先生のきびしさに、とても私は耐えられないだろうと思つたからです。普断はやさしい先生でしたが、よく二人で街へあそびに行きました。幸子さあ、幸子さあ、いますか。と玄関の格子戸の前で大きな声で、お呼びになるのです。ある時はしわくちやの登山帽をかぶって、又何時かは着ながしのふところをリングで一杯にふくらませながら。そうすると私は試験中でも、何んでも一緒に街へとび出してゆきました。どうしてそんなに勉強するのですか。百点を沢山取って一番になってそれがどうしてよいのですか。とおっしゃ

新潮文庫七二 七〇四
伊東 静雄 詩集
彼は日本の近代詩に消したい痕跡をのこして去つたのであつて、その細くするどい痕跡が、かに深く切れこんでいたかは、時がたち、幅広く浅い痕跡が磨滅するにつれてはつきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光りをましているであろう。

桑原 武夫

るものだから、御機嫌のよい時の先生は道を歩きながら心の中のために詩句をさまざまに引き出し小声で幾度もくもくうたつて下さいました。丁度、春のいそぎ、前後の頃だったと思います。

終戦后南河内に仮住居する様になった私は萩原天神の先生の御宅に近い事を知りどんなに喜びました事か。その頃の先生は、今までのほげしは内に秘められ、あふれる程の善意と、身近い者への愛情、それに、つましい祈りの姿は、まるで美しい宝石を心にかけていられる様でした。かくしていた詩を初めてみて頂いたのもこの時です。貴女は生活

日のあたる グラウンドで

池沢 茂

を彩ろうとするから、そしてその生活を夢中になつて楽しむから詩が出来ないので。と云われた言葉が心にのこりました。最後にお会したのは、大阪にはめずらしい大雪の二十八年二月二十一日でした。医者である夫は先生の死期を、うすく知っていました。ためらう私をせき立てる様にして病院へ向いました。誰一人通らぬ道はゴム長靴がすっかり埋る程深い雪でした。先生はしら／＼と小さく薄くなってベッドに寝て居られました。私は先生の御顔を一度も覗きませんでした。黒く区切られた窓から、遠くの雪の山を眺めながら心は不思議に透明ではなすことなど一つもない様でした。先生も何もおっしゃらず、長い間、だまって、ひっそりとしていました。

先生、もうこれでおしまいでしたわね。先生は意地悪だからきつと途中から迷子になつて出口がわからなくなり途方にくれた私を、面白がつて、みていらつしやつた事でしょう。だけど私には今でも先生の御声がきこえるのです。倅せな時、不幸な時、何時でも注意深く、耳を傾けて、先生がニヤリとなさる様に生きて行きたいと願っているのです。

(探偵大東幸子之助
氏夫人)

ぼくはその日、たま／＼、伊東さんの学校まで出かけていった。学制改革で高等学校に昇格しているもの、もとはぼくが卒業した母校の中学校だから、じき近所にあつても、かえつて、たいへん行きづらい。なぜ行く気になつたのか、自分でも、よくわからない。そういえば伊東さんも、ぼくの家に二度ほど、ひよこり、たずねてこられたことがある。あまり突然だったので、どこか遠いところから、風に乗つて、ふつと吹きよせられてきたようだった。たぶんそれと同じようなぐあいだったのだろう。ちょうど運動会の日で、グラウンドでは、生徒や父兄たちが、ぎっしり、トラックでは、生徒を取りまいて。先生たちは、役員の腕章をつけて走りまわつていたり、テントのしたの特別席にしかつめらしく腰掛けたり、おりのからのスプリンレースに出場するため、スターラインのあたりにあつまつて、はしぎあつていたり、していた。そのなかには、ぼくが教わつた先生の顔も、幾人

か見える。

ぼくはそういう先生たちや、顔見知りの同窓生たちに会うのが、どうにも気がすまないので、なるべく隅のほうを足ばやに、歩いていった。すると、そこに、伊東さんがいたのだ。群衆の背後、グラウンドの片隅の、小さな花壇のはずれの、ちよつとした草むらのところだった。そこに伊東さんが、ひとり、ぼつんと、腰をおろしていた。

ぼくは思わず、人ごみのなかに、姿をかくした。耳が遠いのは人工鼓膜のおかげで、ある程度はなおつていたもの、今よりもつと、職業的にも、文学的にも、すっかり行きつまつていたぼくは、ほかの顔見知りの先生とおなじく、伊東さんと会うのも、気がすまなかつたのだ。そのくせ、出ていって話しあいたい、話しあわねばならぬ、という気も、しきりにしていた。そのためにわざ／＼来たのではないかとさえ、ふと強く思つていた。

伊東さんは草むらのなかで、足を投げだし、背をまるめて、うつとりと目をほそめている。おなじ学校の構内にいながら、師として教えている生徒とも、同僚の先生たちとも、なんという無関係な状態だろう。といつても、孤獨な姿勢ではない。その十年ほどまえ、ぼくが伊東さんを知りはじめたころは『あの学校

は広島高師の出身者がはばをきかせているのでね』『中学生なんて、大学生ほどおとなないし、いつそ小学生ぐらいの子どもならないが、なまいきなばっかりで……』などと言つて、職業の面でも、しきりに「孤高」や「孤絶」を叫んでいたが、そういう肩ひじ張ったポーズとは全然違っている。むしろ、適当に、なまけ、ずるけて、ひとり、ぬく／＼と、安樂をむさぼっているようなのだ。おなじグラウンドの、トラックのぐるりや中では、群衆のざわめきがわきたち、砂ほこりが舞いあがっているのに、この片隅は妙にひっそりとして、秋の日光が、さん／＼と、まぶしいくらいに降りそゞいでいる。

それでも、とき／＼、いつせいにトラックのほうばかり見つめているなから、ひとり、ふたり、このあたりへ、生徒が迷いこんでくることがある。かれらは伊東さんをみとめると、たいてい、はっとして立ちどまる。それから、非常にていねいなおじぎをする。生徒徒のなかには、おかしそうに笑い声を立て、あわてて、はずかしそうに走り去ってゆくものもある。ぼくが生徒だったころは、だれもが、伊東さんの異様にきたらしい印象のために『こじぎ、こじぎ』と呼んでいたが、いま、生徒たちは、その伊東さんに、先生としてだ

り、いずれにしても人の反応を試しているような先生の眼差しを意識して、はっとすることがあった。熱があつて気分のすぐれない時など、むきつけに不快な顔をなせることもある。また私も私で、若さの不覚から時には二時間も三時間も話し込んだりして、帰り路で後悔したりすることもよくあつた。

ある時、私が教師になるつもりであるという事に関して、先生になるには厳しくなければというお言葉に、私の生れ日は二月十四日聖バレンタイン節（ローマの愛の聖者の記念日）だからやさしく教育するのだと反対をとなえたところ大層立腹なされ、「馬鹿なことを言いなさんな、教育なんてそんな甘いものどちがう、いつもは非常に厳しくして、ほんの時たまちらつちらつと愛情をみせると効果的なのだ、教育というものは厳粛なものですよ。」と叱られ恐れ入ったことがあつた。ついでに生徒の叱り方までも伝受されたように記憶する。詩についても一再ならずお話をうけたまわつた。「病人の枕元の花をえがいただけでその下に長わづらいの病人が寝ていることまでがわかる、そういう詩を書きたいのです。」また「中原（中也）は本当の詩人です。石鹼箱に秋風が吹き、という詩があるでしょう、あれが本当の詩です。」藤村以後の大詩

けでなく、すぐれた詩人として、特別な親愛と尊敬をさしつけているのだろう。

伊東さんはそういう生徒たちに、足を投げだしたまゝの姿勢で、ちよつと答礼する。ときには、全然気づかぬらしいおりもある。そうして、きらめく秋の日光を満身にあびながら、色のあわい目をほそめて、どこか遠い空のほうをながめている。もつとも、伊東さんはこのとき、その生命をうばつた肺結核がもう、かなり悪化していたのかもしれない。

（元「コギト」同人）

療養中の

伊東先生

福地 邦 樹

私が伊東先生を最もしげしげ病院におうかがしたのは昭和二十五年夏頃だったと思う。私は大学一年生であつた。病臥一年をすぎ、やつと少しづつ結核療養に希望をいだいてこられた頃であつた。夏は一番好きなんですよ、とよくおっしゃつていた。先生は病人にありがちにしては随分と強烈な不満をいろいろ持つておられ、もと陸軍幼年学校であつたというその郊外の木造の国立病院に対して

は特に不信用で、医者も自分で適当な量に直して服用するのだ、とのお言葉に驚いた事があつた。部屋は五十畳ほどの板敷きの大部屋を白い厚地のカーテンで六畳位ずつキャンプのように区切つてあつた。付添いのベッドもあつたが何もかも粗末で、夏はいいが冬は寒々としていた。奥さんがお務めの関係で週に一度か二度しかお見えになれないのであつたが、それをいつも楽しみに待つておられた。御病氣以前は相当奥さんを痛めつけられたらしいのに「新婚当時のような気になるのですよ」と冗談をおっしゃつた事もあつた。「気の付き方がほかの者と違いますんでね」とおっしゃり、「しかし家内が来るとやはり興奮していかん、それがおさまるのに二三日かかるのですよ、そしてやつと静まってきたと思うと、またやつて来るんですよ。」と独得な、にやつとした笑い方をなさつた。先生の話には大抵そういつたそらすような落ちがつくのであつた。

先生をお見舞して帰る時の私の気持は恋人に会つたあとのようにうきうきしたものが、またはいやらしい人間に会つて来たように実にあと味の悪い気持かのどちらかであつた。人をおだててみたり、それに引っかけたこちらが調子になると、ぴしゃんとやつつた



北余部の家の前

昭和廿二年九月廿四日

静雄（四二）夏樹ちゃん（五）

昭和廿年七月九日の空襲で伊東は北三國ヶ丘の家を焼けたされると此處の農家の厩屋に落ちついた。板扉の向ふに詩材となつた地蔵尊がある。晩年の悲惨さが滲み出てゐる写真である。この二年後発病した。

凝視と陶醉

作品と書簡から見た伊東静雄(三十七)

小高根 二郎

伊東はこの百合子さん宛の書簡の三日後に富士正晴氏に次のやうな書簡を書いてゐる。「お手紙有難う存じました。ご懇篤な御評恐入ります。ひとりてこつこつ書いてゐましたのを、コギトといふ雑誌の人々にすゝめられて、それにのせ、とうとう、出版などすることになったのであります。人に交ること少くありますので変なところ数々あると存じます。それはさうとしまして、あなた方のやうていらっしゃいます三人といふ雑誌(註、野間宏、井口浩、瓜生忠夫氏)は、私はすでに二年か三年前か前から存じ敬意を感じてをりました。表紙に木の葉の書いてある、とう写の雑誌でありました。その雑誌の方からお手紙いたゞきますことはうれしくございます。皆様にも敬意おつたへ下さい。ひよっとしますと私の詩或は、皆様にいくらか近いものぢやないかと、ひとりて考へてゐたのですが、いかがでせう。近頃生活感情が切実になればなるほど詩のかけないやうになりますのはいかがなわけです

う。又近い内に拒絶といふ詩集出したいと思つてをります。これはこの頃の喘ぎとして書いてゐます詩を集めたものでございませう。

お暇の折はどうぞおいで下さい。一、二時間の談話にさしつかへるほどの多忙ではございませぬ。

右一言お礼のみ

三月十三日

伊東静雄

富士正晴様

(昭和十一年三月十三日大阪府住吉区住吉町一丁目三富士正晴宛封書)

富士正晴氏の弟の正夫氏は住吉中学校の生徒であった。彼は弟から「乞食」と云ふ仇名を持った、いかにも汚くて小さい詩人の先生の存在を知ったのである。彼は特別の興味を持って弟に手紙を託したと云ふのである。伊東は学校の帰りに家のある松原通とは反対の方向にある播磨町の富士氏の家に立寄り詩集の「わがひとに与ふる哀歌」を贈った。富士氏は早速一読すると感想を書き送った。その富士氏の感想への返事がこの書簡である。伊東はこの書簡の末尾で来訪を歓迎してゐるが、折から伊東を訪問した富士氏に、私はばたりと出会つたのである。

陽の光のはげしい午前であった。病み上り

の花子夫人は腰帯だけで起きてをられたやうな記憶がある。先客である富士氏も来たばかりであつたらしく、袴をつけた姿でびたりと端坐してゐた。三高中退の秀才で詩を書いてゐる青年だと伊東は紹介した。顔の白いいかにも才走つた青年に見えた。互ひに一揖すると、この青年はいきなり「お面！」と私に斬り込んで来た。

「小高根さんは、なぜ詩なんぞ、書くんですか？」と云ふ質問である。詩を書いてゐると云ふ青年が、同じ詩を書いてゐる青年に、いきなりこんな質問をなぜしなくてはならぬんだらう？ 私は返事のしようもなく、狭庭に立ちほだかつてゐる板塀の節穴から、無数に射し込んでゐる外光を凝視してゐた。

まるで侵入者あつかいだ。私はさう思つてゐると、伊東から助太刀が出た。

「詩をなぜ書くんだと云ふ質問ほど失礼な質問はありません。僕たちはなぜ飯を食ふんだらう。腹が空くから……。それでは解答にならない。食ひたいから飯を食ひ、そして糞をする。それは生理ではありませんか？ 詩も同じことです。」いかにも学校の先生らしい明快な答であつた。私は伊東の顔を見上げ富士氏にはにかみ顔を紅潮させた。

今おもへばその回答は、『呂』時代に伊東

受難者

芳野 清

身を踴めて

やさしく降つた雪の中に顔を埋める

きつく きつく 冷たく いたく

痺れてくる

それでもなほ息をつめて

高原のキリシタン宗教のやうに

受難の疼みに堪へながら

雪との冷たい 口づけは 別れた日の

ひととのものとも想ひ

涙が雪に吸はれてゆく

苦惱の唐草模様が解けてゆく

疼痛が恍惚に変わる一瞬

あゝ かうして受難者は瞑目した

目を開けば幼い日の夕もやの世界

私の心に深い安らぎが訪れる

花に似た結晶の中で一つの魂が蘇へる

そつと上げた顔の下に

もう一つの顔の裏側がのこる

冬の日の裏はれた心のデスマスクが

等は議論つくした愚な議題だったのである。

つまり、結論は青木敬磨氏の「文学とは糞壺だ。」であつたのである。その青木氏の思想を伊東は解説したまでだつたわけである。

富士氏のこの質問は、云はゞ、剣道の試合に際しての気合のやうなもの——一種の挨拶だつたらしい。当時、伊東と交渉がすでに始まつてゐた栗山理一氏(当時早稲田中学校教諭、現在成城大学教授)との初対面に際しても、富士氏は私の場合と同様不条理な挑戦をしてゐる。

「ある夏の夜、天王寺あたりのビヤホールで、庭園に張り出されたテーブルを囲んで三人でしきりにジョッキを飲み干したことがある。富士君とは初対面であつた。ませた少年とでもいふ感じの青白い富士君の饒舌が、酔ひが回るにつれて、だんだん毒舌と化して私にからみついてきた。つひに、貴様は眼鏡をかけてゐるから詩人ではないその眼鏡を外してやると立ち上つてきた時は、私も立ち上つて一喝した。伊東さんは終始困つたやうな困らぬやうな表情で、にやにや笑つてゐた。」

(昭和二十八年「祖国」七月号)

この栗山氏の述べによると、当時、富士氏は眼鏡をかけてゐるほどの者は詩人ではないと云ふ確信を持つてゐたやうである。私にな

ぜ詩を書くのかと詰問したのも、或ひは私が眼鏡をかけてゐたからかもしれない。

それにしても、伊東は私の場合には助太刀をし、栗山氏の場合には困つたやうな困らぬやうな顔でにやにや傍観してゐたのである。伊東は「ペンペン・横丁事件」でも判るやうに、先輩に対しては猛烈な挑戦を敢てしたが後輩に対しては暖い慈愛で対したのである。

私と富士氏の場合は同じ後輩同志であり、栗山氏と富士氏の場合は先輩と後輩の間柄に相当するから、伊東の対応の仕方も自ら変つたわけである。

伊東は『椎の木』五月号に次の作品を発表してゐる。

幻

野より雪消ゆ

陽炎は無限にわれを休ましめず

危く地中を逃げ出で

蝶は狂ふ

憑かれし羽根 霊の白

ふり放て この現身を深みに沈めよ

あゝ楡は芽ぶきて

梢に御使の座をつくる

光る微塵を吸へども

われは何故に飛び立たざる

見よ哀れなる魚ら
水面に口を浮べて

わが投げ与ふべき厭はしきものを待ちた
り

この詩からは混乱だけしか感じられない。花子夫人の看護とまきちゃんの哺育の疲労と、母ハツさんの急死の悲しみから、伊東はまだ完全には癒えてゐないやうである。彼は憑かれた蝶の飛翔を夢みながら、同時に魚のやうな沈潜も願つてゐる。と、云つて物欲しげに水面に浮んでくる魚は唾棄してゐるのである。

この詩に私はセガンチーニの画幅と朔太郎の『水島』の調子の影響を感じる。つまり、第二聯の八楹は芽ふきて 梢に御使の座をつくるは、樹梢にアルプスの精霊達の幻影を見たセガンチーニからの暗示である。蓮台のやうな木の芽に、こゝでは八御使の座を感じてゐるが、十ヶ月後の「夢からさめて」でもっと詩想が明確になり、八かしこに母は坐したまふと歌ふに至るのである。母の死の悲しみが、こゝではまだ戸惑つてゐるわけである。

伊東は「幻」を書いてから二ヶ月間は疲労からくるスランプに陥つたのであらう。作品も発表せず、書簡も書いてゐない。八月に入

つて、伊東は久しぶりに次のやうな書簡を百合子さんに送つてゐる。

「先日暑いところをわざ／＼お立ち寄り下さつて、大へんうれしく存じました。合憎病人のみで、一向おかまひも出来ませず不本意の至りでした。その上昨日は逆にあなたからお葉書いただき、恐縮しました。私は丁度あの日いそがしい原稿があり、それを考へながら、町の中をうろついてゐたところで、帰つてから大へん残念でした。この頃の様子暑い時詩など出来る筈がなくそれをひねり出すのですから三日三晩ほど気遣ひのやうになつて、やつと昨日送りました。馬鹿なことです。先生はやはり不眠症におなやみとのこと、何とも申様ございません。さぞお苦しいことせう。やすよさんはもうおいでになりましたか。こちらの病人もますます／＼よろしく、足と脈がもう少しよくなれば普通の人間とかはりございせん。近頃は私は半歳の疲労が一時に出てまるで阿呆のやうな頭になつてゐます。どこか保養に行かうと思つても金がなし、仕方なく、二階の暑いところにて、ぼんやり空でもみたり写真の風景などみて、心をやるのみです。お元気を祈ります。」

(昭和十一年八月二日大阪府西成区松原通二の十五番五軒路市五軒路六七番百合子宛はがき)

窓

服部 三樹子

一枚ののし餅を買ひて一年のつまじきつき終へし我かも
ふり返へることも明日に期すことも思はず寝ねし大年の雪
待つものゝありて今年の化粧する目もあざやかに降りいでし雪
独り居の心安さよ雪降りて気遠き座臥を
とがむるもなし
美しき老尼はきその冬至の日福を分つと我を招きし
うら深く思ひ立ちたることありて雪ふみ出でぬ春の計劃
神事を仕ふる人が真卒に讃へくれたる春の我がまみ
自が上のことのみ祈る日重ね来て目を転じたる春の降雪
はるの陽のまぶしき部屋を清むれば雪解け道待ちし音来る
何事も西の窓より訪るゝ心ならひに春の窓白む

く、無帽の和装であつた。応接間に案内された彼は胸をはだけてしどけなく長椅子に身をもたせてゐた。眼は血走つてゐて、汗ばんだ顔は蒼褪めてゐた。

「今、死ぬかと思ひました。突然めまひがして眼の前が真暗になつたんです。通天閣の下の空洞があるでせう……。あそこに蹲つてゐて死と闘つたのです。小一時間も蹲つてゐたでせう。やつと明るさを取戻してそれからこゝまで辿り着いたのです。」
と言つた。いつもならこゝで自作の朗吟をお始め、茶を運んできた少女が、吹き出し笑ひを胸で納めるために、盆から茶碗をとり落しさうになるところである。が、脳貧血に見舞はれた伊東は、さすがその日は朗吟をせず、茶を呑んで一服すると元氣を取り戻したらしく、かんかん照りの中を蓬髪のままの無帽で帰つて行つた。

この日伊東は「文芸懇話会」から注文の詩の詩材を求めて、とりわけ暑い歓楽街の新世界をうろろしてゐたわけである。その詩は百合子さん宛書簡によると、その日から三日三晩ほどして完成したのである。

八月の石にすがりて

八月の石にすがりて
さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。

この書簡によると、百合子さんは物騒な東京から姫路に引揚げたやうである。その引揚げの途中で伊東の家に立ち寄つたものであらう。相憎、伊東は留守をしてゐた。半病人の花子夫人が応待したのであらう。

その日伊東が留守をしたのは、詩材を求めて新世界を彷徨し、その帰り私を職場に訪ねてきたからであつた。私の職場は浪速区水崎町のスラム街にあつた。職場はもと大阪の目抜きであつた梅田新道近くの堂ビルにあつて、大正十二年の関東大震災の直後プラトンス社と云ふ姉妹会社の出版業を兼業して、雑誌「女性」「苦楽」を花々しく出版したものが、やがて東京が復興すると一敗地にまみれ、その打撃で前記の工場所在地に営業所も引揚げてゐた。私はその営業所の二階にある広告部で、化粧品の文案を書き新聞広告のレイアウトをつけてゐた。

昨年の暮私が豊中に遁走してからは、伊東はちよ／＼よくこの職場に立寄つた。彼は学校の帰りに北畠で阪堺線に乗ると、下車駅である天神ノ森を素通りして、霞町で降りわけである。霞町から奈良線で土堤を西に十数間もくると私の職場である。

その日は夏休なので、例の埃の載つた黒ソフト、フケを肩に乗せた疲れた背広姿ではな

わが運命を知りしのち
たれかよくこの烈しき
夏の陽光のなかに生きむ。

運命? さなり、
あゝわれら自ら孤独なる発光体なり!
白き外部世界なり。

見よや、太陽はかしこに
わづかにおのれがためにこそ
深く、美しき木蔭をつくれ。
われも亦、

雪原に倒れふし、飢ゑにかけりて
青みし狼の目を
しばし夢みむ。

(第二詩集『夏花』)

明らかに過日新世界でめまひに襲はれた際の死の幻影に取材されてゐる。伊東は映画館の建ちならんだアスファルトの灼けた道を歩いてゐて、突然めまひの予感を感じると、あわて、通天閣の下、風通しがよく日蔭になつてゐる空洞に駆け込んだのだらう。彼は頭をかへこむなり踏みこんだらう。このまゝ死ぬのかもしれない。旋回する真暗な渦の底に伊東は吸ひ込まれ、きりきりと舞ひながら、次第に微塵のやうに小さくなりつゝ沈ん

でゆく自分を感じただらう。意識を取戻さねばならない。どんなつまらん記憶でも手離してはならない。それらが消えた時が即ち死だ。伊東は自分を支へてゐるか細い足が踏んでゐる土は、新世界の中心である通天閣の岩のやうな土台であることを忘れまいとしたゞらう。下駄を履いてはゐるが、間接に臆に感じられる堅い反応と別な柔かな感觸は、乞食達の夜具であるドンダロスやムシロの切れっ端と埃が構成した砂埃なんだ。その中には、蚤やしらみの残骸や、酔っぱらひの反吐だつて混つてゐるんだ。天蓋には無名時代の山下新太郎が描いたとか云ふ法相華を持った天女が半ば消えながら飛んでゐる。死ぬ場所としては絶好な場所であるかもしれない。いや、いや、死なうとしてもまだまだ死ぬるものではない。家にはまだ足腰の自由でない妻と乳離れのしない赤ん坊がゐるんだ。生き埋めになるこの場所を確認せよ。忘れてはならない。前には不定型広場がある。つむじ風でパンや南京豆の空袋が飛んでゐる。それらをプールに浮べた、かつて水を噴き上げたところを見たりしたことのない噴水がある。鈴懸の並木がある。その梢の上に、ピヤホルの大きな絵看板が覗いてゐる。峨々とした氷山が描いてある。その中に黒くうごめくものはなんだらう

狼だ！青く冷酷な目を光らした狼だ。いや、狼ではなささうだ。あれは涼を呼ぶペンギンなのだ。こゝでやつと伊東は人心持を取戻し、生のかかして深く息を吸ひ、そして吐いたであらう。俺は助かった。さうだ。死ななくてすんだのだ。次第に明るくなつてくる視野の中に、伊東はよろよろと立ち上つたのだ。

この死の幻影が「八月の石にすがりて」に結晶したのである。三島由紀氏はこの伊東の代表作を評して、「ニイチエの運命愛と純粹孤独の明晰な投影」(昭和二十八年「フシケ」三島)と言つてゐるが、確かにさうした印象を受ける。当時、伊東は生田長江訳のニイチエも愛読してゐた。そのニイチエの孤独な心象風景とセガンチーニの高峻な風景とが合体醸成した雰囲気とが感じられる。

然し、伊東が精神の奥処の何処かで対応を求めたのはニイチエやセガンチーニと共に Hoffmanstahl (Hugo von Hofmannstahl) であつたやうである。つまり、彼の絶作である「外部世界の譚詩」(Ballade Des Außen-Lebens) の外部世界が「八月の石にすがりて」の第二聯第三行目にそのまゝの言葉で現れてゐる事実をもつても、それと知られる。

外的世界の譚詩

ホーフマンスタール
板倉朝音訳

子供は辨へもなき深い眼をして育つてやがて死んでゆく
そしてすべての人が己れの道をゆく

深い木の実が甘くなる
そして夜、死せる鳥の如く落ち
しばし地上にあつて腐る

いつも風が吹き、いつもいつも
吾らは多くの言葉をきき、また語る
そしてからだのはずみと疲れを感じる

街道は草の中を走り、村落は
ここかしこに、炬火、樹木、池に充ち、
傲然たる町、死の如く枯れくちた村……

何のためにこれらは建てられ、相互に
似かよふこともなく、かくも数多いのか
何なれば笑、涙、死は相交るか

これらすべて、これらの戯れが吾らにま
で何なのか

吾らは大きく、永遠に孤独にして
さすらひの旅に何らの目標を求めはせぬ
のに

文体について

山根 忠雄

国語の教科書に

生島遼一氏の書かれた

「文体について」といふ一章が載つてゐる

フランスの自然科学者ピラホンの著した

「文体論」を紹介し

それを獲得する二つの方法などが説かれてゐる

教室で読み終つてから

僕は最後にかうつけ加へた――

「文体といふものは
全く自分独特のものであつて

人も教へてはくれないし

また人に教へることもできないものだ
しかし誰にも自然に備はつてゐる

深く自分を掘り下げてゆけば

誰でも必ず発見することのできるもので

す

さういふ深海の神秘を 誰か
探りに出かけようと思ひませんか？」

かかることを多く見たとて何になるのか
しかも人々夕べと云へばそのいふ所は
軽からず
この言葉、深き意味とかなしみの流れ出る
る――

濃い蜜がうつろな蜂窩から流れ出るやう
な

然し、この Hoffmanstahl の「外的世界の譚詩」と伊東の「八月の石にすがりて」は内容的にはあまり直接的な関連はなささうである。あるとすれば、Hoffmanstahl の大いなる永遠の孤独と云ふ問ひに対して、伊東は八見よや、太陽はかしこに、わづかにおのれがためにこそ、深く、美しき木蔭をつくれと云ふ、太陽でさへ絶対的な孤我なのだと云ふ答へをしてゐると言へさうである。

百合子さん宛書簡の末尾に、伊東は暑い二階に寝転んで風景写真を眺めながら、僅かに心をやる忙びしい鎖夏法を書いてゐるが、恐らく伊東は「セガンチーニ画集」を先づ第一番にひもどいたらう。海拔四千呎のサボニノから六千呎のエンガーディーンへの高峻を神武天皇のやうな髪を生やしたセ氏と一緒に攀じたらう。伊東はさらにダニエル・アレヴィの「ニイチエ伝」を覗いたであらう。そ

こで、同じエンガーディーンのアラトウス
トラの岸辺のピラミッド型の岩礁の上で、伊
東は泥鯨髭のニ氏と二緒に腰を降ろしたら
う。向ふから誰かやつてくる。神武髭のセガ
ンチーニだ。伊東は早速セ氏をニイチエに
紹介したのであらう。……と言つても、別に不
可解ではない。セ氏もニ氏も同じエンガーデ
ィーンに、同じく一八〇〇年代の後半を偶然
にも過してゐるからである。

「遙かに、より高く、縊ゆる人間の事物の
上に……」さう、ニイチエはぼつりと呟い
た。「まさにさうだ。それが即ち俺のシン
ボリズムでもあるのだ。」と、セガンチー
ニは膝を叩いた。

伊東はニイチエの「人間の事物の上」と云
ふ言葉から Hoffmanstahl の「外部世界」
と云ふ言葉を思ひ出した。さうだ。あの「外
部世界の譚詩」の問ひに、セガンチーニの
シンボリスティックな譬喩で答へを書かう。
その答へに、通天閣の空洞で体験したあの死
の幻影を加味しよう。これが伊東の発想では
なかつたかと私は空想する。

さう言へば、百合子さんが伊東を訪ねた日
の半月前、つまり七月十二日に、代々木原頭
で十七匹の蝶が「七月の石にすがつて」息絶
えたのである。二・二六事件の元将校十三名

と常人四名である。

刑執行の銃声をカモフラージュするためか
のやうに、代々木練兵場では旺んな演習の空
砲がうち鳴らされたとのことである。一名を
除いた十六名は皆

「天皇陛下！ 万歳！」か、或ひは、
「大日本帝国万歳！」を叫んでから従容と
して死についたさうである。

こゝに唯一人例外があった。常人の渋川善
助氏である。彼は

「国民よ！ 皇軍を信頼するなッ！」
と、絶叫したと云ふのである。

彼は福島県若松の出身。幼年学校では恩賜
の銀時計を拝領、陸士時代は開校以来の秀才
と讃へられながら、国家革新の思想を抱いた
が故に退学を命ぜられ、明大法科に学んだ青
年であった。時に三十一歳(福本龜治氏著『秘録』
二二六事件真相史)
彼が眼を白布で蔽はれ、正坐して眉間に銃
弾を待つ刹那の心懷は、恐らく伊東の「八月
の石にすがりて」と暗合するものがあつたら
う。

七月の石にすがりて
さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。
わが運命を知りしものち
たれかよくこの烈しき
夏の陽光のなかに生きむ。

運命？ さなり、
あくわれら自ら孤独なる発光体なり！
白き外部世界なり。

まこと、この章句は、渋川善助の運命を歌
つたかのやうにびたり……とする。「天皇陛下
万歳！」、「大日本帝国万歳！」を叫んで意
氣軒昂と死んでいった十六名は、死にいたる
まで七生報國と云ふ再生の信念を抱いて離さ
なかつた。

「皆んな聞いておけ……殺されたらその血
だらけのまままで陛下の元へ集まり、それか
ら行く先を決めようぢやないか」と、死に
臨みながら同志を激励した香田大尉の言葉
にそれと知ることが出来る。

然し、「国民よ皇軍を信頼するなッ！」と
叫んだ渋川善助の言葉には再生の希望がなく
希望を残る国民に託した悲痛な言葉である。

彼はまともな死を見てゐるのである。伊東が
幻影にみた入青みし狼の目Vに真ツ向から臨
んでゐるわけである。

伊東はこの作品ができた後、次のやうな書
簡を富士氏に出してゐる。

「先日から度々お便有難う。一寸長崎に帰
つてをりました。慣れぬ仕事で、さぞご疲
勞のことです。私も看護のつかれ一時に
出て頭泥沼のごとし。詩など到底書けませ

浅野 晃著

詩集箱船

イズムと名の附く一切から解脫し、その概念世界
を放下した氏は、今や清澄にして潤滑な悟達な新境
地に到達した。こゝに編む二十五篇はさりげない風
物詩の外貌を装ひながら、現代の病巣をシニカルに
切開し、その膿汁を剔抉して、新生の血汐の所在を
啓示する。読者は随所に警世と覺醒の金言を読みと
るだらう。
(頒価 三〇〇円)
果樹園社刊

然し九月号の「文芸懇話会」といふ雜
誌に一句ひねり出しました。その内ご覧に
供します。

伊東は帰郷したのは亡母の納骨か、初盆の
ためだったのだらう。
私はこの晩夏の一夕伊東を訪ね、「八月の
石にすがりて」の朗唱を聞き、前述した通天
閣の真下での死の幻影が直接の制作である由
聞かされたのである。

伊東は暑熱に堪へられぬと云つた恰好で腹
這ひになってゐた。氷水の空いた赤い縁取り
をした器に、埃のやうに微塵な蟲がしきりに

妻の風邪

堀口 太平

あや子をおんぶして、
天神町のバスの停留場のまえにくると、
山田さんという家の枇杷の木がある。
いま、小さな白っぽい花をいっぱいつけて
いる。

これがいつも目について立ちどまるのだ
が、
ずいぶん充実した、緊張した感じである。
まるで、妊婦が力んで、
金の卵をうんでゐるみたいだと思つた。
十二月の花では、
山茶花も好きだが、これにくらべれば浮い
たところがある。
枇杷は花ばかりでなく、
木全体が地味で、
蔵するもののあるさまが大変いい。
印象はみじかく、はつきりさせてと思ひ、
矢来下の市場に行く。

中華風のおんぶをつくるつもりだから、

豚コマ、白菜、なくなりかけている味のも
と、葛粉などを買つた。
(一九五九、一、六)

讃歌 かばん

——おの心が心おしはかりて

よるのへや
ひとりかえりきたりて
五円のメロン二箇入れし鞆ひらけば
たたみのうえに
匂いあふれぬ
かく
くらくむなしく
匂いにみちし鞆のごとき心もて
われ
人を恋いむとすらむ
(一九五三・夏)

訂正・第三十六号所載「ひでり」

六行目 そこにおく太太かいて(誤)

十二行目 くらきなやみが顔にちれど(誤)
……なみだわが顔にちれど(正)

舞ひ落ちた。

「今、蟬の詩を考へてゐるんです。八つ手
の芽。あの紫色の芽を知つてゐるでせう。
その葉裏に留つてゐる蟬の抜殻について考
へてゐるんです。」

さう、ぼつり……とつぶやいた伊東は、次
第に暗さを増す戸外の闇に、妖しく眼を輝や
かせた。

訂正

第十七号所載昭和四年六月七日附伊東書簡に現れた「馬
鹿の療治」は川村花菱作「馬鹿野郎の死」であらうと推
理したが誤謬。

それは帯匠詩人ハンス・ザツクス作、久保菜穂「馬鹿
の療治」で、配役は医者・島田政一、病人・仁木独人、
下男・瀧木勤の一幕物で築地小劇場第六十六回公演であ
つた。

第三十一号昭和七年二月二十三日附伊東書簡の映画
「火の山」は伊太利映画「火」であらうと想像したが誤
謬。

それは第一次大戦のアルプス山嶽戦を取扱つたルイス
・トレンカー脚本、カール・ハルトン監督の独逸映画
「火の山」であつた。

鱧

上村 肇

天草に
鱧狩りを見に行こうと誘う男は
頬にひどい傷痕のある男であった。

鱧は夜來の

天草灘の網に幾頭もかかり

未明の渚の上に暴れ回っては

梶杵や丸太で撲り殺される。

鱧狩りを異様に誘う男の

左眼は義眼であって

男は眼鏡を外しては

話の聞

幾度も、その義眼の上だけを
ハンカチで拭くのであった。

編集後記

計画通り三月十二日の伊東静雄の七周年を記念して特輯号を編んだ。予定した執筆陣を悉く網羅すると云ふわけにはゆかなかつたが、国文学者清水文雄、栗山理一、池田勉、作家一庄野潤三、島尾敏雄諸氏の寄稿を以待りて、故人を偲ぶにふさはしい賑やかさを感ずることができた。更に、伊東家からは貴重な写真と放送料、大東博士夫人幸子さんから寄稿に加へて金一封の御支援を頂戴した。茲に謹んで篤く御礼を申し上げます。

ゆりの物故作家、詩歌人の追悼号は普通だが、忌日を記念した特輯号は珍らしいに相違ない。つまり、よくよくの作家詩歌人でなければ編まないのを通例とする。僕等伊東の記念号を取って編んだゆゑは、伊東の詩作品が日本文学の伝統の上に確乎と位置するその確信と啓蒙のためである。一昨年の夏、京都大学の人文科学研究所に桑原武夫氏を訪ねてお話ししたことが、現代詩の系譜は藤村に発し朝太郎を経て静雄に留るのである。この私の確信に桑原氏も全く同意である。その帰りに京大独文学研究室に大山定一氏をお訪ねして同じ私の見解を述べると、大山氏は朝太郎には諸翻訳の浅さがあるが静雄は原典の重厚さそのものであると語られた。いかに伊東を高く評価されてゐるかと判る言葉である。

然るに既刊の諸家のものした現代詩史ないし評文は、未だ伊東の真価を充分に発見してゐるとは言へない。伊東が古今和歌集リルケに学び、和漢朗詠集の対応の精神に照らして、西欧の詩歌に对应し、これを超越せんと骨身を削つた生涯は、藤村に比してもいさゝかの遜色がない。

否、藤村は現代詩に於ける宗因で、静雄は芭蕉なので。この確信から拙論「作品と書簡から見た伊東静雄」は発足してゐる。まだややく四分の一行程を進んだにすぎないが私の残生涯を捧げて悔ゆることのない確信に燃え続けている。この確信を照応するかのやうに、後英を誇る作家井上靖氏は近頃しきりと伊東を賞揚される。昨年十月「新潮」

果樹園三十八号昭和三十四年三月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価五十円

果樹園三十九号昭和三十四年四月十日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第39号

凝視と陶酔 小高根 二郎
蛙のかおぶれ 堀ノ内 歴
青磁の大皿 美堂 正義

春宵 芳野 清
白居易詩抄 森 亮
酒場 福地 邦樹
雪おんな 堀内助三郎
中学時代の思ひ出 蒲地 敏一
流れのある石段で 池沢 茂
レルケ詩抄 たかはし おみ

凝視と陶酔

小高根 二郎

作品と書簡から見た伊東静雄(三十九)

私は「八つ手の芽と蟬の抜殻」の発想を聞いたけれど、それは発想にとどまったらしく、秋になってもその朗読はつひに聞けなかつた。伊東にはスランプが見舞ってゐるらしいか

「本日はコギト有難う存じました。毎々のことながらすみません。この頃は原稿も一向に書けませんので、コギト送っていただけ度毎に、良心の呵責に堪へません。それで、お礼も今更めきますが、何かお便しなくて筆とりました。」

誌上でも觸れてをられるが、去年の『俳句研究』誌上対談でも述べてをられる。又、作家三島由紀夫氏が平岡公威時代つとに伊東の門を滑つた事実を知る人を知つてゐる。実に伊東の反響と影響は単に詩歌の領域にとどまらず、文学全般に及んでると言はねばならない。

かゝる伊東静雄顕彰の趣旨を諒とせられ、拙研究に力を貸して下さる諸家はこの際厚く御礼を申し上げます。本号の執筆者である広島清水文雄、成城大栗山理一両氏は勿論、京大の野間光辰、明大淀野隆三、高知女大清水孝之助教授、作家富士正晴、庄野潤三諸氏、頼原退蔵未亡人芳枝さん、伊東静雄未亡人花子さん、その他数々挙げないほど多数の知識各位の御助力に對し深謝申し上げます。

果樹園 第三十八号(毎月一回発行)

昭和三十四年三月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
發行人 同朋舎
京都市下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
發行所 果樹園社
臨時 定価 五十円

保田さん下飯の由きいてみますので非常に楽しみにして待つてをります。

中島さん、田中さんにも、この頃すっかりうち絶へて、暮してをります。」

(昭和十一年十月三日大阪市西成区松原通一の十五号より京都市中野区大和町二五二番地地下恒夫宛はがき)
この日から一月して、辻野久憲氏から次のやうな書簡が来てゐる。

「お手紙有りがたうございました。暫くお便りなかつたのでどうしたことかと思つてみました。」

後半についてのお尋ねご尤もだと思ひます。それと同時に、あの本を編みながら、殊に後半の部分で、僕がどんな感懐を抱いてゐたかといふこともお察し下すつたことと思ひます。云ひかへれば、僕があつたやうな言葉を附さねばならなかつた悲しみです。しかし今こゝでは何も申し上げますまい。

その代りこの年末にもう一冊訳本をお送りできると思ひます。それは過日米、疲れた体に鞭打つてキリスト伝をやつてゐるからです。これはそれ自らすばらしい本でもありますが、それ以上に僕が今求め、探ね、戦



離散直前の辻野家

左から春子夫人、鮎子さん、路是君、久憲氏

つてある所を代弁してくれるでせう。ランボオからキリストへ、或は急角度の転廻かも知れません。しかし僕としては、これこそたゞ一寸の途だと信じてゐます。……が、この途を進めば、いよいよこの悲しみ、を深くしなければなりません。ほんとに僕自身としても殆ど堪へがたい悲しみなので、しかしこれが果してあの淋しい師を裏切ることになるかどうか、むしろ僕はそれが師を次の時代に生かす最も正しい途ではないかと考へてゐます。なぜならこれは萩原さんにも明言したのですが、萩原さんは旧約であり、それに対して僕は新約でありたいと願つてゐるからです。

生理(註・萩原朔太)のことは、前年もさうだつたし、何ともお詫びしやうがありません。といふのは、萩原さんが昨今「醉生夢死」のやうな状態で、自分の雑誌に出すやうな原稿がどうしても書けないと云つてをられるので、僕も困つてゐるのです。では中止にしてはと云ふと、是非やりたいのだとの返事なので、止むなく、原稿が出来なくなる迄延期してゐます。で、あれは夏の御作品でしたし、あまり発表がおそくなるとお困りのことと思ふのですが、如何したもの

でせう。萩原さんにどこか稿料のある雑誌に出したいと云つて渡しましたが、そのままになってゐます。ほんとに「生理」の件ではこれで二度御迷惑をかけるのですから面目ありません。

しかし生理は別としてもつと御作品を御発表下さい。あまり御沈黙なすつてゐると淋しいですから、僕もそのうち「宗教詩」を十ばかり一度に出してみようかと思つてゐます。すつかり疲れきつてゐますので、何だかごた／＼したとしか書けません。仕事すみましたら改めてお便りします。

伊東静雄
辻野久憲

(昭和十一年十一月一日鎌倉町浄明寺宅間より
大阪市西成区松原通二の十五伊東静雄宛封書)

この書簡によると辻野久憲氏は朔太郎の詩とアフオリズムを抜萃編纂した『人生読本』(第一書)を伊東に贈つたのである。その著者朔太郎氏から「辻野久憲の方法による倫理学の建設」と評された由述べてゐる。伊東は又『地獄の季節』の背神詩人アルチュール・ランボオからキリストへの転身について、辻野氏に質問するところがあつたのだらう。辻野氏はその著の後半に於いて高揚したカソリシ

ズムについて弁明してゐるのである。当時、辻野氏は学生時代からの伴侶である春子夫人を離別し、その間にできた長女鮎子さん長男路是君を伊丹の父母の許に託し、愛人加藤よし子さんと同棲してゐた。この新環境の中で彼はカソリシズムの作家フランソワ・モリアックの「癩者への接吻」(昭和九年九月作品)に引続き「キリスト伝」の翻譯に肺結核と戦ひながら取組んでゐたのである。その「キリスト伝」を辻野氏は伊東に贈ること

を約してゐるが、この年の四月季刊文芸誌「創造」同人吉満義彦氏の紹介で、辻野氏はすでに富士裾野神山に癩院復生病院を訪ねて、彼の信仰心を確かめてゐたのである。そこで彼は「毛髪を剣落して赤黒く爛れた頭や、眼、鼻、口等の一切の構造が頽れ去つて、その跡の洞窟に膿の溢れてゐる顔や、五本の指の欠け落ちて紫色に脹れ上つた掌などを直視した」のであつた。しかも彼はそれから救ひ難い重患者に「その不幸、その苦惱のゆゑに醇化されて、羈絆を超越した生命の最も純粋なる存在が示されてゐる」のを見たのである。「靈魂が腐敗してゐない、少くともそれが既にして潔められてゐることの何よりの證左」を檢分したのであつた。

蛙のかおぶれ

堀ノ内 歴

春がよ 来たときよ もう出るかい
そうだったね
やれ 明かるッ 結構な
おやまあ ひどい寐太りだね
お互さまだ
さあ 鳴いてみんかい
まだ早かる 顔ぶれ足りん
やれやれ しみつたれてるよ
ところでね 蛙がね 此の世じや一等
偉いんだてのを 知つてるかい
左様 勿論 そのとおり
四つの眼玉は天を向き 睨みよろしく
専ら無言の 語りあい
春もつい 来たばかり

春のうごき

久々の雨あがり 春がもう
そこらじゅうで 隠れてはいない
さ 速く履物をつつかけて
下駄でも 靴でもいい
私の下駄は あんな所へとんでる
ぬかるみは じき乾く
足もとに気をつけて
そら いつもの空地だ

み馴れぬ人夫が 其処で
整地と杭打ちを始めている
もう荒地のまゝでは置かない のか
「何になるんです ここが」
「道が出来る 家も建つ 此方が
本通りになるんだ とよ★」声は泳ぐ
すると 今年の春が私らの住み家も
も一つ裏手へ追いやる訳 かな
なにせ 変貌の様が面白く見ていられる
濡れ膨らんだ土中の春を 踏んまえて
私らは 寄り添うて立っている

この復生病院を訪問した後、彼は紹介者である吉満氏に「あの日以来、たえず私の耳許で、何かこの世ならぬばかりに静かで和やかな楽の音がいたしてをります」と述べたほど、カソリシズムへの陶醉と傾倒とを感じてゐたのであつた。(辻野久憲「天と地のははひに」)

この辻野氏の心境は、恐らく萩原氏も伊東も知らなかつたのであらう。その年四月に出た辻野氏の訳著ジャック・リヴェールの『ランボウ』での萩原氏の序「人間性の究極的純潔を愛すること、また絶対アナキイの思想的理念を持つてゐること、ランボオと一部通ずるところのある青年」と見てゐたにすぎなかつたし、伊東は『わがひとと与ふる哀歌』のよき理解者である彼を単なる仏蘭西文学での若き秀才と見てゐたにすぎなかつたらう。従つて前述した萩原氏の「久憲的方法による倫理学の建設」と云ふ断定になり、伊東のランボオの背神からキリストへの転身の疑惑となつたのであらう。然し、辻野氏にしてみたらカソリシズムへの帰趨は当然の結論だったのである。彼はジエイムス・ジョイスの「ユリシイズ」からポール・ヴァレリーの「詩の本質」をざぐりざらにリヴェールの「ランボウ」を経過して

フランソワ・モリアックの「ペルエイル家の人々」に辿り着くに至って、外国文学の肉体の内に影を潜めてゐる稜々としたカソリシズムの背骨を見たのである。つまり西欧の作家は、カソリシズムに帰趨する、或ひは背反する、そのいづれにしても、その根柢にカソリシズムが峻然と潜んでゐることに氣附いたのである。日本の外国文学者が見て見ぬふりをしてすぎるその地点に彼は付んだのである。埋没してゐるその古代の背骨を、病身に鞭打つて発掘しようとしたのである。

その決意からモリアックは絶好の発掘地点であつた。「神を愛することによって、ブルストやジイドやシヨイス等々によつて行はれたあまりにも大胆な禁断の領土への探求中に『聖寵の権利回復』を行ひ、かくして歪曲された現代の人間研究中に理智的、倫理的価値を回復せしめ、貧化された現代のヒューマニティの觀念を再び全体性にまで高めることによつて、純正な人間の觀念を得ることが、今後の作家に残された究極問題である」(「ペルエイル家の人々」辻野久盛跋)を、辻野氏は発掘意図にしたわけである。

彼は「イエズスの生涯」の訳筆を進めながら、モリアックと共に、生きてゐる人とし

てのイエズスを発見し、その手に触れ、肉となつてゐる言葉——肉からできてゐる存在、吾等と同じ肉でできてゐる存在に触れようと努めたのだ。その実践が四月に敢行した復生病院訪問であつたわけである。

書簡中、辻野氏は「淋しい師」と「萩原さん」とを混用してゐるが、彼は朔太郎の中にキリストの投影を認めたかつたのだ。若い学生と不貞に走り、愛児葉子、明子さんの養育を放棄した悪妻にも、拳一つ振り上げなかつた朔太郎。酔つて帰つてから、老母が用意してくれてゐる握飯を、小児のやうに頬張つた朔太郎。奪ふことを一切知らず、与へることをしかなかつた朔太郎。その朔太郎が吐いた金言アフォリズムに、辻野氏はバイブルの投影をみつけたかつたのである。

辻野氏がその朔太郎を旧約と言つてゐるのは、ユダヤ神学とキリスト神学とを混沌としてゐるやうなその未醒の状態を指してゐるわけだ。辻野氏が自らを新約と呼んでゐるのは、前述したモリアックを起点とした整理された自覚を指してゐるのである。

書簡の末尾で萩原氏の個人誌『生理』に伊東は詩を寄稿してゐる由見えてゐるが、その詩がどんな詩であつたか判明してゐない。辻

青磁の大皿

美堂正義

古道具屋の薄暗い店の片隅に

清初初期の青磁の大皿が忘れられたやうにある

表面に埃が少したまり

拭ふと唐草模様が艶々と光りだし

厚手の浅い凹みのなかに浮き上つてきて手につしりとした重量感がある

嘗てこの皿に盛られた料理を想像する敷きつめられた酢豚

煮られた大きな比目魚

あるひは熟れた杏がならべられ

それらは 皿の青い色彩のうへに美しく適度の食慾をそそり

酒はこころよく飲談を助けたであらう

人の手から手へとわたり

人の世の有為転変にしたがつて

海を越えて異国の店頭にさらされ

街路樹の瑞葉が風にそよぎ

皿の上にかすかに蒼く揺れるかげはわが心に哀傷の鬩りをおとし初める

春宵

芳野清

花ひらく

窓の乙女のため息がする

かぐはしい花々のにほひかと立ちこめる

しのび音に抱きしめる

胸のときめきさへ

つたへるやうな……

と、思念は詩ふのだが

きこえるものは

幼児のわめき声、ドアのばたあひ

電車の歯ぎしり、

霽の中からは

降ってくる風呂屋の煤

はては、

交尾期の猫の化物声

酔漢の目のやうな空には

相愛らず星の光も見えぬ

訂正、三十八号「受難者」

六行、キリシタン宗教のやうに(誤)

……………宗徒……………(正)

野氏の文章によると、「夏の御作品」とあるから、夏に取材されてゐるものであることだけは判る。先に私が未完と書いた「八つ手の新芽と蟬の抜殻」を扱つた作品であらうか？或ひは『夏花』期の作品の中で、所載誌が不明な三作品「そんなに凝視めるな」「砂の花」「若死」のどれかだらうか。「若死」は冬の作品だから格外だ。▲富士正晴に▽と献辞の附いた「砂の花」は夏の作品だが、伊東と富士氏との交渉は、まだそれほど熟してゐたとは言ひ難い。便宜上、私は次の作品を充當させていたたく。

そんなに凝視めるな

そんなに凝視めるな わかい友

自然が与へる暗示は

いかにそれが光耀にみちてゐようとも

凝視めるふかい瞳にはつひに悲しみだ

鳥の飛翔の跡を天空にさがすな

夕陽と朝陽のなかに立ちどまるな

手にふるる野花はそれを摘み

花とみづからをささへつつ歩みを運べ

問ひはそのままで答へであり

堪へる痛みもすでにひとつの睡眠だ

風がつたへる白い稜石の反射を わかい友

そんなに永く凝視めるな

われ等は自然の多様と変化のうちこそ

育ち

あゝ 欲びと意志も亦そこにあると知れ

第二詩集「夏花」

この作品はまだ満二十七才の若冠でありながら、すでに円熟の兆をみせて、カソリシズムの翼を借りて帰天の勢ひを示した辻野氏に与へた、伊東の汎神論的な箴言であるとも解釈できる。或ひはまた、当時の日常的な若い友であつた私や富士氏を対象においた詩の教訓のつもりであつたかもしれない。

この作品を分析すると、幾つかの詩篇とホフマンスタイルの影響も包含されてゐる。

第五行目の「鳥の飛翔の跡」は、昨昭和十年十月の作品である「夏の嘆き」に「鶺鴒の飛翔の道」として現れてゐた。そこで伊東は自分の迫るべき藤村、朔太郎の系譜を凝視してゐるが、こゝでは「飛翔の跡を天空にさがすな」と拒絶を命じてゐる。他人の追従と架空の追求とを諫めてゐるわけであらう。

第七、八行 「手にふるる野花はそれを摘み、花とみづからをささへつつ歩みを運べ」

は、四年前の昭和七年『呂』十月号に発表した「事物の本抄」に既に原型が見えてゐた。△私の手にふれたがる道の花らを触れながら、私は林を進む▽が、それである。当時の詩句より含蓄が遙かに豊富になつてゐる点が注目に値する。

末尾の△われ等は自然の多様と変化のうちにごそ育ち、あく欲びと意志も亦そこにあると知れ▽は、ホフマンスタールの「外部世界」の第五聯

何のためにこれらは建てられ、相互に
Wozu sind diese aufgebaut? und
gleichem

似かよふこともなく、かくも数多いのか
Einander nie? und sind unähnlich
viele?

何なれば笑、涙、死は相交るか
Was wechselt Lachen, Weinen und
Erblicchen?

に啓示を得てゐるやうに想はれる。つまり、ホフマンスタールの自然の多様さと変化と、それに交錯する欲びや悲しみに対する問ひに對して、△問ひはそのまゝに答へである▽と云ふ第九行目の詩句さながら、それだからこそ生の欲びと生き抜かんとする意志が生れるのだと、伊東は決然と答へてゐる。忍苦と自

虐嗜好の傾きのあつた伊東にして初めて可能な答へである。

先の辻野氏から便りのあつた十一月に、次の二篇の作品を久し振りに『ゴギト』に発表してゐる。

蜻蛉

無邪気なる道づれなりし犬の姿
何処に消えしと気付ける時
われは荒野の尻に立てり。

其の野のうへに
時明してさ迷ひあるき
日の光の求むるは何の花ぞ

この問ひに誰か答へむ。弓弦断たれし空
上見よ。
陽差のなかに立ち来つづ
振舞ひ著し蜻蛉のむれ。

今ははや悲しきほどに典雅なる
荒野をわれは横ぎりぬ。

第二詩集「夏花」

格別解説を要せぬ作品である。晩秋の足の早い雲が去来する野を伊東はさまよつたの

わたしは岩の間を遣遙ひ

彼らが千の日の白昼を招くのを見た

また夕べ獸は水の畔に忍ぶだらう

道は遙に村から村へ通じ

平然とわたしはその上を往く

第二詩集「夏花」

白居易詩抄(三二)

森

亮

小橋の柳

細い流れは音もなくながれる、頬をつたふ涙のやうに。

西日が悲しげに侘びしげに小橋を照らす。

年暮れた柳は葉をことごとく落して枝ばかり、

それらが身を切るやうなきびしい風に吹かれつづけてゐる。

詩人の死

元微之追悼

書く文章の秀抜、世に在ったとき彼に敵ふ者はなかつた。
その風姿、その靈は命無き今や神々しい存在

三島由紀夫氏はこの作品を「詩人の生活の確立とその決心」(昭和二十八年「フシケ」七月号)と云ふ言葉で評してゐる。

伊東は、微笑みを含んで膝にすがり寄るまき子ちゃんを抱きながら、三島氏の云ふ詩人としての父性と云ふより、生んだ子を理屈な

とはなつた。

泣いて咸陽の北郊に野辺の送りをするけれど

も、

世間並みに彼が灰や塵になつてしまふもの

二

墓の門はすでに閉ざされ、笛吹きたちは帰って

行った。

ただ夫人だけはそのまゝ残つて泣きつづける。

塚のほとり、か黒いまでに青い草のうへに置く白露、

亡き人ここに眠る千歳の秋の、初めて

ある。

註 三首とも白居易が六十才頃の作。各々の原詩を言ふと「小橋の柳」は小橋柳(四の二一七)、次の詩人の死(一)は元微之(二首)第二首(四の二一八)で、その二は元相公餞歌三首中の第二首(四の一五〇)である。元微之は本名、白居易の七才年下の親友で太和五年七月下旬に卒した。

だ。産後の永い病臥からやつと健康を取戻した花子夫人のため、勤め先である堺高女に近い住居を探して一ヶ月後に引越した北三國ヶ丘方面の高台でも彷徨して、得た作品であらう。△弓弦断たれし空▽と云ふ表現には、伊東独自の屈折した表現がある。「わがひとに与ふる哀歌」期の「漂泊」では、△われは見ず、この御空の青に堪へたる鳥を▽と、鳥の飛翔をさへ許さぬほど鮮烈な青空の表現があつた。が、こゝでは空の連合観念である鳥を出さず、鳥を射る間接観念である弓を起用し、しかも、ふりしほられた弦を空の鮮烈さで断ち切つて見せてゐる。伊東の詩句の含蓄は「わがひとに与ふる哀歌」期より一段と深くなつてゐる。この青空の鮮烈さを見分け得る伊東の眼は、確かに南国育ちの眼である。少年の日、有明海、大村湾の上に輝やいた空の無上の青さの不思議を、こゝに表現したのであらう。

笑む稚児よ……

笑む稚児よわが膝に縮れ
水脈をつたつて潮は奔り去れ
わたしがねがふのは日の出ではない
自若として雞鳴をきく心だ

しに育て、ゆく凡百の父性の毅然さを、歌つたものだと思はれる。

柔らかな膚を通して、彼は血潮の共鳴を感じたらう。同じ血潮の共鳴はやがて和むと本明川のやうに万年の水脈を伝つて劫初の方に流れていったらう。今に限つたことはない。

代々の凡百の親達も、なぜとも、なんのためとも問はず、稚児の無心な口が求めれば、その口に食を与へたのだ。日の出を待つまでもない。曉闇に鳴く雄雞のときに、自若として生の覚悟をするのだ。起き抜けに食を求めてさまよふ川床の岩間。そこで雄雞達が呼んだ日が昇り、刻々と光を増し白昼となる。

又、夕になると獸達だって仔を連れて水の畔に宿る。あの獸達も仔を育てるのに人間と変つたことはない。交易のための道は村から村へ通じてゐる。そこを伊東は平然と往く……と云ふ、父親としての自若とした覚悟を歌つたものである。

この詩の各章句は昂ぶつた連弾のやうに互に融け合ふこともなく配置されてゐる。それは確かに安易な理解を妨げるが、他方、読者に自由な空想を誘ふ作用をもなしてゐる。

この理由の他に、この詩の発想の根元には、伊東が意識してかしないのかは判らないが、

酒 場

福地邦樹

女を酒場に連れていくがいい

成功うたがいなしである

無理に飲まさんでもよろしい

彼女の好奇心は満足し

母性愛が眼覚め

いささか浮気になり

そして以後寛容になるであろう

ただし一つ忠告

これは度々やると失敗する

女は一度危険な目にあわされると

浮々する

二度あわされると用心する

ミューラーとホフマンスタールの章句が影響を与へてゐることも理由の一つに挙げられるかもしれない。

第三、四行へわたしがねがふのは日の出ではない、自若として雞鳴をきく心だは、ミューラーの『冬の旅』第十一番「春の夢」の

鶏鳴により

Und als die Hähne krähten,

私の心は覚めた

Da ward mein Herze wach;

私はここに独り坐り

Nun sitz' ich hier alleine

その夢路を考ぐる

Und denke dem Traume nach.

に似てゐる。

第六行目へ千の日は、既述した『冬の旅』第二十三番「並み懸かる陽」のへ三つの陽を、その意図と違へて起用してゐる。

第八行目へ道は遙に村から村へ通じは、ホフマンスタールの「外部世界の韻詩」の第四聯

街道は草の中を走り、村落は

Und Strassen laufen durch das

Gras, und Orte

ここかしこに、炬火、樹木、池に充ち、
Sind da und dort, voll Fackeln,
Bäumen, Teichen,
傲然たる町、死の如く枯れくちた村……
Und drohende, und totenhaft ver-
dortet…
の風韻に通ふものがある。

中學時代の思ひ出

蒲池 徹 一

私達の町諫早には、その頃まだ中学がなかった。町に農学校と女学校とはあったが、上級の学校に行かうとする子には、どうしても中学が順当なので、小学校を出ると、みな中学に行きたがった。中学は大村が一番近いので、諫早からは、ずいぶん沢山の生徒が、汽車で大村へ通つてゐた。全校生徒の三割といふと、かなりの数であった。

その外に長崎の商業に通ふ者や、特殊な学校として女子職業などに、ここからも通つてゐる生徒があった。朝晩はそれらの生徒たちで、小さな田舎の駅は真黒になるほどであつた。

た。

冬はストーブのまわりに集り、夏は外にあふれて木柵のあたりまでむらがり、談笑する者、議論に花をさかすもの、カードをめくるものなど、とりどりであつた。汽車の中とても又同じ風景だつた。

その雑談組とても又一色ではなかつた。多少不良がゝつた硬軟両派から、何とはなしの中間派、大人ぶつた一組、ぶらぶらする散歩派、その中のまた少数派で、文学少年ともいふべき二三人に、私などはいつてゐたが、伊東君といふと、これはカード組の方であつた。そのなかでも亦、際立つた勉強家の一人だつた。

そんな風で中学時分の彼は、ひまさへあれば本を開きカードをめくる、といった、例の小柄な姿だけが印象に残つてゐるほど、真面目一方の勉強家形だつた。そして無口で、心は強いがまだ子供っぽいといふ少年だつた。

云はゞ彼は秀才形だつたが、その常として、世間なみに大人びて、生意気な口をきいたり、一ぱし文学の話などしたがる、出来の悪い子供たちに対しては、無関心の態度を取つてゐた様である。中学時分の彼に、後年の詩人伊東静雄を見ることは、ほとんど不可能に近い。

雪おんな

堀内助三郎

美しく聡明な私の妻はどこかの妃で、
林の中の広い邸宅に私とむつまじく住んでいた。

一夜、私は妻と仲よくし、朝目がさめる
と妻はすでに床にいなかつた。

と、召使いの男が入ってきて、ただいま
皇帝がおみえです、と告げた。

日の当る明るい場所の方で、妻の陽気な
笑い声がきこえた。

召使いの男は、共有ですね、と言ってニ
ヤニヤしながら立っていた。

私は妻にシットを感じたが、仕方がない
や、と思つた。

今朝、三日来の大雪はさらに降り積ん
だ。

私は、やはり雪はいいのだと心に決めて
煙草を一本ゆっくりすいつけた。

のである。なぜなら日本の詩壇の愚かさから、普通では彼の場合のやうな幸運は、とうてい生れ得ないことだからである。たまたまこゝに真の詩人萩原氏が一人在って、師弟やゲル1プの関を乗り越えて、より多い在野の才能の中から伊東を認めたといふことに、幸運があつたのである。

そしてこの意義ある二詩人の会合を、単なる実力本位、現実主義の味気なさから救うたのにも、こゝに運命の神の登場が必要なのである。

それではかの非詩人的な中学時代の伊東は、どこで詩の神と仲よくなったのだらうか。彼の変貌は正しく佐高三年の学生生活によるものであり、殊にその時期から京都時代へかけての、彼の大切な「我がひと」への愛が変貌の主役であつたことは、小高根氏の研究によつて明らかな通りである。

彼は表面のやさしさとは別に、驚くほど心の強い男で、なかなか他人などを認めようとはしなかつた。私も文学に生涯を台なしにした男だが、私のものについて、彼は一言も筆にも口にもしたことはなかつた。そのくせ彼は、自分から彼の妹を私にくれると云つて私を驚かしたことがあるのだから、まんざら眼

中になかつたわけでもないのである。その傲岸と云つても良い半面を持つ彼も、自らの愛の前には弱かつた。彼は一人きずついては、それを他人には知らさずひそかに詩に託してゐたのである。

流れのある石段で

池 沢 茂

子どもがいると妻はなんにも仕事が出来ないと言う。それで、ぼくは公休日には、よほど天気がわるくないかぎり、かならず子どもをつれて出かける。子どもの運動や日光浴のためもある。

子どもは幸吉と梅子のふたりで、五つと二つになる。その日は谷川まで遊びにいった。夏のあいだはたび／＼だったが、冬になつてからはじめてで、ずいぶん久しぶりだった。といっても、距離はそんなに遠くない。アスファルトのバス路にしたがつて、カーブの多い長い坂をのぼつてゆき、その一つの頂点から、わき路へそれておりてゆくと、もう谷間へ出る。子どもの足で三十分ほどだろう。そのすこし手前までは、家々が建ちつたり、バスやトラックやハイヤーなどが行きかう市街

地なのだ。木々のみどりにおゝわれた山々が幾重にもかさなり、その底をぬつて、小さな谷川がながれている。冬なので、山のかげが長くのびて、谷間がおもつていて寒い。ぼくは子どもたちの水あそびはじきに中止させて日あたりのいゝ場所をさがした。

川岸にいくらかの台地があり、そこに家が二、三軒、よこたわつてゐる。そのあいだに道路へむかつて、急な高い石段がぎすずいてある。その中ほどの、両がわの家の玄関へ通じるあたりに、二メートル四方くらいな石だゝみがある。ぼくはこゝへ子どもをつれていった。

石段にそつて溝があり、きれいな水が流れていた。傾斜が急なので、多くもない水だが瀧みたいのに、いきおいよく流れおちる。そのころ水が好きでたまらなかつた幸吉は、さつそく、この溝にかぐみこんで、はげしい興味を示した。ほかの流れでもたび／＼してきたように、そこらの小石をひろつて渡してやると、しばらく考えていてから、それを水のなかへおとす。ころ／＼と音をたてながらころげてゆくのが、幸吉には、おもしろくてたまらないらしい。やがて、自分から、石をひろつて、投げこみはじめた。だん／＼も

どかしくなつてくるのか、手いっぱい砂をにぎつて、ぱつと投げられる。水といっしょに、ざあと流れおちてゆくのが、なんとも言えない興味をそゝるのだろう。とっぜん自分の下駄をぬいで放りこんでしまった。

「あ、そんなことしたら、いかん。そんなことしたら、下駄が無いようになるよ。下駄

が無いようになつたら、もう、おうちへ帰られへん」

ぼくはあわてて言いきかせる。ところが幸吉には、ぼくがあわてて立ちあがつたのが、かえつて、おもしろいらしい。きゃ／＼と声をあげて、よろこぶ。そうして、ぼくの下駄まで取りあげて、水のなかへ投げこんでし

レエルケ詩抄 6

たかはししげおみ訳

新しい歌

ハゲタカが輪を描いて迫る そのくちばしで人間の脳味噌を啄かんと身構えながら僕は遠くから、まったく遠くから見ている僕のゆり木馬がうなづくのを

古びた木馬はゆれを止める
たてがみに蜘蛛が巣をはる
そうして 今まさに到来する
日日の落涙の時が

白 樺

インディアンの偶像のように

眼が 輪が 線が

黒くあるいは灰色に樺のはだをおおっている
古い祭の礼法を新しい祭のそれで
まだすっかり失つてはいない
そんな精霊に似ているかのようだ

おどおどした眼の見えない忍耐の徴しの上で
緑の樹冠がさらさらと音をたてている

静かな群衆に白樺の葉はささやく

／＼かかつて真実であつたものは これからも
真実だ

自然の現象は眼でみちびかれています
その眼は自然の光を見やしない／＼と

まつた。

「幸ちゃん、下駄がぬれたら、足がつめた
いよ。足がつめたかつたら、しもやけになる
んやで。幸ちゃんはまえに、しもやけになつ
たことがあるやろ。しもやけになつたら、か
ゆくて、いたくて、あるかれへん。あるかれ
んようになつても、かまへんか」

ぼくはこわい顔をして幸吉をにらみつけ
る。すると幸吉にも、これ以上のいたずらは
できないと、どうやら判断できるらしい。し
かし、ことばの意味がわからないのか、まる
きり聞いていないのか、ふりむきもせず、
たゞ、じつと、水の流れをみつめている。

医者はたいいてい、幸吉について、絶望的な
診断をくだして、親のぼくたちに、あきらめ
や覚悟をすゝめる。それでも、ぼくたちは、
やはり生きてゐるのだから、なにかしら、希
望みたいなものを保持しようとしてきた。た
とえば、こんな、いたずらみたいな行為でも、
かれ自身の興味にしたがつて自由にさせてい
るうちに、そこから、社会的な判断や常識的
な知能がめばえてき、ことばもおぼえてくる
のではなからうか、と考えるようにするのだ。
ぼくはもう怒つていないことを示すために、
とん／＼と、おもしろそうにはねて、石段の

のである。なぜなら日本の詩壇の愚かさから、普通では彼の場合のやうな幸運は、とうてい生れ得ないことだからである。たまたまこゝに真の詩人萩原氏が一人在って、師弟やゲルプの関を乗り越えて、より多い在野の才能の中から伊東を認めたといふことに、幸運があったのである。

そしてこの意義ある二詩人の会合を、単なる実力本位、現実主義の味気なさから救うたのにも、こゝに運命の神の登場が必要なのである。

それではかの非詩人的な中学時代の伊東は、どこで詩の神と仲よくなったのだらうか。彼の変貌は正しく佐高三年の学生生活によるものであり、殊にその時期から京都時代へかけての、彼の大切な「我がひと」への愛が変貌の主役であったことは、小高根氏の研究によって明らかな通りである。

彼は表面のやさしさとは別に、驚くほど心の強い男で、なかなか他人などを認めようとはしなかった。私も文学に生涯を台なしにした男だが、私のものについて、彼は一言も筆にも口にもしたことはなかった。そのくせ彼は、自分から彼の妹を私にくれると云って私を驚かしたことがあるのだから、まんざら眼

中になかったわけでもないのである。その傲岸と云つても良い半面を持つ彼も、自らの愛の前には弱かった。彼は一人きずつては、それを他人には知らさずひそかに詩に託してゐたのである。

流れのある石段で

池 沢 茂

子どもがいると妻はなんにも仕事が出来ないと言う。それで、ぼくは公休日には、よほど天気がわるくないかぎり、かならず子どもをつれて出かける。子どもの運動や日光浴のためもある。

子どもは幸吉と梅子のふたりで、五つと二つになる。その日は谷川まで遊びにいった。夏のあいだはたび／＼だったが、冬になってからはじめてで、ずいぶん久しぶりだった。といっても、距離はそんなに遠くない。アスファルトのバス路にしたがって、カーブの多い長い坂をのぼってゆき、その一つの頂点から、わき路へそれておりてゆくと、もう谷間へ出る。子どもの足で三十分ほどだろう。そのすこし手前までは、家々が建ちつたり、バスやトラックやハイヤーなどが行きかう市街

地なのだ。木々のみどりにおゝわれた山々が幾重にもかさなり、その底をぬって、小さな谷川がながれている。冬なので、山のかげが長くのびて、谷間がおぼつていて寒い。ぼくは子どもたちの水あそびはじきに中止させて日あたりのいゝ場所をさがした。

川岸にいくらかの台地があり、そこに家が二、三軒、よこたわっている。そのあいだに道路へむかって、急な高い石段がぎすいてある。その中ほどの、両がわの家の玄関へ通じるあたりに、二メートル四方くらいな石だゝみがある。ぼくはこゝへ子どもをつれていった。

石段にそって溝があり、きれいな水が流れていた。傾斜が急なので、多くもない水だが瀧みたいのに、いきおいよく流れおちる。そのころ水が好きでたまらなかつた幸吉は、さっそく、この溝にかぐみこんで、はげしい興味を示した。ほかの流れでもたび／＼してきたように、そこらの小石をひろって渡してやると、しばらく考えていてから、それを水のなかへおとす。ころ／＼と音をたてながらころげてゆくのが、幸吉には、おもしろくてたまらないらしい。やがて、自分から、石をひろって、投げこみはじめた。だん／＼も

どかしくなってくるのか、手いっぱい砂をにぎって、ぱっと投げられる。水といっしょに、ざあと流れおちてゆくのが、なんとも言えない興味をそよめるのだろう。とっぜん自分の下駄をぬいで放りこんでしまった。

『あ、そんなことしたら、いかん。そんなことしたら、下駄が無いようになるよ。下駄

が無いようになったら、もう、おうちへ帰られへん』

ぼくはあわてて言いきかせる。ところが幸吉には、ぼくがあわてて立ちあがったのが、かえって、おもしろいらしい。きゃ／＼と声をあげて、よろこぶ。そうして、ぼくの下駄まで取りあげて、水のなかへ投げこんでし

レエルケ詩抄 6

たかはししげおみ訳

新しい歌

ハゲタカが輪を描いて迫る そのくちばしで人間の脳味噌を啄かんと身構えながら僕は遠くから、まったく遠くから見ている僕のゆり木馬がうなづくのを

古びた木馬はゆれを止める
たてがみに蜘蛛が巣をはる
そうして 今まさに到来する

日日の落涙の時が

白 樺

インディアンの偶像のように

眼が 輪が 線が

黒くあるいは灰色に樺のはだをおおっている
古い祭の礼法を新しい祭のそれで
まだすっかり失ってはいない
そんな精霊に似ているかのようだ

おどおどした眼の見えない忍耐の徴しの上で
緑の樹冠がさらさらと音をたてている

静かな群衆に白樺の葉はささやく

へかかって真実であったものは これからも

真実だ

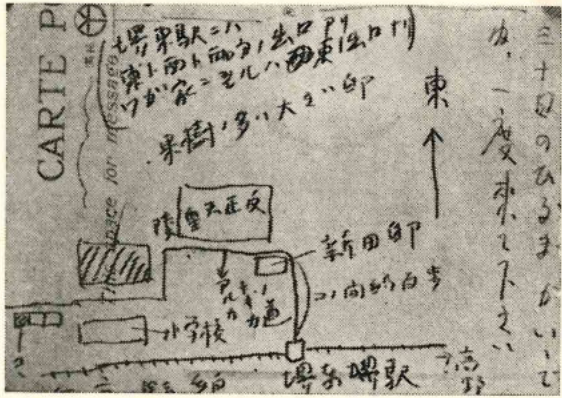
自然の現象は眼でみちびかれているが
その眼は自然の光を見やしない』と

まった。

『幸ちゃん、下駄がぬれたら、足がつめたいよ。足がつめたかつたら、しもやけになるんやで。幸ちゃんはまえに、しもやけになつたことがあるやろ。しもやけになつたら、かゆくて、いたくて、あるかれへん。あるかれんようになって、かまへんか』

ぼくはこわい顔をして幸吉をにらみつける。すると幸吉にも、これ以上のいたずらにはできないと、どうやら判断できるらしい。しかし、ことばの意味がわからないのか、まるきり聞いていないのか、ふりむきもせず、たゞ、じつと、水の流れをみつめている。

医者はたいてい、幸吉について、絶望的な診断をくだして、親のぼくたちに、あきらめや覚悟をすゝめる。それでも、ぼくたちは、やはり生きていくのだから、なにかしら、希望みたいなものを保持しようとしてきた。たとえば、こんな、いたずらみたいな行為でも、かれ自身の興味にしたがって自由にさせているうちに、そこから、社会的な判断や常識的な知能がめばえてき、ことばもおぼえてくるのではなからうか、と考えるようにするのだ。ぼくはもう怒っていないことを示すために、とん／＼と、おもしろそうにはねて、石段の



北三國ヶ丘の家の案内図 富士正晴氏宛はがき

果樹園

第40号

凝視と陶酔 小高根 二郎
 蜜柑の皮 浅野 晃
 伊東さんの思ひ出 山根 忠雄
 狐問答 芳野 清

春の日の会のこと 林 富士馬
 白居易詩抄 森 亮
 編 福地 邦樹
 故郷 美堂 正義
 道明寺山行 堀ノ内 歴
 見送り 池沢 茂
 古い唄 田中 克己

凝視と陶酔

小高根 二郎

「蜻蛉」「笑む稚児よ」を発表した十一月初旬に、京都紫野孤蓬庵の編笠門の絵葉書に書いた、次のやうな寄せ書きが伊東に舞ひ込んだ。

「京都の庭を見物して只今酒をのんで居ます。同じく酒をのんで居ます。保田与重郎」

(昭和十一年十一月五日京都より大阪市西成区松原通二の十五伊東静雄宛はがき)

果樹園三十九号昭和三十四年四月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同 朋舎 定価三十円

下までおりていった。一番下は石や岩のごろ／＼している河原で、下駄はその石のあいだに引っかゝっている。その下駄をひろって石段をあがってくるとき、ぼくはふと思いついて、梅子のおむつをさぐってみた。まだ大丈夫と思つていたのに、いつのまにか、もう、ぬらしている。

「梅ちゃんだまってしてしまつたら、あかんがな。しっこするときは、ちゃんと言うんやぜ。おむつがぬれたら、気がわるいやろ」

「ちょい／＼、ちょい／＼」

ぼくがおしえると、梅子は小便のことを「ちょい／＼」とおぼえていて、そう言いながら、しゃがんで、かっこうをして見せる。「してしまつたら言つたかて、あかんやあ」

ぼくは言いながら、この子はどうかやら、幸吉とちがつて、まともに生れついているらしいと、ほつとする。それから、おむつを溝のながれでゆすいで、石段のかたわらの木の枝に、ひろげてかける。ぬれている下駄も、石段にならべて立てかける。

空は気が遠くなるほど、はるかに、高く遠く晴れあがっている。北にあたる背後は石段で、そのうえの道のむこうは、また丘になっている。まえも、右も、左も、いくらかの距離

離をおいて、かなり高い山が、かさなりあつている。つまり、こゝは、ぐるりが山にかこまれていたので、冬の風が、すこしも吹きこんでこない。そして日光の供養だけがある。河原や石段からの反射までがいっしょになつて、あつぱつたく輝いている。暖冬のせいもあつて、寒中だというのに、春どころか、まるで初夏のあたゝかさだ。

梅子はおむつをとつたついでに、下半身をはだかのまゝにしておいた。日光浴のためだが、身がなるになった梅子は、あかい頬をし、大よるこびで、よち／＼と、石だゝみを歩きまわっている。それから、石段を一つのぼつては「ぼい、ぼい」と自分で声をかけながら、とびおるまねをする。ぼくは木や草の葉をちぎつてきて「お舟やで。お舟、お舟」と言いながら、溝へ投げいれて見せた。幸吉がともすれば、また下駄をとろうとするので、それを防ぐためもある。そして幸吉に、その葉をわたしてやると、おなじように水にながして、じつと見入りはじめた。梅子も来て「あつぱ、あつぱ」とぼくから葉を請求する。そして水にながして「おふね、おふね」と言った。そのうちに、おむつはもちろん、下駄も、おゝかた、かわいていた。

編輯後記

二日二十五日兄太郎の案内で清荒神の帰りブラッセルの美術批評家マリオ・ペドロサ夫妻が発行所に立寄られた。ペドロサ氏はベニスでのビエンナーレ展で機方志功画伯にプラムを授与することに最も努力された方である由、兄から紹介された。

氏は清荒神で見た数画は十九世紀の生んだ三大画伯の一人であると言はれた。即ち、ゴッホ、ゴッホ、鉄斎であると云ふのである。私の昔書いた作品に「鉄斎以上先生」と云ふ機方志功論がある。二十年前の作品である。当時の画伯の声価は日本では知る人ぞ知るの眼界で、むしろ外国に於て呼ばれ高かつた。夫妻に所蔵の機方志功の作品を鑑賞に供し、鑑賞以上の真価があるかどうかお訊ねした方が笑つて答へなかつた。

近頃文壇にケストラー氏の日本ペンクラブ否定問題が起つた。さうした危惧は、私はすでに第三十五号の後記で触れておいた。塔台も暗し……の例もある。案外日本の外から見た日本観が正当なことは、フェノロサやタウトをかたがたすまでもない、機方志功の場合でもそれと判る。世界的と云ふ旗印をか、ける者ほどこゝろ島國的な人間が多い。(O)

果樹園 第三十九号(毎月一回発行)

昭和三十四年四月一日発行

池田市野町一六八 編輯兼 小高根 二郎
 発行人 京都市下京区壬生川通五条下ル
 印刷所 同 朋舎
 池田市野町一六八 發行所 果樹園社
 定価 三十円

当時、保田氏はよく萩原朔太郎先生に随行してあちこち旅をしてゐるが、折から入浴した二人を、京都在住の桑原、淀野両氏が案内して食事を共にすると、「わがひとに与ふる哀歌」刊行以後、めっきり作品の数が少くなつた伊東を激励するために、この寄せ書きが出されたものであらう。

その後伊東は次のやうな書簡を百合子さんに送つてゐる。

「ゆり子さんお手紙有難う。私共も毎日平凡無為な生活です。……中略……弟は東京のP・C・Lといふ会社にひき抜かれて行きました。東京に行く前の日京都で、西宗さんと、先生にお会ひし、ご馳走をいただいたと言つてよこしました。兄弟が、ちりちりになって、この頃、私の家はひっそりさびしいです。こちらの赤ん坊物につかまつて立つ程度になりました。子供が居るといふもののが、ごまかせます。人間三十以上にもなると、もう何かに、ごまかされんと生きて行きにくいらしく、神様は、そんな時期に、赤ん坊を授けるのだらうと、存じます。私はこの頃はめつたに詩書きません。覚悟が激しくなると、さう／＼安易に物書くことが出来にく／＼になります。それ

に、大阪には友人が少いことが、物かくには不便です。この頃はゲーテの詩をよく読んでをります。

又新しい詩集出版のことを心の中で考へてをります。

先日こんな詩を書きました。

朝 顔

一日中陽差の落ちて来ることのない町なか
の、我が家の庭に、一茎の朝顔が生い出で
たが、それが、夕になるまで満むことを知
らず咲きつづけて私を悲しませた。

そこと知られぬ吹上の
終夜せはしき声ありて
この明け方に見出しは
遂ひにさめ居しわが夢の
朝顔の花咲けるさま

さはれ、御空にま昼すぎ
人の耳には消えにしを
かの吹上の魅惑に
己が時逝きて朝顔の
なほ頼みふる花の夢

(昭和十一年十二月初「推定」大阪市住吉区北島中一
丁目大阪府立住吉中学校より姫路市五軒邸六七酒井百
合子宛封書)

伊東は、この書簡で、ゲーテ (J.W. Goethe) (1749-1832) の詩集を読んである由、見えてゐるが、「朝顔」は、或ひは、ゲーテの野薔薇 (Heidenroslein) に対応して書いた作品であったかもしれない。

野 べ の ば ら

ゲ 大 山 定 一 訳

僕はおまへを折りとりよ
野べのばら

ばらは子どもにさからった
いつまでも忘れぬやうに刺しますすわ

黙ってわたしは折られません
ばら ばら 紅ばら

野べのばら

子どもはそれでも折りとった
野べのばら

ばらは刺したりもがいたり
叫んでみたが無駄だった

たうとう折られて泣いてゐた
ばら ばら 紅ばら

野べのばら

私の中に、私の題に、鮮しい蔭影となつて朝顔は咲くことは出来なくなつたVと歌つてゐた。その二年後、昭和九年『コギト』十月号の「川辺の歌」では、△私に残つた時間の本

蜜 柑 の 皮

浅 野 晃

今日は妬き思ひの荒れ狂ふ日である
さういへばこの数日といふもの
誰ひとりわが陋屋を来り訪れるものはなかつた

遠き友からの消息も届かなかつた
もとより自分はどこへも出で行かない
さうして今日はこのやうな吹雪である
机にむかつて数冊の書をひらいてみたが
それはたゞいよいよ妬みをかきたてるばかり
だつた

かかる妬さをしりぞけようとつとめる故にこ

その

このやうに荒れ狂ふ吹雪であつた
△おまへだつてひどく構へこんでるが
さっぱりえらかなないじゃないかV
えいくそ手でも洗つてやらうと
ストーブのわきをたつて
台所までいって見たが

性！ 孤独の正確さ、その精密な計算で、熾
な陽の中に、はやも自身をほろぼし始める、
野朝顔の一輪を、私はみつけるVと、歌ひ続
けてゐた。が、まだ共に時間的な脆弱性を通

この水のきたないことはどうだ
おいどこかにきれいな水はないのか
ないどころか結晶したやつがいくらでも窓に
吹きよせてゐる

顔を洗うんじゃない手を洗うんだ
あつたあつた蜜柑があつた
自分は蜜柑の大きいやつをとつて
ていねいに皮をむく
くるりとむいた皮でできた手を洗ふ
さうして実のほうをありがたく頂戴する
さうして窓からひややかに吹雪を眺める
△あんなにうつくしい人が死ぬなんて
そんなことであるもんだらうかV

逝 く も の

山桜の花と水車に送られて
谷川の水は
家族同士 仲間同士
冗談をいったり歌ったり
青い空を自身に染めてゆくと
むかふから見知らぬ水どもが

この「野べのばら」は、ゲーテの数ある詩篇中でも、伊東が最も愛好した小曲の一つであつた。ゲーテがストラスブルグの大学を出て郷里フランクフルトで弁護士を開業した若冠二十二歳の時の作品。ゲーテはこの詩の少年であり、フリデリーケは野薔薇に譬喩されてゐると云ふこの作品を伊東は口誦しながら、咀嚼し、吟味を繰返して、この小曲の勇敢な少年とは凡そ反対であつた、若い日のおづ／＼とした悲恋を回想したかもしれない。伊東は自分にも薔薇の詩があつたことを思ひ出したに相違ない。「噴水と薔薇」。五年前百合子さんに書き送つた作品である。△私が泉のそばに坐つた時、噴水は白薔薇の花の影を写した。私はこの自然の反省を愛した。私が青空に身を委ねた時、縫ひつけられた幾条もの銀糸が光つた。私は又この自然の表現を愛した。さうして、私の詩は出来た。V伊東が初めて詩精神を発見した、記念すべきあの詩である。

伊東はこの詩の薔薇の代りに、朝顔を換置することを思ひついたので。

朝顔と言へば、伊東の詩想では馴染み深い花である。四年前、つまり昭和七年『呂』十月号の「朝顔」で、△充溢であつた日の様に、

念的に抒情してゐるにすぎなかつた。
然し、この通念性を裏切つてゐる万葉の古歌がある。

あつといふ間にとび込んできた
これらの新顔を
横眼で見ながら
並んでゆくうちに
口をききあひ角つきあひ
こんどはもつと威勢のいい新顔が
どどどどどとわり込んできて
いつかしだいに平地に出たが
身内にはぐれたものもあり
旧知と別れたものもあり
泣いたりわめいたり笑つたり
眼を見張つたり眠つたり
闇夜はつめたき光り
日中は天道さまに甘やかされ
わくわくしたりびくびくしたり
悦に入つたり滅入つたり
見たり聞いたり思つたり
それでもせつせとゆくうちに
海へ出た 海ではまた
押したり引いたり押されたり
そしてすつかり年をとり塩辛くなり
昇天した

朝顔は朝露負ひて咲くと云へど夕陰にこそ
咲きまさりけれ

読人しらず

この万葉の朝顔は、昼顔か夕顔かを、のん
きな古代人が錯覚したのであらう……と云ふ説
もある。又、この歌は実は旋頭歌であつて、
「朝顔は朝露を負つて咲くが、秋萩は夕影に
こそ咲きまさる」の「秋萩」を、書写した際に
書き落したのであらう……と云ふ意見である。
が、共に実在の歌に対して臆測を出でま
い。素直に物影に夕まで凋むことを忘れた朝
顔と見るのが至当であらう。

私はこの万葉の読人しらずを、万葉期より
むしろ古今和歌集期に近い歌人と解釈する。
朝顔は朝露を負つて咲き朝日に凋む……と云
ふ通念から、「花がなかったら春はどんなに
長閑なことだらう」に代表される古今的な
ひねりのある洞察——正当な観察をした、最
初の歌人であつたやうな気がする。

話が脇道にそれたが、夕影にこそ咲きまさ
つた万葉期の朝顔まではゆかぬが、夕まで凋
むことを知らずに咲き続けた朝顔に伊東は着
目した。伊東は学生時代に万葉の筆写をして
ゐた。「近頃私は出家になつた様な気持で万

伊東さんの思ひ出

山根忠雄

京大文学部の図書室で

「夏花」といふ詩集をよんでひどく感動

した僕は

頼原先生の紹介状をもらつて

初めて伊東さんを昔の住吉中学校に訪れ

た

「あなたが僕を知つてゐて

それを誇りに思ふやうな人に

きつとなりませよ」と

伊東さんは生前好き少女に語つたとい

ふ

「京大国文科の卒業生で

ほんたうに文学のわかるのは

恐らく伊東君が一番だらう」といはれた
頼原先生のお言葉を僕はそのとき確かに
お伝へしたやうに思ふ

野の夜

風の冷たい三月の夜ふけ

丹波焼の徳利を傾けながら

ひとり炬燵にあたってゐる

「春夜雨を喜ぶ」といふ詩に

——野徑に雲は俱に黒く、

——江船に火は独り明らかなり

と杜甫は歌つたが

この頃の降りつづく細雨にしめつた

野の闇は

ところどころ

すでに春の明りを点火して

この徳利の色のやうに

まっ黒けだ！

かもしれない。

この万葉の朝顔が、二坪ほどの狭庭にそば
立つてゐる丈高い板塀の節穴から這ひ込んで
きた朝顔と、びたり……と合体したのだ。私

の記憶に間違ひがなければ、その板塀の突端
に近い節穴から、外光と一緒に細かい蔓が迷
ひ込んできてゐた。その蔓が燃える空に触れ
てゐる所には、一輪の藍の花が褪せた紫に燃

え爛れてゐた。その下方の日蔭の場所では、
午の時刻も知らぬげに濃藍の一輪が咲き続け
てゐた。さらに下の方には童子のオチンチの
やうな蕾がまだ青白く時を待つてゐた。

狐 答

芳野 清

桜が咲いて

黄色い菜畑ほつぽと炎えて

丸いぼんぼりお月さま

何とも狐狸めいた風景で

頭の弱い私など眉唾、桑原、御用心

童の頃の村祭

馬鹿口開いて見たもんだ

ひよつとこ面の村人が

恥らふ美女にうかうかと

華の御殿に招かれる

美女は狐に早変わり 操る手先そのまゝに

男は頭に手拭のせて

肥溜お風呂で唄くちずさむ

さては御存知馳走の教々

馬の小便酒 馬糞の牡丹餅

さんざ鴨腹満腹御気嫌

さて ひよろ／＼と御帰館召されば

菜畑変じて小川となり

どうも困つた渡らにやなるまい

お尻からげて「おゝ深 おゝ深」

いつか春夜の白らむまで

御殿も小川も皆消えた

ひよつとこ男は菜畑に腰を抜かして大弱

り

その鼻先にこれは又女嫌男嫌の春の舞

狐の本場はお隣り中国

聊斎志異の女狐は

楚々たる風情で「御免遊ばせ」

貧書生の臥床へも入ってくる

情が濃くて そのまゝに

人の子供を生んだりする

哀愁深くていゝのだが

ユーモア味では日本の

狐に歩があるやうだ と

愚にもつかぬ事ながら

春日痴夢に日が暮れる

この中の濃藍の凛とした一輪が伊東の胸に
投入したのである。それは噴水のそばに咲い
てゐた薔薇を推しのけて位置を占めた。そし
て、「夕陰にこそ咲きまさりけれ」と云ふ猛
ましい先祖の花心にあやからうとした。伊東
の胸底から、運命的な予感や、或ひは鎮魂的
な複雑な哀韻を響かせた「野薔薇」第一、二
聯のリフレインが制作意欲を掻き立てたであ
らう。

ばら ばら 紅ばら

Roslein, Roslein, Roslein rot,

野へのばら

Roslein auf der Heiden.

それにしても、亡びの近い運命も知らぬげ
に、懸命に夕まで咲き続ける朝顔の花の姿は、
婦人の途を探してもしてゐるやうに文学とカ
ソリズムに献身してゐる辻野久憲に似てゐ
るではないか……。彼の頼む師友である朔太
郎や、武夫や、隆三や、与重郎は京都の古庭
を見ながら楽しく酒を酌み交してゐる。彼等
に比べて、病床でイエズスの生涯と取組む久
憲はあまりにも悲しい。さうだ。あの朝顔の
花を歌つて久憲に捧げてやらねばなるまい。
これが伊東の「朝顔」の制作経過であり、
意図であつたであらう。

百合子さんに書き送った「朝顔」の原型は昭和十一年の歳末を越え、翌昭和十二年一月にまで持ち越されて彫琢されたのである。その事情は、序詞の変化によってそれと知ることが出来る。「一日中陽差の落ちて来ることのない町なかの、我が家」が、『コギト』二月号所載のそれでは「去年の夏、市中の一日中陽差の落ちて来ない我が家」に変化してゐるからである。後者に特に「市中」と書いてゐるわけは、昭和十一年の歳末に西成区松原通の市中の家を引払い、堺市の町外れである北三国ヶ丘に引越してゐるからである。

朝 顔 辻野久慈氏に

去年の夏、その頃住んでゐた、市中の一日中陽差の落ちて来ない我が家の庭に、一莖の朝顔が生ひ出でたが、その花は、夕の来るまで凋むことを知らず咲きつづけて、私を悲しませた。その時の歌、

そこと知られぬ吹上の
終夜せはしき声ありて
この明け方に見出でしは
つひに覚めぬしわが夢の

朝顔の花咲けるさま
さあれみ空に真昼過ぎ
人の耳には消えにしを
かのふきあげの魅惑に
己が時逝きて朝顔の
なほ頼みある花のゆめ

第二詩集「夏花」

「春の日の会」のこと

其他 (1)

林 富士馬

毎年、佐藤春夫先生の誕生日をお祝いして皆が集る。その集りに「春の日の会」という名前がついている。

佐藤先生の誕生日は四月九日である。ことし(昭和三十四年)もその集りがあった。たまたま皇太子の御婚儀の前日になってゐるので、ことしは、忘れることがないと思うが、この数年、我が家の懸案であつた区劃整理の引越しに際し、盗賊にはいられ、一冊のこらずの書籍、雑誌類をはじめ、書翰、日

記帖、書きかけの原稿、切抜、雑誌帖類、そう云つたものまでを紛失した。他の人には少しもかゝはりのないことであつても、又直接生計に響くことではなかつたが、(あゝ、何とこのことに悩むことよ!) 私は全く呆然とした。その前に、戦争で、疎開先に送るようにして駅まで荷造りしたものを焼いたことがある。敗戦後は、碌な書物を買えるような余裕のある生活ではなかつたが、それでも、頂戴して、そのことが記念になつてゐる幾冊かの書物もあつたし、手紙類は考へがあつて、何より、割と大切に出来て来たのである。盗賊はバタ屋としか考へられず、それら一切を、たゞ紙屑として何台かのリヤカーで運んだものらしく、なにひとつ残さなかつた。その小屋の敷居のところに、こぼれたらしく岩波文庫のゲーテ詩集が一冊残つてゐた。敗戦後の東京に出て来て、住所を転々としていたとき、昭和二十二年九月(もう十年以上経つた)が、江戸川の洪水に逢ひ、大抵のものを水漬しにしたが、そのときも、紛失はしなかつたものである。

そういうことがあつて、積極的に、どんな過去のことはほんとは忘れるべきであるかも知れないのに、逆に、もうそれ程沢山残

つてもいそうにない自分自身だけのために、或は当然、大方の「果樹園」の読者には迷惑であろうと考えながらも、こんな文章を綴つて、自分ひとりのためにも記録しておきたい

白居易詩抄 (二十三)

森 亮

公主の館

平陽街区の古びた館にはもう行く人が滅多にない。
偶と誰かが訪ねてゆくなら彼は悲しみに胸がふさがる。
春ならば梅・李の花咲く中庭によぶこどり鳴き、
御夫妻の住まはれた楼閣に秋はこほろぎの怨み声。
真珠で飾つたすだれは鉤から外れてちぎれちぎれ、
見晴らし台は見る影もなく消石の石だたみを残すばかりだ。
うはさに聞いたが、夫君は今に生きながらへひげは雪のやうに真白になって地方にくらし

と思ひ立つた。老人のくりごとに近づいて来た。さて、ことしの「春の日の会」は、新橋演舞場で、佐藤春夫先生の第五番目の舞踊劇

★ 読 詩

夜ふけ読むのをやめて長い溜め息をひとつ吐く。
声出して読みふけてゐたのは二十年まへの旧詩帖。
ともし火と向き合つた白いあごひげを止めやうのない老いの涙がうるほす。
詩をやり取りした相手は大方この世の人ではない。

註 「公主の館」の原詩は同諸客題于家公主旧宅(四の二六)である。公主は天子の息女を言ふ。この場合は于季友に嫁いだ方であるから、于家公主と呼ばれてゐる。公主は早く世を去り、夫君の李友も地方(明州)に転出してゐたので、洛陽の平陽里(假名)の季友の旧宅は荒れてゆく一方であつた。二番目の「読詩」の原詩は感旧詩卷(四の一九〇)で、白居易が六十二才の作。初めの「公主の館」も大体同じ頃のものである。

「陽春曲山村祭」(はるふかしさとこのよひみや)一幕四場が上演されておるといふので、その「東おどり」観劇の総見があつて、その後、四時半から八時まで、築地料亭「金田中」で行われた。

ことしのことを記録するだけではない。去年のこと、一昨年の会の日のこと、と私は書きつづけて行きたいのである。私に文学というものがあつたなら、その文学にとつて唯一の日であるから、私は私の過去の生活を、その日にかぎつては、明瞭に思い出せる筈である。去年の「春の日の会」には、「果樹園」のお仲間では、浅野晃氏のほかに、上京されたばかりの田中克己氏がおみえになつたが、田中氏はことしはお電話で、出席出来なくなつたとのことであつた。

世間ひと通りの義理やおつき合いの出来ない私ではあるが、この会だけには、それこそ「万障繰り合せて」不思議と出席してゐる。多分、義理やおつき合いのためではないのであろう。が、人の大勢集るところや晴がましところに出席することに慣れないので、私は毎年誰れかをさそわなくてはならない。例えば浅野先生には、同年輩の「文芸日本」のお仲間があり、あゝいう会でも、仲良さそう

蝙蝠

福地邦樹

醜女の妊娠は気の毒でみていられない
彼女は醜い看護婦であった
時々つとめのあとで

以前その病院の患者であったという夫の
もとに帰り

朝がた階段の踊り場

黒い妊婦服をまといじつと前方をみつめ

呼吸をととのえている様子は

背のひくい蝙蝠の残酷さを持っていた

脈をはかってもらうとき

彼女の手は

まだそれほどの年でないのに

白くぶよぶよして生温かった

しばらく休ませてくれと

私の病室で油を売っていくことがあった

私は蝙蝠を嫌う

不愛想な病んだ鳥であったのに

彼女はますます緩慢な動作になり

一緒にひとつのテーブルを占領していら
るが、不思議と私にはいつもそんな仲間が
ない。余りしつこく、仲間を求めすぎるため
のようである。庄野君なんか、吉行君や安
岡君等とうれしそうな仲間がいつもいる。そ
の人達とこの会で顔見知りになったが、仲間
を私も作らなくてはならないが、私はお山の
大将になっていないとおさまらないので、困
る。併し、もう年齢なので、このまゝで押し
通す覚悟でいる。とにかく、ことは、おな
じく「果樹園」の仲間の芳野清氏にお願
いして、お伴を命じた。

その癖、「春の日の会」では、私なんか幾
時の間にか古顔の一人である。ある会がある
と、その会でだけ、顔が広かったり、威張っ
たりしている人種があるが、古顔というの
は、とにかく、その会だけでは、顔が広いと
いうことに相成る。新しい顔は、文壇も世間
もおなじく、押しなべて新鮮である。古顔は
陳腐になる。高浜虚子のことばに、「平凡な
句はとるが、陳腐な句はとらず」とある程で
ある。

ことしの出席者は八十名位だった。会は毎
年盛んで、たのしい。何しろ、「門弟三千名」
と称せられている佐藤先生の誕生日なので、

所謂文壇のおれきれきも数が少くない。そう
いうなかに難ると、文壇的にも文学的にも、
仕事をしない、或は、名なぞ為さない人の方
が却って妙に目立つものの方である。

ちなみに、佐藤先生自身、大変この集りを
たのしみにしていられる。一家揃って、出席
される。文壇的な集りに大いに反撥されて来
たし、どつちかと云えば、社会的でない筈の
先生が、この会は非常にたのしみにしてい
られるように見える。

「君にも案内を出すように云っておいたと
思うが、会費が高いのだから、無理して出席
しなくともよろしい」と仰有ったことがあ
る。一家が生計に追っかけられていると御存
知の終戦直後の頃である。

この会で私は興奮し酔払う。昔は毎日酔
払い、興奮していたが、近頃はお正月とこの日
位しか酔払わないようだ。

先生のところにはじめてお伺いし、文学へ
の志を述べたのは、あれは昭和何年のことだ

故郷

美堂正義

ここから見る空は広い

ますます醜くなった

そして白衣がはちきれそうになって

やっと休暇をとった

つたろう？

昭和八年？

そうだ。いまから「春の日の会」の思い出

を一年ずつ逆に通り返り、数えて行ってみよう。

そうしたらはつきり判るかも知れない。

会の世話人は長谷川幸雄さんである。

長谷川さんは、佐藤先生の玄関にいて、正

則英語学校に通い、その後アメリカに渡り、

現在は、朝日新聞社につとめていられる。誰

れに聞くということなく、そんな風に覚え込

んでいる。

私が戦争に行くこと決めて、佐藤先生のとこ

ろにお別れに伺ったとき、長谷川さんが丁度

社用か何かで尋ねていらして、知り合いに

なった。その折も例によって先生の前で、し

たたかに酔払っていた。昔は若かったから、

コワイものはなかった。その折、先生は、は

しげやしわが大君はうた人をというような和

歌を書いて下さった。うた人を、と云って頂

いたのが、大変うれしかったのである。私は

長谷川さんに、先生に序文を書いて頂いた詩

集「誕生日」（昭和十五年自費出版）をお送

りした。その後年に一度、春の日の会でお逢

いするだけであるが、何しろ「門弟三千人」

のなかの一人である故、そうして又俊逸が多

い門弟のなかに雑っているの、少しお酒が

廻ると、数年前までは必ず「なあ林君、俺達

は大器晩成型なんだから」と、文学に対する

並々ならぬ夢想と野心とを云われていたが流

石に、去年と、ことは云われなかった。お

師匠は前に、「大器晩成と云っても、文学の

世界で仕事をするためには、四十歳までには

云々」のお教えもあったように思う。支那の

有名な書物にも、四十までに名前を為さん

には云々ということがあったように思う。私

の場合に就て云うなら、文学で名前を為した

くもあったが、いまでは、とにかくこの乱世

を「医者」の資格を獲得して、一家を支え得

るようになったことを、父母と共に、何より

佐藤先生御夫婦に感謝している。長谷川さん

は、朝日新聞社で、「出身成功」(一)され

たことに、その境遇に満足されているかどう

か。私は偶然読んでいた探偵小説の翻訳者の

名前が長谷川さんであることに気が付き、ひと

りなつかしく思ったことがあり、いまでも私

の詩集を大切に持っているの仰有って下さる

ことを、光栄に思っている。

海には鳥が点在し

向ふには帯のやうに青い海がある

その遙に四国の山が霞んで

そこから私の上を越して後の高い山まで

四月の空は明るく覆ってある

私の立ってある山の麓で生まれ

この空気を吸って育ち

私の傷けた木もある

しかし、街はすっかり変って

電車が走り、バスやトラックの往來が激

しく

二本のキラキラ光る鉄道もついて

田圃のあった辺りが目貫通りとなり

私の幼ない日の記憶の家もなくなつて

煙を吐く工場が多く

啼く鳥も少なくなってあるやうに想はれる

木々は緑の芽を吹き初め

土に温みも感じられ

草の匂ひも甘く香ばしい

せはしく啼きしきる小鳥よ

いつかはこの山に続く土の下に

私の祖先と同じやうに坐ることであらう

は二度となかったが、一人一人が立って、自己紹介のようなことをしなければならなかったときがあった。例によって酒を飲んで、興奮はしても、芸のない私は、突然「佐藤春夫論を書くひとつの方法として、是非、門弟三千人の列伝が必要のように思う。そういう方法で、佐藤春夫に逆に光をあてる方法もあり得ると思う。芭蕉を論ずるのに、其角、丈草、去来論が必要のように、僕は佐藤春夫の門弟三千人列伝を書いてみたいと思っている」というような意味のことをしゃべって、座が白けたことがあった。そのとき、私には同席の井伏鱒二も井上靖も檀一雄も中谷孝雄も、等々々々、又評論家の島田謹一、山本健吉、吉田精一等々々、或は又柴田錬三郎、五味康祐等々々、更に又同席していなかったが保田与重郎も死んだ太宰治等々々、そういう固有名詞はすべて眼中になかった。私には次に書きたく思い、そうして永遠に書けないだろう自分の一冊の抒情詩集のことしか考えていなかったかも知れない。又、「お絹とその兄弟」製作次第のこと、或は「一夜の宿」のモデルであり、たまたまその席にも出席していられた島田納郎画伯のこと、「指紋」の最初の稿に附録としてあったあの小説の主人公、オピウム、イーターが書いたことになっている英語の文

章、というより「瀬沼の山羊」のモデルだとも云って、沢田卓爾先生等々々の一切をひっくるめて、私は「林富士馬の詩とその意見」だけが必要であったのかも知れない。あとで、お隣りにいらした芳賀檀先生から「今夜林先生は大演説をなさいましたね」と云われて、甚だ恥ずかしく、しよげたことであった。佐藤春夫の「田園の憂鬱」という小説にたまたま触れて、私はこの世に、この現実の日常生活のすぐ傍に、そこにとび込めばそこに棲むことの出来る文学の世界が存在することを知り、心が安らぐのを感じた。私は意志的に、与えられた現実のほかに、自分の生活を持つ可能性を覚悟した。私の文学は、佐藤春夫のなから一歩も出る必要がなかった。「詩人の道は生涯の道であり、荆棘の道である所以のものは君ももう十分に知ってある通りである。君が自分の門に来て君の志を述べた時、自分は君の再考を促したのはつい昨日のやうに思ふがもう八年になるとか。その間につくづくと君を観るに君も亦、気の毒にも生れながらの詩人である。——異常性格者である。」云々の序文を頂いたのは、昭和十四年の夏、二十四歳のときであった。そうすると、はじめて先生の門を叩いたのは、昭和六年のことの勘定になるわけだ。

道明寺山行

堀ノ内 歴

四月の野徑を一人とおく行く
身近でしわ枯れ声かしている
不思議なボソ／＼で きつと
古い隔世代からの話声のようだが
日当の丘に梨か杏の果樹畑
丁度真白な花の満開 近よると
まるで粉ごに溢れた花が
その飽満さに無聊でいるのが
青白んだ芽えの上に染み出ている
ボソ／＼はひどく古びてかすれ
何か云い続けるらしいが意味はとれない
畑に扉 小さくて赤錆びた錠前
満開の白無垢は見事で重々しく
世の中からは置き忘れられている
太陽は少しく傾き
ひとり汗しいら立っている私が
緩い丘の上りに徒らに歩度を強めるが
脾弱いヨロ／＼歩きでしかない
ボソ／＼はおもつてき
私は振返らない 四月の野徑
一九五九・四・四

古い唄

田中克己

私の生れる前に死んだ祖父の五十年祭といふので、私は叔父叔母いとこたちと海をわたった。その村に着くころには雨もやみ、私はきげんよく土の上に下り立った。祖父の生きてゐた時を知ってゐる唄は一族の顔を見わたして、私を祖父にそっくりといった。唄のおぼえてゐる祖父の年齢に、私はちやうどなつてゐるのだ。唄の好きだったといふ私の祖父に、私は容貌のほかに、それをもうけついでゐる。かなしい時、私はうたをうたふのだが、それを子供たちは、お父さんまた古い唄、とそしめるのだ。

見送り

池沢 茂

妻は梅子を生んだとき「あゝ、こんどは、

えらかった。幸吉のときは、らくやっただけど……おなかにいるあいだから、しんどくて、ほくたちに子どもが出来たのは、ふつうよりも、だいぶおそい。はじめが男の子の幸吉で、もう三十を越えた母体の初産だった。二度目の、しかも女の子のときにくらべたら、難産なのが、むしろあたりまえだろう。しかし妻は、妊娠中も、内職の洋裁などで、せつせと夜ふかしをつづけていたし、出産のときも、とりたてて苦しまなかった。生まれてからも、半年ほどのあいだ、ずっと寝かせたまゝにしておいて、もりなど、あまりしなくてもよかった。母乳がとぼしく、三か月ほどのうちに人工栄養ばかりに切りかえねばならなくなつたが、べつに不つごうはなかった。ひどくやせて、こつ／＼と骨ばり、しわばんでいたのが、むしろその後、まる／＼と肥えだし、七か月目には優良児にさえなつた。しかし、あとから考えると、それは幸吉が、まだ母体のなかにいたときから、ふつうの子とは、どこか違っていたからにちがいない。おとなしく、おっとりして、育てやすくはあつたものの、なんとなく反応がぶく、ぼんやりして、どこかしら異常なところのある

のが、だん／＼目立ってきたのだ。やがて、ものを言うのも、歩くのも、人なみよりだいぶおくれるらしいのが、はつきりしてきた。それでも幸吉は、一年と九カ月か十カ月で歩けるようになり、三つの誕生がちかづいて走れるくらいになると、ぼくが出動するたびに、ついてくるようになった。玄関か、せい／＼門が見える曲り角までで別れようとして、泣きわめき、そっくりかえって、きかないのだ。

『じゃあ、停留所までおいでよ』

妻にそう言ったのがきっかけで、その日から幸吉は、雨の日でないかぎり、出動するほどといつしよに停留所まで出た。といつてもひとりでは、とても帰れない。というよりもひとりでは、家からそとへなど、一歩も出られなかった。だから当然、妻もいっしょに行かなければならない。ぼくたちは夫婦と子供だけの家族で、るす番はだれもいないから、ぼくの出勤ごとに、戸じまりをしてカギをかけた三人そろって出かけるのだ。

家から停留所までは、ゆっくり歩いて十分あまり。途中で、ながい下り坂がある。

『幸吉も家にばかりいるんでは、体のためにわるいからなあ。こうして、わずかでも、そ

との風や日光にあたりたり、運動もせんことには……」

言いわけみたいに、ぼくはときどき妻に話しかける。いつも欠かさず子や妻に見送ってもらえるのが、ぼくはうれしかったが、妻は日によって、さっぱり気乗りのしないようすをしているからだ。とにかく一家総出で出勤ごとに、雨の日のほかは、かならず停留所まで、はる／＼見送りに出かけるのだから無理もない。近所の奥さんたちのおもわくも気になったにちがいない。しかし幸吉はじつさい、親が連れださなければ、どこへも行かない子どもなのだ。ふつうならば、かどへ出て、いろ／＼しゃべりあって、遊んだり、はしりまわったりしている。なかには、もう、三輪車など乗りまわしているものもある。ところが幸吉は、どういふわけか、簡単な単語のほかは、なにも言えなかった。そのせいか、近所の子たちから、よばれたり、あそびにさせられたりしても、なんの反応も示さなかった。耳などわるいわけでもないのに、そばから注意してやっても、見向きもしないで、あらぬほうをぼんやり、ながめているにすぎない。そして、かたときも、親から、はなれなかつた。寝るときはもちろん、起きているあいだも、たえまなしに、ぼくか妻かの手をに

ぎってしようとした。妻は洋裁がすきで、あまり家から出ない。だから幸吉は、毎日の運動といえば、その妻につれられて、市場などへ買物にゆくぐらいのことだった。かけっこをしたり、マリをころがしたり、三輪車のけいこをしたり、ちょっと遠い山や谷川などへ足をのぼしたりするのは、男親のぼくがいっしょでない出来にくい。むろんそれはぼくの公休日か、泊りあけの早帰りの日にかぎられる。あいだの日は帰りが夜おそいので、幸吉はもう寝ていて、その翌日まで、ぼくの顔を見ずにしまえば多い。ぼくはそれで、出勤の途中、幸吉に手をにぎらせて歩きながら、イヌやネコをはじめ、スズメやツバメ、チョウやトンボ、近くのお宮からとんでくるハトなど、なんでも目についたものを教えようとする。道ばたに小屋をおいてニワトリを飼っているところがあつたから、そばまで連れてゆき、かどみこんで、草などたべさせて見せたりする。坂のうえまでくると、日によって、下のほうの市街のかなたに、海がきわだって見える。外国航路らしい大きな汽船が港から出て、しろい水脈をながく、まっすぐに引いているときもある。そんなときは幸吉をだきあげて『ほら、海やで。大きなお船が走ってるな。』

果樹園四十号 昭和三十四年五月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同 朋舎 定価三十円

見えるやろ」などと言って聞かせる。ところが幸吉は、そういう対象のどんなものにも、なんの反応もあらわさないのだ。そのほうにチラリと視線を走らせるらしいときもあるけれど、やっぱり、あらぬほうばかり見ている。ことばの意味がわからないからだけではない。近所の子どもたちに対するのと同様、むしろそれ以上に、どんな生きものにも、めずらしい景色にも、なんの興味もおこそうとしないのだ。かれには、どういうわけか、たゞ水だけがおもしろいらしかった。道ばたに、みぞや、どぶの落ち口などがあると、幸吉はだまってぐん／＼手をひっぱり、その水を見につれていった。

果樹園 第四十号(毎月一回発行)
昭和三十四年五月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人 同 朋 舎
印刷所 同 朋 舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第41号

凝視と陶酔 小高根 二郎
故人のこと 田中 克己
白居易詩抄 森 亮
山霞 山根 忠雄

未熟な言葉 福地 邦樹
風光り…… 堀口 太平
錆びた眼覚め 堀ノ内 歴
花と雨 浅野 晃
大きな木 たかはししげおみ
花期 美堂 正義
水の好きな子 池沢 茂

凝視と陶酔

作品と書簡から見た伊東静雄(四七)

小高根 二郎

伊東は北三国ヶ丘に新居を構へてから、次のやうに周辺の雰囲気や百合子さんに伝へてゐる。

「先日はお手紙有難うございました。ご元氣のご様子で、うれしく存じます。蒲池君結婚された由、私も安心しました。お暇の折は新居を見においで下さい。前の所とはすっかり趣の違った所で、横は広大な反正御陵、(註)仁徳天皇の第三皇子裏は堺市が一望の下に見渡される高爽の地で、夜などはこ

陵のお濠で変な声で鳥がなき、近所の原っぱではお化けが出るといふ噂です。早くこゝに移ればよかつたと思ふほど、私の気持おちつき、物書く気持もおこります。早速古鳥哀歌といふ長詩書きました。反正御陵のことを古鳥御陵といふのです。これは「むらさき」といふ少女雑誌の三月号にのせる少女詩です。もっと有名になれと仰しやいます。私が有名にならぬのは世間が愚鈍であるからです。私は現在の日本の小説家、評論家をもあはせて第一流です。詩人とはそんなものであります阿々。花子がつとめる様になりましたから、今迄よりはお金持になりました。遊びにいらつしやい。すし位はいくらでもご馳走します。



「悪き母達」

シオウアンニ
セガンチイーニ

先生はご健康ですか、風邪は召されませんか。お大切に祈ります。

伊東静雄

ゆり子さん

（昭和十二年一月十三日堺市北三国ヶ丘町四〇一郵便局より姫路市五軒邸六七酒井ゆり子宛封書）
この書簡に現れる「古鳥哀歌」は、「夢からさめて」と改題されて、同じく昭和十二年『コギト』三月号に発表された作品である。

夢からさめて

この夜更に、わたしの眠をさましたものは何の気配か。

硝子窓の向ふに、あゝ今夜も耳原御陵の丘の斜面で

火が燃えてゐる。そしてそれを見てゐる

わたしの胸が

何故とも知らずひどく動悸うつのを感ずる。何故とも知らず？

さうだ、わたしは今夢をみてゐたのだ。故里の吾古家のこと。

故郷の吾古家のこと。

ひと住まぬ大家家の戸をあけ放ち、前栽に面した座敷に坐り

独りでわたしは酒をのんでゐたのだ。夕陽は深く廂に射込んで、

それは現の目でみだの夕影よりも美しかった。何の表情もないその冷たさ、透明さ。

そして庭には白い木の花が、夕陽の中に咲いてゐた

わが幼時の思ひ出の取纏る術もないほどに端然と……

あゝこのわたしの夢を覚したのは、さうだ、あの怪しく黠めく

御陵の夜鳥の叫びではなかったのだ。それは夢の中でさへ

わたしがうたつてゐた一つの歌の悲しみだ。

かしこに母は坐したまふ

紺碧の空の下

春のキラめく雪溪に

枯枝を張りし一本の

木高き梢

あゝその上にぞ

わが母の坐し給ふ見ゆ

第二詩集「夏花」

この序詞に当る前栽のある故里の大きな家の思ひ出を、私は伊東から幾度も聞いたことがある。伊東の姉さんである江川ミキ女史

故人のこと

田中克己

僕は東京に来てやはり孤独である。朝太郎先生も堀さんもある。耐へ切れなくなつた日、堀さんの奥さんに電話をかけたると、多摩墓地へお詣りで留守とのことだつた。あとでこの日が御命日であつたことがわかる。今年も青葉の時となり堀さんのことはおぼえてゐるが、むしように朝太郎先生こひしく、思ひ出が話したくて、お嬢さんの葉子さんに電話をかけたると留守、翌日ゆくと、昨日は御命日で前橋に行かれたと。僕は呼ばれてゐるのだ。薄弱になつた記憶力を補ふために、堀さんや萩原先生が、思ひ出せ、思ひ出して談れと、どこかから呼んでおいでなのだ。僕の老衰を憐んで、葉子さんは駅まで僕の鞆をもち、ビタミン補給によいレタスを買つて下さつた。

だから、伊東の「夢からさめて」と全く同じ思ひであつたのである。しかし、セガンチーニは『愛の果実』『悪き母達』の画幅で善悪二系統の母を寓意的に描いたのである。前者は、花の咲く春の野の一本の立樹に嬰兒を膝に抱いてゐる母の姿である。遠くには連山と家畜の群が見えてゐる。言はゞ、アルプスのマリアと云つた画幅である。後者は、中景は水の連山が限り、その下の吹きさらしの雪溪に、寒気にいぢけた立樹が悄然と立ってゐる。その樹の中間に軽羅をまとつた若い母が逃れようとしながら呪縛されてゐる。胸からはみ出た豊富な乳房から、この時！とばかり嬰兒は母乳をむさぼつてゐる図柄である。

この画幅の寓意とは関係なしに、伊東はその構図——八紺碧の空の下、春のキラめく雪溪に、枯枝を張りし一本の、木高き梢、あゝその上に、伊東は「悪い母」とは全く反対の、生涯を子供の慈育に捧げつくした、男まさりで賢明だつた母の姿を安坐せしめたのである。

このセガンチーニの構図の起用の他に、この詩で特筆すべきことは、詩よりも長い序詞の起用である。その序詞に対する細心さは先の「朝顔」に於ても顕著であつたが、そのもくろみは既に五年前に書いたエッセイに見

（神戸市会議員）の語るころによると、伊東家の最盛期にあつては、家を幾軒も所有してゐて、木棉問屋の他に幾つかの商売も兼業してゐたものらしい。私が伊東に聞いたところによると、その前栽のある大きな家は、諫早でも最古を誇つた料亭であつた由である。その料亭も後日廃業してゐたのを、休暇で帰省した時にでも伊東は酒を携へて訪れ、昼寝の用に供したのであらう。昼寝から覚めて前栽の立樹の向ふに沈んでゆく春の落陽の美しさそれは咲いてゐるコブシの花と対比して非常に印象的であつたらしく、同じ話を大学時代の友宮本新治氏も聞いてをり、この作の原型はすでに大学時代に出来上つてゐたらしい。

しかし、この詩の主体である樹梢の上に坐つてゐる母は、昨年五月の作品である「幻」に初めて現れてゐた。即ち、八あゝ楡は芽ぶきて、梢に御使の坐をつくるが、それである。その際私は触れたが、この幻想はセガンチーニの画想に關係があるのである。

晩年シンボリズムに目覚めたセガンチーニが初めて描いた画想が樹上の母の幻影であつた。セガンチーニは五才の時に母を亡くしてゐたが、その若く美しかった母の面影を回想して、「曙や真昼の陽の美しさではなく春の落陽の美しさ」であつたと述懐してゐるの

えてゐた。「古今集のあの定型的な譬喩や序詞や、枕詞などをも一度勉強し直す歌人の明治以来少かつたことは、いかにも残念である」（『昭和七年「昌」十二月号）伊東は明治以来の歌人が怠惰であつたが故に看過した古今和歌集——とりわけ伊勢物語を書かむるに至つたほど見事な在原業平の序詞を、こゝに活用してみせてゐるわけである。少女国文雑誌『むらさき』にこの詩を発表してゐる意味も、この国の古典にこそ見逃しがたい詩法が散在してゐる事実を、心ある少女達に教へるためだつたのだらう。

その月末次のやうな書簡を富士正晴氏に書いてゐる。

「お手紙有難う。先日瓜生君（註：瓜生忠夫氏任中）に来て下され、あなたの近況報告してくれました。私も年末旧お宅に行き、引越された様でしたので帰りました。

『三人』有難う。感想あれども、手紙では意を尽しません。私は年末堺に引越し、あまり閑静なところなので閉口してゐます。小生はどうも町の方がよるしい。四月になったら一度遊びにおいで下さい。

二十四日 伊東静雄

富士正晴様

（昭和十二年一月二十四日堺市北三国ヶ丘町四〇一郵便局より良興北葛城郡二上村閑屋館塾生堀内万富士正晴宛封書）

この書簡によると、伊東も富士氏も、互ひに転居をしたことを知らず、旧宅を訪ね合ったものらしい。伊東は富士氏に、新居はあまりに閑静すぎて町の方がいゝ……と言つてゐるが、この意見は百合子さんに十日前書き送つた意見と全く反対である。彼女には、「早くこゝに移ればよかつたと思ふほど、私の氣持おちつき、物書く氣持もおこります」と言つてゐた。そのどちらが真実の心境なのだらう。恐らく両方が真実なのだ。静かな回想の友である百合子さんとの交渉には、高爽な御陵のほとりの家の方が似合はしかつたのであらうし、伊東がギリシヤ狂の詩人ヘルデルリン論をやるとチャンバラの方が面白いと応募する富士氏とのつきあひには、猥雑な町の方がふさはしかつたからである。

二月中旬すぎ次のやうな書簡が辻野久憲氏から来てゐる。

「絵はがき二葉ありがたく拜見しました。あなたの転居通知を失つて困つてゐたんですよ。正月には伊丹に行つたまゝ寝ついで御会ひしたかつたけれど通知のしやうがなくてそのまゝになりました。こちらへ入院して既に一ヶ月毎日友情のうすさを歎いてゐます。今まで訪れてくれたものは無理にせがんで萩原さんが丸山君(註：丸山眞氏)同

伴して来たのが只一回切りで他の連中の多くは便り一つくれません。そんな折から故あなただのはがきは特にうれしかつた。一体本来のロマンチケル(註：Romantiker・浪漫派)には友情の高揚を重んずるグルッペ(註：Gruppe 集団)ではなかつたのか。又日本精神とは物のあはれや義理人情を生命とするものではなかつたのか。いやこんな愚痴も此の世と神との國との間にさまよつてゐる僕の泣き言にすぎますまい。只つくづく人間の孤独さを痛感しました。御住所がわかつたから拙訳一冊送らせませう。病中の急造品で大変自分でも不満足なのですが右取あへず御返事まで」

(昭和十二年二月十九日東京市豊島区池袋二ノ一四三)野尻医院より堺市北三國ヶ丘五十七伊東静雄宛封書
この書簡によると、伊東が堺の北三國ヶ丘に引越した頃、辻野氏も伊丹の父母の許に帰つたのである。託してある鮎子さん路是君と正月を共にするつもりであつたのだらう。時があれば伊東を訪ねるつもりもあつたのだ。ところが辻野氏の生命を奪ふに至る発熱が始つたのである。発熱した伝染に危険な状態では、子供と同居もできまいから、彼は婦鎌を決意した。新春早々電報を受けた愛人加藤よし子さんは大船に迎へに出て、その翌日に豊島師範裏の野尻医院に入院したのである。この頃、伊東は辻野氏に捧げた「コギト」

でなかつたら御上京下されば嬉しいこと

白居易詩抄 (二十三)

森 亮

池のほとり

竹がつくる清らかな日陰で僧が二人碁盤に向つてゐる。

ふさふさ垂れた竹の葉が人目をさへぎつてはあつた、
ときをり碁石を打つ音が聞えてくる。

二

小舟に乗ったをんなの子が白い蓮の花を採つて戻つてゆく。
をんなの子は跡をくらす方法を知らない。
浮き草が掻き分けられて一筋の道が残つてゐる。

★

す。

仙葉が作れなかつた歌

たけなはの秋は白髪しろがみのわたしにいたく徹とほへる
丹砂にじしを焼いてはみたが水銀が転がり出たばかりで曲がない。

その水銀が動いてやまないのとひとつこと、
わたしの齡としがよぼよぼ爺さんの方向に傾き傾くのも仕方がない。

さいはひ見つかつた緑いろのお酒を杯さかづきに注いだゆゑ、
ほつぺにそのかみの紅顔を取り戻すのはなんでもない。

少年の無邪氣さをどうして遠くに求める必要があらう。
この今の生なま酔ひの中からそれはほのぼのと生れてくるぢやないか。

註 「池のほとり」の原詩は池上三絶(四の三一九)

で、詩人が六十四才の作。一見、客観的な描写になつてゐるが、実は彼の屢敷の中の風景。従つて対局者の人は楽天その人である。「仙葉が作れなかつた歌」の原詩は燒葉不成命酒独酌(四の四三九)で、六十六才の作。丹砂(辰砂)は水銀と硫酸との化合物。昔中国人はこれを精煉すれば精神を養ふ靈葉が出来ると考へた。

二月号発表の「朝顔」の定稿を得た勘定になる。まことに運命の作であつたと言はねばならない。

彼は入院中の発熱を推して野田書房から刊行する『イエス伝』の校正を続けたのである。文中、日本浪漫派の友達が見舞ひにこぬことを痛憤してゐるが、発熱当時の伝染性に加へて、カソリシズムの熱病を避けたためだらう。訪ねる友は文学の友より、事実、カソリシズムの友の方が多かつたのである。『創造』同人の吉満義彦氏や、『イエス伝』の版權問題でパリの出版元との交渉に當つてゐた上智大学の小林珍雄氏であつたのである。

この生を越えた寂寥に届いた、「朝顔」の献詩に続いた伊東の転居通知に、辻野氏は蘇生の喜びを感じたであらう。

伊東が「夢からさめて」を発表した三月下旬に、入院中の辻野氏から次のやうな長い書簡が送られてきた。

「御手紙と御葉書とをありがたう。見舞旁々春休みに上京してもいふふあなた友情の溢れた言葉には心から感動しました現在の病状は春日遅々といふやうに依然として微熱が進みもしなければ退きもしない状態なのですので果して三月末までに起き上れるものやら怪しいのですが、わざ／＼

生れ出で給ひしベトレヘムの既、死し給ひし十字架、それ以外には家として持ち給はざりし我が王にいざや似奉らん

これはスペイン中世の聖女テレシアの言葉です。そしてこの夜僕の心中にて繰り返しやまぬ言葉でもあります。ほんとに僕にはもう僕の十字架以外に住むべき所はなくなつたやうです。例へばかうして一日中ぢつと横臥してゐるとつい眼の先きに四寸角の縦の梁が真直ぐに僕の足許めがけて走り下りてゐる。それと同時に丁度その上から七三のあたりにもう一本梁が横に流れてゐる。それは丁度世の人々がキリストを磔けたあの十字架と同型であり同大であらう。僕はあらゆる苦惱を経、あらゆる侮辱をなめつくして既に半死半生となつたイエスがこんな重い自らの十字架をなほもかついだのかとぢつと眼前の十字架を睜めてゐる。するとそれが次第に血を噴き出しやがて徐々と僕の上のしか／＼と来るのです。

それからこれは先日あなたのお葉書の文面に甘えてお願ひするのですが堺は小西行長の旧城址だつたこと故にか小西行長に関する古文書や研究文献のやうなものがありましたら散歩のおついでにでも探して

欲しいのです。

過日細川ガラシャ夫人に關する本を読み
その中で小西行長が関ヶ原の役で一敗地に
塗れながら深く討死に逝ったのは日本
武士道上一大偉業者のやうに言ひ伝へられ
てゐるが實際は彼はキリスト者として自殺
を禁ずる神の命に従ひ武士道を捨ててキリ
スト者としての立派な最後をとげたのだと
いふ説を読み成る程と思つた次第です。さ
う云へば四十七士が日本精神の華ならば天
草の二十六聖人などは豈日本精神のみなら
ず、また、世界精神の華でもあるぢやあり
ませんか。それやこれやで現在僕の最大な
希望は一日も早く元気な体となつて長崎を
中心としたあなたの故郷の地一帯を遍歴し
歩きたいことです。いつもながらの暴言御
許し下さい。

右取りあへず御返事までに

三月六日

辻野久憲

伊東静雄様

(昭和十二年三月六日東京市豊島区池袋二ノ一四三野
原醫院内より堺市北三區ヶ丘町四〇伊東静雄宛封書)

辻野氏は精神的にも肉体的にも死を賤めだ
してゐる。訪れる友もないさうした彼に、春
休み見舞ひをかねて上京しようと云ふ伊東の
便りは、どんなにかうれしかったらう。彼は
うれしさうにアピラの聖女テレサ・デ・ヘス

ス (1915-1986) の言葉を引用してゐる。イエ
ズに似奉る……と云ふ祈願から、彼女はう
つつにイエズスの姿を見、奇蹟を顕したので
あらう。そのテレサの言葉を繰返す辻野氏は
又、身に迫る十字架の幻影を見たのである。
多分、信仰にもよらうが、熱もその幻影の形
成に手伝つたであらう。

このテレサの言葉は、復生病院の岩上神父
が経営するカトリック研究所から上梓された
嘉治るり子さん訳の『聖テレシアの小さき
花』から採つたのである。病床のつれづれを
慰むべく、同著を小林珍雄氏が届けたからで
ある。

又、小林氏は、明治五年に禁教令が解かれ
てから最初に出版されたキリシタン殉教史、
仏人ジャン・クラッセの『日本西教史』をも
辻野氏に貸与したのである。内閣書記官室記
録課の版で、上巻は明治十一年六月、下巻は
明治十三年十二月に上梓された。辻野氏はそ
の下の巻第十一章で長崎二十六聖人のけなげな
殉教を読み、第十二章でアグスチノ・小西行
長や細川ガラシャ夫人の信仰の深さを知つて
感動したのである。

逆臣明智光秀の次女で細川忠興に嫁したガ
ラシャお玉。夫忠興の激怒や死の威嚇も彼女
の信仰を曲げさせることができなかった。関

山霞む

山根 忠雄

山霞む——この美しさを
僕はまだほんたうには知らなかったのだ
人麻呂は香具山の夕霞を歌ひ
芭蕉は名もなき山の朝霞を歌つたが
すべて物のもつ「形」の美しさが
夢から覚めたやうに
はつきりと見えてくるためには
相当年令の成熟を必要とする
今年三十九才の春！
大きく目をひらいて見入る
霞む遠山並の初姿——

潮 騒

乙女子と 卓に語れば
はるかなり 壁の絵のげに
ささやきし
春の潮騒——

未熟な言葉

福地 邦 樹

僕らが物語の愛とはぐれるのは
どの地点であるう
どのような言葉も ついに
僕らを告げることは出来なかつた
あるいは、それらは常に僕たちを
行き過ぎてしまふのかもしれない
誰に見せるのでもなかつた笑まい
心からにじみ出てきたような涙
おしころされた無限の忍耐などを
どうして言葉などに転身出来よう
僕らに許されたのは

もどかしい符号をもつて
もう一つの魂に向かい
解くことをゆだねるだけなのだ
しかし、ほんのかすかな合図や身振り
僕らの間の無理解な個所を飛びこすのに
造作はない
すべて僕らの愛は
凝視する姿勢にほかならなかつたから

ヶ原合戦の前年、忠興は家康に従つて会津の
上杉討伐に参加した。その留守を石田三成は
襲つてガラシャ夫人を人質に取らうと企て
た。信仰には苛酷であつた夫忠興ではあつ
たが、彼女は夫のため日本の婦道に殉じよう
と決意した。

「夫人ハ侍女ヲシテ強ヒテ他室ニ退去セシ
メント欲シ之レヲ説諭シテ曰ク汝等皆基督
信者ナリ而シテ死ニ殉スルハ天主の禁制ナ
リト是ニ於テ侍女等已ムヲ得ス夫人ノ命ニ
従ヒ各自其室ニ退クニ及ンテ護衛兵ハ夫人
ノ室ニ入ルニ夫人ハ顔色清艶心衷湛然徐ニ
護衛兵ノ傍ラニ近ツキ其坐ニ就キ基督及ヒ
マリノ名号ヲ唱ヘ衣襟ヲ開キ首ヲ延ヘテ
劊手ニ任セケレハ護衛長臣ハ之レヲ礼シ刀
ヲ抜テ首ヲ刎シ……云々」

辻野氏は、この侍女の殉死を禁じ、自害も
カソリシズムの教義に反するとして、家老小
笠原小斎の手にかゝつて死んでいったガラシ
ヤ夫人の信仰の細心に感動したのであらう。

それにも増して辻野氏を感歎せしめたのは
小西行長の殉教の精神であつた。彼は秀吉の
キリシタン禁圧政策のたゞ中にあつて、キリ
シタン大名高山右近を初め長崎二十六聖人等
バテレンやキリスタンの庇護に全力を傾注し
関ヶ原合戦には石田三成に組みして西軍の主

陣を形成しながら武運つたなく敗れた。武士
道に従ふと逮捕される前に切腹して果てるの
が常道である。然し、彼は教義に忠実のため
好んで捕はれの身となり、イエズスが十字架
を担ひつゝ辿つたゴルゴタへの道と同じ道を
引き廻され、架上で受けた殉教の痛苦と同じ
痛苦を味つて死んでいったと云ふクラッセの
解釈に辻野氏は感歎したのである。

「罪人ヲ刑スルニ門地ニ関セス庶民ト同ク
都テ耻辱トスヘキ処置ヲナスハ基督教師ノ
屢目撃スル所ニシテ日本一般ノ風習ナリ倍
テ石田(註・石田治部小幡三成)安国寺(註・毛利
家の名代安国寺ボンズ)ノ二人ノ死地ニ至ル形
容ハ顔色土ノ如ク怯恐シテ嘆息涕涕セリド
ム、オーギェヌスタン(小西ハ勇氣衆ニ擢ツ故
ニ耻辱ヲ蒙リ不正ノ処置ニ遭フト雖モ確乎
トシテ動カス其顔ハ高貴ニシテ度量アルノ
相ヲ顯ス事平生ニ異ナラス又倨傲虚飾無キ
ハ是レ其最モ勇猛尊大ノ徵ニシテ天堂ニ再
生スルノ渴望アルニ因テ其督ノ為メニ耻辱
ヲ受ケ死刑ニ就クカ如クナルヲ欣喜スレハ
ナリ此三人ハ形状相異ナル此ノ如クナレハ
問ハスシテ基督信者ハ何人ナルヲ知ルヲ得
神仏信者ト基督信者トノ間相距ル霄壤ノ差
有ル事判然タリ
刑場ニ赴ク途中ニ於テ仏僧等ハ説論ノ式ヲ

為サントシテ至レリ此式ハ都テ死刑ニ処セラル、者ニ向ヒ為ス者トス治部小輔及ヒ安國寺ハ此式ヲ受ケシト雖モドム、オーギュスタン小西ハ基督教者ナリト大呼シ仏僧ヲ攬斥シ基督教者ノ称名ヲ高ク唱フ既ニ刑場ニ到リ三人ノ縛ヲ解クニ及ンテ高貴ノ人ノ死ニ非ラサレハ決シテ寺ヲ出ル事無キ有名ノ仏僧至リ二人ニ種々ノ挙動ヲ為シ其後仏僧等ノ甚尊敬スル仏経ヲ頭額ニ戴カシムドム、オーギュスタンハ基督ノ名称ヲ唱ヘ手ニ基督ノ小像ヲ写セル「ノートルダム」ノ美麗ノ画ヲ捧持セリ此画像ハ原トシャルルキャン帝ノ妹葡萄牙ノ女王ヨリ基督教師ニ付与セシヲ教師之ヲドム、オーギュスタンニ贈リシ者ナリ

此三人肩輿ヲ下ルニ方リテ基督教師ヨリ教徒ヲドム、オーギュスタン小西ニ面会ノ為メ送ラレタレハ此人護衛ノ列ヲ排シテ漸ク其傍ニ近ツキ基督教師等其場ニ到ラント欲シ種々力ヲ尽スト雖モ終ニ会談話スル許可ヲ得ル能ハザルヲ告ケ且罪業消滅天堂再生等ノ事ヲ忠告セシニオーギュスタンハ之レヲ謝シ知己ノ教師等ニ伝語シテ曰ク曾テ教ヲ辱フスル所ノ諸件ハ悉ク勤メ終リ又罪業消滅ノ為メ天主ヨリ授クル所ノ苦痛ヲ經テ以テ甚満足ノ死ヲ遂クルヲ得ルニ由リ幸

ニ心慮ヲ安ンセヨト基督教徒退後仏僧巴小西二人ニ施ス如クドム、オーギュスタン小西ニ、仏経ヲ戴カシメントスルニ之レヲ拒ミ余ハ基督教者ヲ以テ死セン事ヲ欲スト云ヒ之レヲ退カシメ兩手ニ基督ノ画像ヲ捧ケ日本ニ於テ最モ尊崇スルノ礼ヲ為シ三タヒ之ヲ頭上ニ戴キ其後天ヲ仰キ目ヲ開テ黙然タリ暫クシテ又基督ノ小像ヲ戴テ睨キ更ラニ柔弱ノ態ヲナス神拜ノ次序ヲ乱サス基督及ヒマリーヨ唱拜シテ後其首ヲ伸ヘ劊手三刀ニシテ漸ク刎首セリ

この「日本西教史」はゼジュウイット教会のクラッセ氏が在日宣教師の本国に通信した書簡やその他の文書によって一六八九年（元禄二年）芭蕉の「奥の細道」の成つた年に編纂したものだと云ふ。その描写の精細は辻野氏でなくても讃歎するであらう。

辻野氏が伊東に小西行長の資料の探索を求めたのは、行長は堺の政商隆佐の子であると伝へられてゐるからである。又二十六聖人の遺蹟を訪ねるべく長崎旅行を夢みてゐるが、まだ八夕の来るまで潤むことを知らず咲きつづけるV希望をつないでゐるからである。

伊東は「コギト」四月号に、死に一日一日近附いてゆく友の心境とは全く反対の颯爽と

風光り……

堀口 太平

スクーターで走っていた。
今日は、
ひらひらした景色で、
ハナミズキの葉をみるようだ。
伝通院まできたら、
植木市がたっていた。
ひらひらした景色の、
うらがわだ。
花が黄いろいのもあれば、
赤いのもあるのが、
さがしあぐねた、
ひらひらした景色の、
うらがわだ。
(一九五九・五・一一)

錆びた眼覚め

堀ノ内 歴

とおくを夜汽車が走っている
夜は更けた 野は広い と
言っている その音
さつき窓の下で誰かぐぶッ倒れた？
開けてみると 向い側の軒下路面に
下伏せて 酔漢が寝込もうとしている
しずまった町で 彼だけ昂ぶっていた
路傍の場所がそっくり彼の寝床に変わる
その素晴らしい睡眠よ
風呂屋の煙突がもの寂びた空中で
煙が止んでからの露わな時間に
不機嫌にそびえている
汽車の響は その天辺をも越してき
いまや のろ／＼と山裾をゆくらしい
そして 私に一種の睡気が訪れていた

一九五九・四・二三

疾 駆

した次の作品を発表してゐる。

われ見てありぬ
四月の晨
とある農家の
厩口より
曳出さるる
三歳駒を

馬のほひは
咽喉をくすぐり
愛撫求むる
繁き足踏
くうを打つ尾の
みだれ美し

若者は早
鞍置かぬ背に
それよ玉揺
わが目の前を
臍腹光りて
つと駆去りぬ

遠嘶の
ふた声みこ糸

まだ伸びきらぬ
穂麦の末に
われ見送りぬ
四月の晨
第二詩集「夏花」

北三国ヶ丘の家の東方一キロには金岡輜重隊があつた。そこから方違神社の前を通り伊東の家の横を抜けて堺市内にコンクリートの道が貫通してゐた。伊東は時に若武者が駆る「疾駆」と同じ場面に遭遇したことだらう。それにしても疾駆直前の凜々しい三歳駒の表現はなほだ生彩を帯びてゐる。伊東は学生時代宮本新治氏に従つて、酒井家のすぐ近くにあつた銀鞍会に立寄つてゐた。(昭和三十一年二月三十日発行同志社高商学友会誌「表」山科の馬場「解説参照」)恐らくそこで厩から曳出される疾駆を本命とする俊馬の心意気を精細に観察したものであらう。

この「疾駆」を発表直後、伊東は約束のやうに東京に辻野氏を見舞つてゐる。
「先日は御妹様まで伴つてこんな遠くまで御見舞に来て下され感謝の言葉を知りませぬ。あの時の元気が最後にてその後急に悪化し少し危険を感じましたので知人の紹介でやっとこさ表記の所へ転院しました。何から何まで真白な大部屋の片隅に死に近いやうな人々と同室しながら、倅ひ僕の心は

花と雨

浅野 晃

北の火山灰地に
けふ雨がふる 五月も半ば
部屋の中ではまだストーブをたいてるが
裏の焔ではネギや
ハウレン草エンドウのみどり
目にしみてあたらしい
ジャガタラ焔やカボチャ焔は
ただしっとりうるほふた畝の列が
無言の待機の姿にある
樹木らしい樹木のないこの火山灰地
それがいま一望の焔となった
そこにけふふる雨は
辛うじて春雨といふ感じだ
ストーブのそばの小机に
子が牧場からとってきたエゾザクラの一
枝がいくぶん大柄な花をつけ
たそがれてゆく光の中に
じっとおのれを保ってゐる
手をのばして花にさはってみた
花の肌はつめた

色はさらしたとき紅
大柄なだけよけいに淋しい
自分はじっと花を見つめる
花はづかしさうに
伏目になって自分を見る
黙々とこの日を働いた人らも
みなすでに子らと家に入り
ふしぎな歌は季節の中にある
もろもろのいのちは かしこ
疲れた土から萌えて出る
雨がそれをうながし
うら若いみどりの時がめぐりうたふ
花ははなやかな夕映のごとく
悲しみはファンテジ・アンプロンブチ
のごとくだ
雨は天からふる
世間の音は地をつたつてくる
すっきり暗くなった部屋に
しぜんに動いた手が
大きく宙に天の字をえがく
そして、そこでとまる
自分は立ちあがる 灯火をつける
雨の音はせず
畑の方から花よと喚ぶ声がする

焦燥も不安も忘れていきます。こゝでなほ
再三ヶ月は闘病生活を送らねばならぬやう
ですから、自分のアドレスは表記に願ひま
す。御礼をかねて取りあへず御通知まで
に。

末筆ながら御妹さまによるしく 草々

四月七日

伊東静雄様

昭和十二年四月七日東京市大森区大森町五丁目帝國女
子医専第一病院内科 辻野久慈より堺市北三國ヶ丘町四
〇伊東静雄宛はがき

伊東が妹りつさんを伴って辻野氏を野尻医
院に見舞ったのは、場合によっては看護の手
伝ひでもさせるつもりだったのだらう。辻野
氏の文章によると、この出会の時が最後の元
気さであったと云ふ。

辻野氏は長崎の旅の夢から、あれこれと故
郷のことについて伊東に訊ねるところがあつ
たらう。伊東は長崎の二十六聖人よりも二十
三年前天正二年に日本の第三次の殉教者霊名
ルカとマチャスの二人を故園諫早が出した史
実を語つたらう。

この出会の後、辻野氏の病状は胸の方より
腸の方が危険だと云ふことが判つたので、野
尻医院から小林珍雄氏の紹介で帝國女子医専
病院に移つたのである。こゝで尚三ヶ月の闘
病生活をせねばならぬ由書かれてゐるが、そ

はつきりとそのことを私につげる。

山雅房版「現代詩人全集」

冬の間は緑の色を誇つた宿木。それが春の
進行につれて所在が判らなくなる。何故に
また冬の宿木のことなどを思ふのか。Vと伊
東は言つてゐるが、恐らく彼の心底には、天
折の運命にある早熟な秀才辻野久慈氏の姿が
あはれに花やいで映つてゐたに相違ない。
第二聯に「外部世界」と言ふ言葉を用つて
ゐるが、それは「八月の石にすがりて」にも
現れたホーフマンスタールの「外的世界」で
あらう。

又、同聯のひとの妻になつた恋人とは、酒
井安代さんでも仄かな意味で指してゐるのか
もしれない。

ともあれ、この作品は、翌月伊東がつひに
完成した絶作「水中花」の原型なのである。

「宿木」を発表してから数日して、つまり
七月七日の七夕の夜、日華事件が勃発したの
である。北京西南三里にある蘆溝橋の北方千
米の龍王廟附近で演習をしてゐた豊台駐屯部
隊に対して、宋哲元揮下の第二十九軍が発砲
しかけてきたと云ふのが事件の発端であつた
十日には蔣介石は中央軍四ヶ師と全飛行部隊
の北上を命令するに至つた。

この危機のさなかに、辻野氏の命脈が次第

これは医師が予測した彼の生命の時間であつた
のである。

辻野氏はこゝで洗礼を受け聖ヨハネの霊名
を取つたのである。

伊東は二ヶ月おいて次のやうな作品を『む
らさき』七月号に発表してゐる。

宿 木

冬のあひだ中 かれ枯れた櫛の樹に
その一所だけ青んでゐたやどり木の
いまはこの目に区別もつかずに、
すつかりすつかり梢は緑に燃えてゐる。

何故にまた冬の宿木のことなど思ふのか
外部世界はみんな緑に燃えてゐる。

数へ切れないほどの子供らが
花も過ぎた野薔薇のやぶで笑つてゐる。

そしてわたしの恋人はとうの昔
ひとの妻になつてしまつた。

疾うの昔に などとなぜ私は考へるのか
いゝえ、あのひとにもわたしにも
やつと今朝青春は過ぎて行つたところだ

窓辺につるした玻璃壺に
あはれに花やいで金魚の影は、

に細つていったことが、彼の内妻加藤よし子
さんの便りでそれと知られる。

「いつぞやは御見舞のおはがきをありがた
う御座いました。今日こそは御返事を
と思ひながら病室の雑用にまぎれましてま
ことに失礼致しました。おはがき頂きまし
た頃はまだなか／＼元氣も御座いまして、
よく書籍類なども手にいたしましたして恢復の
日を未来の希望と共に待つて居りまして、
この調子なら、七月はじめには退院して涼
しい山の方に暑中をおり、静養したなら、
また昔日の健康を取り戻すことも出来るだ
らうと、病人も心から信じたのしんでゐま
したところ、七月七日夜恐れて居りました
腸出血を致しまして以来三日間は絶食いた
し、その後は少量の流動物となりましたが
出血や絶食が続いたあとのために、非常に
衰弱いたしましたして、日夜苦痛をうたへる
やうになりました、この分では……或ひは
あなたさまと再び会ひ語らふ日が永遠に失
はれてしまふのではないかとも思はれてな
りません。尤もそれは最も最悪の場合を想
像してなので御座います。本人はすつかり
がっかり致して居りまして、しきりに本當
の仕事をしなすとげずにゆかねばならぬこと
を残念に思ふらしく、時折は涙ぐんで居り

ます。本人にいたしませばさぞや断腸の思ひでありませう。

併しかういった病状で御座いますけど、別に危篤といふ程ではなく、除々に病状が進みおかしてゆくらしゆう御座います。

御一家様の御健祥を祈り上げまして

七月十四日

よし子

伊東静雄様

昭和十二年七月十四日東京市大森町五丁目女子医専病院内科加藤よし子より堺市北三国ヶ丘四〇伊東静雄宛封書

このよし子さんからの便りによると、辻野氏の末期症状である腸出血が始ったのは、蘆溝橋事件の勃発と日時を同じくしてゐる。日夜訴へる彼の痛苦は、平津地区の戦火の拡大と共に大きくなっていったのである。辻野氏は、黄土にまみれながら死んでゆく彼我の兵士と同じやうに、無念の涙を嚙んだのだ。彼の心中には、すでに手掛けてゐる仕事があつたからだ。「ポール・クロードル、ジャック・リヴェール往復書簡集」の訳出がそれである。カソリシズムと云ふ種々たる西欧文学に潜んでゐる脊骨の発掘の悲願の歎は、彼の手から、ぼろりと落ちたのである。心にもなく病魔のために落ちたのである。骨と皮ばかりになつた掌を自ら撫しつゝ、無念の涙を嚙んだのは当然である。

この加藤よし子さんからの便りを受けた伊東の胸に、「宿木」の未完の結句が浮び上つたのである。八窓辺につるした玻璃盞に、あはれに花やいだ金魚の影。その危ぶさは危篤である辻野の運命とそっくりではないか……この時、伊東の胸に翌八月『日本浪漫派』に発表した「水中花」の哀艶を極めた韻律が奏でたのである。

水中花

水中花と言って夏の夜店に子供達のために売る品がある。木のうすい／＼削片を細く圧搾してつくつたものだ。そのまゝでは何の変哲もないのだが、一度水中に投ずればそれは赤青紫、色うつくしいさまさまの花の姿にひらいて、哀れに華やいでコップの水のなかなかに凝としづまつてゐる。都会そだちの人のなかなには瓦斯灯に照らされたあの人工の花の印象をわすれずにゐるひともあるだらう。

今歳水無月こゝろみづなづきのなかは美しき。
軒端のきばたを見れば息吹のごとく

萌えいでにける釣つりしのぶ。
忍ぶべき昔はなくて
何をか吾の嘆きてあらむ。
六月の夜と昼のあはひに
万象のこれは自ら光る明るさの時刻。
遂つひひ逢はざりし人の面影
一茎の葵の花の前に立て。

塘うたがはへがたければわれ空に投げうつつ水中花
金魚きんぎょの影もそこに閃ひらめきつ。
すべてのものは吾にむかひて
死ねといふ、
わが水無月のなかはうつくしき。

第二詩集「夏花」

現代詩の中で耽美を競ふなら、この作品ほど哀艶を極めたものはない。午下りの万物が光彩を放つ静謐な時刻。一本の葵の花が咲いてゐる。たゞそれだけの舞台である。その花の前に伊東が佇立せしめたのは、もはや、人妻となつた安代さんでも、潔癖な独身主義を通す百合子さんでも、或ひは瀕死に喘ぐ秀才辻野久憲氏でもなささうである。茫漠とした誰かだ。八遂ひ逢はざりし人／＼と云ふ呼び名の下に、それら運命の人々を抽象した面影を佇まされたかもしれない。運命と云ふ時刻の岐路。たまたまなくなつて彼は水のやうな大空に水中花をなげうつ。赤、青、紫の装のやう

に開いて、やがて花の姿を形成して鎮まる水中花。幻想の金魚も閃き出る。生棲場所の倒錯これはまさしく死の世界ではないのか。伊東自ら水中に息するやうに大きく喘いでゐる。さうだ。音もなく光彩を美しく放つてゐる六月の万象は、俺に向つて死ねと命令してゐるのだ。死ねと云ふ命令者がどうしてかうも美しく見えるのであらう。

この「水中花」は恐らく『日本浪漫派』同

大きな木

たかはし しげおみ

無限の堤防の中心に立っていた一本の大きな木

それは石ころ川原の水たまりに裸の黒い梢をうつしていた

渡り鳥がむらがつてついでにいた

夕焼を背にして怒つたやうにつつ立っていた

そんな姿を父と一緒に見たやうな気がする

他所からきた友を誘つていったことがある

人であつた太宰治の小説以上に浪漫派を代表してゐる。亡びる美しさこそ抵抗であるとした当時の浪漫派の耽美の精神を、これほど美事に抽象した評論も小説もないからである。「水中花」が発表されてから旬日を経ずして上海虹橋飛行場附近で陸戦隊派遣隊長大山中尉と斎藤一等水兵が惨殺された。中甸には中国空軍は陸戦隊本部、総領事館、第三艦隊旗艦、邦人紡績工場を爆撃し、待つてゐましかつてゐる。ひとりでその根もとをおとすれたこともある僕等はいつたいなにを語つたのだろうか。僕はいつたいなにを考へていたのだろうか。おぼえてゐるのはさむざむとした枯木姿ばかりだ。

かとなつかしむ

父ももうなんにも言わないが 僕よりも一層

あの孤独な木の運命を案じているにちがいない

い

ところで 何処に居るのかわからない友よ

君はあの木を覚えてゐるか

たとばかり、その翌日日本空軍は南京、南昌、紹興、寛橋飛行場を空襲して、こゝに八年にわたる中日戦争の端緒を開いたのである。その四日後、つまり八月十九日には、二・二六事件の指導者であつた北一輝は代々木陸軍刑務所で銃殺刑に処せられた。行動者であつた肅軍派の青年将校達が処刑せられてから一年一ヶ月を経過してゐる。昭和維新を夢みた彼等は代々木練兵場での演習の空砲の音に紛れて処刑されたが、北一輝は上海戦の轟然たる実砲の炸裂音の反響裡に殺されたのである。彼は若くして中国の第三革命に参加し、日常……中国服を愛用して肌身を離さなかつたほどの中国びいきであつた由である。もちろん中国の要人達とも交渉があつた。その彼を刑死せしめた事実、軍の統制派の意向がすでに中日戦を徹底することに決定したからだと見る向きもある。

こと拙論にわたつて恐縮だが、その後も諸家から幾多の御教示を承りました。

三枝康高氏著『日本浪漫派の運動』は良心的な研究で、諸所に異論も感じましたが教へられた点もかなりあつた。特に巻末に附ける二作品——昭和十年十二月発表の「さる人に」と昭和十一年一月発表の「追放と誘ひ」がある事実を知らされた。幸ひ杉山美都枝さんが『日本浪漫派』全巻を秘蔵してをら

れたのでこの二作品とも判明した。

又、萩原葉子さんの御教示で、明太郎先生の個人誌『生理』に発表された昭和十年二月の作品「入市者」を知ることができた。

新進作家であり、伊東の所蔵本「四季」の所有者である小久保実氏からは、『四季』発表の作品で判らなかつた「無題」の御教示を得た。とりわけ私が感動したのは、京大教授野間光辰氏より昭和五年の西鶴臨講会の忘年句会の資料を御送りいただいたことである。今度深草への引越に際しみつかった……と、わざわざ御教示を得たのである。同会は藤井紫影先生が主催され、また学生であつた野間氏が世話人をされたことである。

時・昭和五年十二月十三日
所・熊野神社森樹楼

「願音」 藤井紫影

芭蕉かれてあらは過たる別窓 藤井紫影
酒さめて火鉢に人の静かなる 加藤順三
寄り木に親をぬくめの友雀 樋口 功
悪食の話に年忘れけり 須原退蔵
あゝ雲の何処かで

伊東静雄
野間光辰

こので発表された俳句とも詩ともつかぬ伊東の句は拙研究には貴重な資料であつた。つまり第三十九号拙論所載の昭和十一年十一月発表の「蜻蛉」の原型だからである。この問ひに誰か答へむ、馬断たれし空よ見よの句は、実に六年の星霜を経て得られたものである事実が実証されるからである。

いづれ「観祝と酔酔」が結束する折に改めて補備として追記させていたが、これら諸家からの御教示に対し心から深謝申し上げ爾後の御教示も併せて御願ひいたします。又早大教授川副基氏からの度々の御禮遣いに対しても適々敬礼申し上げます。

水の好きな子

池 沢 茂

『幸田露伴は小さいころから、水が好きで、しようがなかつたそうやけどな……』

夕食のとき、水の好きな幸吉の話が出て、そのあと、ぼくがひとりごとみたいと言いかけると、妻は、はしをおいて顔をあげた。目がきつとなつて、期待の表情が出ている。うっかり口をすべらせたとき、ぼくはたじろぎ、不安をおぼえた。そして、そのまゝだまつて、うやむやに食事をつづけた。

ぼくたちの子の幸吉は、ものごころが付きだしたころから、どういふわけか、極端に水を好んでいる。大きな河や海はこわがるばかりだけれど、みぞや、どぶや、水道など、そういう小さな、動く水にたいすると、くるおしいほどの興味に取りつかれるのだ。

『幸吉のことが気になつてなあ！ ひさしぶりに顔が見たいと思つて、出て来ましたんや、ほんまに、かわいらしい、おとなしい子やなあ』
そう言つて、たま／＼いなかから、ここに

こしながらたずねてきた義母も、やがて、その幸吉をつれて市場などへ買物にいつてきたりすると、たちまち、ようすが變つてしまふ。『なんどいな、この子は！ どぶのほうへばかり、ぐん／＼手を引っぱつて、買物もなにも出来やせん。いまにも、こがされてしまひそうや』

かわい／＼孫のためにと手みやげなど、どつきり持つて来ただけに、失望も大きいのだろう。その暗い怒りはやがて、親のぼくたちのほうへ向けられてくる。しかし、ぼくたちは、まいにちのことだつた。いつも親のそばにいて、ひとりでは家から一歩も出られないから運動や日光浴のために、とき／＼散歩や遊びに連れださねばならない。用事で外出するときも、いっしょに連れてゆかねばならない。そんなとき、道ばたに、坂のためにいきおいよく流れているどぶがあつたり、水道管がこわれて水がふきだしていたりすると、幸吉はきつと、そのそばに、しゃがみこんでしまふ。その水がうずをまいていたりすると、とくにおもしろいのか、ほう／＼おいていたら、一時間でも二時間でも、じつと見ていようとす。家では水道の水を出してあそび、お勝手やせんたく場など水びたしにする。それでも、これだけなら、水に特別な興味をいだく

性質とだけいって、すまされるだろう。露伴はおさないころ、どの程度にまで水に引きつけられたにしても、その知能は、もちろんずばぬけていたにちがいない。しかし、こういうことは、ぼくたちのあいだでは、まだタブーだつた。遺伝によるのか、そのほかに原因があるのか、とにかく幸吉には精神の発育に障害があると診断する医者もあつたけれど、話がそういう方面にふれてゆきそうになるとぼくたちはおたがいに、ためらい、おびえた。

花 期

美 堂 正 義

小さな白い花を無数につけた生垣が
車窓近くを流れるやうに移動する

杏 紅梅 木瓜みんなそれぞれの風情があり
蕾を開き初めた桜並木に交つて
木蓮の華麗な花も見える

日毎名の知れぬ紅や白の花らが
思ひがけない場所であいてゐる

花の季節は短く

平気で言えるようになるまでには、かなりの月日が必要だつた。

それでも、とにかく水にだけは興味を向けてゆくのが、ぼくには、ひとつの救いに思えた。おなじ年ごろの子とはだれとも遊ばないし、ふつうの子どものおもしろがるサルやイヌやネコ、チョウやトンボなど、どんな生きものも見向きもしないけれど、とにかく、ある状態の水には、閉ざされた心のとびらが開かれるとしたら、そこが突破口になるのでは

短い生命を惜しむやうにつきつきと装ひ
嫩葉は恥ぢらひ勝ちに緑の息吹きを萌えいで

光を含む空には軽げに白雲が浮び
私の心に哀愴が沁みてくる

それは一本の矢よりも鋭く
河の水よりも豊かである

無心に咲きつづける花らの
溢れるいろどりに眩惑させられるが

あはただしく成長する樹木の
吹き上げてくる泉に似た生命の愛しさに
驚きと当惑にとまどひながら
五十に近い年齢に思ひ至るのである

いつか妻は、ぼくが幸吉に水あそびさせているときとつぜん怒りだしたことがある。『そんなことして、いったい、なにになるの。水道代がかさむだけやあれへん。水なんか、なんぼ好きになったかて、幸吉のために、なんにもなれへん。ますく、わるくなるばつかりや。それより絵本なんか見せて、読んで聞かせるほうが、ずっとためになるやないの』『そんなこと言うたかて、幸吉には、こちらの言うことの意味が、ほとんど理解できないやないか。ものの形や名前も、まだわからへん。絵本を読んでやるにも、それまでの基礎をつくらんことには、どうにもならんやないか』妻の怒り方がとつぜんで激しかったので、ぼくも腹を立てて言いかえした。しかし、いま、しゃがみこんだまゝくるおしい目つきで、じっと水を見つめている幸吉を見ると、妻のほうに正しく、ぼくが間違っていたという後悔が、急に大きくつのつてくる。やはり水にたいする興味を助長するのではなく阻止するほうへ、もっと働きかけなければならなかったのではなからうか。いや、それよりも、さしあたって、どうしたらいいだろう。出勤の途中なので、あまりひまどれると遅刻になるから、ぼくはだん／＼いら／＼してくる。そのうちに、ぼくはしかし、いゝ方法を思

いついた。傾斜が急なところに石を投げこむと、カラ／＼コロ／＼音を立てながら、水といつしよに流れてゆく。くぼみがあったり、たいらになつていたりして石がとまっていまうと、つぎの傾斜のところで、また、べつ石を投げこむ。その石を追いかけながら『そら、赤ちゃん、石が流れてゆくよ。ころ／＼と、ころ／＼と……』などと歌うように言って、小走りに走つて見せる。すると、これまで水にばかり取られていた幸吉の意識がこの石のほうに、向きはじめたのだ。そのうちに幸吉は大はしゃぎで、ぼくといっしよに走りだすようにもなった。ひまどれていた時間も、これで、かなり取りもどせる。そうして、ある日、幸吉は走りながら『ころ／＼と、ころ／＼と……』と喋りながら、声を立てて笑った。自分でも石を投げこんで、流れてゆくのを見つめながらまた『ころ／＼と、ころ／＼と』と、おかしうてたまらないように笑う。ぼくは妻をふりかえつた。『そら赤ちゃん、ころ／＼と石が流れるよ。ころ／＼と、ころ／＼と……』ぼくにうなずいて見せると、妻も急に元気になつて、おなじように、石を投げこんで、幸吉といっしよに走りだした。

果樹園四十一号 昭和三十四年六月一日発行(毎月一回「日発行」) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

果樹園 第四十一号(毎月一回発行)
昭和三十四年六月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人 同明舎
印刷所 同明舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第42号

凝視と陶酔
レエルケ詩抄
母の日
遺族
都会の午後

小高根 二郎
たかはし 訳
堀ノ内 歴
田中 克己
美堂 正義

終着駅
待つていた花
高嶺の花
文鳥
柱時計
白居易詩抄
幸吉の収集癖
冬待

浅野 晃
堀口 太平
山根 忠雄
芳野 清
福地 邦樹
森 亮
池 沢 茂
辻野 久憲

凝視と陶酔

作品と書簡から見た伊東静雄(四十一)

小高根 二郎

伊東は上海戦がたけなわとなつた八月の或る日に高野山に登つてゐる。遍照光院で、広島文理大出身の小壮気鋭な国文学者——清水文雄、蓮田善明、栗山理一、池田勉諸氏と会

同するためであつた。そもそも、伊東がこれら斎藤清衛門下の諸秀才の知遇を得たのは、住吉中学の同僚である加藤愨一氏が同じ斎藤門であつたからである。加藤氏は同僚中に京大出の詩人がある由……堺中学の栗山氏に知らせたのに始まる。

栗山、池田両氏は学生時代に、先輩である成城学園の清水氏と共に春陽堂から『国文学試験』を出してゐた。栗山氏が昭和八年堺中学に赴任し、翌九年池田氏が今宮中学に着任したのを機縁に、前述の加藤氏と共に、月一回、家庭もたまはりの研究会をやつてゐた。その席に伊東は加藤氏に伴はれて出席したことがあつたのである。

これを機縁として伊東と栗山氏との交渉が始まつたのである。昭和十年に辻野久憲氏が松原通にあつた伊東の旧宅を訪ねた時、伊東は栗山氏にその来訪を予告してゐたので、栗山氏はカメラを持参して訪問したので、竹子を前にした伊東、辻野の写真が今に残つたわけであつた。

編輯後記

先号は紙面の余裕がなくなつて後記が書けなかつたが、今月も狭小になつて二ヶ月分の消息を伝えるには狭きものである。その間田中克己氏が帰阪して久し振りである東京の消息を聞くことができた。四月から成城大の方は教授になつた。今年には引続き散文詩を発表してゆく由である。四國高松に向つてゐた福地邦樹氏が母校への転校に成功し帰阪した。聞くところによると阪大の恩師小島吉雄教授の御推挙による由である。拙誌運営の上からも深謝申し上げます。

岩崎昭弥氏が岐阜市講演で若冠ながら最高峰で選進した。

天理大教授の高橋重臣氏が二ヶ月の予定で東京に内地留學した。

今日は林富士馬氏邸の新築祝ひを兼ねて東京の同人会が開かれる由である。文學と違つた面でも果樹園はいつかみのりつゝあるやうだ。

果樹園四十二号 昭和三十四年七月一日発行(毎月一回「日発行」) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

清水、蓮田両氏が初めて伊東と出会つたのは翌昭和十一年八月二日堺市七条通の栗山氏の家であつた。

「夕刻、池田が詩人伊東静雄氏を伴つて来る。一同ビールを飲みながら、快談する。伊東氏大いに気焔をあげ、自作の詩や、他人の詩を朗吟して興をそへる。純粹の詩人らしさに打たれる。池田と伊東帰る。」と、当日の印象を清水氏は日記に書き留めてゐる。伊東はその夜最近作である絶唱「八月の石にすがりて」を朗吟したことであらう。その夏四氏は遍照光院に籠つて、星野書房から斎藤清衛先生の名で出版される中等学校教科書『作文』の編輯を始めたのであつた。

「伊東氏の名は、山の生活の間、仲間の会話に幾度か出てきた。特に初対面の蓮田と私は伊東氏から或る異常なものを感じつつたことを語り合ひ、すでに交遊の始まつてゐた二人から、貪婪に何かを嘆き出さうとつとめたやうに記憶する。」

と、清水氏は述懐してゐる。

翌昭和十二年の八月にも四氏は遍照光院に山籠りして昨夏の仕事の続きをしたが、その際、伊東は客分として招かれたのである。「時に、採用文の選択などについての伊東氏の短い意見は、我々の仕事に重要なヒン

トを与へた。

伊東氏は、我々が仕事をしてゐる間、所在なきさうに煙草を吸つてゐることもあつたが、……中略……劉曉と口笛を吹くのであつた。若き日の寮歌でもあらうか、仕事に専念する振りによそほひながら、四人は心々に、詩人の吹き鳴らす哀愁のメロディに聴き惚れてゐた。」

『果樹園』昭和三十四年三月号、
清水文雄「詩人と口笛」

この会同を記念する写真が残つてゐる。

院の裏庭に藤椅子を据ゑ、向つて左にしどけない恰好をした伊東、右に毅然とした蓮田氏。後列には栗山、清水両氏はならび立ち、池田氏は蓮田氏の椅子の背に手を託しておよび腰で佇んでゐる。伊東だけはカメラの焦点から眼をそらし地面を凝視してゐる。と、云ふのは、四氏は編輯してゐる『作文』の印税で、『国文学試論』から『芸文文化』に発展しようとする共同目的に眼を燃やしてゐるが、招かれた伊東は所在がなかつたからであらう。

この会同での夕食時に、晩酌のほろ酔ひ機嫌も手伝つて、伊東は幾度か自作の朗吟を振舞つただらう。伊東は死に一日一日と近附いてゆく辻野久憲氏に思ひをはせながら最近作の絶唱「水中花」を兩三度……朗吟したこと

だらう。八堵へがたければわれ空に投げうつ水中花。この一句と、哀艶な伊東の節廻しは、その日蓮田氏に致命的な感銘を与へたものと私は想像してゐる。意識的にか無意識的にかそれは判らないが、その後の蓮田氏のふとした行為に、その一句の影響が感知できるからである。

蓮田氏は翌十三年十一月第一回の応召して中支に遠征して洞庭湖畔の戦闘で負傷した。第二回目の応召は昭和十八年十二月大東亜戦のさ中だつた。大阪駅を通過する蓮田氏を、伊東は見送りに出た。伊東は黄菊を蓮田氏に贈り、蓮田氏は伊東に蜜柑を与へるつもりであつた。惜別の思ひと勇進の昂ぶりからであらう。蓮田氏は蜜柑を与へることを忘れたのに気附いたのは、すでに列車が動きだしてからであつた。蓮田氏は車窓を開き、闇の中の伊東の幻影に向つて、その蜜柑を投げうつてゐるのである。その時蓮田氏は恐らく八堵へがたければわれ空に投げうつ水中花の一句を口誦してゐたであらう。その日より一年八ヶ月後、つまり敗戦の直後に、蓮田中尉はジョホールバルで連隊長中条大佐を射殺し、自らもまた自決してゐる。この悲劇の謎を、遍照光院で聞いた「水中花」の感銘が解くと思はれるので、特に読者の記憶の隅に

とどめおかれたい。
伊東はこの高野行で次の作品を得、『むらさき』十月号に発表してゐる。

高野日記より

八月二十三日友を大門のほとりに送るその道よ朝ごとの霧にしめれり
とだえつつ山かげに鳴くはかなかなつとに來し高野の秋の
土産ものすすむる店に
並べしはされど春の鶯笛
青塗りの竹の小ぶえなり
ともに店頭にたち

ゆくりなく二人が笛の
共鳴のかなしからずや
見はるかす木の園
雲移る檜原杉山
家待つ汝が愛しき兒に
えらぶらむ同じその笛
友よわれも一つ欲し
多宝塔いよよ朱きに
われ独りふかみゆく秋にのこりて
いかに居む山の宿りぞ

この詩によると伊東は一人後に残つたことになる。が、大阪在住の栗山、池田両氏も恐らく共に残留したであらう。見送られた友は東京に帰る蓮田氏が清水氏であらう。八ゆく

レエルケ詩抄 (7)

たかはし しげおみ訳

酔っぱらいの口上

おれに つれはなかつたはずだ！
おれが 眼をすつていなげりや
おれと一パイつきあつてるおまえは死神だぞつとするが、まあ一パイいこう！

もう今は夜だ 地球はひとめぐりおわつて
おれたちの背中であつて
おれたちは一パイやりながら
七つの海を背負つてるわけだ
台風にまきこまれりや おれたちの船は
どこかで ばらばらだよ！
おれたちの背負つてる回転祈禱器は
同じことばかり百万べんもぶつぷつくりかえしてやがる

ジャングルのなかで血の匂いに唸つてる

りなく二人が笛の、共鳴のかなしからずや
前述したその後の影響関係から考へて、見送られる友は蓮田氏と見立てた方が詩の鑑賞からは面白い。この二人が、互ひに性格的な相
虎やライオンの群
覗きからくりのなかでふらふらおどつてる
あやつり人形たち
棕櫚林のなかからどすんどすんとやつてくる
象たち
おまえがなにもであらうと まあいいや
一パイいこう！
ぞつとするか まあほせや！

地球はひとめぐりおわつて
おれたちの背中であつて
だから 大勢の奴が立つていられなくなつて
赤道のまわりに はつてやつてくる
肘の骨が
きしみながら落ちていく
そして昔の黄色人の王たちの
いろとりどりのミイラがやつてくる
海をわたり川をよぎつて泳いでくる
おれたちの仲間いりに
さそり メドウサの蛇たち
数えきれない 小さなお化けたち

似性や、古今和歌集に対する共感をこの晩夏の
の出会い初めて知り合ひ、店頭で吹き合つた
鶯笛の同じ音色に微笑み合つた情景と心境と
を想像すると、まことに運命的な感慨を私は

毛虫の群 ぶんぶんの群が
窓べでとびかつてゐる

それから おれたちの背中の
地球のまわりにうずくまつて
うず高くかたまつてゐる街々に
教会の鐘がなりわたつていく

すると はげしくガタガタと あるいは

よろめいて倒れんばかりに あるいは懸命に
アルキビアデスとプラトンが
窓ガラスをノックする

おまえに見えるか？

おまえに聞えるか？

窓をあける！ さあ おれたちと一緒に一パイ

イ やろう！

——ああ だれもない——

ぞつとする ぞつとするな

とまれ 一パイいこう！

……
おまえはどこにいるのだ？

覚える。

伊東は八月高野山で無二の心友蓮田善明氏を得たが、秋と呼ぶにはまだ名ばかりの九月九日に、無二の心友であつた辻野久憲氏を失つたのである。

「先日わざわざ伊丹までおいで下され告別式に列せられましたことを厚く御礼申し上げます。

折角御目にかゝれたのですから、久憲さんの最後の様子なども色々とお親しくして頂きましたあなた様とゆつくり御話し合ひたかつたのですが、何分辻野家と行動を共にしてゐましたために、思ふやうにはなりませんんで、まことに失礼いたしました。

四五年生活を共にいたしました（もとよりこれは父母の承知のないことでしたが）時にしかり飛ばされ、時に慰められてゐた私の半身とも申すべき彼の死去は、私に取りますして、まことに一瞬の夢かとうたがはれてなりません。

死にゆく時の彼の心はどんなであつたかと思へば、私は自身の心が傷つき破れるやうな気がいたします。彼の最後の呼吸が止まつてしまつた時の眼閉じた顔は、この世にまたとない程の淋しい実を淋しげな顔でした。

最後まで意識は実にはつきりとしてゐま

して、二度淋しく笑つて私をちつと見つめました時、私は実に心切なく人と生れた者は、皆このやうな苦しい悲しみに会はなければならぬのかと、ひたすらに果敢なま

れてなりませんでした。昨日萩原朝太郎先生の許を訪れました節、来月の四季を追悼号にして下さるやう

なおはなして御座いました。何かあなたさまの方へ御通知が御座いましてせうか。あまりなぐくなりますので今日はこれで失礼いたします。御令妹さまに何卒宜しく御つたへ下さいまし。

九月二十二日 加藤よし子 伊東静雄様

（昭和十二年九月二十二日東京市中野区小塚二六二葉荘内）
（加藤よし子より堺市北三国ヶ丘町四〇〇伊東静雄宛封書）

辻野は九月九日午前一時よし子さんだけに見守られながら死んだのである。伊丹から走せつけた父と姉と、それから小林珍雄氏との三人だけで、その日の午後三時大森の教会で敬禮式が行はれ、桐ヶ谷火葬場で骨になつた。よし子さんの書簡に見える伊丹の葬式で、骨になつた辻野は、遺児路君、鮎子さん、生母、それに伊東と別れを告げたわけである。戒名道久院紹憲真隆居士。

又、霊名ヨハネ辻野久憲のために、富士山

麓の復生病院では、岩下神父の司会で一百の頼者は聖ミサを捧げたと、吉満義彦氏は書き残してゐる。

辻野は大正十一年兵庫県伊丹小学校を知事賞を貰つて卒業。大正十五年伊丹中学第四学年を修了すると第三高等学校文科に入學。昭和七年東京大学文学部仏文科を卒業すると第一書房に入社「セルパン」の編輯に参加した昭和九年同社を退社してからは専ら翻譯を業とし、満二十八才の若さで逝つたのである。

よし子さんの書簡の末尾に見える昭和十二年『四季』十一月の追悼号には伊東は執筆してゐない。彼はひそかに故人を偲びたかつたからであらう。『コギト』十二月号に次の鎮魂歌をひとり発表してゐる。

わが 笛

故辻野久憲君に捧ぐ

君が花さきし命よそは実に五月の
夜の庭の 橘の如くなりき
君は開花もて専らわが憂愁と
追慕とを歌ひぬ
その中にして
いかに瀧気のうちに於ける如く安らげく

われは古人と語りしよ
術ぞなし

いま君が若き命をかけて眺めし野より
瀧気は消え失せたり

そはもと君が呼吸にてありしかば
さあれわれ十月の葉がくれに見出でて
黄なる君が果実の

わが手に重きに驚く
友よ讃めよこれの現に残りし野に
わが吹きて行く笛の音を

つまり、伊東は辻野との共鳴の場として、
天地の間にみなぎつてゐるエーテル——この
古典的な媒氣のみなきる異世界に二人きり

寝る前二人は さも愉しげに降りて来た
「明日ね 母ちゃん いいもの上げる
秘密やねん そやな ちよつとだけ言お
うかな 一つはね美しいもの 西洋の
お姫様の絵 それから 折紙で鶴もこさ
えた 明日上げる おやすみ！」

「何だろ」暫らく妻のかおをみていたが
あれだ マリヤのカード！
すると只一枚の繪が どうなに彼女には
貴重だつたか判つてくる それを
特別の期待で母に贈るといふ

妻は 稚ない心が嬉しくてならないらし
く 笑いころげ乍ら 瞳をぬらしていた
「あいづら 随分子供だなあ……」
私は言い紛らそうとしていた

母の 日

堀ノ内 歴

行きかけて間のない教会で私の女の子が
カードを貰つて来た かお硬ばらせ
皆にも 私にも それを見せた
「これ貰うたんや……」

ありふれた極彩色のマリヤの繪葉書
十才になるその子には珍らしい贈り物：
ただで すぐ忘れ去つていた

明日は母の日 と云う今宵
十三才の長男と二人が二階でなんぞ密談
している「明日母ちゃんに 何やろう」
らしかつた

で住んでゐたのである。その交際の形見として
手に残つた橘の実を、友の徳の重さと讃へ
てゐる。

事実、伊東の家の狭庭を限つてゐる築塙の
向ふには空屋になつてゐる邸があつた。その
玄關脇にはこもり茂つた橘か柑子の立樹が
あつて、表通りを通ると通用門の格子戸の隙
間から、つぶらにみのつた黄金の実が眼を射
たものである。九月九日辻野を失つてから、
伊東は朝夕の通勤の行き還りに、濃緑の実が
次第に色づいてきたのを見たであらう。ヴァ
レリー、ジイド、モリアック、リヴィエール
、ジエイムス・ジョイスの名訳者であり、芭
蕉等の日本古典にもよき理解を示した天折の
秀才辻野を哀惜する思ひは、木の実が黄金色
を増すに従つて増したであらう。

辻野の死を追つて十月二十三日には、出版
記念会の夜に一宿一飯の奇縁を結んだ中原中
也が死んでゐる。辻野にはジャック・リヴィ
エールの『ランボオ』の訳著があり、中原に
は『ランボウ詩集』の翻譯があつた。共にアル
ルチェール・ランボウ (Rimbaud) の関係者が
二人、戦雲の高まりのたゞ中に仲良くあの
世に旅立つていつたのは、不思議と云へば不
思議であつた。既述したやうに伊東は中原の
詩の愛読者であつた。彼の愛情は、ペテン

にかけられたオデン屋代で帳消しになったとは言へ、その才を惜しむ哀悼の思ひも、「わが笛」に潜び込んでゐたかもしれない。

この「わが笛」で特筆すべきことは愛する辻野久憲に対する悼詩と云ふ意味の外に別にある。それは和漢朗詠集に典拠してゐるらしい事実が、その詩が発表になつた頃百合子さんに書き送つた書簡でそれと推理できる。

「ずみ分永くご無沙汰しました。自分でも惘れる程です。今日菊枝さんが用事で学校にこれら皆様ご元氣のご模様うかがひ、うれしく存じました。上高地にいらつしやつたさうですね。面白くありましたか。ゆり子さんはこの頃大へん愉快さうにしてゐられるとききました。私は平凡無事で、——勿論心の中では色々な現象が、毎日いろいろと起つてはゐますが、これは一寸文章では云へない様な隠微なもので、即ち私の詩ですが——学校と家との間を往復して、日を暮してゐるだけです。然し夏には妹と二人で十日ほど高野山に行きましたが、一向面白くありませんでした。

この頃は、読書をしてをいでですか、私は聖書をよむことと和漢朗詠集といふ昔の本を味ふことを仕事にしてをります。聖書は勿論、私が信者になつたのでは、（決して

決して）ありません。たゞ漫然と、ところどころ何だか思ひ当りながら勝手によんでゐるのです。和漢朗詠集は私の詩の勉強です。詩はこの頃はあまり書けません。段々づかしいことがわかつて来て閉口するのです。そして時々音楽をききます。この頃ベ

ルレーヌの詩を何とかいふフランスの女の人がうたつたレコード買って来て同じものばかりかけてきてゐます。女のカン高い声で憂愁と甘美の氣にみちた歌きいてると何とも云へぬ心のもうさ、つらさを感じます。少しかう、たいはいしてゐるのですね。何かそんな風なレコードあつたらおしへて下さい。この頃つづげさまに詩の方のえらい友人を三人まで失つて実に味気ない、とりのこされた、力のもつて行きどころのない様な悲しみをいたしました。えらい人がそばにをるとどんなにこちらも生甲斐があるかもしれませんね。

昨夜はえらい風だつたでせう。こんどの家は高見にあるので家が倒れさうな程で、一晩中、着物きて床の上に坐つてゐました。後では坐つたまゝねてゐました。

活動（註・活動写真）みられますか。この頃は活動もあまり面白くない様になりました。私の心の中の詩の方がもつと微妙で、

都会の午後

美堂 正義

車が賑れあがるやうに車道に溢れ用のない人がなんと多いことか

安全地帯の上で聞いた時計の音は爽やかに正午を知らせたがいまは 願めきのなかで

舗道の芽吹いた並木を仰ぎながら心重たく歩む

人が余りすぎる 車が多すぎる 絶えず緊張がいらいらさせる

ビルの谷間では地熱が足下から這ひ上り暑い陽射しのなかで

疲労が一段と覆ひかぶさつてくる橋の上でも

川の水の反射が激しく眼に突きさざり澄むことのない都会の空に

太陽は輝り狂めて休むことがない吐く息も焔となつて私の体を苛む死ね 死ねみんな狂人となれ

午さがりの都会はかつと燃えてゐる

活動みてゐて阿呆らしいです。

先生にもご無沙汰お詫びして下さい。そしてお達者においてる様祈ります。

二日 伊東静雄

ゆり子様
（昭和十二年十二月二日大阪市住吉区住吉町北角中
一丁目大阪府立住吉中学校より姫路市五軒路六七
酒井百子宛封書）

この書簡のなかで、伊東は「和漢朗詠集は私の詩の勉強です。」と言つてゐる。この事實は十二月下旬に頼原先生に書く書簡にも現れる。

唐詩人白楽天を主軸とする詩に対し、古今和歌集の紀貫之を中心とする歌が、いかに対応し融合してゐるかを対照してゐる名著。これから伊東はなにを学ぼうとしたのであらう試みに、故辻野久憲の鎮魂に捧げた「橘の花と実」を和漢朗詠集「夏の部」「橘の花」の項に探つてみる。次の詩歌が浮び上つてくる。

後中書王
枝繁金鈴春雨後、花薫紫麝颯風程
読入しらず

さつきまつはなたちばなのかをかげばむ
かしのひとのそでのかぞする

即ち、後中書王の詩では、春雨の後にいつしらずみのつてゐた黄金の鈴のやうな橘の実

遺族

田中 克己

夕ぐれどきに電車に乗り、陸橋にかかつて思ふのは一つの家族のことである。

七十になつた母と、「もう三十七にもなつて」とその母を誤かす妹と、ただ二人で今ごろは夕飯をたべるであらう家族をおもつて耐へられない気持である。息子であり、兄である、わたしの友は一卷の詩集と、未刊の詩篇とをのこして、大治の鉄山をまもる部隊の主計将校として、死んで帰つて来ない。母は未刊の詩篇を詩集に編んで刊行した。十五年めのことである。忘れられないのだ。さうしてこんな風に確かな強い記憶力をもつた母や妹が日本中に何万とゐるのだ。わたしはそのことだけを忘れないであらうと思ふ。

から、凱風に紫麝の香をくゆらせてゐた花季を回顧してゐる。古今和歌集の読入しらずの歌は、橘の花から昔のゆかしかつた人を回想してゐるのである。

右二篇の中、伊東の「わが笛」は後中書王の方に近い。つまり、伊東は朝夕の往還に眺めやつた隣家の橘の実から、花季の紫麝の香の代りにエーテルを起用したのだ。

又、伊東はヴェルレーヌの詩を仏蘭西の女流歌手が吹込んだレコードで幾度も聞いてゐるが、これは中原中也に關係がありさうである。中原はヴェルレーヌの抒情詩の真の意味の継承者である……と伊東はよく言つてゐた。伊東は中原の詩で最も好きだつたのは「月の光」であつた。

月の光が照つてゐた
月の光が照つてゐた
お庭の隅の草叢に
隠れてゐるのは死んだ兒だ
月の光が照つてゐた
月の光が照つてゐた
おや、チルシスとアマントが
芝生の上に来てる

この「Thrus」と「Aminte」が出てくるヴェルレーヌの詩がある。「Mandoline」である。

ドビュッシーが作曲したこの詩のレコードを伊東はみつけたらしてきて、伊東は中原の鎮魂の思ひを籠めて聞いたのだらう。

Les donneurs de sérénades

恋慕ながしのみやび男と

Et les belles Acouteuses

身かたむくるたをやめと

Echangeant des propos fades

気のない言葉の受け渡し

Sous les ramures chanteuses

歌ふ葉かげの暗がりに。

C'est Tricis et c'est Aminte,

あれがチルシス、こなたはアミント

..... (堀口大学訳)

このレコードによるヴェルレーヌと中原中也の照応を味つた伊東の心根は、先に和漢朗詠集で日本の詩歌人と中国の詩人の対応のさまをま探つた意図と軌を一つにしてゐると言へさうである。

伊東は書簡の中で「詩の方のえらい友人を三人まで失つて……」と、前述の辻野、中原両氏の他に、も一人詩人の友を失つた由見えてゐるが、それは詩集「白の侵入」の著者中村武三郎氏のことである。中村氏は山形高等学校で亀井勝一郎氏の先輩に当り、辻野、中原より一年前に無名で死んでゐるのである

が『日本浪漫派』八月号に隠れた詩人中村氏の存在を亀井氏が紹介してゐるので、同じ頃死んだものであると伊東は錯覚してゐるのである。後述するが、伊東は翌昭和十三年一月『ゴゴト』に発表した「決心」をこの中村氏に捧げてゐる。

又、伊東は書簡の中で、信者になつたのではないが聖書を読んでゐる由、見えてゐるが、これは辻野久憲の影響だらう。「ところどころ何だか思ひ当りながら勝手によんでゐる……」とあるから、辻野訳のモリアックの「キリスト伝」を新訳のマイタ伝あたりと対照して、「人の子キリスト」は「神の子キリスト」の幻影からどう抽出、解釈されたかを研究したのであらう。それともこの月から『ゴゴト』に山岸外史氏の「人間キリスト記」が連載されたから「文学青年キリスト」と「神の子キリスト」を対照したものかも知われない。事実、伊東は、「山岸のキリストはあれはまるで文学青年だ。然し、面白い。」と評してゐた。又、そのことに関して伊東は長い書簡を山岸氏に書き送つたさうであるが、戦災で焼けた由で伊東のキリスト観は知る由もない。

昭和十二年の歳末、伊東は次のやうな書簡を頼原先生に送つてゐる。

終着驛

浅野 晃

誰がおまへをこの道に引き入れたのか

おまへをこの軌条にのせてしまつたのか

あの時 あの場所で 誰がおまへを転轍したのか

(のろろの曠野をうごいてゆく旧式な車をおまへはさびしいひとみで見やつてゐる)

それからといふものおまへはこの道をすすんでゐる

おまへの速力が落ちたといふものよ

それほど權威のある計器を誰がもつてゐるといふのだ

おまへはおまへではないか

おまへの感覚自体でさへそれを計りかねてゐるではないか

(さうだ 速力については言ふなかれ

おまへがオールドケンタツキーホーム)

自然は山や河だけでない

暴徒も賢者もまたそれだ

おまへの視界はさまざまに變つた

「昨日は御本お葉書確に拝受いたしました。最も怠惰な弟子なるわたくしにまで、まことに有難く存じました。

その後また永い間お引こもりの由、切に御自愛祈らずにはをられません。夏前は杉浦君(註・敬称補正・一郎。当時今宮中学校教諭後九)と談合つて先生が大阪にお立寄りの機もあらば、四五人でご全快のお祝しようぢやないかと、言つてゐたのであります。

御本只今約三分の一ほど拝見したところ。無智なわたくしは専門的なこと申す力ございませんけれど、この御本の一つの特質は「研究の楽しさ」を教へる点ではないかと存じました。先生のいかにも楽しく御研究のふんいきがよむわたくし共にまでつたはつて来るのであります。若いわたくし達年輩の研究家と思はれる人の文章時々雑誌でのぞいてみまして、それに往々、深い味読と愛、切実な決心などの欠けてゐるのや、瑣末な智識の羅列や、さもなくば、しやくし定規な、根本的素養を欠いた議論をみかけて味気なく思ふこともあるのであります。研究の楽しさを全身的にあらはした文章は、よみます方でいかに専門的な智識のないものでも、きつと、打つてくるものだと存じました。

わたくしはこの頃あまり詩書きません。しかし詩多く出来る時は又心の苦しい時でもありますから、実を申しますと、ぼんやり何もせずにあるのが、私の理想でございます。このごろは、和漢朗詠集や、芭蕉の初めの頃の紀行文などよんで、自分の詩の手にしてをります。

やはりこのごろもお食物にも何か制限が
おありなのでせうか。

十四日

頼原退蔵先生

(昭和十二年十二月十四日堺市北三國ヶ丘町四十より)

(京都市上京区大將軍西町三六頼原退蔵宛封書)

頼原先生は昨昭和十一年から脳を患はれて退官してをられた。『ゴゴト』同人で、若くして芭蕉研究の權威であつた杉浦正一郎氏と全快祝ひをやる計画を書いてゐるが、先生の復官されたのは昭和十六年であるから、多分に病氣中の先生を激励する配慮がこの文章に籠められてゐると見なければならぬ。

先生から送られた著書は三省堂発行の『江戸文芸論考』である。蕪村、太祇、芭蕉、宗因、西鶴にわたる先生の研究を讀みつゝ、伊東は「深い味読と愛、切実な決心」と云ふ讚辭を書いてゐるが、この言葉はそのまゝ伊東の文学態度なのである。先に辻野久憲の「キリスト伝」山岸外史の「人間キリスト記」に

対して聖書を読み、中原中也の「月の光」の原典であるヴェルレーンの「マンドリン」をわざわざレコードで聞いてゐる態度にも、如実に「深い味読と愛」で対する伊東の心根が現れてゐる。この味読と愛から伊東は「切実なる決心」を導きだすわけである。

書簡の末尾に、白合子さんに書き送つたやうに『和漢朗詠集』と芭蕉の初期の紀行文を詩の正本として読んでゐる由見えてゐる。これも「味読と愛と決心」に関係がある。伊東は『和漢朗詠集』に於ける唐詩の志と『古今和歌集』の懐とが、いかに影響し、融合ないし対応してゐるかを味読しつつ、伊東の内部に知識として蓄積されてゐる、リルケ、ヘルデルリン、ニイチエ、或ひはセガンチーニをいかに血肉化するかの決心にしてゐるのである。又、芭蕉の初期の紀行——「武蔵野を出る時、野ざらしを心におもひて旅立」つた死を賭けた「甲子吟行」の紀行に、伊東は先人が詩に死を賭けた決心を手法として味読してゐるわけである。この芭蕉の紀行が伊東の詩に現れるのは、第二詩集『夏花』期を過ぎ第三詩集『春のいそぎ』期になつてからである。

伊東は明けて昭和十三年一月に次の詩を発表してゐる。『コギト』に「決心』『四季』

に「危くうつくしい方よ」の二篇である。

決心

「白の侵入」の著者、中村武三郎氏に

重々しい鉄輪の車を解放されて、
ゆふぐれの中庭に、疲れた一匹の馬が待
む。
そして、鞍は凝とその先端を地に著けて
ゐる。

けれど真の休息は、その要のないもの
上にだけ降りる。
そしてあの哀れな馬の

見るがよい、ふかく何かに囚はれてゐる
姿を。

空腹で敏感になつたあいつの鼻面が
むなしく秣槽の上で、いつまでも左右に
揺れる。

あゝ慥に、何かがかれに拒ませてゐるの
だ。

それは、疲れといふものだらうか？
わたしの魂よ、躊躇はずに答へるがよ
い、お前の決心。

第二詩集『夏花』

待つていた花

堀口 太平

ねむっている子をのぞきこんでいたら、
「おとうさん、不思議ですの？」ときく
「私には不思議とおもえないの。
うまれてきたということ、
あずけたものを、とつてきたようなの
よ。」

あたりまえだとおもいますわ。」
感心してしまつた。

それはまた、
おまえのことにもあてはまり、
私のことにもそうなので……。

おまえが、
私には待ち人であつたに間違いなく、
いやも応もなく、きたえられていた私の
四十年代ということ、
ながつた冬のあとで、
Dianthusの莖にひらいた花だとしか

おもえないから、
私にもあたりまえだ。
だから、不思議だともいえる。

(一九五九、五、一七)

高嶺の花

山根 忠雄

五月四日——快晴

比良に登る

シャクナゲ満開なり

その一枝をむさんにも

蕾のまま折り取つて持ち帰り

壺にさしたら

翌朝見事に花をひらいた

井上靖氏の「比良のシャクナゲ」といふ

詩には

「あの香り高く白い高山植物の群落」とか

「その高い峰の白い花」といふ風に描かれ

てゐるが

白よりもむしろ淡紅色で

香りはほとんどないけれども

美しいことは無類だ!

それは三日間咲き続けて私をよろこばし

た

しかし旅疲れのため

正面から堂々と

その高嶺の花の美しさをついに歌ひ出せ

なかつた

この詩の主題「決心」は先の額原先生宛の書簡に現れてゐた。「深い味読と愛」に対応して導きだされる「切実な決心」の「決心」である。伊東はこの決心と云ふ主題を心で暖めながら、その発火点を外部の時象に求めてゐたのである。

この「決心」が発表された一月の十六日には「國民政府相手にせず」と云ふ奇妙な声明の下に、中国の戦火は事変と云ふ様相から戦争と云ふ明確な焰となつて大陸全域に燃え広がつた。夜毎に夥しい兵車は金岡を進発した。「このごろは毎晩のやうに、夜おそく、何干といふ兵士や馬が私の家の下の街路を出征して行きます。わたし達はそれを見送つて、何とも云へない気持になります。道に立つてゐて行進する兵士にラムネや氷水を接待すると彼らはあるきながらそれをのむのです。出征する馬をみるのはことに哀れなものです。心が無いのですから」(昭和十三年六月二十日附酒井百合子宛書簡)死地に曳かれてゆく軍馬。忍従しか与へられない運命の動物。伊東は何とも云へない気持——憐愍に眼をしばたきながら見送つたのである。彼等の拒絶は食事を拒むより他に方法はない。その実状を「疾駆」の解説で触れた銀鞍会でつぶさに伊東は検分してゐたのであらう。

伊東は、死地に曳かれてゆく軍馬の姿に、秣槽の上で鼻面を振り食事を拒んでゐる銀鞍会の乗馬の姿を焼附けたのである。それは疲れのせみではなく、お前の決心であると伊東は軍馬に代つて歌つてやつてゐるのである。

この詩は伊東の戦争否定の表白なのである。これを詩集『白の侵入』の著者故中村武三郎に捧げてゐるのは一種の検閲に対するカモフラージュであると見なすべきであらう。

万象に侵入しゆく白は那辺よりかきたる
その昔の秘苑に湛へし紅熱の沼あり
今 その深みに白は弄むる
わが頸肉のおくがに白が巢くふはかゝる
ときぞ (中村武三郎「白の侵入」)

この天折詩人の詩を伊東は「生涯の悲しく、美しい予感の詩」と評した。(昭和十五年「コギト」)
「夏強ひて「決心」と「白の侵入」の関連を割り出せば、軍馬に寄せた伊東の「何んとも云へない気持」と云ふ「時代の南無阿弥陀仏」が中村武三郎の天折の運命に通じると云ふだけである。

「四季」の詩は故辻野久憲の内妻加藤よし子さんに捧げられたものである。

危く、うつくしい方よ。あなたが出会ったひとは、終焉をいそいでめたのです。あの一とは死を通じてあなたを呼び、あなたは、喪ふために近づかれたのです。そこであのひとはつか／＼と死の中に、あなたの目のまへで歩み入られた。すべて美しいものの、それが運命です。青春の意味なのです。美しい、ひやかな方よ。あなたは引返しも、降りられもしないところで、残るでせう。そして御自分のことでも涙をお流しになることはなくなるでせう。

また、よしこのさき幸福と悦のなかに居られる時のあるにしても、あなたのふかくなつたお瞳は、それを得信じないでせう。

この詩は辻野死後のよし子さんの辿つた生涯を奇しくも予言してある。

彼女は辻野の死後生きる希望を失つて茫然自失した生活を過してゐた。或る夜さ靈名ヨハネの辻野が彼女の夢枕に立つた。

柱時計

福地邦樹

私の家の柱時計は
老いぼれじいじいのように
どこもかしこも締りがなくなつて
ねじを巻いた時はしきりに進み
ねじがきれてくるとやたらに遅れ
ボンボンなどひどいもので
正確な数を打つたためしはなく
気分にかかせて
二十ぐらい続けて打つこともあり
この頃では隣近所に恥ずかしいので
時報だけは歌わさないようにしている
私の生れたとき買ったものだそうだから
もう二十七年もの間
私の心臓と同じように
断えまなく動きつづけ
その間二度分解掃除しただけなので
もうすりきれひからびて
黒光りした体は
疲れて気儘で
時々ゼイゼイと呻き声を発する

芳野 清

林富士馬さんに或る日
小説を書いてみないかと云はれ
僕は才能もないくせに
多分に自惚れ屋であるから
今を流行のセックスやら
幻想、スリラー織り交ぜて
大あわてにてつち上げた
醜怪な代物
患者を扱ひなれてゐる先生も
これには何とも閉口しだらしく
白衣を脱いだり着たりして
「君、美しいと云ふ形容詞は
小説には使はないんだよ」
僕は緑色のソファに椅つて
思はず小学生のやうに靨くなつた
僕は利根夫さんの飼つてゐる
嘴の赤い文鳥になつて
欄間の窓から飛んで行きたかつた
帰途、小さな悪魔がさゝやいた
—— 憐れるなる *alt. denkensmethode*
よ

を見守り続けたのである。

「私たちは幸にして、このやうな肉体の業苦からは免れてゐる。この上は、私たちが亦、彼等に劣らず靈魂の業苦からも救はれ、清浄な光明の生命を享受しうるやうに努めねばならないのだ。」

と云ふ「天と地のあはひ」での辻野の意志が、聖典のやうによし子さんの進路を指し示したのである。

彼女は看護婦学校に入り、伊東の「危く、うつくしい方よ」が発表されてから一年を経た日に看護婦免状を取り、多摩全生園を振り出しに、青森の松丘保養園、岡山の邑久光明園、草津の栗生楽泉園を巡歴して昨昭和三十三年十二月に隠退されるまで、実に九十九年にわたつて辻野の遺志である救難事業に、青春を含めての半生涯を捧げたのである。

幸吉の収集癖

池沢 茂

幸吉は走つたり水あそびしたりできるやうになつたところから、妙なガラクタをあつめて保持するという変な癖が、だん／＼はつきりしてきた。はじめは木ぎれのたぐいをあつ

めていた。ぼくが日曜大工なんかして使つた木材の、いろんな切れっぱしをあつめ、自分の所有物として保管する。そのうちに、そとへ連れて出たときにも、道ばたに棒など落ちていると、ひろつて持ちかえるまでになつた。それがいつのまにかなくなると、こんどはカンのたぐいをあつめだした。ミルク、お茶、あめ、せんべいなど、そういった家にあるいろんなカンをあつめ、私有物にしてしまう。幸吉には会話ができない。ひとりごとや言。ひとりで歌をうたっているときもある。しかし、ひとから問われたり、話しかけられたりしても、なんにも答えない。両親、つまり、ぼくや妻にたいしても、ほとんど返事しない。相手にむかつて、みずから発言したり反応を示したりするのは、すきなたべもの、欲しい品物、大小便など、さしせまつた欲求があるばあいに限られる。こんなだから、友だちはむろん、ひとりも出来ない。ブランコ、すべり台、三輪車など、ひとりやれる遊びも、こわがるばかりで、積極的な興味など持たない。水遊びだけが特別だった。そうしていつも、家のなかにばかり、閉じこもっている。そとへ出るのは、ぼくや妻の、散歩や買物や用事に、連れられてゆくにすぎない。それで、妻がかわいそうに思い、ぼくも賛成し

て、きれいな小鳥のえがかれた六角形のカン
を買求めた。ドロップのカンだが、あめ類
はいっさいたべないから、なかみは別の容器
に入れかえ、そのカンだけを幸吉に持たせた
のだ。それから、どうせ将来いるのだからと、
きれいなヨットのえがかれてる小判型のアル
ミの弁当箱も、買い与えた。ところが幸吉
は、一日、せいゝ三日ほど、持っていただ
けだった。かれがカンのたぐいを収集するの
は、色や形や模様には、なんら関係のないこ
とがわかる。

幸吉がそのころ、いちばん執着していたの
は、使いふるした茶のカンだった。ブリキの
円筒形のカンで、一面にさびているうえに、
口のあたりがこわれている。どうせ買いかえ
ねばならなかったのだからと、妻は、ウグイ
スの模様のある、みどりいろの、あたらしい
二重ぶたのカンを買求めてきた。すると幸
吉は、これも欲しがって、なかの茶をぶちま
け、自分の所有物として取りあげてしまった。
妻は一時、お茶やノリ、菓子や砂糖など、カ
ンというカンは、特別大きな、たとえば米や
麦などの容器のほかは、ほとんど全部取りあ
げられ、困りきっていた。しかし幸吉は、さ
びた、こわれた、まえのカンのほうを大切に
して、みどりいろのあたらしいカンは、やが

て、すてて、かえりみなくなつた。そのうち
に、カンの収集癖そのものも、いつとなく、
うすらいでいった。そのかわり幸吉は、こん
どは、ビンのだぐいをあつめた。した。

ぼくの家にも、カゼや胃腸や外傷の薬は、
ひととおり常備してある。健康保険の関係で
勤めさきの会社からも、とき／＼ビタミン剤
など支給される。こういう薬のビンを主にし
て幸吉のあらたな収集癖が燃えだしたのだ。
ミルク、ヨーグルト、半ねり歯みがき粉、ソ
ースのほか、卓上の食塩、こしょう、しょう
ゆなど、それから、メンソレータム、けしよ
う水、インク、ペンジン等々、大型のビンの
ほかは、あのビンも、このビンも、幸吉の妙
な欲望の対象になつた。

ぼくは腹の調子がすこしでもおかしいと思
うと、じきに薬をのむ。カゼ気味のときも、
なるべくそうする。妻にもこの点は十分に注
意させている。ことに子供は、幸吉にも、そ
れより三年半ほど下の小さい梅子にも、カゼ
や胃腸には気をつかつて早いめに薬をのませ
るとき／＼ビタミン剤もあたえるようにしてい
る。ところが、これらの薬はたいして幸吉の
所有物になつてゐるから、そのたびごとに、
幸吉にたいして、なだめたり、すかしたり、
しつたりして、一時借用しなければならな

い。すると幸吉の保管はますます／＼嚴重になり
はじめた。自分の所有物が大切で必要なもの
だと感じたからだろう。木ぎれやカンのたぐ
いのころは、とくに大事にしていた一、二の
品のほかは、保管といつてもかなりルーズだ
つたけれど、これらの薬は、取られまいとし
て、たえず警戒していた。とくに気に入つた
のは、はだ身はなまず、自分のズボンのポケ
ットに入れておく。はいりきらないのは、妻
から買物用の網の袋を取りあげて、そのなか
におさめ、いつも手に持っている。ぼくや妻
につれられて外出するときはもちろん、ふろ
へゆくときにも、どうしても手ばなそうとし
ない。むりに取りあげようとする、じたん
だをふみ、そっくりかえり、突っかゝり、か
らみつきなどして『ふくろッ！ふくろッ！』
とわめき、あばれる。よる寝るときは、ズボ
ンはぬぐので、そのポケットのビンも全部い
つしよに袋のなかにおさめ、その袋のひもを
手にまきつけて、ねむってしまったも、けつ
して手から離れないようにする。あさ起きて
ズボンをはくと、ポケットのビンは、元どお
りに袋から出して入れかえる。おもちゃの汽
車や電車、砂場などで遊ぶときにも、片手だ
けしか使わない。もう一方の手には、しっか
りと網の袋をにぎっている。

その後しばらく、幸吉は小さま／＼のク
ギをあつめ、ペンジンのビンにいられて、大事

白居易詩抄(二十四)

森 亮

秋の夜ふけて

この愛しいばかりの良夜を誰と一緒にすこさ
う。

数かぎりない若い人たちはわたしを分かつて
くれない。

嘗ての歓楽は忘れたやうにわたしを離れて心
は唯々空しい。

親戚旧友相次いで世を去りどちらを向いても
何か足りない。

風が過ぎて行くと木のみぢ葉がゆらゆらひ
るがへる。

白ひげの老人が独り月明かりの中に立てば、
これは又寒々ときびしいものが眼に映る——
疾うに盛りを越した菊と蘭の幾株。

わたしの弁解

前世ではお坊さんだったといふ軍人もゐる。

画家から生れ変はつたらしい詩人もある。

坐禅を組んでつらつら自分のさだめを読んで

みたが、

わたしには何代も前の世から歌の負債が溜つ
てゐるらしい。

でなきや、どうしてこんなに物狂ほしく歌を
詠むのか。

何しろ病氣になつてからの方が以前よりも作
りたい気持ち旺盛だ。

註 「秋の夜ふけて」の原詩は抄秋独夜(四の五〇三)

で、白居易が六十七才の作。次の「わたしの弁解」の
原詩は自解(四の五三九)で、六十八才の作。その年
(開成四年)の十月に詩人は風疾を得て左足が不自由
になつた。併し智能には何の障害も受けなかつたやう
で、発病後間もない頃から——主として短かい物であ
るが——盛んに詩を作つてゐる。

冬 待

—やがて、冷き間に、われら沈まん
さらば、東の間の、われらが夏の
強きひかりよ(ポオドレエル)

辻野 久 憲

私に酷しかった夏はもう逝つてしまつた。
今宵、飲泉会社も大門をときして、深い睡り
に沈んでゐる。堆く積まれたラムネの空處
が、月の光に濡れて、夜光虫のやうに煌いて
ゐる。

—私はそこに、季節の移り変りをさくら
うとするもののやうに佇む。私の熱を病む額
に、夜気がしつとりと触れていく。私の忙し
ない呼吸に、かすかに籠えた曹達の匂ひが通
つてくる。私はふと何物かを俵つやうに、後
を振り返る。そこにまた私の蔭が立つてゐる。
私の親しい蔭ばかりが。……

今宵、川ぞえの櫓の木立も黙して語らな
い。水の濁れた川床の上に、私の腕のやうに

頭に覆せた枝々が、その影を投げてゐる。

—私はそこに、夏の畢りを喧しく啼いた
鯛の声をたづねやうとするもののやうに蹲
る。しかし私はもう何も聞かない。私の咳く
声ばかりが、この沈黙を破る。私はふと、秘
密にふれたやうに立上る。そこにすべては過
ぎていく。私の想出を後にして。私の懐しい
想出ばかりを。

まだやつと季節の尖ばに立つてゐるのに、
もう私はその終りを念つてゐる。私は肩の上
にマントの重さを、頬のあたりに袴巻の厚さ
を感じてゐる。何物も私を今の情思に引止め
ない。私はたゞひたすらに、冬に向つて急い
でゐる。あのすさまじい木枯の吹きささぶ冬
に向つて。……

註この原稿は—梶井基次郎氏に、辻野久憲拜……として
捧げられてゐる。辻野が漱水雑誌に發表した戯曲と一
緒に辻野家から出てきたところから推すと、昭和三年第
三高等学校三年夏の夏作品ではないかと思ふ。先輩梶
井氏は「青空」をやつてゐたので、それに推薦してもら
ふつもりだったのかもしれない。

編 輯 後 記

「詩学」から八月号を「四季」再検討の特輯に当てると
言つてきた。この「四季」とは「四季」「コギト」を総称
しての意味らしい。再検討と云ふところから推すと、戦後
のジャーナリズムからその詩精神が全く抹殺されてゐたこ
とになるらしい。戦後九十四年にして改めてその真価を問
ふと言ふことになつたのだからか。さう言へば、この二
誌に直屬してゐた作家や詩人や評論家で、戦後まづたくそ
つばを向いて了つた人があつた。敗戦と云ふぬめしい現実
で、その詩精神が誤つてゐたことに改めて気づいて方向転
換を決意したのか、さもなくば後世に名を伝へるためか、
或ひは切実な食のために詩精神を売ることになつたのだら
う。僕等は暗黒な上に不器用だつたので、詩精神を愛するこ
とがなかつた。味噌汁をすすり、沢庵をかちつて飯を食ふ
日本人が、日常会話に日本語を語るかぎり、かうあらねば
ならぬ道と信じてゐたからであり、今も信じてゐるからで
ある。十年、二十年の区切りではなく、せめて日本人の平
均年齢の年月で時潮をはかり、それを一ことまとして評
価する習慣があるからである。

果樹園 第四十二号(毎月一回発行)

昭和三十四年七月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
京都市下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同 朋 舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園四十三号 昭和三十四年八月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園 第43号

蓮田善明とその死 小高根 二郎
さくら花 服部三樹子
白居易詩抄 森 亮
はまなすの歌 浅見 晃

魚の目 田中克己
おしやべり 林 富士馬
旅 装 山根 忠雄
メロン／＼ 堀ノ内 歴
収集癖の発生 池沢 茂
あゝ時 美堂 正義
人と言葉 福地 邦樹
挨拶 吉本 青司

蓮田善明とその死 (一)

小高根 二郎

れきとした職業軍人ならばとにかく……、
応召による陸軍中尉にすぎなかつた国文学者
蓮田善明が、なぜ、終戦の聖旨を聞く日にな
つて自決をせねばならなかつたか? それは
知友間で久しいあひだ謎とされてゐた。

しかも、自決に際しては、わざわざ上官で
あつた連隊長を射殺して死の道づれにした……
……と伝へ聞いてゐたので、その謎にさらに
暗い量添へてゐた。

デング熱による発作だつたのではあるまい
か? それとも、神ながらの国文学本居宣長

……の継承者をもつて任じてゐた彼のことだか
ら、神國の滅亡と運命をともしたのかもし
れない。連隊長を巻添へにしたのは私怨関係
だつたかも知れない。大体こんな臆測で、謎
はそのまゝいつか十二年の歳月を越えてゐた

蓮田の竹馬の友であり、学校時代、軍隊生
活を通じての同僚であつた丸山学氏によつて
その謎が解明されたのは去年のことである。
丸山氏は目撃者であつた鳥越副官の言葉を次
のやうに伝へてゐる。

「蓮田善明が自殺した日は閑院宮春仁王殿
下が終戦の聖旨を携えて飛行機で南下せら
れ、南方軍總司令部で連隊長以上の幹部に
対してそれを伝えられる日の朝である。そ
の日の朝早く、七時半頃のことであるが蓮

田は……中略……、軍装をして鳥越副官の室
に現われた。軍装と云うのは正式の軍服に
拳銃・眼鏡などすべての装具をつけたもの
でいわば軍人の大礼服である。その蓮田を
見て副官は蓮田に転任か何かの命令でも来
てそれを受けに来たのか、それにしても副
官たる自分が知らない筈はない、と不思議
に思つた。が、とにかく二人で話をしてい
ると副官のところへ補給中隊で二人の自決
者があつたので処理に来てくれと云つて来
た。副官はそれを蓮田に告げると蓮田は副
官が自動車で行くなら同行して車中で話を
したいと云つたが、その時は自動車が他に
使われていたので単車を使うことになり同
行は取止めになつた。

鳥越副官が補給中隊から連隊本部に帰つ
て来たのは十一時半頃であつたが蓮田はま
だ本部で待つてゐた。そして二人が副官室
で話をしている時に連隊旗手が入つて来て
軍旗の処理をしなければならぬので手伝つ
てほしいと云つて来た。これも連隊として
極めて重要なことなので副官は蓮田を室に
残して軍旗室に赴いた。用が終つて室に帰
つてみると蓮田の姿はそこにはなかつた。
そして間もなく副官は階下で銃声二発をき

いた。当時は隊内に連日自決者がある状況であったが副官はおどろいて二階の自室の窓から本部の前庭を見下すところに行ってみると本部の玄関に連隊長用の自動車が付けたら、左手で胸のポケットから軍事郵便のハガキに何か書いたものを出してこれを握りしめながら大の字に足を開いて突っ立ったまま拳銃の引金をひいたのだった。鳥越副官は二階の窓からそれを見ていたのだ。どうする間もない美事な自決であった」

〔日本談義〕昭和三十三年八月
号、丸山学「蓮田善明の死」

この文章によると、覚悟の他殺であり、覚悟の自殺である。精神錯乱の結果であったとは認定できない。他部隊に別に二名の自決者が出たほどの、敗戦に直面しての軍の動揺と士気を想ってみれば、蓮田の自決の方は格別珍らしいことではない。しかし、自決を敢てするほど武士道に忠実なものが、上官の命は朕の命と同じことだと云ふあの「軍人に賜はりたる勅諭」の信徒の精神に背反してまで、

さくら花

さしのべし手に届くまで近く来て身ぐるみ誘ふ春の日と風
面むけて冷たき風の底に満つるいひがたき春の暖さかも
墮ちてゆく心の底におとつれて見捨てぬ春の天地の花
歌を忘れしカナリヤ我を泣かしてさくら咲きぬと誰に嘆かむ
うすきころもまとはせながら吹き過ぎぬ立ちどまり思ふ春は素肌にし
きのふのこと今日忘れぬて一日暮れ夕さくらばな速き絵を見す
ふとしたる心の隙に入り来しが身よりもかろし花びらのごと
ものごとの記憶といふが何ものも足しにもならずさくら散る夜半

服部 三 樹 子

一心にことを遂げむとせし少女花さへ身さへうつゝなかりき
風ふけば木々の向うのさくら花身ぐるみ白く重くゆるゝも
身も冷ゆらむ花の下びを思ふだにおのゝくほどの春今年なり
さくらばな咲きのさかりの重々ときのふの仕草けふのもの憂き
一ひらのさくら花びら戸に附くをみれば遠くなりし人から
さくら花なまなまとして身に重く被ふと見しは昼のたまゆら
春なればかなしき目もて見つめたるけものと我を距つ花びら
夕ぐれの窓の遠見のさくらばな思ひも花も揺れてゐるかも

鳥越副官に対して、「自分宛の郵便物に金某と云ふ名でくるのががあるが、これは少し訳があるのだから諒解してほしい」と言つたと云ふのである。諜報関係の仕事で、さうした必要も想像されぬこともないので、鳥越副官は

格別気にも留めなかつたのであらう。後になつて考へると、上条大佐は対馬の出身であつたから、或ひは少年時代に朝鮮から渡つてきた上条家の養子になつたのであるまいか？ つまり、金某こそ真実の姓名であつたのでは

白居易詩抄 (二十五)

森 亮

池の畔に忍びよる夏

水かさかじりじり増すにつれて池の堤の春は終り、
濃い陰を交錯させて夏木立ちが腕をひろげる
誰も乗らない小舟は田舎の渡し場を思はせ、
かなたの籬のたたずまひは水辺の村に見立ててもいい。
ふちづぶる寝台の塵ち静かに払ふことも、
くんと匂ふ酒庫のとびらをひらくことも、
それがその日の出来事に数へられるほどに
わたしのひと日ひと日は暇であることが無い
時どき幼くて可愛い孫をからかつてみる。

山との別れ

——病中ある人に——

山登りにも水のほとりの遊びにも二度と出掛けることはあるまい。
湧きでる泉やごし巖、もや・霞の眺めを今我が物とする人は誰だらう。
君が嵩山の南壁の見えるところまで行つたら声張りあげて
をちこちに並び立つ峰又峰に聞かせてやうて欲しい、この別れの歌を。

注 「池の畔に忍びよる夏」の原詩は池上早夏(四の五六六)で、白居易が六十九才の作。前年風疾に冒された詩人は冬中臥たきりだつたのが、春が進んで暖気が加はると杖をついて散歩できる程に快復した。次の山との別れの原詩は送嘉客(四の五三四)で、彼が六十八才風疾の病床で詠んだもの。

迎者の応待にいんぎんであつた。「いまにいつらの世話になる時がある」さう……大佐は後で副官に洩らしたと云ふのである。
又、大佐が終戦の事実を伝達するため、連隊の下士官以上をジョ・ホール王宮に集めた際職業軍人としてはまことに許すべからざる皇室と団体に対する侮辱的な言辭があつた由である。その言辭は具体的に紹介されてはゐぬが、「天皇戦犯論」と「日本混血論」ぐらゐのところであらう……ことは想像がつく。
つまり、上条大佐は如上の来歴から、戦況の不利なるにつれ通敵行為をし、自己の身命の保全だけをはかつた卑劣漢であつたと云ふのが、丸山氏の結論である。しかも、後で判明したことだが、中条大佐は英軍側の手配人物であつたと云ふ。即ち、ドウリットル東京空襲部隊で上海に不時着した飛行士を処刑した、軍事裁判の判士長その人だつたからである。蓮田が手を下さずとも、いづれ、死で待ち設けられてゐた大佐の運命だつたと附言されてゐる。

この丸山氏の解説によつて、蓮田善明の行為の謎をとりめぐつてゐた暗量だけは霧散したのを覚える。しかし、謎はいぜんとして謎と

して残つてゐるのを感じる。なぜ蓮田が精神的な衝動を行為に移したか？ その内部構造が読られてゐないからである。

私は詩人伊東静雄の伝記の準備をしながら伊東のワキ役として登場する蓮田善明に対しても少からず関心を払つてきた。伊東の一人のワキ役であるフランス文学者辻野久憲が満二十八才の若さで死んでからは、そのワキ役は蓮田が担当してゐたと思はれるからである。この辻野の悲運、蓮田の悲劇の介添へによつて、シテ役である伊東が演じる詩劇は事実以上の悲劇に感じられる。俺の生涯は決して不幸ではなかつた。さう……伊東が伝記の舞台で表白するためには、ワキ役の辻野は西欧文学に潜むカソリシズムの発掘途上で消えねばならなかつたし、辻野に代る蓮田もまた拳銃三発を放つて掻消えねばならなかつたのである。

蓮田善明は明治三十七年……熊本県鹿本郡植木町の医家に生れた。熊本市の北方二里の地点である。有明海を越えた対岸のやゝ北方長崎県の諫早町に伊東静雄が生れたのは二年後の明治三十九年であつた。

植木町はその昔南朝派の忠臣であつた菊池

一門の勢力範囲——菊池、山鹿、玉名、山本四郡の山本から、南方一里に位してゐる。そんな因縁から、菊池武光が改造したと伝へる大國主を祭神とする鑑田神社は植木町の西南半道ほどの桜井にある。

鑑田神社は明治九年十月二十四日の神風連の乱に關係がある。滔々たる欧化の時政と時潮。磨刀令が出るに及んで加藤清正以来の陋固たる保守精神が爆発した。盟主太田黒伴男以下百二十余名は、伝来の甲冑に身を堅め、家宝の刀槍をくりかざすと具令安岡良亮、鎮台司令官種田政明少將を襲つてこれを斃し、余勢をかつて城内の歩兵營、砲兵營に攻め込んだ。欧銃式兵器に対する純粋な日本兵器で挑んだ一戦だつた。まさに風車に槍で立向つたドン・キホーテさながらだつた。盟主太田黒が銃丸で斃れるや、一揆に神意がなかつたことを覺つて敗走した。その敗残の多くは前記の鑑田神社に詣り、爾後の進退を神意に仰いだのである。

蓮田はこの由緒ある鑑田神社に折にふれ詣ることがあつたであらう。低学年時の遠足で行つたこともあらうし、秋祭の笛太鼓に誘はれたこともあつたらう。子供にとつて当時の祭の蠱惑の一つであつた覗きカラクリは、

ホット・ニュースである日露戦争絵巻を展開したであらうが、土地柄、菊池武光が征西將軍懷良親王を奉じて小式頼尚の大軍と戦つた筑後川合戦の場面を演じたかもしれない。また紅蓮の焰を吐く熊本城を背景に、矢尽き刀折れた太田黒伴男の憤死の情景も展開されたに相違ない。

伊東の諫早には蓮田の植木ほどの花々しい歴史的背景はない。有名な長崎二十六聖人の殉教よりも二十三年も前、つまり、天正二年に日本に於ける第三次の殉教者——靈名ルカとマチヤスと呼ぶ二人のキリシタンが処刑されたと伝へられてゐるぐらゐである。

伊東家の菩薩寺の近くにアンリ・ルソーでも描きさうな赤煉瓦建ての諫早監獄がある。さうした縁起でもない建物の建設地は、それ相應の場所が選ばれたであらうから、そこらあたりが昔からの刑場——ルカとマチヤスが掃天した地点ではなかつたかと……私は空想してゐる。伊東家の墓地もそこから近い。

伊東の亡父孟蘭盆記『今年の夏のこと』にこんな記述がある。

「故郷では、私たちは十四、五の両日は、夕方から、家一等の晴着を着、又子供の私

はまなすの歌

浅野 晃

北の海の砂丘のかげにはまなすの一族は屯ろしてゐた
夏が来て海が藍色に輝きはじめると彼らはまっ赤な花をつけた
濃霧のなかでそれらの花は蓋のつけねまで濡れた

太陽がそれを乾かした、花はよろこびにふるへた
その花のかくはしい匂ひを海からの微風がまきちらすと
虫たちが集つてきて蜜を吸つた
嵐のなかでも彼らの生活はもちこたへた
夜は月が露よりもしづかに彼らの影を深めた

人間の一団がやつて来た、鼻をくくんくんいはせたあげく

彼らは花を見つけた、「きれいな花があるで」

そして海ぞひに小舎を建てた、それら粗末な小舎のうしろにはまなすは咲きつづけた

つぎの一団がやつて来た、彼らは向ふの曠野の樹木を伐りひらいてここまで来たのだつた
「ほお、ええ匂ひの花だの」と彼らはいつた

そこに彼らは馬鈴薯と唐黍を植ゑつけた
はまなすの一族はいまはわづかに残つてゐた
けれども夏が来ると彼らはうつくしい花をつけた
人間たちは彼らをかへりみることをしなかつた
まっくらな夜の汐鳴のなかで彼らは烈しく慰めあつた

子供たちだけが彼らの前に立ちどまつた
なんというすばらしい花の匂ひだらう

なんというすばらしい花の色だらう
子供たちは感謝した、はまなすは子供たちに感謝した

はまなすはいつた、「小さな人間さんいつまでもあんたがた小さいままであて下さいよ」
かなしいことにはまなすの言葉は人間の子供には通じなかつた、子供たちは口々にいつた

「もうすぐ実がなるな、これに」
「さうよ、赤い実だよ、とてもうまいよ」
彼らははまなすの枝に小さな手をかけた
そして上手に刺をよけて枝ごと花をとつた
子供たちは歓声をあげて砂丘へと走つてゆき
浪うちぎわで浪といちいち無邪気にたはむれた
日が暮れた、海も暮れた、彼らの影はもうない
砂の上に彼らが忘れた紅い花だけがある

魚の目

田中克己

大阪にゐた時、魚の目でこまった。朝晩の通勤にしかめつづらをしてゐた。夏休みとなり、大東博士に切除してもらひそのあと福地君の自転車の尻に乗せてもらつて通院快癒。学名を鶏眼といふことも博士に教はつた。癒つたあと、歩くことはこんなに楽なものだったかと思つくと感じた。

東京へ来てからまた痛くなり、しかめつづらのはじまる。恩師と……女子大学の講義のあといつも都電までお伴をする。つひに気がつかれて、跛をひくわけを訊ねられ、申しあげると「それは削ればいいんだよ」とのお教へである。なるほど削れば簡単にいたまなくなる。わたしは学恩のほかに、こんなことまで教へていただく不肖の弟子である。

たちは白麻の五紋附をつけて、墓地の前に集り、明々と数十の燈籠をその前に吊り、蟲の声をきいたり、又遠くの丘墓地の電飾に間違ふやうな美しい燈籠の灯をながめながら、夜をすごした」

白麻の五紋附を着せられた少年伊東は、その墓地から一段低みに連つてゐる堆積地帯——一昨年の汜濫で有名になつた本明川が蛇のやうにうねつてゐる広袤の向ふ、蒼茫と暮れてゆく有明海に眼を放つただらう。右方の岬の突端には雲仙嶽が巖々とした山容を海に浸してゐる。その麓の岩礁は白く水しぶきを煙らせ、海がまだ眠りきつてゐないことを告げてゐる。堆積地帯のそここの丘墓地に燈籠の灯が明滅します。ハモニカがどこからか流れてくる。帯のやうな海の宙天高く、夏雲は煮凝つた油脂みたいにまだ輝いてゐる。真昼ならそこに熊本の山波が展望されるところである。

その日少年伊東は、最後まで暮れ残つた雲の一部に、二十年後に互ひに魂を分ち合ふ蓮田が佇んでゐるやうなぞとは想像したであらうか？ いや、想像したと想はれる節がある。伊東は昭和十三年、蓮田善明主宰にかゝる『文芸文化』創刊号に次の詩を寄せてゐるが

稲妻の照明で照らしたされる部落部落の少年の中に、かつて伊東があり蓮田があつた思ひ出を、誘致しようとする意図が籠められてゐると思はれるからである。

稲妻

肥前の思ひ出

伊東 静雄

暗い、暗い地平を、一瞬にして閃かし蒼白な稲妻が、水田の面を奔る

強く涼しい風は、烈しく額や目口を撲ち著物を押へ難く翻す。

子供は怖がらない。夏の夕べ、往還に立つて、それを見るのを楽しむ。

征矢よりも疾く蒼白な稲妻がひっきりなしに、水田の面を奔る

屋間見なれぬ遠い部落々々
川の帯の燈めきや不思議な大きい雲の印象が、

おしやべり

林 富士馬

人の世に住む弱きもの
歌ひ女よ。詩人よ。
汝等そも何をか持てる。
まどはしの言の葉持てり。
世に媚び人におもねり
おのれを欺く
まどはしのたくみを知れり
笑ふなかれ憎むなかれ

これは永井荷風の詩だそうである。題は「武器」というのだそうである。この「詩」を批評せよ、といったら、現代の「詩」の進歩を知らない、詩は所謂「詩的な情緒や感傷」とは全く別物になっていることを知らない。いま少し「詩」を勉強せよ、と云われそうである。この「詩」を愛誦していると云つたら、それこそ、現代の詩人と、当代の女性から軽蔑されそうである。

旅装

山根 忠雄

奥の細道の旅に出るとき
「ただ身すがらにといでたちはべるを」と芭蕉は言つてゐます
つまり余分のものは成るべく持たない方針です
ところが世間には
平生でも何かとやたらに持ちたがる人が
ゐる

万年筆 シャープペンシル
タバコケース パイプ ライター
ネクタイどめ 写真機などといふものは雑然たる知識のやうに
とかく落したり忘れたりするもので決して身につけません！
いつまでも身につけて離れぬもの
生きる知る智慧

——旅の体験こそ
芭蕉の最も重視したものであります

一時にはつとずるほど瞳の底に閃いては後、一層暗いくらい闇。
その小気味よい光と闇の鬼遊び！

田舎の人は言つてゐる。稲妻多い夏の夜は、
豊饒な秋の実りの予告だと。

子供はそれを、きつと然うだと思ふ。
そして、凝と地平を視つめる。

大勢其処には子供らが集つてゐて、
盛んにおほ声で笑ひこけながら

こんなに賑やかな、にぎやかな悪戯をしてゐるのではないか？

往還の、強く涼しい風に類も冷えて
そんなふうの子供は楽しく考へる。

つまり、俺の「肥前の思ひ出」は一葦帯水の「肥後の思ひ出」であり、君が主宰する雑誌に詩を書くことになつたのも、遠く相見ぬ少年時に、同じ稲妻の演ずる光と闇の鬼遊びを眺めやつた日にすで結縁してゐたのだと云ふ風懐が、この詩から感じられるのである。

不意に真夏の暑さが来たものだから
急造の手製アイスクリームを
三人の子等にたべさせていると
一等小さいのが 瞬くまに平らげ
皿をなめ上げている「あ 汚な！」
彼はチビの癖に悠然と睨み上げて
「僕な メロンくちててんよ
隣のワン公ね メロンくちててんよ
ごはん喰べてよったよ 僕ね
あれちててんよ」
磁瑯器を長い犬の舌が隅なくなめる
あのペラ／＼の巧みな動きを 彼も
真似てみたくなつた訳が 私にも
よく解かる
なるほど メロンくちと
一九五九・六・二

収集癖の発生

池沢 茂

ぼくはそのころ日曜大工に勤んで、納屋を
建てたり、勝手口の門をこしらえたり、台所
のたなや調理台を作ったりしていた。公休日
だけでは間に合わないから、おそ出の日の午
前中や、泊りあけて早帰りの日の午後なども、
利用しなければならぬ。幸吉はそんなほく
にまつわりついて、手ごろな木ぎれなど出来
ると、手に取るようになった。それから、ど
うしても必要な板や棒まで欲しがり、ぼくか
ら取りあげた板や棒をタンスのうえなど一定
の場所に集めて、自分の私有物にしました。
遊ぶときには、ひとり、それらの板や棒を
ならべたり、かさねたりしている。とき／＼
レールの形をつくるほかは、はっきりした意
図はみとめられない。たゞ、一方の側面に、
ほんのわずかでも、すぎがあつたり、でこぼ
こがあつたりすると、気になって、気になっ
て、ならないらしい。一ミリのくるいもない
ようにと、寝ころんですかして見たり、上か
らのぞいて見たり、しきりに神経を使ってい
る。そのために、太さや長さの違う棒と取り

勉強することは、昔から好きではないし、
軽蔑されることは、出来るだけ避けたい。そ
こで、だん／＼同人雑誌に書くことがなくな
っている。

荷風がなくなったとき、特に多くの週刊誌
が記事にしたことを新聞広告で知っていたが
遂に一冊も読まなかった。それがいまでは残
念で仕様がなない。今更読みたいと思つても、
雑誌と違つて、週刊誌ではどうにもならな
い。週刊誌もこんなところが私にとって不便
なものであるとは、気付かなかつた。週刊誌
を読まなかつたのは他意はなく、うかうかし
ているうちに、期を逸したらしい。新聞な
ら、却つて、或る人のところに行つて、とち
込みを読むことも出来るのに。

太宰治さんの桜桃忌も、今月の筈である。
去年がその十回忌であつた筈である。太宰さ
んには大愛お世話になつたので、桜桃忌には
是非出席したいと心掛けていながら、果すこ
とが出来なくて、奥さまから偶然お電話を頂
き、去年はやつと出席出来て、御挨拶だけは
出来た。酔払うことを随分用心していたが、
やはり相等酔払つたようにも思う。それで
も、早目に帰つて来たので、後悔で睡れない
ということはなかつたように思う。別に文学

かえたり、厚さや大きさの違う板と入れかえ
たり、いろ／＼工夫をする。なんのつもりか
はわからない。こちらから教えて、建物とか
乗物の形を組立てるように仕向けても、はか
ばかしい興味は示さない。カタコトしか言え
ないのが知能の程度だとすると、もつと簡単
なレール以上の、そういう具象物は、はつき
り理解できないのかもしれない。とにかく、
たゞ雑然と、ならべたり、積みかさねたりし
ながら、その一方の側面が一ミリのでこぼ
こもなく、きっちりとするわなければならぬ
のだ。どうしてもうまくいかないと、じれて
あばれだすときもある。そんなときは手つだ
わねばならない。たゞし一方の側面だけがそ
ろえよく、反対側はでこぼこでもあまり気
にならないので、わりあい簡単に出来る。す
ると幸吉は満足し、だん／＼落着いてゆく。
それから、また自分流儀で、一つ二つ板や棒
を取りかえ、べつこの板や棒をあらたに加える
などして、その妙な仕事に没頭してゆく。

『幸ちゃんは今、大工さんになれるんやな
いかしら。大工さん言うたら、あまりよくな
いけど、建築技師とか、なんとか……』
『うん……ほかのことはなんにも出来なくて
も、そういう建築の方面に、特別な才能をあ

的な集りに限らない、人中に出席すると、矢
鱈に興奮するので、いけない。学生時代に、
教練の査問があるとき、気をつけ！ の号令
がかゝると、途端に、足がガタガタ震えだし
て困つたときのことを思い出す。

太宰さんがなくなつたときも、何か生活に
追つかけてられていて、落着いて新聞を読めな
いような状態にいながら（そうでなかつたら
多分幾つもの新聞を買つて来て読んだことだ
らうと思う）そのために尚更印象が強かつた
ことも憶えているのだが、さかんに新聞紙を
賑やかにしたことを鮮明に思い起す。新聞紙
が、私には江戸時代の瓦版のように思えた。
ラジオでも報ずるし、電車のなかなどで、文
学に全く縁のなきそんな人々がさかんに太宰
治を話題にしている。その太宰治という人物
は、私の知っている人ですよ、と云いたい位
であつた。だから、なくなつた、とはつき
り判つたときも、おくやみには、行きたくも
行けなかつたのである。

併し太宰さんのなくなつたのは十年も昔だ
つたので、週刊誌もテレビもなかつた。
永井荷風の生き方は、ほんとうの文人にふ
さわしく、羨ましい限りに思えた。

ある時

美堂 正義

既に卓子の上に酒瓶が並び
女らの嬌声が心よく耳をくすぐり
蕩然とした心で友に
酒呑まぬ奴には

酒呑みの心理は解らないなぞ
理屈にならない言葉で強ひる
そんな時 ふと思ひ出す
机に向つて本を読んだり
何か書いて居られるあなたの姿を
無為無頼に過して悔いなき私を
省みて肅然とするが

酔酌するのは楽しい
そのために酒を呑むことがある
初夏の夜は風は暖く胸を過ぎ
光は柔く刺戟する
酒の力を借りて酔々とした気分を晴らす
私を懲れと思ひ給ふな
酒は甘く咽喉を通り過ぐ

人と言葉

福地邦樹

言葉は稀薄な命

かたちとなったとき

すべては嘘となる

人はきまぐれの花

愛をえたとき

もはやそこに愛はない

する。口をきくのを忘れてしまったみたい、家にばかり閉じこもって、ひとり黙々として、板や棒を並べたり積んだりしている。

ぼくはタクシーやトラックのおもちゃを持ち、むりやり幸吉の手を引いて、おもてへ出た。遊ぶのに適当な場所がじき近所にある。路地で、コンクリートの坂路だから、交通上の危険がすくないし、手をはなせば自動的に走ってゆく。幸吉はこゝで、ぼくといっしょに、ながいあいだ遊んだのだ。ところが、幸吉はもう、すっかり変っていた。一度二度、以前とおなじように、坂のうえからトラックやタクシーを走らせて見せ、さて、こんどは幸吉自身にやらせようと手に取らせると、とつぜん幸吉は、どぶのそばへ走ってゆき、そのトラックを放りこんだ。『あ、そんなことしたら、いかん』とぼくが大きな声をあげる、幸吉は逆に、はしやいで、こんどはタクシーを取って、どぶのなかへ投げこんでしまった。

はじめ幸吉は、買いたえられたおもちゃ類はみな、大切にしていた。幸吉より二つ上と、おなじどしの、ふたりの孫を持っている義父と義母は、そんな幸吉をしきりに、うらやましがった。ふたりの孫はやはり乗物のお

らわしてくるかな……』

ぼくと妻は、とき／＼こんな会話をかわした。おたがいの沈みがちな気持ちをこれ以上傷つけないで、なんとか引きたてようとするつもりだった。といっても、希望や欲がないのではない。精神科や神経科の医者に診断してもらい、特殊児童の教育者という人たちにも相談したうえで、いったんは絶望しているふたりだったけれど、やっぱり、こんな見込みが、ふと頭をもたげてくるのだ。

幸吉の知能指数は、三歳のとき六〇、四歳のときは四〇ぐらいと言われた。五歳になると、もつと減って、三〇ぐらいに低下している。それにしても、この判定が事実としたら、板や棒を積んだり並べたりするのに、一ミリものくるいもないように、どうして神経を使うことができるのだろうか。並べた棒のあいだにすぎがあったら、それだけ長い棒と取りかえたり、積みかさねた板の高さがそろわなかったら、それだけ厚い、あるいは、それだけ薄い板と入れかえたり、というような工夫や創意が、どうして働くのだろうか。見ていると、なんだか、ふしぎな気持ちになってくるのだ。はり絵の山下清や、自分の名前もろくに書けなかったと伝えられる将棋の坂田三吉などが

もちゃをこのんで非常に多く買いつめていたが、つき／＼と、こわしたり、池や川のなかへ放りこんで、たちまちのうちに、満足なもの一つも残らなくなっていた。『幸ちゃんを見習わんといかん』『幸ちゃんを手本にしない』

幸吉に精神医学上の重大な欠陥があるのを、まだ、はっきり知らなかった義父と義母は、このように、ふたりの孫にたび／＼教えた。ところが幸吉も、板や棒に熱中しただしてから、せつかくのおもちゃ類をだん／＼粗末にしました。おもちゃ類は、親がたべるものを節約してでも買ってくれる。それを持って遊ぶのは、むしろ奨励される。棒や板はこれに反して、あまり喜ばれない。ぼくの大工仕事に必要なばあいには、このことを言われ、取りかえされる。幸吉には自然、おもちゃ類に比べて板や棒のたぐいは、手に入れるのが困難な、非常に大切で必要なもの、と感ぜられたのだろう。父も母も、大工仕事やせんたくなどはけんめいにやっているものゝおもちゃで遊ぶのは、奨励はしても、自分自身はそれほど熱中しているのではない。こんなこともだん／＼と見抜き、感じ取っていったのかも知れない。友だちがひとりも無く、親だけが人

ぼくたちの話題にあがってくる。四歳という幸吉のおさなさが、前途に無限の可能性を信じさせる。

『そやけど、建築技師になるには、上級の学校へゆかんならん。それまでに義務教育をおえて、それから、試験を受けて……』

会話がこゝまでくると、ぼくたちはしかし、ふた／＼び黙りこんでしまわねばならない。乗物のおもちゃに熱心だったころの幸吉のほうで、まだしもマシなように、ぼくには思えた。単語だけだけれど、いろんな乗物の名前も言えるようになっていた。きげんのよいときは、消防自動車、郊外電車、快速電車など、意外に複雑な名称も口に出して、ぼくたちをはっとさせた。そとへ連れて出て実物を見せたり、実際にそれらに乗せたりするとき、こちらから問いたすと、ハイヤー、オート三輪、トラック、市内電車など、たいていみな答えることができた。ふつうのバスと観光バスの区別もできた。それが木ぎれのたぐいに熱中しただしてから、いくら問うてみても、ほとんど返事をしないようになってきたのだ。遊びに連れてやろうとしても、まえば喜んで、むしろさいそくするほどだったのに、たいていは極端にいやがって、反抗的にあばれた

挨拶

吉本青司

モット ハヤクカラ
ナカマイリ シナケレバ……
イヤ ホントハ トックカラ
ナカマイリ サセテイタダイタノデシタ
ジシント イウモノモナク
ホトンド なるしむダケデ
イキテ イタ キョウデシタ
ボクハ
ダケド ウマレテ イタ ママノ
ハダカヨ アイシ
ヒロビロト シタ ソラノ
ヒカル イシカラ だいびんぐシタ
オサナイ ナツノヒノ ママデ
アリタイノデス
☆
ムクノキノ ハダノイロシテ
ボクノ カワヨ
アフレ ナガレヨ

間関係のすべてであった幸吉はこうしておもちゃを離れ、父や母を見習って、大工仕事から板や棒、せんとくから水遊びと、その興味が移っていったのだろう。トラックとタクシーをどぶのなかへ投げこんだときから、幸吉はやがて、そのほかのおもちゃも、つぎつぎに、どぶのなかへ捨てはじめた。拾いあげて洗っておいでも、じきにまた捨ててしまう。ひと目もたぬうちに、リンゴ箱に一ぱいほどもあったおもちゃは、ほとんど全部姿を消し、わずかに残ったのは、こわれた部分だけのガラクタと、特別大きな木製のトラック一台だけになった。

編輯後記

六月二十一日久しぶりで在阪同人で同人会を開いた。従来編輯は小高根、校正は山根氏、発送は池沢氏が担当してゐたが、池沢氏が身辺多忙となつたので、発送だけは福地氏が代つてゐるためである。第四十二号から右の三名が業務分担をしてゐるので大方の御了承を願ひます。尚、同人には近頃作詩に好調の堀ノ内氏と兄さんの博氏も参加して歓迎した。

七月八日京大野間光辰教授より贈贈と第四十二号所載の拙論に対し御叱正を賜つた。頭原退蔵先生の御病氣は腎臓病であられた由で恐縮した。先生の靈ならびに芳枝未亡人に対し心から御詫言申上げます。

七月九日都立大学学長矢野峰人先生より激励の御贈書を受けた。蓮田善明の悲劇、辻野久憲の悲運ならびに加藤よし子さんの貞潔に対しても、深い関心を寄せていただき、感激した。

き、感激した。

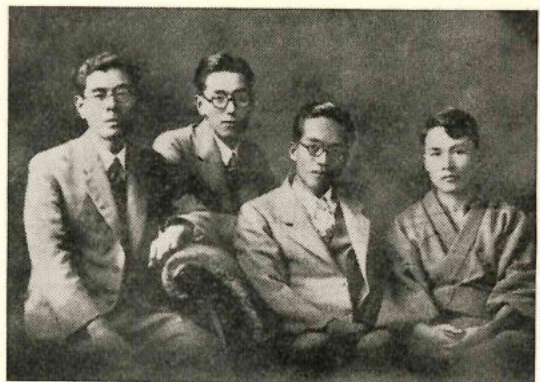
七月十日阪大小島吉雄教授より贈贈の辞を賜つた。このやうに、商業ジャーナリズムよりむしろ学界に於いて、関心をいたゞいてゐることは、何にも増した僕等の喜びである。もともと同人中浅野、田中、森、高橋、西垣諸氏は大学の講壇に立つてゐるのであるから、誌風そのものに近似性があるためかもしれない。どうやら拙誌も往年の「コギト」が保持してゐた学界の関心を呼ぶ雰囲気は到達しかけてゐるやうである。

思ふところがあつて三年半つづけてきた拙稿を「蓮田善明とその死」に切り換へた。伊東の詩魂が辿つた歷程——古今和歌集、ケストネル、リルケ、セザンヌの日本を経て和漢朗詠集に到達し、そこから真の意味で新しい日本現代詩を生むにいたつた。いまきは充分説明しつくしてゐると思ふからである。その後の伊東の凱歌は拙稿「燕」であつた。爾後の作品は、伊東自ら桑原武夫氏宛書簡に書いてゐるが初期の作品の解説なのである。

もはや伊東は不幸であつたとは言へない。心友だつた辻野や蓮田に比して遙かに幸福である。辻野の訳書モオリアツクの「爛者の接吻」は近頃角川文庫で再刊された。いさゝか書を慰むところがあつたであらう。然し、蓮田善明の靈は全く救はれてゐない。誤解と前視に上陸を妨げられて今もなほヨホールパールの夜を彷徨してゐると思はれるからである。

私は蓮田善明と一度も出会つたことがない。「芸芸文化」への原稿依頼で二度ばかり書信の往復があつたばかりである。幸ひ蓮田と親交のあつた広島大栗山理一教授の御教示と支援が期待できるので、伊東との関連に於いて追求してゆきたい。三月下旬久しぶりで米取した田中氏と会談した際、上京二年になつた彼はまたまつた研究が準備できたのである。拙稿の終結に就いて発表される予定なので御期待を願ひたい。

申し上げておくが伊東静雄研究はこれで中止されたわけ



室戸台風直後の会同記念
左から清水文雄・池田勉・栗山理一・蓮田善明諸氏

果樹園

第44号

<p>蓮田善明とその死 小高根 二郎</p> <p>七 夕 堀 口 太 平</p> <p>ブリッティング詩抄 たかはししげおみ</p> <p>あるひととき 美 堂 正 義</p> <p>白 馬 岳 福 地 邦 樹</p>	<p>仏説屈托経 堀ノ内 歴</p> <p>胃 の 腑 田 中 克 己</p> <p>ドライな女 山 根 忠 雄</p> <p>白居易詩抄 森 亮</p> <p>棒 池 沢 茂</p> <p>樹 芳 野 清</p> <p>夏の讃歌 浅 野 晃</p> <p>予 告 吉 本 青 司</p>
--	--

蓮田善明とその死 (一)

小高根 二郎

蓮田善明の文学活動は広島高等師範学校に在学中から始めてゐたらしい。校友会雑誌に小説や評論を発表し、詩人としての名前はすでに生徒間で高かつた由である。第四年生の時には文芸部の代表委員を務めてをり、当時第一年生であつた栗山理一、池田勉両氏がたまたま寮の風呂場で一緒になつた際、「あれが蓮田だ……」と、囁き合つたものさうである。清水文雄氏は当時第二年生であつたのである。

蓮田は高師を卒業すると、たゞちに岐阜中学に赴任し、後に諏訪中学に転動した。その

ではない。時に伊東静雄鑑賞として意義のある詩の解説を書くつもりであるし、これから正規な伊東静雄伝に取り組む予定である。御愛読と御贈贈をいたゞいた諸氏に深甚なる謝意を捧げ、変らぬ御教示を願ひ上げます。

過般、人間性の恢弘を意図して中河与一氏が綜合雑誌「人間専科」を創刊された。いづれも馴れ合ひの商業誌の汎濫の中に刷新の気運を巻き起すものとして期待してゐる。

その第三号に私は「中原中也論を蔵く」と云ふ小文を書いた。「文学界」に三号にわたつて掲載された大岡昇平、篠田一十両氏の大岡氏著の歌「中原中也伝」をめぐつた論争である。もともと人間中原に対して信従も畏敬も感じてなかつたらしい大岡氏の中也小伝も納得ゆかなかつたが、中原中也を全く認めてゐない篠田氏の中也小伝批判も滑稽であつた。それよりさらに滑稽を感じたのは四、五、六月口角泡を飛ばして論争した篠田氏を、大岡氏が同人である「青」が迎へ入れて執筆させてゐることである。裁判官の私も唯然とした。同人雑誌の気位もプロレスか競輪なみになつた。(O)

果樹園 第四十三号 (毎月二一回発行)

昭和三十四年八月一日発行

池田市野町一六八 果樹園社 印刷所 同朋舎 定価三十円

編輯兼 発行人 小高根 二郎

印刷所 同 朋 舎

池田市野町一六八 果樹園社 発行所 果樹園社

定価 三十円

間、広島高師は広島文理科大学に昇格して、清水氏はその第一回の卒業生となり、第二回・第三回と、栗山、池田両氏が続いて文学士になつた。蓮田が中学教師をやめて広島文理大に入学しなほしたのは昭和七年、つまり清水氏が卒業した年だったのである。従つて、高師での最先輩であつた蓮田は、大学では最後輩になるといふ、奇妙な結果になつた。

この蓮田、清水、栗山、池田の四氏が、「芸芸文化」の母胎となつた『国文学試論』第一輯を春陽堂から出したのは昭和八年九月、蓮田がまた大学二年の時であり、彼の論題は「真福寺本古事記書写の研究」だつた。翌九年六月第二輯が出、蓮田は第一輯に続き「古事記の文学史的考察序説」を発表した。

その後、蓮田の提案によつて、『国文学試論批評篇』が計画された。つまり、研究と並んで国文学研究の現状に対する批評を試みようぢやないか……といふのである。そこで前記の四氏の会同が計画された。九月二十一日は土曜。二十三日は日曜。二十四日の月曜は秋季皇霊祭。その二十三、二十四日の連休が会同日に約束された。蓮田は学生として広島にゐる。成城高等学校の教授をしてゐた清水氏は東京。栗山、池田両氏はそれぞれ大阪

府立界今宮中学の教諭として大阪にあった。会同の地は地の利をえてゐる大阪。場所はすでに妻帯してゐた天王寺区国分町は池田氏の家に予定されてゐた。

折から台風季である。パラウ、トラック島の間隙に発生した台風は、沖縄、南大東島の間隙を抜け、奄美大島東から鹿児島南方二百キロの海上を通過、愛媛佐多岬南方を通過して室戸西方数キロの地点に上陸したのは二十一日の午前五時であつた。中心示度九百十二ミリバール。平均風速秒四十五米。室戸岬測候所を開所以来の新記録で驚倒せしめた大暴風雨は、さらに徳島、淡路島を抜き、大阪湾を越えて神戸東方に襲来したのは午前八時であつた。「近畿六府県の惨禍死傷七千を突破」新聞に大見出しで報じられた被害に、二日後に迫つた会同はお流れになる公算が大となつた。

清水氏の西下を阻止するのは東海道線瀬田川鉄橋を転覆した急行七列車であつた。蓮田の上阪を不可能ならしめるのは山陽線の旭川、吉井川、高梁川の氾濫だつた。とりわけ、岡山を貫流する旭川の鉄橋の橋脚一基は傾斜し、西大寺岡山間は復旧のめどがたくなかつた。運は天にゆだねられた。二十二日の午後七時十分東京発の第十三号

七夕

堀口 太平

倭鶏が餌をあさっている。
梅雨ばれの蠅のつよい翅は鳩のようだ。
桃の木の枝を、
屋の風がゆすり、
実は、
だいたい赤くなつた。

兵隊からかえり、
父も母も見送つたあとに、
おそくできた二つになる長女の手をひいて、
この露地の
桃の木のしたにくる。

桃の葉は、
干して行水をつかうと汗疹にたいへん効くぞ
うだ。
今日は七夕だ。

列車から東海道線は開通した。翌朝五時四十分から瀬田川鉄橋が開通する目安がついたからである。清水氏の方はこれで安心だつた。

脂が金いろにもりあがつた幹は、
おもたけ豪華な飾りを吊つて、
白鳥座の星を祀っている。

——あれは汾陽からあるいて三日。

黄河の上流で、
清水河のほとりにある離石というところだ。

土でこねた民家。

葉草を荷つてきた駱駝。

柱時計のひびきもきかなかつたしずかな村だ

倭鶏がはしり、

蠅がとんでいる。

桃の木のかげを、

長女の手をひきながら、

私の駐屯はうっすら埃をかぶり、

七夕や、

木の実にてらされているのがなつかしい。

(一九五九・七・二二)

しかし蓮田の方は絶望だつた。山陽線岡山西大寺間が開通できるのは二十九日以降になる見込みであつたからである。その蓮田が契ひ

ブリッティング詩抄

嵐の前

胡桃の樹がきらきら輝いている 何千枚の葉

という葉がすべて

その葉がひとひら 僕の盃の中におちてくる
空気がしめっている 稲妻と雷がやってくる

うだ

胡桃の葉は小舟のように酒の上をはしる

かすかな雷鳴 あなたの 川の上だ

緑の葉を僕は盃からとりだす

ほろにがい酒はいまいささか胡桃の味がする
ほんの僅かのにがさは なにごとにあつても

よいものだ

友達の言葉のなかにも 愛の接吻のなかにも
されば 酒のなかにも どうしていけないこと
があるう

陶酔

酔えよ わが大いなる ひげこき兄よ
僕のそばに近よりたまえ
みてくれ このグラスを これは
月の光の色をうかべて 火と燃えながら
氷のように冷たい 古い酒なのだ

朝焼け 夕焼けの従兄よ
飲みほせよ 牛のごと飲みたまえ
バター色の うま酒に
君の腹が漬かるまで!

よりかかれよ 大いなる
緋色の兄よ 僕の肩に
よろめき ぐにやぐにやの
若者の頬は 血の氣を失つて

僕は君のマントのひだに
顔をうずむ その赤きひだのなかに
僕は夢みる 古い夢々を
君のたかき膝を枕として

(たかはし しげおみ訳)

めた台風も、四人の会同の契ひと熱情だけは砕きえなかつたからである。足は東へ向いて勝山通の電車停留所までくると、そこにあった児島写真場で記念撮影をした。巻頭に掲げた写真がそれである。四人の右端に蓮田は泰然と坐つてゐる。豊かな毛髪は広い額を半ば隠し、眉貴く両眼はけいけいと輝やいてゐる。通つた鼻柱の下に唇は真一文字に結ばれてゐる。その剛毅な風貌以上に蓮田善明のひととなりを物語つてゐるのは、無造作に着込んでゐるセルの和装である。この軽装で台風直後の阿鼻の困乱をきわめた陸と海を越えてきたのだからである。

蓮田が伊東静雄と初めて出会つたのは、その室戸台風直後の会同の翌々年、つまり、昭和十一年八月二日の堺市七条通は栗山氏宅での会同の折であつた。その記録を清水氏は次のやうに日記に書き残してゐる。

「……難波駅まで亀（註：大阪居住の舎弟）に見送られて、栗山の家に至る。十二時少し前。

蓮田がきてゐる。栗山は学校の蹴球試合を見に行つてゐて留守、やがて帰宅。蓮田は思ったより元気。鼻下に髯を立ててゐるのには驚かされた。『これでないといけな

い。必要に迫られたのだ』とも言つてゐた。栗山の所の光嬢は可愛いさかり。笑顔をもつて一家内を明るくしてゐる。

夕刻、池田が詩人伊東静雄氏を伴つて来る。一同ビールを飲みながら。快談する。伊東氏大いに気焰をあげ、自作の詩や、他人の詩を朗吟して興をそへる。純粹の詩人らしさに打たれる。池田と伊東氏帰る。」

（昭和三十四年三月果樹園三十八号）
清水文雄「詩人と口笛」

当時蓮田は大学を卒業し台中商業に赴任してゐた。夏休を利用してはるばる台湾から走せ参じたわけである。鼻下に髯を蓄へてゐたのは、恐らく、現地人に威厳を示すための、一の植民地風俗だったのであらう。

この会同に伊東は池田氏に伴はれて出席したのである。池田氏は阿倍野から阪和線に乗り金岡で下車すると、大阪刑務所の長々とした高堤を右に見ながら西に行き、方違神社の前で屈曲すると、すぐ大通りの左手に現れる反正天皇御陵の向ふ、小路に建つてゐる二階建二軒長屋に伊東を訪れ、彼を誘ひだしたのである。二人はそこから丘陵地帯を千キロばかり南下し、宏壮な仁徳天皇御陵の側面が東方に眺めやられる栗山氏の家に案内したわけである。かやうに家が近かつたので、栗山氏と伊東の往来はかなり頻繁であつた筈であ

あるひととき

美堂 正義

汽車がゐない歩廊はがらんと淋しい明るさ
父娘が立って話をしてゐたが
小さな娘が手で平泳ぎのしぐさをしながら
父親の周りを廻り始めた
ワンピースの袖が蝶の翅のやうにはばたき
スカートの裾は波のやうに揺れながら
そこらに花を撒いた華やかさで騒めいて
ある
光が燃えるレールの反射が眩しく
風が止んでゐるひとときを
くり返し くり返し楽しさうに眺ねてゐる
熱気に蒸された車中に萎えながら
私は珍らしいものを見るやうな心で
しばらく目を止めてゐた

白馬岳

福地 邦樹

残雪のきらめく尾根を
大きなリユックを背負つて
私達は寡黙に歩んだ
あの真夏の煮えた都会をのがれてきて
私達の奥にとじこめられている
わずかに清らかな部分が
このさらさらと
浸透性の強い紫外線の中で
照らし出されて来るかのようにだ
そして山の習慣というよりも
おのずから誘われる素直さで
すれちがう登山者ごとに
私達は朗らかに挨拶をかわす

る。それなのに、池田氏がわざわざ誘ひだしに立寄つてゐるのは、まだ伊東に会つたことのない蓮田か清水氏の特別の要請があつたのか、それとも、その二人に伊東を紹介する思ひつきが、栗山、池田両氏から急に発案されたためだつたのだらう。

蓮田は、一見……貧寒な体軀にかゝはらず、伊東の顔は異様なコクを含んでゐるのを氣附いたらう。左眉の上と右鼻にルビでも打つたみたい大きなホクロ。峻しい額の下に光つてゐる、まじろぎの稀な鷹の眼。その眼はアルコールが廻るにつけて愛想よく微笑み、針のやうな不精髭を配した厚い唇はものうげに開いて、自作の詩を朗吟したのである。

その朗吟の冒頭の詩は「八月の石にすがりて」だったのである。かく私が推定するゆゑんは、その前日の八月一日に、久しぶりに成つたこの詩を『文芸懇話会』に送つてゐる事実が、酒井ゆり子さん宛書簡で判明してゐるからだ。彼の舌が彫琢したばかりのこの詩は、真ツ先に朗吟の舌に乗るであらうことは生理だからである。

八月の石にすがりて

伊東静雄

八月の石にすがりて
さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。
わが運命を知りしのち
たれかよくこの烈しき
夏の陽光のなかに生きむ。
運命？ さなり、
あゝわれら自ら孤寂なる発光体なり！
白き外部世界なり。
見よや、太陽はかしこに
わづかにおのれがためにこそ
深く、美しき木蔭をつくれ。
われも亦、
雪原に倒れふし、飢ゑにかげりて
青みし狼の目を、
しばし夢みむ。

伊東がシオヴァンニ・セガンチーニの孤独なアルプス風景から発想したこの詩……。灼熱した石にすがりつゝ息絶える蝶。白く燃える太陽。白樺の木蔭。山肌をえぐつてゐる雪原。そこに出没する狼の幻影は、窺高い韻律と共に、聴き手の四人に強烈に印象された

であらう。とりわけ、当時の日本のアルプスともいふべき新高山を持つ台湾在住の蓮田にとっては、この詩が直接台湾に取材されたのではないかと錯覚されるほど、共感を呼ぶ克明な印象をうけたであらう。熱帯から寒帯までの両極を持つ標高三九五〇米の高峻。その風景の中の結晶片岩に、オレンヂに紫褐の椽取りと紋を附けた豪華なワモン蝶が、触角と翅とを慄はしながら息絶えただらう。白陽下に沈思する樟の濃い木蔭。それとは対蹠的な見上げる山嶺の雪溪。生茂る樹梢からはウンゴウ (Felis nebulosa) がこちらを狙ってゐる。褐色の地肌に黒色の椽取りをした雲形班を飾った毛並が葉洩陽に波打ってゐる。日常見聞したこの植民地の危機感、そのまゝ伊東の「八月の石にすがりて」のエキゾチックな危機性に通じたであらうと、私は想像する。蓮田にとっては伊東とこの日の出会が運命的な共感の影を投じた時となったのである。

その翌年、即ち昭和十二年の八月にも蓮田は伊東と出会ふことができた。蓮田は清水、栗山、池田三氏と昨夏に引続き高野山は往生院谷の遍照光院に籠り、斎藤清衛先生の名で出版される中等学校教科書『作文』の編輯をしたが、伊東は客分として十日間招かれたか

らである。

「時に、採用文の選択などについての伊東氏の短い意見は、我々の仕事に重要なヒントを与へた」

(前掲、清水文雄——
詩人と口笛——)

と、清水氏は懐旧してゐるから、昨年の短時間の出会いの場合と違ひ、蓮田は伊東の詩の根柢をなす文学観までも知る機会があったと見ねばならない。暇な時には伊東は小鳥のやうに宿坊の欄干に身をもたせて、鬮咄と口笛を吹き鳴らしてゐた由である。又、三人は仕事が一段落すると、伊東を誘って町に一杯ひっかけにも出掛けたいらしい。栗山氏の次の文章は、その不参の記ではあるが、私に重要なヒントを提供する。

「仲間の者や伊東さんが、これから町に飲みに行かうと誘ってくれたが、変にかたくなになつて返事も重く、それを断つて一人だけ部屋に残つてゐた。しばらくしてから、どやどやと一杯機嫌が皆が帰つてきたが、伊東さんはつかつかと私の側に来て、君のは罰れなき怒りだ、くだらないぞとどなつた。それを聞いて私はいっぺんにかたくなつた。」(昭和二十八年「祖国」七月号、栗山理一)

恐らく、この時なぞ伊東は街の掛茶屋で一杯やりながら、朗吟をやつたことは必定であ

仏説屈托経

堀ノ内 歴

まーか はんにやー はいらーみい：
退屈のやり場
開けてある表から
夜の更ける匂いが している
絶えず 蚊のいないところ
椅子にかけて 足の蚊を足で 叩く
急に 表の路面を人がぞろ／＼来る
近くの映画館が ハネたのだ
さ こちらも 戸を閉める
と 屋内のむせ上がりで 噴き出る汗
遠蛙の間かれる 二階窓の時刻が
待っている筈だ
あと片づけを急いで 声は弾んでいる
なむからたんの とらやーやー…

胃の腑

田中克己

手術は一時半もかかったので僕たちは心配して手術室の外の廊下集つてゐた。そこへもち出されたのが胃の腑の半分であつた。これは僕の胃の腑と、一年間おなじ食物を、高等学校の寄宿舎でつめこんだ。そのあとでは昭和二十年三月大阪から華北の石家荘まで数日間、兵隊用の弁当をともした。もう消化の役目を解放されて、だらしないのびきつてゐるこの半分を、ドクターはピンセットでさし示して説明しようとしたが、穿孔したことだけをいふと、あとでくはしくといつてドアの向ふへひっこんだ。これで僕たちはもうおまへを見ることはなくなつたのだ。そして胃の腑よ、僕に文学を教へてくれたおまへの持主は、つひにおまへを見ることなかつたのだ。僕はしばらく変な気がなほらなかつた。

る。深山の店のもの佻びしい赤ゲットを敷いた床几。少し涼気を感じすぎるビール。客のない閑散な雰囲気。警戒を要しない飲友達。この条件は伊東の朗吟のため準備せられたやうなものだからである。欠席をした栗山氏は伊東の朗吟を聞き飽きてるやうなもんだから気にならない。伊東はこの八月に『日本浪漫派』に発表したばかりの「水中花」を披露したことは間違ひない。

水中花

伊東静雄

水中花と言つて夏の夜店に子供達のために売る品がある。木のうすい／＼削片を細く圧搾してつくつたものだ。そのまゝでは何の変哲もないのだが、一度水中に投ずればそれは赤青紫、色うつくしいさまさまの花の姿にひらいて、哀れに華やいでコップの水のなかなかに凝とじづまつてゐる。都会そだちの人のなかには瓦斯灯に照らされたあの人工の花の印象をわすれずにあるひともあるだらう。

今歳水無月のなどかくは美しき。
軒端を見れば息吹のごとく

萌えいでにける釣しのぶ。

忍ぶべき昔はなくて

何をか吾の嘆きてあらむ

六月の夜と昼のあはひに

万象のこれは自ら光る明るさの時刻。

迷ひ逢はざりし人の面影

一莖の葵の花の前に立て。

堪へがたければわれ空に投げうつ水中花

金魚の影もそこに閃きつ

すべてのものは吾にむかひて

死ねといふ、

わが水無月のなどかくはうつくしき。

この耽美を極めた詩は、恐らくビールに肌寒を感じた蓮田を刺し貫いたであらう。八吾にむかひて死ねといふ、わが水無月の詩句は、そのまゝ蓮田に死ねと囁く八吾が葉月として受けとられたらう。七夕の夜に蘆溝橋に発した発砲事件は、事件としてくすぶりつづけてゐたが、八月九日つひに上海虹橋飛行場ちかくの大山中尉、斎藤海軍一等水兵の暗殺事件に発展し、累卵の危機に直面してゐた。その危機を伝える時の空気の波動は、蓮田にはビールを酌み交す伊東、清水氏、池田氏以上に鋭敏に感知されたからである。と、いふのは、蓮田は予備役陸軍歩兵少尉であり、

伊東は丙種合格、清水氏は第二乙種合格、池田氏は第一乙種合格の補充兵であったからだ。室に引籠ってゐる栗山氏も、伊東と同じ最も安全圏にある丙種合格だ。伊東は朗吟後の昂奮でひとりはいよいよめでただらう。

「みんな見ていなさい！ 僕は栗山をたしなめてやる」

さう……酔へば口癖の台詞を吐きつゝ、掛茶屋を出て奥院に通じる大通をゆたり……ゆたり……帰る一行の先頭に、伊東はせかせかと内輪の足を運んだらう。両側の屋並を越えて亭々と聳えてゐる杉、檜、榎の黒い立像。狭められた夜空に少い星屑を数へたのは蓮田であつたらう。八塘へがたければわれ空に投げうつ水中花。金魚の影もそこに閃きつ。すべつてのものは吾にむかひて死ねといふ。この伊東の詩句が、この時まるで蓮田自身の詩句のやうに、舌にいつしか乗り移つてゐるので気が附いたであらう。

蘆溝橋事件と時を同じくして七夕の夜から始まつてゐた辻野久憲の腸出血。「ポール・クロードル、ジャック・リヴィエール往復書簡集」訳出の夢は、大森は帝国女医専病院の窓から見上げられる星屑のやうに、刻々と遠のきつゝあつた。その辻野の運命を歌つた「水中花」。喘ぎながら尾端をひらめかし虚

空に翻転する金魚。それはまさしく俺のことぢやないか……と、涙を含んだ眼を閉ぢる辻野。いたはるやうに愛撫する自らの掌は、もはや破れた円扇みたいに軽い。その掌は狭められた窓を抜け、星屑が充滿した空を通つて、杉、檜、榎に狭められた高野の窓から、骨太な蓮田の掌にバトンを引継いだのだ。「心友」といふ運命のバトン。

もともと辻野も蓮田も互に一面識あつたわけではない。たゞ伊東を介して偶然つながつてゐるだけである。しかし因縁が全くないかと言へばさうでもない。蓮田が職のために居住してゐる台中。その台中に、辻野もまた憲兵であつた父の赴任に従つて郷里舞鶴から移住し、大正五年、つまり、その日から二十二年の昔、台中尋常小学校に入学してゐたからである。即ち、蓮田は中学教師として、辻野は小学校生徒として、同じ植民地の空気を吸つたことがあつたわけである。

さうした経緯を知るよしもない伊東は、勢ひこんで遍照光院に立戻ると、白鼻緒の雪駄を放恣に玄關に脱ぎ放つや、つかつかと部屋に侵入すると、ごろりと横臥してゐた栗山氏が起き反りざま

「君のは謂れなき怒りだ、くだらないぞ！」と、裂帛の嗟阿を切つてゐたのである。

ドライな女

山根 忠雄

君の美しさは動きやすい
捉へにくい

五条大橋の牛若丸ぢやないが
こちらと思へばまたあちらといふ風に
刻々と変化する

もつとドライになリませう

きつぱりと忘れてしまひませう

忘れてみせます

と君はいふけれども

「恋」の心は

一度流れたすと

水のやうにあふれて行くものだ

それを糸屑かなんぞのやうに

ぶつりと断ち切つてしまふのは

人間の本性に反した

不自然な行為といふものだ

それでは結局浮気ぢやないか？

白居易詩抄 (三十六)

森 亮

鶴

いつ何処で見てもいい物つて
めつたに無いが

鶴はいいな

翼をひろげた
お前の舞ひを
みんながほめる

——鶴はいいな

翼ををさめて
静かに立つた
お前の姿が

——ああ、わたしは一番好きだ

——鶴はいいな

★

亡友元微之

昨夜は君と手をたづさへて遊ぶ夢を見た。
けさ早く起きて手巾で顔を覆うたが涙はとど
まる所を知らない。

漳河の畔に老いてほくはあれから三度やまひ
に臥た。

咸陽の野辺の多年草に八回目の秋の花が咲き
君は地下に埋まって泥がその骨をとかしつづ
ある。

ぼくはと言へばまだ人間界に身を寄せて頭に
雪を積もらせてゐる。

ぼくたちの共通の友人が次々に死んで行つた
が、
黄泉は暗い場所だから君は顔の見分けがつか
たかしら。

註「鶴」の原詩は七言絶句の鶴(三の三四)で、詩人が五十三才頃の作。この訳詩は積案と言つてもいいやうな自由訳になつたことをお断りしておく。「亡友元微之」の原詩は夢微之(四の五七六)で、六十九才の作。「漳河の畔」といふ句は原文では漳浦であるが、それは昔、魏の詩人劉楨が病を養ひ、世を忍んだ所。白居易はその地に居た訳でないが、修辭的虚構としてこの語を借用したのである。「ぼくたちの共通の友人」は原文では阿衡、韓郎とあり、実際は兩人とも元微之の近親のやうである。

棒

池沢 茂

板や棒のたぐいに対する幸吉の収集癖が薄らぎだしたのは、あらたに、粒ミルクやお茶や菓子などのカンのたぐいに対して、はげしい興味を持ちはじめたからであつた。いろいろな棒ぎれや板ぎれをあつめ、タンスのうえなど一定の場所に保管して、そのなかの一本でも一枚でも取ろうとすると、たちまち泣きわめいて反対していた幸吉だったのに、一番いゝ板や棒を取りあげても、もう平気な顔をしている。家に閉じこもり、ひとり黙々として、それらの板や棒を並べたり積んだりしていたのも、いつとなく無くなりだした。それとも、命よりも大事にしていたやうなその板や棒を、自分から、庭の草むらのなかへ放りだしたまゝにしたり、どぶのなかへ投げすてたりした。まるで大水がひいてゆくやうだった。幸吉に取りついていた板や棒は、すこしずつ、だん／＼急に、それから不意に、幸吉からはなれ、どこかへ去つていった。幸吉をつかまえ、ゆさぶつてゐるのは、そのかわりに、カンのたぐいだった。

ところが、山のようにたくさんあつてい

た板や棒のなかで、たゞ一つ、一本の棒が残った。非常な大水は、完全にひいたあとでも、その土地のうえに、なにかの跡をききみつけるにちがいない。すくなくとも、その被害を受けた人のこゝろには、ながい傷あとを残してゆくだろう。一本の棒は、おさない幸吉の精神に、あまりに強く食いついていた板や棒の、一つの傷あとだったのかも知れない。四十センチぐらいの長さの、ラワンのひらたい角材で、すこしわん曲している。ぼくが日曜大工で、ラワン材で調理台をつくったときの残りものだった。二メートル以上の長さがあったが、さきのほうがまがっていたので、とくに安くしてもらったのをおぼえている。必要な長さだけ使って、まがった部分を切りはなすと、いつものように、さっそく幸吉が取って私有物にしていたのだ。といっても、たくさん板や棒の収集物のなかで、取りたてて大切にされていたのではない。それらの板や棒をまっすぐに並べたり積みかさねたりして遊ぶのに、まがっているそのラワンの棒は、ぐあいがあるいから、むしろ疎外されがちだった。私有物の一つとして、タンスのうえなど一定の場所に、そのほかの、ほとんど使用されない板や棒といっしょに、置かれていたにすぎない。それがカンのたぐいに関心が移

樹

芳野 清

夏の庭には既に濃い疲れが宿ってゐる
花や実を落した樹は
子を生み終つた中年女のやうに
しどけなく葉の繁るに任せてゐる
深い緑を喪取るのは
凋落の黝い色だ
望みを托するには非情すぎる空の下で
重い葉を垂らしてゐる
振り落すには早い季節の旺りに
それは堪えてゐる
煩惱の重い鎖だ
風の死んだ昼下がりに

樹は物うい同化作用を営みながら
夢見てゐる

生活の苦しみにはあき／＼した今
何を夢見ることがあらう

しかし 樹は夢見てゐる

葉のすべてを振り落し

さばさばと枝も幹も露はになる

あの季節が来ることを

その時こそ

樹は細い祈りの枝を天にさしのべ

神と語ることが出来るであらう

そして

神はやさしくマナを降らすであらう

雪のやうに白いマナを

ん気が強くなつて、人に負けないような気になるんやないかしら』

『なるほど。……そこまで自意識があるかどうか知らんけど、とにかく、そう言え、あの棒は、刀とおんなじ形してるなあ。うまいぐあいにソリがあつて、まるで手ごろな小太刀やなあ』

妻の解釈にたいして、ぼくは一応、うなず

き、なっとくできた気もした。が、それだけにしては、一本の棒に対する幸吉の執着は、あまりに烈しく、しっこすぎるようであった。その棒は、さきはとがっていないけれど、

夏の讃歌

浅野 晃

天文学者は望遠鏡の焦点をあはせる
探偵はアリバイの裏をひっくり返す
どちらも真実をつきとめようと
純粋にさうやってゐるうちに
世界が亡びるのをみないものでもない

世界が火だるまになつたとして
君はそのまま目をつむるか
それともとび出して
声をかぎり救ひを求めるか
けれどもそれはその時だ

たまらなくむし暑い今日の日に
シャイロック・ホームズを読むのはよい
ファールブルを読むとおなじに

長さといふ、すこしわん曲しているかげんといふ、にぎりぐあいいい、そのまゝで、いかにも小太刀と似た感じがした。幸吉とおなじ年ごろの子供たちは、おもてへ出て、もうふしぎに勇氣が湧いてくる
精一杯生きたらふことはない

子供がそろそろ大きくなると

君は勇敢に人生の荒浪にはうり出す

子供は泳ぐ

だいじょうぶ泳ぐ

何としてもこれは痛快な事実だ

人一倍はたらいで

早く逝つたらしいものが待ってゐる

あそこへ行かう

愛執と嫌悪と貪欲といふ

三人の魔女をふりきって

山また山

雲は悠々

風はじつに爽快にすぎ

このはてしない大地曠原に

ありとある草の花がいきいきと。

さかんに、チャンバラごっこなどしている。

しかし、カタコトしか言えず、ひとりの友だちも持っていない幸吉には、そんな遊びの仲間入りなど思いもよらない。「刀」という概念さえ、おぼろげにでも持っているかどうか、あやふやだった。映画など見ようとしないうし、絵本も、いろ／＼買いたたいても、乗物のたぐいだけに、理解と興味を示すにすぎない。

むかしチョンマゲをゆっていた時代に、刀というものを持って切つたり切られたりしたとなど、想像もできるはずはなかった。それなのに幸吉は、家にいるときはもちろん、ぼくや妻に連れられて散歩や買物に出かけるときでも、その小太刀みたいな一本の棒を、どうしても手ばなそうとしないのだ。刀のように構えたりはしない。じつと片手でにぎりしめ、ぶらさげているにすぎないけれど、ふとぼくや妻から離れたときなど、あわてて駆けだそうとする拍子に、その棒は、手といっしょに、はげしく動かされたり、振りまわされたりする。その場所が店さきだと、ショーウィンドーのガラスに当るばあいもある。人ごみのなかだと、しば／＼、見ず知らずの人に当る。相手がおとなだと、腰や肩ぐらゐを打つてすむものゝ、おさない子供のばあいには運わるく、頭や顔をなぐりつけてしまったたり

予告

吉本青司

挨拶という詩に
ボクノ カワヨ
アフレ ナガレヨ
と書いたら
台風が来て
ほんとに仁淀川を氾濫させ
水田はヘクタールが冠水し
中河原に
水があふれた
そして
今成の人々は
近くの丘に避難した
ぼくはちよっと
こころがとがめた

編輯後記

伊東論から突然蓮田論に移行して反響を心配してゐたが、それは杞憂にすぎなかつた。伊東と同郷の国文学者川副国基、詩人蒲池歌一諸氏がさへが、改めて知った蓮田の死に同情し、激励の言葉をくださった。
三島由紀夫氏からも感佩した由のたよりを下書き、蓮田の死は謎ではなく彼の思想の当然の帰結であつたらうと書かれてあつた。然し、敗戦に直面して、この当然の帰結の方が希有に属したのである。蓮田の死ほど敗戦日本を象徴してゐる悲劇はない。爾後の御支援をお願いする。
蓮田の同志であつた広島清水文雄、成城大栗山理一、池田勉諸氏、未亡人蓮田敏子さんからも数々の御支援と教示を蒙つた。その教示によつて前号に次の誤謬があつたので訂正させていた。
蓮田は医家の出であると言つたが、それは敏子さんの方であつた。師井医院の出である。蓮田は真宗金蓮寺蓮田慕善氏の三男だつた。敏子さんからのたよりに蓮田は秋の象徴の花をもっとも好尚したとあつた。

果樹園 第四十四号(毎月一回発行)

昭和三十四年九月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人
京都市下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園四十四号 昭和三十四年九月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園四十五号 昭和三十四年十月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第45号

蓮田善明とその死
招 待
白居易詩抄
小高根 二郎
田 中 克 己
吉 本 青 司
森 亮

来 信 堀ノ内 歴
船 路 浅野 晃
朝の香り 服部三樹子
秋 来ぬと 美堂正義
夏から秋へ 山根忠雄
下 宿 福地邦樹
棒でたまく 池沢 茂
後 記

蓮田善明とその死(三)

小高根 二郎

蓮田が「八月の石にすがりて」「水中花」を通して、伊東を知る機縁とつた昭和十一年、十二年と続いた高野夏行。その滞在中に、台中は村上町なる敏子夫人と長男晶一君にだされた書簡が十一通残つてゐる。その間たゞ一年にすぎないが、蓮田の心情と時潮の動きとを、よく物語つてゐる。

★昭和十一年書簡

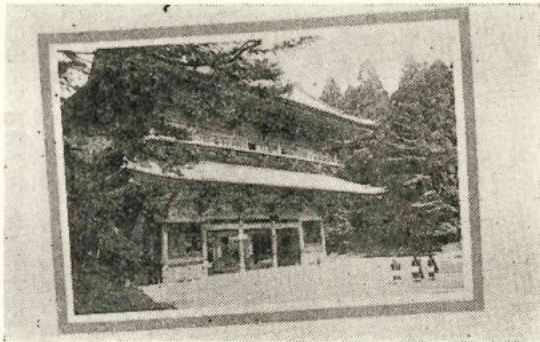
八月六日和歌山興高野山瀧照光院より台中市村上町八ノ一蓮田敏子さん宛絵はがき一高野山全景
「こゝの精進料理に感心してゐる。」

来年は一緒に来てほしい。来年もこゝで何か仕事をやることにしてゐる。蚊もあない。

植木(註・蓮田の郷)の方へは、僕のことば書かないで、便りをしておいてくれ。病氣はどんなか? オフロデアタマヨアライナサイ」

八月七日、発信宛名前掲。絵はがき一高野山別格本山瀧照光院上段の間、狩野榮川筆
「手紙、写真落手。がっしりと撮れてゐる。池田も来た。庭さきの萩の花がいゝ。晶一ノシヤシン、ヨクウツツテキル、大キクナツクト、イケダサンガホメテクダサツタヨ。」

八月十三日、発信宛名前掲。絵はがき一高野山大門
「〇十二日なれば、心そゞろなり。
〇ほんとに肥えてきた。
〇十七日迄は山にゐる。
〇下界が夏であることも忘れた。魚や肉を食はなければ生きて行けないといふことも忘れた。ト云ふやうなトテモ清浄生活だ。」



高野山大門の絵はがき
昭和十一年八月十三日蓮田から敏子夫人宛

○途中で大阪へ出るなども大儀でそんな気も起らぬ。盆踊でもあつたら踊らうといつてゐる。

トウチャンハ、モウ、十バカリネタラ、タイチュウニ、カエツテルヨ」

★昭和十二年書簡

七月二十七日、基隆より台中市村上町八ノ一
蓮田敏子さん宛はがき

「午前八時着。九時乗船。新装の富士丸の乗心持、誠に上々、天気も極めて清朗、波もしづかなり。去年のやうにうつかり、物を忘れたりはないから御安心下されたし。十二時出帆の筈。

ショウチャン。トウチャンハ、イマ、キイルンノオフネノナカニキマス。フジマルトイフオフネデス。ショウチャンモ、オホキクナツタラ、ヒトリデ、タクサンリヨコウナサイ。」

八月二日、瀨照光院より台中市村上町八ノ一
蓮田敏子さん宛はがき

「昨夕大阪を立ち、九時すぎこの寺についた。なつかしい。雨後の山上は星の光さへ眩しいくらい。帽子のつばもつめたく冷えた。同行は栗山、池田、清水、星野、それに詩人の伊東氏。先生（註・斎藤清衛博士）は

四五日中に来られるらしい。多胡順さんはいつ来られるかはつきりしない。大山さんや、後藤貞夫君も追々来るとのこと。

大阪での出兵について、台湾では見られない熱誠ぶりだ。どん／＼出て行く。正に氣勢天をつくが如しである。大阪では池田の家（住吉区小阪町四ノ八）に二泊。栗

山の家で一度夕飯をくった。服地は池田の奥さんにたのんでおいた。栗山の家あての電報、どうもすまなかつた。今年はやからうなどと考へて、心配かけた。これで忘れものが二つ。一つは船中風呂から帰ったらパンツを忘れてゐたこと……。」

註・星野……星野敬一氏。京都星野書店主。

多胡順氏……奈良女高師出身。広島女学院赴任当時

に斎藤清衛博士に師事。当時神戸女学院教諭。

大山さん……大山澄太氏。広島通信員、「通友」

編輯者。

後藤貞夫氏……広島文理大昭和十七年卒。斎藤門。

八月四日、発信宛名前掲、はがき

「高野山らしい気分、やつと落ちついた食事も去年ほどめづらしくはないが、野菜料理で軽く三杯ほどたべたあと、腹の中も軽く、気もちよし。冷水摩擦日に三度やる。健康はよいから安心して下さい。晶一や太二に毎日くたびれてゐることだ

猫

田中克己

僕は年よった。その証拠に前ほど怒らなくなった。昔きらひだった猫やそのほか倚つて来るものが好きになった。いまに倚りかかることだらう。ところで猫といへば、うちの末っ子はいつも猫を寄せて来る。大阪では去りぎはに三匹の猫の始末に困ったが、東京でも部屋借りのことをわきまへず、また二匹拾つて来て、その他にまた一匹、それが先日から下痢をし出す。その中にゐなくなる。僕はそれが悲しいのだ。倚つて来たものがゐなくなつたからだ。末っ子はそれに平気である。また拾つて来るわ、とでもいふだらう。僕はまた来るものよりも、いままでゐたものが忘れられない。保守派といはれるわけだ。もつとも僕はぜつたい原水爆賛成ではない。これだけは天地神明にかけていふ。なんとこの発言の古風なこと（傍白）。

招待

吉本青司

無花果は実によく

わたし達のところを写し

立秋に

果液の醸造をはじめ

そして空の絹わたといっしよに

つむの中へ

全宇宙を擁する

枝々は

たくみに組みあい

棚をつくり

丸顔の児童を招待する

こうかつな蟻は

人知れず幹をつたって

果液を盗むが

児童は平気で

蟻もいっしよに食べてしまふ

老人がいう

八蟻を食べたら健脚になるV

らうね。大阪の二人の家でも子供の相手が

仲々らしい。こちらでも頬べたの赤い人を見ると美しいが仲々それが見当らない。子供のほかは、女の人などは所謂お化粧ですつかり血色をかくしてゐる。白粉がとれると白粉やけをしてゐるといふ工合だ。」

八月八日、瀨照光院より蓮田晶一君宛はがき

「トウチャンガ、キナクテモ、晶チャンハコワイコトナンカ、ナイデセウネ。ツヨクナラナケレバナリマセンヨ。」

サイトウセンセイ、ガ、オイデニナリマシタ。晶チャンモ、大キクナツテ、シッカリ、オベンキヤウヲシテキルデセウネ、トオタヅネニナリマシタ。マイニチ、アメガフリマス。 父チャン」

八月十日、発信宛名前掲、はがき

「手紙落手、ドウモスマン。晶一の怪我にはほんとにひとりごまかつたことだらう。幸ひ針が入つてゐなくてよかつた。

植木からの手紙には『台湾では生活を守るのが第一で、支那へ出征することはないやうである。用意はしてゐる。時節柄いろいろ用事が多くて学校に出でゐることが多い』とでも返事を出しておいてもらひた

い。」

八月十二日発信宛名前掲、はがき

「仕事は今絶頂である。去年よりうまくすゝんでゐる。今日は十二日である。新竹には行ったか。明日先生はお帰りになる。来年は夏期大学をやる手筈ができた。栗山が風邪をひき、清水が腹をこはしたりしたが、すぐよくなつた。僕と池田が元氣である。毎日二回三回の冷水マサツをつゞけてゐる。」

八月十五日、発信宛名前掲、はがき

「やゝ仕事に疲労をかんじてきた。帰つてゆつくりあそびたくなる。しかし、気の合つた連中と一つの仕事をしてゐるので、頭の爽やかなことは何ともいへぬ愉快さである。先生はお帰りになつた。来年の夏までの仕事。

一、「作文」の完成

作文教育パンフレットの刊行

一、試験第五輯 今年中

試験（雑誌型）三月

一、試験叢書トシテ一冊ノ単行本五六月迄

一、夏期大学 八月高野山にて

これからの一年で、教育会、学界を震動さ

せる。」

八月十七日、発信宛名前掲、はがき

「みんな元気かしら。帰る日が近づいた。もう十日もない。昨日池田君の奥さんから手紙で、服地のことを台湾にきいてやってゐるがまた返事が来ないから、間に合はないことがないやうにとこちらへも見本を送ってきた。そこで皆でえらんでくれたのを買つてもらふやう返事しておいた。

土産は十分買はないが、早くかへつて話したい土産話が多い。毎日睡眠不足で帰るまでずっとさうだらう。帰ったらゆっくりやすみたい。内地からのたよりはこれでおしまひになるかもしれぬ。明後日十九日は下山。同夜大阪を立ち、二十日午後植木。二十二日植木をたち、戸畑（註：次兄道明氏在住）、二十三日乗船。」

これらの書簡を味にするには蓮田の家庭環境を知らねばならない。

蓮田は五人きょうだいの末っ子。父慈善氏五十三。母ふじさん三十四才の時の子である。他に長兄為明氏、次兄道明氏、長姉きくさん、次姉文子さんがあった。両度の高野行を植木の両親に秘してゐるのは、九十になん

白居易詩抄（二十七）

森 亮

早く来た夏型天候の日に

夏日和はうち続く日照りに輪をかけ、のつと張り出した白く光る雲はひっ込みさうもない。

籬のあたりがほかほか暖かく飢ゑた雀がうるちよろしてゐる。

池に水涵れて飲む物のない鴨は飛び去った。

頭巾を脱いで額をさらけ出しても頭がなんとなく重い。

着物の裾をからげてもからだは汗ばむ。

何といふことだらう。選りに選つてこんな日に

左遷された人たちは南方炎暑の任地に向ふのだ

なんとする老父、七十になんとし、しかも、眼の痛疾をもつてゐる老母が、年寄りっ子への愛憐から、夏休には孫達をつれて帰郷するやう……特に要請があったからだらう。

つ召集令状が台中にくるやもはかりがたいので、またまた留居を強ひられたのであらう。この苦勞多い愛妻のために蓮田は服地の土産を約束したわけである。

そして単線電車と県道は寸断せられ山峡は気の遠くなる孤立の中にあつたが、私ら二人には不思議な力が湧いてひどい欠食に元氣によかつた

幾日も、二人は馴染み少ない村人らと遅々たる県道修復作業に加わつて行つた。今、友の手紙を妻と奪り合つて読み「あの時の儘だ、まるで繰り返した……」

私らが人生の出発を、敗戦失職と孤立無援の中で送つたのは、良かった日日が互にかばい合う為にのみ在つた十五年後の今も、それは変つていない友には、町長をもしているその父が彼の毎年数日の帰郷を待っているのだと云う逃亡の私らには、戻るに家も失せている故郷のいま満身創傷の報に、古い愛着が生なましくせられるもの如く、私らは暫く、昂心をしずめかねてゐる

一九五九・九・一、

谷川の魚

海の下底がでんぐり返つて桑畑にならうといふ時の勢ひであるから、

風は波を煽つて大海原を沸きに沸かせる。

鯨と蛟が呑まう、嘯らうの大海争ひに海水は

ひと色の朱に染まる。

深山峡の流れに遊ぶ魚はいかにも楽しくてなにも承知してゐない。

註 「早く来た夏型天候の日に」の原詩は早蕪（四の六〇三）で、詩人が七十才の作。最後の行は楊・李二大臣がそれぞれ潮州、韶州の刺史に落されて南方に赴いたことを指してゐる。楊嗣復は白居易の姻戚であつたし、李玘も彼の友人であつた。「谷川の魚」の原詩は瀾中魚（四の五九三）で、これも同じ年の作らしい。時世を諷したエピソードで、数年前（八三五年）の甘露の変を指してゐると言ふ説もある。

蓮田の長男晶一君は昭和五年二月生れだから満六歳。次男太二君は昭和十一年一月生れだから満七ヶ月。乳呑児を抱へてゐる敏子さんは同行も大変だから、第一次は留守を強ひ

又、蓮田に遺失癖があつた点は興味がある。第一次、第二次共に敏子さんに予め注意されながら、その習癖を繰返したのだ。特に船中の風呂にパンツを忘れたのは秀逸である。一念……国学復興の悲願に凝つて、爾余の一切は枝葉にすぎなかつたからだ。この放胆な真質も伊東に似てゐる。伊東はときに黒板に誤字を書くことがあつて、そのうかつさを発見した生徒がゲラゲラと嘲笑すると、枝葉は問題ではない！ 問題なのは根幹なのである……と、かへつて生徒をたしなめたほど放胆だつたからである。

私が最も興味を感じたのは、第二次第二信に出てくる——蓮田が入高第一歩に感じた、雨後の山上の星の眩ゆさと帽子のツバの冷さである。先に、私は伊東の心友としてのパトンを辻野から蓮田に引継いだ場面の空想を書いたが、そのパトン・タッチはこの瞬間であつたかもしれない。又、伊東が一緒に呑みにゆかなかつた栗山氏に咬向を切つた場面があつたが、酒の好きな栗山氏が不参したのは、第六信にてでくる栗山氏の風邪のためだつたのであらう。

蓮田は書簡の末尾で、服地の他に土産話の多いことを伝へてゐる。久しぶりに再咳に接した恩師斎藤清衛博士や同志清水、栗山、池

来信

堀の内 歴

東京にいる友から 珍らしく封書の来信言葉遣いが敬語に替わっている

八月盆に帰郷した甲州身延の在で

台風が彼を半月も閉じ籠めた とある

「あいつ 石ころに なつてたな……」

つとめて平静に云う
昔、身延の中学で彼と机を並べた私が
出離の都会で妻を迎えるや、疎開にと
帰郷したその日から 三日目で終戦
すく九月三日には、大きい台風が
私ら新婚の杉皮茸山小屋を、夜じゆう
押し潰しそうにした、翌朝視界の光景は
無惨に一変していたのだ

まず富士川と支流各河川の決潰
至る処の崖崩れが、土砂の下へ家と人を
嘘のように呑み取つていた

田三氏の消息と共に、朗吟によって詩を彫琢する風変わりな詩人伊東静雄の面影も、土産話の一つに必ずつけ加へられたことだらう。「水中花」の哀切を極めた風韻。それも歌ふやうに語られたに相違ない。

伊東はこの第二次高野夏行の別れを、次のやうに歌つてゐる。

高野日記より

伊東 静雄

八月二十三日友を大門のほとりに送る
その道よ朝ごとの露にしめれり
とだえつつ山かげに鳴くはかなかな
つとに來し高野の秋の
土産ものすすむる店に
並べしはされど春の鶯笛
青塗りの竹の小ぶえなり
ともに店頭にたち
こころみる單調のその音
ゆくりなく二人が笛の
共鳴のかなしからずや
見はるかす木の園
雲移る檜原杉山
家待つ汝が愛しき兒に
えらぶらむ同じその笛

船路

浅野 晃

天体を測つておのれの位地を見出し
海図によって危険な暗礁を避けながら
船はゆく
目ざすは水と天との連なるところ
それは進むにしたがつてたえずあらはれ
はてしらぬ船路へとわが船をいざなふ
時にみどり濃い山をみとめて
波しづかな岸に船を寄せ わたしらは
その港に妻子を見てよろこぶ
別れはいつも辛い しばしは岸に沿うて
ゆくが

やがてみよしは沖をさし
かくてまた水ばかりの船路である
日をよみ 月をよみ 年をよみ
あまたたび岸に寄り 岸をはなれ
わがいとし子を遠くかしこの岸に残し
この友のなきがらをしづかに底に沈めつ
つ
嵐の夜には索具にわれと身を縛し
朝ともなればなつかしい旋律を口づさみ
つひには岸を見失ひ
海図をも取りはづし ただ汐の流れると
ころ
わたしらはいつもみよしに立って
あたらしく上る星に胸おどらせる
目ざすは水と天との連なるところ
はてしらぬ はてしらぬ わが船路

この詩によると伊東が会同の友を送つたのは八月二十三日である。先の蓮田書簡では下

は、伊東の酒井ゆり子さん宛書簡に、伊東が妹りつさんを帯同して滞高した事実が書いてあるからである。或ひはりつさんは途中で呼び寄せられたのかも知れない。その四日間はずれだけ、伊東はりつさんと高野の秋に残つたのだらう。つまり、伊東は詩に二十三日としてゐるのは、自分の高野下山を記念する意味があったのかも知れない。

朝の香り

服部 三樹子

齒磨粉の朝のかをりのうらうれし安けく
長く眠り足りたり
友が家の狭き流しの下にみし足ながき虫
よ秋はじまりぬ
颱風のけはひ過ぎ去りし夜空より月の雫
はまこと降るなり
スカートに泥のはねしをいたはれる人に
雨夜の茶を滴らす
なつかしき昔のごとく門見えて雨の上り
し夕靄の木々
少女女子の日より安けきこゝろかな夜の稲

この詩で見送られてゐる友は、大阪在住の栗山、池田両氏ではなく、東京に帰る清水氏か、台湾に帰る蓮田と見るのが至当である。蓮田が前年の夏行で敏子さんに送つた絵葉書は「高野全景」、宿坊であった「遍照光院」に次いで、「大門」が選ばれてゐる。この事実は、まだ高野を知らぬ敏子さんに、その象徴としての風物を知らせる意味があったのだ
光りたまゆらの風
母のごと日々の細かき注意のみかゝれし
文を掌に持ちて眠る
一つ敷に貧しき主と棲む日々
に思ひ限り
て去りし我が歌
夏の風吹けば涼しと怠りて歌よ汝さへ忘
れ眠りき
人みなのもだしも眠る静けさに西の窓より
り入る暁の風
あけ方の風清らなる窓明けて神招くほど
の独り寝を経つ
今日と明日きのふも変ることなきを明日
の日ぐれの風の待たれぬ
醒めてつと枕に足を置きながら爪を剪り
たる夏の一朝
裏道のものゝいくらも長からぬ木陰ゆく
とき共に黙しぬ

山予定は十九日。そこに四日間の開きがある。遙々と台湾まで帰らねばならぬ蓮田は、或ひは先発をしたのだらうか？ 栗山氏の記憶によると下山は一緒だった由である。この栗山氏の記憶と、蓮田の予定から、私は下山は十九日であったと推定する。見送つたのは詩の通り伊東一人だ。かく私が推理するゆゑん

七月二十六日台中出発から下山する八月十九日までの二十五日間に、上海事変は勃発し、張治中揮下の中国軍十萬は陸戦隊、邦人密集地区虹橋方面を包囲して激戦となった。下山の十九日にはまだ陸軍部隊は派遣されてゐなかつた。応急の支援は上海から最も距離にある熊本師団が想定されるので、蓮田はいづれ遠からぬ召集の運命を予想して、思ひ出のよすがに旧路を選んだのであらう。

詩によれば大門の近くの土産店で蓮田は伊東と仲よく竹製の鳩笛を買つたのである。蓮田田晶一君は満七才。太二君は満一年七ヶ月。伊東のまきさんは太二君と同じ満一年と七ヶ月。いづれへも恰好な玩具である。蓮田がまづ鳩笛を手を取つた。ほう……、ほう……、ほう……、ほう……。その試吹する木訥な音色に、伊東も帰りをまつまきさんへの土産を思ひつたのだ。ほう……、ほう……。ほう……、ほう……。秋早い高野の朝の涼気に

共鳴するその音色に、伊東は高野滞在で感じた蓮田との気質的な近似性と文学的な共鳴とを想起したのだ。三人を見送る伊東。大門両翼に佇む大仏師運長作の仁王像も、二百里の陸海を越えて帰らねばならぬ蓮田をつつがなかれと見送ったろう。檜原杉山の山波を越えるのはしい畿内の風光を、見納めになるかも知れぬ……と、蓮田はしかと瞳孔に捕へただらう。蓮田は八月十日附敏子さん宛書簡で「台湾では生活を守るのが第一で、支那へ出征することはないやうである。用意はしてある。時節柄いろいろ用事が多くて学校に出てあることが多い」と、あたかも蓮田が台中にゐるかのごとく、植木なる老父母にカモフラージュの手紙を書かせてみた。しかるに、八月十七日附書簡では、植木に老父母を訪ね、戸畑に次兄を問ふやうに飄意してゐる。蓮田が、容易ならぬ時潮と運命とを予感した証拠である。その予感のやうに、蓮田が植木、戸畑を訪ひ、二十三日門司で乗船した払腕には、わが陸軍部隊は初めて上海の外港呉淞に敵前上陸を敢行して、事変はいつか戦争に変貌してゐたのである。

☆ ☆ ☆

棒でたゝく

池沢 茂

ひとりの友たちもなく、家にばかり閉じこもっている幸吉は、とき／＼、ふいに、はしやぎだして、家のなかを走りまわった。きや／＼と、うれしそうに笑い声を立てて、とんだり、はねたり、体をくねらせたりしながら、せまい家のなかで、ぐる／＼まわったり、はしからはしまで、なんべんとなく、行ったり来たりするのだ。相手はだれもない。理由もわからない。かれをそんなに喜ばせる動機が、ぼくたちの目には見えないところに、なにかあったのか。そういう思い出がふいによみがえってきたのか。それとも、発育ざかりでありながら家にばかり閉じこもっている幼児の肉体のなかに、活動を求める衝動が、本能的にわきたってくるのか。走っているうちに、ますます愉快になってゆくらしかった。笑い声のあいまに、とき／＼、わけのわからないことを叫んだり『よい』などと掛け声を入れたりする。

ところが、そんなとき、だれかが相手になつてやるとかえつて妙に、だめになつてしまふ。いっしょに遊んでやろうとして、ならん

秋来ぬと

美堂 正義

娘が山柿一枝を持って帰つて来た
八月の末といふのに熟した柿三個
艶やかな葉の間に見える
蒸し暑い熱気に苦しめられながら
季節の移り変りは肌では知られぬが
植物は敏感にその時を告げてゐる
日照り続きの晩夏の日の光り
午さがりの林で鳴く法師蟬
崖に生ひ茂つた雑木に混つた
枝を抜けてゐた山柿の
果実は目立たないやうに羞らつてゐただらうが

いまは机の上で静かな姿を保つてゐる
ふと仰ぐ山際は青く澄み
空に一刷毛の白い雲が浮んでゐる
間もなく芒も白い手を伸べるだらう
心にかすかな囁りはあるが
青絹の秋を待ち侘びる私に
山柿は燈のやうに鮮かに色芽えてゐる

夏から秋へ

Die große Stille des Herbstes—Rilke

山根 忠 雄

空いちめん

雲は夏の強烈な光を放つてゐるが
ところどころ

もう秋の爽やかなうす雲が流れてゐた

夏から秋へ——

ただ壮大なものか
しづかに傾いてゐた

かたはらの草むらゝを風の動かして

……僕はさきほど

本屋の店頭で覗いた

詩人リルケのもの静かな偉大な姿を

しだいに思ひ浮べてゐた……

かなわん

妻は声をあらげて叱り、棒を取りあげようとした。幸吉はびっくりし、棒を取られまいとして逃げた。が、じきにもどつてくると、いままでの完全なガラスが不意になくなつて穴のあいた障子や、たゞみのうえに散乱している破片などを、ふしぎそうに、しげ／＼と見つめた。

幼児はたいいてい、ある時期に、茶わんやコップなどを投げて、わざと割つてみるという。おもちゃはもろろん時計やラジオなどの機械まで、わざ／＼こわして、なかを調べてみる場合もある。そういう知能の発育段階が、おくれせながら、幸吉にも、やってきたのかもしれない。棒が当ると大きな音をたててガラスの割れるという現象が、幸吉には、ふしぎで、おもしろくて、たまらないらしかった。『ボウガアタルト、ガラスがワレルナア。ボウガアタルト、ガラスがワレルナア』

幸吉はくりかえし、ひとりごとを言った。ぼくと妻は顔を見合わせ、だん／＼と笑顔になつた。今の今まで、舌打ちし、顔をしかめていたふたりだったのに、意外に複雑なことばが口に出せたのを聞いて、うれしいほうが大きくなつてきたのだ。それに幸吉のことばは、叱られたので反省し、いけない行為だつ

たと、親に復唱し、自分に言いきかせているように聞こえる。

『わかったや。もう、しいなや。こんどだけはいへど、これからはしたらあかんよ』
叱ったぶんを取りかえそうして、妻はやさしい声になり、幸吉の頭をなでた。

ところが幸吉は反省などしたのではなかった。それだけの能力は、たぶんまだ、そなわってはいないだろう。そんなことよりも、棒で打つとガラスが割れるという発見のほうに、かれの興味はひかれたにちがいない。それまでは、なんとなく手ばなしにくく、無性に執着して持っていただけの棒に、このときあたりらしい意味が生じてきたのだ。幸吉はこの棒を使って、ガラスをはじめ、いろんなものを、たぐいしてみるようになった。たぐく強弱と対象によって、さまざまな音が生じる。ものによって、くぼんだり、割れたり、こわれたりする。なにげなく手にしていた棒の、思いがけない威力に、幸吉はおどろき、うれしくなり、ます／＼夢中になった。はじめは単細胞の原生動物から、魚類や獣類などの、無数の段階を経過して誕生し、成育してくるの人間だとしたら、幸吉はこのとき、太古の原人の段階にいたのかも知れない。障子のガラスも、窓のガラスも、五枚、六枚と割ら

れていた。コップや茶わんや皿なども、つぎ／＼に、たぐき割られた。室内の壁は棒の

さきでこぼかれて、でこぼこの穴だらけになった。幸吉はこのごろ、粉ミルク、お茶、菓子、の容器など、家のなかのカンというカンを収集し私有物にしていたが、そのカンも、保管の場所から出してきて、棒でたぐいしてみるようになった。けた／＼美しい金属音の鳴りひびくのが、はじめは、おもしろいらしかった。とき／＼手をゆるめて、そつとたぐき、低い音を出して、しばらく、ふしぎそうに耳をかたむけていたりする。それから、急にあわたとしく、にぎやかにたぐきつづける。きや／＼と、おかしそうに笑いこぼる。

そのうちにカンは、へこんだり、こわれたりする。すると幸吉は『カンがこわれたア！カンがこわれたア！』と何十べんでも繰返してわめき、地たんだをふみつづける。パンチや金づちなど出してきて、なんとかなおしてやるまでは、どうしても静かになろうとしない。ところが、その幸吉が、いつからか、みずからカンを破壊することに、よろこびをいだきはじめてののだ。これまでは大切に保管して、だれかがそのなかの一つでも取ろうとすると、たちまち泣きわめいて反対していた幸吉だったのに、その大切なカンをつぎ／＼に

棒でたぐいして、だめにしてしまう。音のほうは、もう、問題でないらしかった。あきらかに、はじめからこわす目的でカンを打つのだ。そうして、へこませたり、こわしたりできると『やーい』と歓声のような掛け声をあげながら、そのカンをどぶや裏庭の草むらなどへ投げこんで二度とかえりみようとしな

どうして正反対の方向へ心が動いていったのか、その動機はわからない。カンがへこんだり、こわれたりするの、不意におもしろくなってきたようだった。異様に大切にしていただけ、付きものがおちたとなると、一層つまらないものになったのかもしれない。カンの収集癖がやんだのは、とにかく、このときだった。そして、このことは、お茶、菓子、さとう、ノリなど、いろんなカンの容器を取りあげられて困っていたほくたちに、一つの希望を持たせた。ふつうの子供と違った異様な性癖も、なにかの拍子に、自然と取れてしまふ時機がくる、ということだった。このあと幸吉はカンのかわりに、いろんな葉、ソース、しょう油、こしょう、ベンジンなど、ビンというビンを集集しだしたから、結局おなじようなことになったもの、そのうちにやまるだろうと、ほくたちは困りながらも寛大に、その成行きを見守っていた。

下宿

福地邦樹

その頃、窓の小さい東向きの私の部屋は朝方いつとき陽がさすだけだった。一輪の花のあったためしもなくすすけて、そこら中すり切れていた電車が十五分おきに鼻の先を通った

下宿の人達はよくけんかをした真夜中にどなり合うのであった
占師の主人一家と
きちがい婆さんと
素性あやしい女と運転手夫妻と

それらの部屋の前を通って
私が一番奥なのであった
私はそれらの人を愛されないわけではなかった

しかしどうして彼等と理解し合えよう話もどこかずれた所を交錯した
勤めに行かぬ日のわびしさは
われながら処理しかねた
私の出歩く癖は
あの下宿でついたので
安酒を覚えたのもあのお蔭だ

婆さんは誇大妄想狂のけがあった

近くの島の出だというぞろげな女の所には毎晩のように気の弱そうなシン外交員がたずねて来た

占師は奇妙な声で祈禱もやらした
運転手の夫婦は喧嘩をするかぶざけてるかどちらかであった

占師の奥さんは後妻で
噂によると二代目阿部サダと言われていた
私はその吊り上った眼と
子供をキャンキャン叱る声をおそれた
彼女は亭主に酒くせが悪いという理由で酒を禁じていた

しかし何よりの苦手は氣違い婆さんであった
私が洗面所で痰を吐くのがけしからんとて
おまえの校長に言いつけてやるから学校を
教えるといった

二言目には教育者だからどうあるべきだと
私を再教育しようと計った
二年間の高松生活で
私は四回下宿をかえたけど
その家だけはさすがに骨身にこたえた
最後に私もうとう大声でけんかをして
その日のうちに逃げ出した

編輯後記

八月二十二日。山根忠雄氏より『中央公論』九月月号載江藤淳氏の「永井荷風論」、蓮田善明のことが出てあるといふ連絡を受けたので早速一本を購って読んでみた。その論文の末尾に、次のやうに蓮田が起用されてゐる。

「ロマンティズムの問題としていうなら、荷風の倒錯した論理は、『マチネ・ポエティック』と『日本浪漫派』を包含している。『日本浪漫派』の論客蓮田善明が、近代文学者中ほとんどの例外的に荷風を激賞したことを忘れるわけにはいかない。おそらく彼は、荷風のなかにかくされた『死の論理』を鋭敏に嗅ぎとっていたのである。』と書かれてゐた。江藤氏は昭和八年十二月生の年少の評論家である。蓮田が自決した日にはまだ満十二才にも満たなかった事実を思つて、一寸意外な気がした。その論旨の正否はとにかく、生前蓮田を知るといふ日江藤氏が、巷間全く蓮田を忘却してゐるに彼を取り上げてくれたことは、拙論の発足早々のことであつたので執筆する意義を改めて感じ、力添へを得たやうに思つた。蓮田は小説家では永井荷風、歌人では吉井勇、詩人では伊東静雄を激賞してゐた。荷風を賞めたのは果して『死の論理』のせみであつたかどうか一考を要するが、伊東に感銘する端緒をなしたのは確かに『死の論理』ではなく『水中花』の「死の倫理」だったのである。
九月二日。蓮田敏子さんより蓮田の残した

書簡、日記、応石時の写真、武運長久の日章旗、追悼録「おもかげ」をお送りいただいた。万謝の至りである。蝕んだ日章旗を掲げると、久松潜一、塩田良平、藤田徳太郎、中村武雄夫、暉康隆、藤森朋夫、西尾実諸氏の署名がある。なほよく見ると、舟橋聖一、石川達三両氏の名も列ってゐる。特に後掲二氏のその後の文学動向を思つてうたゞ感慨に堪へなかつた。

九月五日。淀野隆三氏から転居通知と共に辻野久蔵夫人だった加藤よし子さんと連絡がついたといふので謝状をいたした。拙誌四十二号に辻野が梶井基次郎に捧げた詩「冬待」を掲載したが、梶井宛書簡が淀野氏編さんの筑摩書房の『梶井基次郎全集』に収録されてゐるからである。

九月七日。清水文雄氏より本号所載の昭和十二年八月二日附蓮田書簡に現れる友人知己の教示をいたした。その中に現れる多胡順さんは、恩妻八重子が神戸女学院に在学当時四五年生ときの担任の先生であつたことが判つた。蓮田、清水、栗山、池田四氏が編輯した女学校用「作文」には、多胡女史の水壺も掲載されてゐたとのことである。恩妻が間接的に蓮田の教へをうけ、私は教師蓮田の研究をしてゐるわけである。清水氏のはがきを読みながら私も家内も思はず身を慄はした。

九月十日。寿岳文章氏より激励のおはがきをいたした。「蓮田善明も伊東伝の当然の展開であり、それゆゑに却つて伊東伝が色彩を加へるでせう。」という御言葉があり、拙論の意図を深く透察してくださつてゐる御

厚志に感激した。
九月十一日。斎藤清衛博士より『芸文文化』時代を思ひ出したとお便りをいただいた。十月十七日大毎会館で開かれる「和歌文学会」で米阪される由である。その節、拜眉の機を得て蓮田の面影に生彩を加へたいと思ふ。
九月十四日。蓮田の長兄為明氏より鄭重な書簡をいただいた。

「……終戦後政治的体制の変革による思想的方面の変化甚しく戦争当時の諸問題に対しても無理難解な各種の批判が忌憚なく発表され国民大衆の生活内容も動すれば歴史の伝統を没却した異様の形相を呈し始め邦家の前途寔に寒心に堪えない秋でございます……」

とあつた。まことに中正な遺家族の言としてこゝに掲げさせていたゞいた。
巷間戦線離脱や逃亡を抵抗と称して英雄視した曲筆がひところ流行したが、この頃はどつちやら卑怯者であつたと云ふ正当な判断を一般にするやうになつてきたやうである。逃亡で生を全うしたものが英雄なら、戦死した奴はのろまか莫迦者であつたと云ふ論理が成り立つからである。

この日、日本時間午前六時二分二十四秒、人間が打ち上げたロケットが三十八万キロの天空を翔破して月に到達した。それはソ聯が打ちあげたのもいふ、アメリカが打ちあげたのもいふ。人間が打ちあげたのである。この科学の進歩は恐らく地球から戦争といふ

悲劇を終絶せしめるだらうからである。私は科学を否定する平和主義は信じない。昨午京大天文学の宮本博士の講演を聞いたが、現代は人智の極致に到達してゐるといふ。原子爆発は太陽と同意語であり、人工衛生は星に他ならぬからだといふ。つまり、人間はつひに宇宙を創造したのだからこれが限界であらうといふ説である。
この宮本博士の論理の方が、前述したやうな現代の文学者たちの裏返へされた論理より遙かに正当である。さらに博士は、将来遠距離ほど旅費は安くなり、近距離ほど高くなる時代が到来すると予言された。つまり、遠距離ほど早く着くので燃料が少なくてすむからだといふ。
或ひはさうした倒錯を感じる時代がやってくるかもしれない。しかし、そんな時代がきても、人間の苦悩と愛欲を基盤とする倫理は恐らく変わることはない。(〇)

果樹園 第四十五号(毎月一回発行)
昭和三十四年十月一日発行
池田市野町一六八 印刷所 同明舎
発行人 小高根二郎
印刷所 同明舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園四十五号 昭和三十四年十月一日発行(毎月一回発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

果樹園

第46号

蓮田善明とその死	小高根 二郎	橋	白居易詩抄	浅野 晃
市 場	福地 邦樹	赤	い 畑	森 口 太 平
秋 思	服部 三樹子	夜 状	後 美 堂 正 義	吉 本 青 司
秋 索	田中 克己	事 後	山 根 忠 雄	彌 雄
		青年と語る	岩 崎 照 弥	池 沢 茂
		兄 児	所	

蓮田善明とその死

小高根 二郎

蓮田が台中に帰つてから半ヶ月を経た九月九日に、伊東の心友たるべき運命のバトを彼に引継いだフランス文学者辻野久蔵は、満二十八歳の若さでこの世を過ぎた。その辻野を追つて詩人中原中也是、十月二十三日に恵まれなかつた生涯を閉じた。辻野にはジャック・リヴィエールの『ランボオ』の訳著があり、中原には『ランボウ詩集』の翻訳があつた。ランボオの『地獄の季節』に馴染みであつたこの二人。しかも、伊東の精神の位置に親しかつたこの二人が、共に待ち合はせてもしたかのやうに、戦雲の昂まりのなかにあ

世に逃避したのは妙である。

十一月六日には日独伊防共協定がローマで調印された。地獄の季節の到来が約束されたのは、まさにこの時だつたわけである。十二月十三日には中国の主都南京が陥落した。これで終戦も近いと早合点をして無知な提灯行列は津々浦々まではいやいだ。その翌日には、かねて準備されてゐた中華民国臨時政府が北京に樹立され、明けて昭和十三年一月十六日には、「爾今国民政府を相手にせず」といふ奇妙な声明が、第一次近衛内閣の名において中外に宣言された。

その宣言の半月後、つまり、二月一日に、蓮田の父慈善師は八十八の高齢でみまかつたのである。蓮田はどうしたことか慈父の葬式に走せ参じてゐない。去夏高野山からの帰

途、植木に立寄つた日が別れとなつたのである。もともと五人の子供を養育するのに充分なほど金蓮寺は豊かであつた。その上、母は眼の痼疾があつたので、やりくりに十二分の力を致せなかつた。蓮田の高師からの学資は多く姉きく、文字さん二人の針仕事によつて賁がれたのである。こんな事情から、最も父母の愛憐をかけられた筈の蓮田は、反比例して父母への愛情が稀薄だつたのだらうか? さう言へば、一昨、昨年の両度の高野夏行にも、その帰途老父母を見舞ふことは、初期の予定からまったく除外されてゐた。一念、国学再建の熱情に燃えてゐた蓮田にとっては、爾余のことは一切枝葉にすぎなかつたからだ……と、私は解説したが、苛酷なまでのその熾烈な精神は、父の死をもつてもいさゝかも動じなかつたのだ……と言へさうである。

父の死んだ二月一日には、第二次人民戦線事件として、大内兵衛(東京帝國)有沢広巳(京帝國大学) 脇村義太郎(東京帝國大) 美濃部亮吉(法政大学) 阿部勇(法政大学) 宇野弘蔵(東北帝大) 氏等の一連の大学教授群が検挙された。蓮田は後掲の日記で、その事件については多く触れてゐるが、不参した父の葬式に關しては、当日郷土では珍らしく雪が降つたといふ事実を、メモていどに記してゐるにとどま

る。つまり、検査事件は「おほやけごと」であり、父の死は「わたくしごと」にすぎなかったからであらう。

蓮田はかつて永続きたためしのない日記を、父の死後半ヶ月後から約一ヶ月余にわたって書き綴ってゐる。これを見ると、蓮田のひととなりや思想が、巷間つたへられてゐる単純なそれと、相当違つたものであつたことが判明する。

二月十五日

……前略……自分は、調和的であるのか、追隨的であるのか。なるほど自分は、人一倍調和性をもつてゐると思ふ。それは追隨と見えることもある。しかしそれは「人間」に立ちかへる「人間」の立場に於て自他を見ようとするためであつたやうである。そしてそのために自分は年をとり、教養を重ねるに従つて、他人に協調をするやうになつてきた。自分として、又言へば、自分はかなり自意識の強い人間であり、非調和的である。しかし、この自意識は、自分自身の抗戦にも多くを用ひてきた。そのために自分は自他に対して或る場合強引に出ることがある。何もの(?)をもそのためには排して自分の道を行かうとするや

市場

福地 邦樹

夕暮れた市場を酔つて歩けば
人間の営みのなんと楽しいことか
なにやらきらきらしたものが
沢山並べてあつて
果物などが豪華に積まれ
仔細ありげに忙がしそつに
男や女が行き来する
電燈がだんだん明るくなって行く中を
彼等の心は一向見えず
蟻の群れのように遠く近く
不思議なもの影がしきりに動いて
どこか外国の町の
たとえばインドのバザールにでも
迷い込んだように
美しさに幻惑されてしまふ

うな強引——そしてそのために多く人を不快にもし、おどろかせもし、又、せつかく自分を調和的だとみとめてくれた人々の信頼をそこでマイナスにした。

今自分は、この三月末東京成城(註・成城高等學校)へ行くことにきまつた。これも台湾の人々に対してかなり不義理になる。殊に後藤先生(註・台中商業校長後藤義光氏。広島高)に対しては。(自分はやはりそんなことを氣にかけてゐる)しかしこの非自主的な、無精神の土地の開拓も自分には沢山だ。この未墾地を耕すのが自分の任務ではない。まだ自分の種蒔く土地にはなつてゐない。もつと荒地に適したものをつくつてみて、土地を馴らしてからでなければならぬ。自分の如きものがこんな時代の台湾に埋るべきではない。

自分が台湾にきたのは、スサノヲノ命や大國主命が根國を神避らはれたやうにして、自らをここにすてたのである。肉体的に蝕まれ、起ち上る力になつたものは、かうして捨てるにふさはしなかつたといつてよい。三年前の自分は肺門を犯されてゐた。あの激動を自分は忘れることはできない。しかしそれは幸にして一年半でなほつた。活力も出た。けれど、何といふむなししい自分を自分は味つたことか。自分は肉体の絶望を早計した。

中に狭いものを見た。世界を見ないで思ひ上つた自主。

自分は平坦地に下りたくなつた。世界へ出たくなつた。自己滅却を意識した。そのためにも最も軽蔑した広島(註・広島文理科大学)に三年を甘んじた。しかしこれはいけなかつた。広島はその環境も学園も空疎だ。己を没すべき世界的なものどこにもない。自分の魂は余り忠実にそこで自壊した。

学問しに行つて、学問の精神も何もかも失つた。とうとう台湾にまで自分を追ひやつた！ 広島罪だ。

成城にも広島も空気が濃い。そいつが自分をきめたのだ。このことは自分の運命としてはならない。

そこには先生が居られる。自分もこれからほんとにしつくり先生を見るだらう。今までまだまだ先生をよくみてゐない。自分は現在の要求を思ひ切つて先生におつつけよう。もうその火端は廻鑊によつて「武蔵野に炊く」(註・高橋清博士隨筆集)の批評を以て切られた。ニイチエに於けるワグネルの如く！

これから鍛へ直すのだ。三十五才になつたがおそくはない。没頭してみろ。そうすれば自分には自信がある。今度も自分は妙に三年間つづに縁がある。今度も

いや事実さうであつた。これは、余り、自分を他にまかせきつたからであつた。そして結果として、この台湾を、又台湾を通じて支那や、南方の植民地的な世界を、そして、かういふ世界に向つてのびてくる世界の手をみる事ができた。

二月十六日

しかし過去をとりあげるのはやめよう。問題は今だ。

も一度書く。自分は今成城にきまつた。もちろん成城行きは一方便にすぎぬ。今更成城の教育方針に共鳴しに行くのでもない。うるさくが少くなるだけのことである。要するにそれはきまつたことであつて、何でもない。又、何でもあつてはならない。

もちろん、自分は単に内地に帰るのではない。自分は世界へ行く。益々世界へ行く。と同時に自主の地位に上る。そのための一つの行動としての上京である。

勉強もそれを中心にする仕事である。単に学界に近づいたり、単に勉強のし易い環境に行くのではない。

自主の行動だ。

かつて、信州で(註・長野県立諏訪中学校)自分は自主の一極点に立つた。そしてその自意識の

三年間しかつたかないかもしれぬ。

しかし五十までは三年間が五回残つてゐる。相当の仕事ができよう。

自分を世界精神と自主精神の数字にまで抽象しつくさう。そこに自分の生かし方がある。

日本を守り、日本のために進んで戦ふ思想でなければならぬ。それは、すでに昨年七月以前に於ける小国民根性でない。現在の日本の現実、今までの日本が知らなかつた大きな摩擦をなしてゐる。かつての日清戦争ともちがふ。その時は追ひ払へばすんだ。今度は進んで入らうとする。そしてそのために世界に大きな波を起させ、その波の中心たらんと意志してゐる。

軍事力や政治力の問題にそれはとゞまらぬ。それらでさへも、あくまでそれが文化の問題としてあるところに今日の大いなる意味がある。軍事力や政治力やうごかす日本人の対世界の態度、その中にある人間的人類的態度、この態度に裏づけられた日本の自主、自由。

しかるに当局や世の政治家はこの自由、自主を失はず、明治以前の鎖國的ひとりよがりの自主をはなれきれないものが多い。それが愛國の名によつて唱へられる。彼らは往々現在の勝手な思ひ込みで学問の明証する日本の

たまや伝統やを蹂躪し、相愛らずの他国的思想で、こり固って人を攻撃する。

我々がかゝる自称愛国人を排斥する。これと戦はなければ、日本は危い。

数日來の雨。昨日今日晴れ曇り。今日きもちわるく生暖い。蛙の声しきり。風呂から上ってハダカにて書いてゐて寒くなし。初夏のごとし。

次兄より、父の十二月以降の容態経過を詳しく知らせ来る。実に孝行なる兄である。本葬の日、めづらしい雪なりしと。

二月十七日

最近、帝大はじめ大学教授が人民戦線に關係するとして検挙(第二次)。その他、議会の貴族議員中、帝大教授の旧著をせんさくして、日本国体思想に反するとして大臣を求追する。その槍玉にあげられたる著書は勿論禁禁。とうとうたる国粹主義者にはかなはず。予はその著書及び難者の弁論何れをも詳知せず。

しかしながら難者が、それらの数氏の著書にもつ如き不安を、世も亦、その難者に対して抱き、学問の——日本学をもその中に含んで——高き自由の脅かさるゝを感ず。痛感す

秋 思

服部三樹子

月世界の身近となる世となりて月の光に恥づる日は多し
あゝ頭上あまり明るし月よみをなまめく金色と詠みしひとりあり
月世界にも人住むと一日聞かされて否定する何も持ち合はさざり
骨のごと月の光にさらされて過ぎしころの秋は悔多し
白く明るき月を描きし作文の反古となりつゝ少女過ぎたり
月の下び街静かなりし平凡の道を描きし筆の稚なさ
ものごころ確かならざりし日の清さいま我が足は泥にまみれつ
秋の夜の月の無辺の光の中魂ちりゆきて涙残れり
自が心清しと思ひ上りし日月よみはげに非情に見えし
我が心汚れ汚れてたゞに受くる月の光の金色のぬくとさ
月代のなまめきのぼるを詠みし歌その日その人を知るも知らずも

捜 索

田 中 克 己

秋晴れではないが彼岸近くで、まっすぐ家には帰れない。前から気にかけてゐたUの家を訪ねて見る。十年近くゆかないので道も忘れ、訊ねたづねして、行つて見ると、家をとこはしてゐる。土方の統領にもとの持主をたづねると、知らない、といふ。軒旋屋が間に入つてゐるので、といふのには嘘もないらしい。隣の奥さんにたづねると、あなたは誰です、と詰問される。亡くなった主人の友達で、と答へ、移転先は知らないがと嬢の中学校を教はる。中学校へゆくとこゝでもわからず、卒業した姉の高校を教はる。翌日、その高校を訪ねると、姉は帰つたあと、教はつたアドレスをまた訊ねたづねしてゆけば、妹だけゐた。故友に似た眼をしてゐるが、これも故友に似て物いはず、にこにここと笑ふばかり。これで私のはなしも終りである。

内務大臣の答弁を以て推するも、さうとがめだてするほどの大したことはないらしいものなまで、(内務大臣は末次大将也) 一々しつこくくひさがつて学者思想家退治をやるつもりなるが、幸ひにしてそれが日本を防衛するに足る意見ならばよし、しかしこの頃の、猫も杓子も「自由」の名を恐れることチブス菌を恐るゝが如き、疑心の得々たる横行は、却つて遂に日本を危からしむるものとなり、日本の創造精神を阻害する結果ともなる。哀れむべし。恐るべし。いきどほるべし。日本をあやまるものはかゝる片意地で、自分の名のために国家や愛国をかつき出す老人なり。

日本はそんならっぽけなものであつてはならぬ。真の日本を見ぬものは、反日本的なもの、自称国粹主義者も同じだ。日本の世界性。日本の自由。：後略：

二月十七日

：前略：今春纏むべきもの

◎本居宣長(試論原稿) 七十頁

国学源流列伝(真と美とを愛するもの) 五十頁

本居宣長と平安朝文学 五十頁

◎：前略：日本文芸学とは、冷静なものではない。

二月二十三日

二十日より本日まで、在郷将校特別教育。

本日午前台北空襲。：後略：

三月十一日

試論の将来につき——日本文芸学の問題——

岡崎氏(註、岡崎義恵氏) その他の日本文芸学の自己の意志を尊重するか、日本文芸といふ対象を尊重するかといふと、後者の方である。例へば、様式の問題などでも様式的に扱はうとする。日本文芸を日本文芸史概論的に、日本文芸史を所謂文芸史的に扱はうとする。あるがまゝの与へられた対象を第一に尊重する。

これに反して我々のは、我々の中に生きるものを第一とする。それは今日の我々の中に生きる日本文芸である。過日の日本文芸の総合や整理された結論でなくて、批判を第一とする。選択する。これが第一の分岐点である。

資料や題目の羅列、組織でない。解釈学的でない。鑑賞的でもない。批評的である。むしろ宣揚的である。

三月二十一日

◎神話性の復興、宣揚、宣長の学。

◎現実には破らるべきものである。私が自由に構成すべきものである。さういふ秘密をもつた文学の伝統を復興しなければならぬ。現実には構想的に錯覚せられねばならぬ。

◎今日の科学主義は、かつての神学と戦つて人智の偽りをくだいた自由の精神でなく、科学した結果への消極的な便利主義的屈従に傾いてゐる。

◎神を見た宗教に代つて神を見た科学、それに代つて文芸はつねに神となつて世界をみることを本質とする。

◎無と有との上に自由な奔放な文学。

◎文学と科学とを共に新しくせよ。

◎自ら神となつて文学を新しくする伝統を日本にみる。

◎原初的に語部たち。己を神と信するまでに足りきつた大いなる神の構想を伝承した語部たち。

◎かつて神となつた伝承者と、神を見ざる神学者をくだいて神を見た科学者との水々しい精神の復興。

◎科学は、現実を神の構想にまで深めなければならぬ。文芸学は、存在する作品の解釈

的認識や概念的組織や説明ではない。文芸を神の構想として認識し、同時に神の構想への試論である。

○まず「知をみがけ。神にまで。」

○文芸せよ、神へまで。

○科学は、神への文芸が心理的主観の妄想化することへの自戒であるのみでなく（そのことは世間的憂慮にすぎぬ）、文芸創造の確認である。

この日記は、台湾を去るにあたって苦勞に満ちた今迄の歷程を回顧し、自主自由の新たな決意の火を点ずるために書かれたものであらう。日次を追った日誌といふより、むしろ、「覚悟の書」の体裁をなしてある。

こゝで特別に解説を要するのは、二月十七日の自称愛國者に対する「哀れむべし。恐るべし。いきどほるべし」といふ蓮田の憤激である。それは蓮田がその日の朝刊で、自称愛國者のたぐひに属する老貴族たちの、貴族院本会議での跳梁ぶりを讀んだからである。

井田磐楠男爵は東大経済学部長河合栄治郎教授の著『フアシズム批判』『時局と自由主義』『第二学生生活』を槍玉にあげた。とりわけ、『第二学生生活』中の大学令第一条批判を指弾したのである。「大学は……中略……兼ね

橋

浅野 晃

天に銀河 地に向日葵
こんな道をいつも歩いてゐる
それがおれといふ人間なのか

むかふの薄明のなかに
橋ははんだん姿をかくしてゐる
しぜんこの道がそちらへ行く
風がおれの頬を叩いて
ふかい溪谷の肢体を記憶から引き出す

おれの影が木立の影と
入り交り 重なっては離れてゆく
もうそこが橋の袂だ

て人格の陶冶および国家思想の涵養に留意すべきものとす」の「人格の陶冶」「国家思想の涵養」は、理想主義に本づく個人主義と、国家主義の具現であつて、学問の自由といふ基本原理に矛盾すると河合教授が論じてゐたからである。

これより先、既述した大学教授陣が検査された二月一日当日の貴族院本会議では、三室

橋はおれのことを待ちかねてゐるのだ
おれの足音に聞き耳を立ててゐたのだ

いま おれは橋の上にある

橋はおれとの出会に有頂天になつてゐる
けれども橋の顔はしわだらけ
道も辛い 橋も辛い
渡すといふ仕事は拒んではならない

下では水がどんどん流れ
あそこにも逝くものの智慧があり
あれは智慧のひとつみだ 見て行くのだ
水と橋との糸がくこの十字
いっそ大きな手で思ひ切り十字を切れ

天に銀河 地には橋
橋を渡ればまた道だ おれはやっぱりおれなのだ

戸敬光子爵は東大法学部長田中耕太郎教授の著『法と宗教と社会生活』を攻撃してゐた。教授は著中……国民全体に神社崇拜を強ひることの不可を論じ、この風潮を防ぐ最良の方策は小学校での団体的な参拝の陋習を廃止すべきだと論じた個所があるからである。国体明徴のいよいよ緊急を要する秋、国立大学にいよいよも職を奉ずる者の言としては誠に

奇怪千万……その処分を三室戸子は末次内相に迫つたのである。内相はこの攻撃に対して、「事実をよく調査した上で善処したい」と返答した。

三室戸子は田中教授指弾にとまららず、さらに歴史に関しても論及した。即ち、「崇神天皇の御事蹟がいまだに判明してゐない」とは畏れ多き極みである。明後紀元二千六百年までには聖蹟が判明するやう調査せられたい。」と要求した。こゝに至つて蓮田は「哀れむべ

し。恐るべし。いきどほるべし。」の憤激に

点火したものと私は想像する。「古事記」「日本書紀」によつても解明されぬ事蹟や聖蹟は、調査しようにも調査しやうがないからである。三月二十一日の日記に見える「己を神と信するまでになりきつた、大いなる神の構想を伝承した語部たち」が伝承しなかつた事蹟や聖蹟は、明らかに伝承する価値がなかつたか、さもなければ存在しなかつたからである。

蓮田はこの語部たちが伝承した『古事記』

白居易詩抄 (二八)

森 亮

老子道徳経

「物言ふは知らざる者ぞ、知る者は黙して言はず。」

この言葉をわたしは老先生から承つてゐる。しかし、もし老先生が本当にさういふ知者であられたならば、

どうして先生自ら五千の文字を連ねた著述を遺されたのだらう。

この世の中に生れて四十年、

まだおぢいさんと呼ばれるほどではない。
どうもわたしは苦勞性らしい、
房々した髪の毛が真白になつてしまつた。
さても、水際にあそぶ番ひの白鷺、
あの清らかな、のっぴの鳥たちはどうしたことだらう、
心配も苦勞もないはずなのに
白い絹糸のやうな髪を頭から垂らしてゐる。

白 鷺

注 「老子道徳経」の原詩は説老子(四の二六五)でこの詩人の代表的エピソードの一つである。六十三、四才頃の作。次の「白鷺」の原詩は白鷺(二の五二)で、四十四才のとき彼が江州司馬に左遷されて江州に下つたその途上吟。

注 「老子道徳経」の原詩は説老子(四の二六五)でこの詩人の代表的エピソードの一つである。六十三、四才頃の作。次の「白鷺」の原詩は白鷺(二の五二)で、四十四才のとき彼が江州司馬に左遷されて江州に下つたその途上吟。

蓮田の日記は三月二十一日から四月四日まで半月間中断してゐる。その間、台中引揚げ準備と東京への引越といふあはたゞしい難事で取紛れたからであらう。記述も台中でのそれのやうにはまとまりがないフラグメンテ

が、学習院に転動した清水文雄氏との事務引継ぎやら、蓮田が創案した授業要領や、「日本文化の会」創設当初の雰囲気やらを推察することができる。

四月四日

：前略：四日は、晶一をつれて小学校へ。又仲原（註・成城中学主事）その他学校へ。清水君（註・清水文雄氏）案内にてめぐり、右足、靴のためにや、痛む。晶一のうけたテスト、そのうけぶり面白し。初めて風呂をわかす。

四月五日

夜銅直氏（註・成城学園校長）を訪ふ。不在。午前のんきにくらす。午後晶一をつれて新館に机その他を求めに行く。晶一の手つめたく、頬やあつし、あはれなる健康状態なり。心痛む。新宿などにつれて出たことを後悔す。まだ恢復してゐないのである。御機嫌とりに、支那料理の折詰と、苺を一箱かってやる。祖師谷まで来ると雨がふつてゐた。用心に持って行った傘で帰る。晶一は遂に風邪をひいてしまった。夜中氣をつける。今迄とくらべて朝晩がひえる。しかし、こゝこそ半永住してよい所なり。環境美し。

かも生徒に発見させる。
めい／＼の素質に応じて指導すべきことを考慮する。
一斉指導を稀にする。
今のノートでは全然いけない。生徒よりも教師が牽制される。
教卓は邪魔になる。生徒の机も一方向きはよくない。お互に教へ合はせる。
生徒対教師ではなく、生徒対生徒とする。
教師は無形、全体、自由、基礎的な訓練と、一般より深化への誘導と。…後略…

四月三十日

五月の光みなぎりて
軒に白藤の花
咲きみだれ
数十匹のどんらんなる蜂は
一日狂へるごとくうなりやます

庭木の枝より枝へわたしたる
竹竿や緒紐に
洗濯もの縦横にうちならび
妻子ら午後に行楽に出でたる後は
われひとりなる家ぬちに
ひそ／＼と書き物し
時折蜂のうなりに耳をかしげ

四月六日
今日晶一は寝かしておく。しかし学校から帰ってみたら表の門柱の上のぼつてゐた。

赤い畑

堀口 太平

茅ヶ崎をでたあたりに、
赤い畑があった。
おやと思つたら、
やはり鳳仙花だ。
鳳仙花の畑だった。
馬入川の鉄橋にかかる少し手前だ。
列車は小田原でとまった。
これからさきは各駅停車だ。
ルリシジミがとんでいた。
日ざかりの私。
定着した赤い畑。
ピシリピシリ気がたつてきた花びら。
いるという思念の日ざかり。
地のうえにおとすその不滅のかけ。
花をそだてた人が、

いるということ……………。

柔焼の鉢にうつされて、
この近在の町から出荷される、
火花のようにとおい紅と、
水のようなみずみずしさ……………。

私は、
飯をくつて糞をたれ、
花をつくつて金もうけする生活を否定し
ない。
塩気の効かぬ言論の世に華々しいことよ
茅ヶ崎の線路のわきの、
鳳仙花の畑は詩だ。

茶を買った。
列車は動きました。
定着した赤い畑は、
種子をはじいる。
山林に自由存す、と独歩は歌ったが、
詮じつめればこのことだ。
（一九五九・九・二九）

しばし目を庭中にあそばしむ
生垣を通りて風はずき
かの白きせんたくものを庭土の上に

うれしいと共に不安。額はやはりあつい。又
ねかし、自分もねる。太二も少々熱がある。
荷物がまだつかない。

四月十一日

仕事が増々多くなってきた。日本文学の会
と成城と。しかし成城の方は第二とせねばならぬ。沢柳氏（註・成城学園の創設者沢柳本太郎氏）
の精神はやゝもうろうとしてゐる。現在の指導精神は何やら分らぬ。今に最もつまらぬ学校になるかもしれぬ。とにかく低調だ。
日本文学の会。勢ひづいてきた。この勢ひを生かさねばならぬ。少数の力であるが、こんな仕事をめざしてゐる国文学者はない。名だけではない。日本学を樹立せねばならぬ。宣長の学を検討し、先生の学をうち出す。先生中心にしてやうてゆける。…後略…

四月十四日

昨日発熱、本日欠勤。
：中略：「中学一年の国語教育」といふ本を書かうか。自発。大いなるものへの謙虚。これが二原則だ。そして、自主的な世界精神への誘導。…中略…

好きな課の研究を深める。
何を知り、何を考へ、何を習練研究すべき

落ちて散乱せり

或は芝の上 或は山吹の下にも
すでに乾きてさら／＼したる肌着
手拭 ハンカチの類
それ／＼に崩折れて土の面に伏せり
見るがうちに又危く落ちんとし
一枚のハンケチは音立てゝ芝生に落ち…
檜の影その上に躍れり
されど 何たる美しさ
健康なる五月の午後

それら生きものの如く美し
われは立ちてひろはず
あきれて見とれ居り
怖ろしき美しさなり
あゝ五月
われはふしぎなる日本の姿をみたり

東京の蓮田の新居は世田谷区祖師谷二丁目
六十六番地に定められた。環境美し。半永住
してよい所……と、蓮田は書いてあるから、
高師卒業後の巡歴ののち、やっと安住の地を
みつけた安堵が感じられる。

しかし、二月にも暖い日には蛙の声が聞け
た暖国台湾から引越した蓮田にとっては、よ
ほど東京の四月の朝晩の冷えは警戒すべきも

のだったらう。長男晶一君が蒲柳の質であったからだ。早速風邪を引いた晶一君と発熱した太二君のために、昼間から一緒に寝てやるほどの子煩悩さを示してゐる。

さう言へば、年少の頃は蓮田自身も文学少年らしく蒲柳の質であったやうだ。県立中学濟々費一年の冬、すでに学友丸山学氏(註、瓜現大昭和七年卒、現在熊本商大教授)と回覧雑誌「ゴムノキ」をたしてゐたが、二年の時には肋膜炎を病み一年進学が遅れた体験があつたほどだからである。昭和二年広島高師を出ると幹部候補生として鹿兒島歩兵第四十五聯隊に入營し、十ヶ月の軍隊生活によく堪へてゐるが、既述の日記で判明するやうに、一年後の諏訪中学教諭時代には肺門浸潤に犯されてゐた。つまり肉附骨格は甲種合格だが、内診的には蒲柳の質が潜在してゐたと見るべきだらう。

蓮田は自分の肉体に潜んでゐるその脆弱の素質が愛児に顕現することをもっとも恐れたからであらう。晶一君、太二君の病気の看護は真夜中といへども決しておろそかにはしなかつた。蓮田が清水氏に語つたところによると、就寝に當つてまづ大量の水を呑む。さうしておくと尿意を催してやがて必ず眼が覚める。そこで愛児の額に掌をやり寝息をたしかめる。そこでまた大量の水を呑み、尿意を促

進して次の看護の時刻を自らに約束させるわけである。かうした事情は夜が明けると継続される。意志によつて肉体を酷使する。或ひは犠牲にする。その性向は、こんな日常生活にも片鱗を輝やかせてゐたのである。

蓮田は、かうした人一倍子煩悩であつた反面、私情によつて公の精神が蝕まれることを極端に警戒してゐたやうである。この頃、蓮田は「本居宣長に於ける『おほやけ』の精神」の稿を進めてゐる筈である、文中……子煩悩の山上憶良をこっぴどくやつつけてゐることに

よつても、その自戒の精神がよく判る。「山上憶良はわれらが古典の日に既に小説家の目をもつた最初の人である。彼は公宴の席に

憶良らは今は罷らむ子泣くらむその子の母も吾を待つらむぞ

と訣別して歸る時、彼はまことに私情のモラルを立てたのである。彼はそれ故最初に道徳を歎ひ衣食生活を歌つた。彼の汚らしい『貧窮問答歌』をはじめ人性の歌が近代小説を愛する徒に愛重される所以である。彼遺唐小録として渡唐し、儒仏老の知性を深刻豊富に学び得た。(昭和十七年六月「國文學論」六輯所載)

憶良は大宝元年正月(701)遣唐使粟田真人に随行してはるばる中国に渡つた。前掲の「子泣くらむ」の歌は、その送別の宴で歌はれたものであらう。当時の幼稚な帆船による渡唐は、昭和十三年の堂々たる輸送船による中国遠征より、比すべくもない冒険と危険で待ち設けられてゐたであらう。△今は罷らむ子泣くらむその子の母も吾を待つらむ△は、まこと、生還を必ずしも期しえない憶良の真情であつた筈である。仮初めの子等の発熱にも、安寝せず看護に専念したほど子煩悩な蓮田にその真情が判らぬ筈はない。しかも、憶良に私情のモラルに執した二流詩人と蓮田は断じてゐるやうである。一流詩人は公情を歌ひ私情は歌はない。この信念を先行せしめて、逆に蓮田は自らの煩惱の超克に努めたわけであらう。

礼状に
美堂 正義
見舞ひに天災に恐怖を持つと書いたが右にそれて被害はなかつたが
台風ノイローゼで進路予報を地面と首引き
この頃は氣象台技官並みの知識さへ身に
ついた
日本は何う仕様もないくらい哀しい国土
で
人も我も横死するのは悲惨の極みです

幸ひ今日は秋晴れのよい天気
で
寝そべつたまゝ礼状を読む
少し前に逃避して命を保つとあるが
さてそんなにうまくいくかなあ
安全な処は何処かと考へあぐねてゐます

泣くらむ」の歌は、その送別の宴で歌はれたものであらう。当時の幼稚な帆船による渡唐は、昭和十三年の堂々たる輸送船による中国遠征より、比すべくもない冒険と危険で待ち設けられてゐたであらう。△今は罷らむ子泣くらむその子の母も吾を待つらむ△は、まこと、生還を必ずしも期しえない憶良の真情であつた筈である。仮初めの子等の発熱にも、安寝せず看護に専念したほど子煩悩な蓮田にその真情が判らぬ筈はない。しかも、憶良に私情のモラルに執した二流詩人と蓮田は断じてゐるやうである。一流詩人は公情を歌ひ私情は歌はない。この信念を先行せしめて、逆に蓮田は自らの煩惱の超克に努めたわけであらう。

日記の結末となつてゐる五月の歌はまことに美しい。そゝくさと鉛筆で書き流した仮初めの詩品であるが、第三聯第九行の△一枚のハンケチは音で△芝生に落ち△の「音立て△」を「音立てず」に訂正すれば、完璧な作品となる。蓮田は中学時代には「ゴムノキ」、高師時代は同人雑誌「耕土」「空」校友会雑誌「曠野」を丸山学氏等と編輯発行し、そこに詩を発表してゐた。その詩歴は、中学時代に弁護士を夢みた伊東静雄よりも永い。それはとにかく、五月の歌は伊東の詩境に酷示して

夜歩

吉本 青司

台風が去つて
銀河の砂が
さびしく
遠くかがやいている
白鳥の
飛翔するあたりを
ぼくが
逆立ちして歩く
遅刻した風が
すずかけを揺すつて
台風の行方を
追っかける

ある。その理由は伊東、蓮田ともに永井荷風を欽慕したせみにあるだらう。

伊東は詩の上達の妙諦として荷風訳の仏蘭西近代抒情詩撰『珊瑚集』を暗誦してゐて、座右銘のやうにその玲瓏な作品を口誦してゐた。蓮田はまた「近代文学者中ほとんど例外的に荷風を激賞した」(九月号「江藤淳」永井荷風論)と、後世の若い評家に言はれるほどの荷風びいきであり、青少年時には詩人であつたのだから、当然『珊瑚集』は味道してゐたと見ねばなるまい。

伊東は蓮田の「五月の庭」の一年八ヶ月後に「野分に寄す」を『文芸文化』昭和十四年一月号に発表したが、これは『珊瑚集』の影響の最も顕著な作品の一つであり、蓮田が歌つた初夏の庭を、そのまゝ晩秋に移した……と言へるほど、その詩境は酷示してゐる。

野分に寄す

伊東 静雄

野分の夜半こそ偷しけれ。そは懐しく
寂しきゆふぐれの
つかれごころに早く寝入りしひとの眠り
を、
空しく明るみづ色の朝につづかせぬた

木々の欲声とすべての窓の性急なる叩も
てよび覚ます。

真に独りなるひとは自然の大いなる聯関
のうちに

恒に覚めぬことを希ふ。窓をすかし
て降は大海の彼方を得望まねど、
わが屋を揺するこの疾風ぞ雲ふき散りし
星空の下

まっ暗き海の面に怒れる浪を上げて来し

柳は狂ひし女のごとく逆まにわが毛髪を
振りみだし、

摘まざるまゝに腐りたる葡萄の実はわが
眠り目覚むるまへに

ことごとく地に叩きつけられけむ。

篠懸の葉は翼撃たれし鳥に似てつきつき
に黒くもつれて浚はれゆく。

いま如何ならんかの暗き庭隅の菊や薔薇
や。されどわれ

汝らを憐れんとせし。

物皆の凋落の季節をえらびて咲き出でし
あはれ汝らが矜高がる心には暴風もなど
か今さらに悲しからむ。

こゝろ賑はしきかな。ふとうち見たる
室内の

燈にひかる鏡の面にいきいきとわが雙の
眼然ゆ。

野分よさらば駆けゆけ。目とむれば草

紅葉すといひとは言へど、

野はいま一色に物悲しくも蒼靄めし彼方
ぞ。

この伊東の詩には第二詩集『夏花』期の特質
であるデコラティブな表現が際立っている。

それが『珊瑚集』のアンリイ・ド・レニエ
やマッシュウ・ド・ノワイユなどへの相似感
を呼び覚ます理由である。前掲の蓮田の「五月

の庭」は、むしろ伊東の第三詩集『春のいそ
ぎ』の日本的な平明さや枯淡さに似通ってゐ

る。伊東が『珊瑚集』やリルケを脱皮して、
真の日本現代詩と呼ぶにふさはしい詩境に迫

りつくまでには、なほ半ヶ年を要してゐる。

つまり、八いまこの國に 到り着きし 最初
の燕ぞ 鳴く／＼と勝鬨をあげた「燕」は、ま

さにその伊東の詩境を物語るものだが、伊東
より詩歴の古い蓮田は、すでに伊東に先廻り

して新詩境に到達してゐた事実を示すものか
もしれない。

事後

堀ノ内 歴

たい風が それました
まっかに 夕やけです

ひふのしたまで すきとおります
たましいが ぬけてゆきそうです

あゝ よかった
ものおもいは やほです

こんやは はやばやに

ねたいものです
のこしての仕ごとは うっちゃり

ね床のなかで 大型の写真集をでも
あげたまゝ 睡ってしまいましたようか

ゆうやけは まっかです
一九五九・九・三〇

青年と語る

山根 忠雄

孔子は四十にして惑はずと言つたが
人間四十に近づく

確かに人生の見晴らしがよくなるね
王之渙の詩

「千里の目を窮めんと欲して
更に上る一層の楼」ぢやないけれども

とにかく四十も階段を登ってきたんだか
らね

今まで見えなかったものがはつきり見え
てくる

時間がますます貴重なものになってくる
深く生活を愛するやうになる

堅く大地を踏みしめるやうになる

——詩の本質は
青年的なものではなくして

死さへも越える
感性の成熟といふことだ——とは或る詩
人の言葉だが

だんだん年をとるのが
負け惜しみでなく

なんだか楽しみになって来さうだよ

因みに、蓮田を成城高校に迎へ入れるため
にされた清水氏の学習院への転勤。それが三
島由紀夫氏をして文学に開眼せしめる機縁と
なつたことは特筆されていゝ。清水氏は中等
科二年生に文藻ゆたかな平岡公威少年を発見
したのである。平岡少年はやがて蓮田を知り
伊東に目覚めた。三島文学はこの三人の師の
骨格と肉と血に培はれてゐる。つまり、清水
氏によつて平安朝文学の完璧、蓮田によつて
古代の神話の靈感、伊東によつて逆説的な肯
定の譬喩を、いつしらず吸収して成育したの
だ。

託児所

池沢 茂

「赤ちゃんも幼稚園へいったら、もつと、

ことばをおぼえるんやないかしら。おなじ年
ごろの子供といっしょに置いといたら、社会

性も出来てゆくと思うんやけど。なんぼ教え
たかて、家にいてるだけやたら進歩があれ

へん。おなじ年ごろの子供と遊ぶのが一番大
事やつて、児童相談所の人も言うてはつた」

こう妻が言いだしたとき、ぼくは、はつと
なつた。それまでぼくは、勤めから帰るとす

ぐ、幸吉を相手に、いろ／＼話しかけたり、乗

物のおもちゃで遊ばせたり、押入れのたなに

板を立てかけてすべり台のかわりにしたり、

マリをころがしあつたり、していたのだ。そ

うして幸吉が寝たのは、夜半もとうに過ぎた

ころだった。ぼくは出勤がおそいかわりに帰

りもおそい。とき／＼夜勤があつて、その日

は会社で泊ってくる。この点で幸吉は、ふつ

うの子より、父親に接する機会がすくないか

もしれない。そのかわり、ぼくが夜ふけて帰

っても、まだ起きていたときには、こうふん

して、ます／＼眠れなくなるらしかった。い

っしょに遊んでくれるやうにとせがんで、ま

て悪いかもしれん。おなじ年ごろの子供と遊ぶのが、なんといつても第一やなあ」

ようやく寝付いてくれた幸吉に、ほっと重荷をおろしたおもいで食卓のまえにあげらをかき、しょうちゅうを口にしながら、ぼくは妻に、あいつちを打った。むか／＼していた氣持が、ふっと落着いてゆく。

さきに子供といっしょに食事をすませていた妻は、食卓のそばで裁縫をしている。幸吉をほくにまかせきりにしていたその妻の、ことさらに平然とした横顔にも、ぼくはむかむかしていたのだ。底意地を見せびらかしているみたいなの、その心構えを意識すると、足が立つのもおくられてきた幸吉を丈夫にするため夜半すぎに、一時間も二時間も、手をひいて歩かせたり走らせたりした過去の殊勝な行爲までが思い浮かんで、怒りに油がそまがれるのだ。しかし妻には、幸吉のしたに、もうひとり、赤ん坊の梅子がある。ぼくのする中には、ふたりの子の世話をしなければならぬ。こんなときでもなければ、裁縫など、ろくろく出来ないのだから。梅子が乳を求めてむずかるので、夜も十分に眠れない。

ところが、ぼくはこれまで、こんなときに二度三度、かっとなって怒りを爆発させたことがある。いったんセキが切れてしまうと、

兄に

序詩

岩崎 照彌

お前の墓が出来た
十二年後になつたが許してくれ

祖国がお前の死んだビルマへ
遺骨収集に出掛けたのも此の春だ
むろん拾はれては来なかつたけど
家にはちやんと遺髪が残つてゐる
門出に言った感激の言葉

万歳 万歳 天皇陛下万歳
入營して一ヶ月目に
雨期のインパールへ送られたのだ
死亡公報にかう書いてある

昭和十九年八月十五日
ティディム北方約十軒に於て
頭部腹部貫通銃創により
壮烈な戦死を遂ぐ

親切な嘘が今になってわかつた
飢餓とマラリヤと赤痢に悩まされ
戦闘は一度もせずに退却して
戦友と一緒にのたれ死んだのだ

もう、自分が制御できない。そのために妻に負傷させ、結局ぼく自身が、非常に困り、苦しんだことがある。怒らないでよかつたとはくは思った。しかも妻はもう、幸吉のゆく幼稚園を大体きめていたのだ。

そこは教会の幼稚園で、日曜日には、信者の礼拝や会合がおこなわれる。あいだの六日間には、その礼拝堂を教室にして、幼稚園がひらかれる。庭に、砂場と、ぶらんこと、すべり台があつて、それが運動場になる。満三歳になれば、いつでもあずかるので、幼稚園というより、むしろ託児所に近い。子供を三人かゝえて苦勞している牧師の妻が先生で、そのほかには、先生はひとりもない。礼拝堂といつても、バラックにすぎない。道路に面した庭の板べいには「悩みある者は来れ」などの文句を紙に大書し、一面に、はりだしてある。

さしあたって問題になつたのは、すこし遠いといふことだ。幼稚園の多いところで、じき近所に、あたらしいのが出来かゝつてゐる。すこし離れると、二つある。これらの三つにくらべると、途中の道も複雑で、ずいぶん遠い。それでも月謝の安いことが、まずしいぼくたちには、なりよりの魅力だつた。どこでも千円から千二百円かゝるのに、こゝは

て半額以下になつてゐる。妻は近所の人など

僕は生存者の一人に昨日会つて来た

瘦せ衰へた二人の兵隊があふ向け
土人の小屋で寝ころんでゐる
投げ出された既足の蹠は変形し
泥と血にまみれて妙に青白い
「眠るなよ 眠るなよ」

「眠らないが眠い」
「眠つたらいかん眠つたら」
「眠らないが眠い」
「我慢しようもうすぐ誰かやつて来る」
日暮の風が仏のやうな二人の顔を撫でる
思ひ出したやうに懶い語調がつづく

「俺は志摩の波切だ 帰つたらうまい魚
を喰はせるから来いよ」
「俺は近江だよ 湖があつて うまい米
がとれるところだ」
「ああ白米が喰ひたいなあ」
「喰ひたいなあ」
「みんなはどうした？」
「先に後退したよ」
「馬鹿いへ——」

眠いのを我慢しとれば誰か来る」
「眠いなあ 眠い……なあ」

詩集墓 碑 銘

題字・保田与重郎
序・田中克己

今日もし万葉集が編まれるとすると、この詩集は必ず収録されねばならぬ詩集である。インパール戦線に戦死した兄。その兄の死の真相を訊ねて著者は十数年の歳月を費した。言はず著者が詩筆を執るにいたつたのは、初めからティディムの密林に餓死した兄に捧げる饞魂の悲願に発したと言つてよからう。著者は万葉詩人のやうに歌はねばならぬ必然だから歌つてゐる。従つて、巷間の「死の仄」詩にありがちな空疎な発想やら、過剰意識や、詩語の遊戯等の一切を遮断してゐる。影塚されてゐるのは死の真相と時代の真実だけである。

しかもその間、兄の恋人の面影が遺棄し、死の戦場に於いては爆発する諧語が浮沈し、無智な作戦命令に逼走しつゝ、亡びてゆく日本軍の凄惨な真姿が歌ひつくされてゐる。収録するところは精選された二十二篇の詩品であるが、たゞ兄の饞魂にとまらず、当時の日本の饞魂の美事な語をなしてゐる。装幀はまた題名にふさはしく壮麗。戦場の地獄も収録されてゐる。完璧さである。まさに戦争文学の白眉と言つていい。巷間伝へられる傑作と対比されることを希ふ。

頒定価 二〇〇円

に聞きあわせて、こゝにきめてゐるらしかつ

「眠うても眠るな 眠る……なあ」
遠くで忘れたやうに砲声が響く
日暮とともに深い深い睡りに
落ち込んでいったのだ
中隊長戦死 中隊長代理戦病死
小隊長病死 小隊長代理戦病死
生存者は中隊中たつた四人だつた

インパールの南方一五八哩附近
ティディム北方約十軒の山小屋に
あの美しかった二十才の肉体は
もう白骨となつてゐるといふのか
ゆうべの夢を
母が今朝話してくれた
骨だけになつた手で裏口の戸をあけて
「ただいま」といふお前の姿をみると
今夜はその夢を僕が見るだらう
お前よ あの日見送つてくれた
町の人々や親しい友達にだけでも
もれなく帰還の挨拶をしてほしいのだ

お前の墓が出来た
十二年後になつたが許してくれ。

詩集『墓碑銘』より

た。「梅子ちゃんはおぶってゆくからいゝわ。おぶるのがえらかったら、うば車に乗せてゆく。うば車を買おうとして、よかったなあ」と妻は張りきっていた。

「おまえたちの「しつけ」がわるいからやな。いかな」と首をかしげた。

そう言われると、ぼくはしかし「しつけ」がわるいだけなら、むしろ、しあわせだと思ふ。自分としてはずいぶん努力しているつもりでも、自分で勝手に、そのように思っているにすぎない場合が多い。「子供さんをよく見てあげなさいませぬえ」などと近所の奥さんたちがときどき感心するけれど、ちょっと見て、そんなふうに見えるだけかもしれない。それならば、かまわない。「しつけ」だけの問題なら、ずるいようだが、託児所や幼稚園へゆき、いわば専門家の手で「しつけ」をされるようになったら、なおるに違いないからだ。ところが、ぼくには、そうは思いきれないから不安になるのだ。それでも、張りきっている妻を見ていると、そんな不安も、ふとあかるんでくる。それから、希望や期待さえ芽ばえてくる。

幸吉はどういうものか、異様に愛らしい顔をしていて、精神がおさないせいかもしれない。連れだって外出すると、いろんな人が、のぞいて見たり、ふりかえったりする。「ちょっと見てごらん、あのかわいい坊や……」などと話しあいながらゆく女づれもある。電車のなかなどでも、わざ／＼そばまで来て、ほったたをつゝいたり、話しかけたりする人がある。四歳の幸吉のあどけない愛らしさはその日常の詳細を知らない他人には、よけい異常に目立つのらしかった。七か月のとき優良児に選ばれたくらいだから、五体は満足にそろっている。ひたいや頭の形も、いかにも賢そうに見える。近所の人たちも、ぼくたちをうらやましがり、否定すると『そんなことありませんよ。あまり大事にすぎると、家にばかり置いていなさるからですよ。幼稚園へでも行くようになったら、ことばもおぼえて、じきに追いつきますよ』と言うのが常だった。たま／＼たずねてくる妻の父や母も、

『はじめは付添いがあるやろなあ。連れて行って、ずつと付いて、それから、連れて帰ってくる。たいへんやなあ。そやけど、そのうちに、だん／＼なれて、ひとりで行って、ひとり帰ってくるようになる。きつとなるやろ。そうになったら、しめたもんやなあ』とぼくは言った。

編 輯 後 記

九月二十三日。久しぶりで来阪された清水文雄氏にお会いできた。蓮田善明に聞いているの啓示をいたゞいた。十月三日。阪急百貨店書籍部で催された「鏡子の家」サインパーティーで三島由紀夫氏に初めてお会いできた。蓮田と三島氏の関係は本冊の拙論末尾で触れたが、蓮田夫人宛三島書簡、追悼録「おもかげ」所載の氏の考案、その他を拙論に引用させていたゞく謝承を得た。

十月十一日。朝日テレビの仕事で来阪された中河与一氏にお会いした。三年來の労作であった「探美の夜」を脱稿されたので、同じ伝記物に取組む私として慶賀申し上げた。

十月十二日から四日間山陰の旅に出た。お蔭で三島氏著「鏡子の家」上巻、斎藤史女史の歌集「密閉部落」、岩崎昭弥氏の詩集「墓碑銘」が読めた。三島氏の造形的均衡と適度な比喩、斎藤史女史の凛烈な孤絶の精神。それに岩崎氏の鎮魂の熱願は堂々と対抗し得るのに吃驚した。

果樹園 第四十六号(毎月一回発行)

昭和三十四年十一月一日発行

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

池田市野町一六八 小高根二郎 印刷所 同明舎

池田市野町一六八 果樹園社 印刷所 同明舎

定価 三十円

果樹園四十六号 昭和三十四年十一月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

果樹園四十七号 昭和三十四年十二月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

果樹園

第47号

蓮田善明とその死 小高根 二郎
 白居易詩抄 森 亮
 オウムがえし 池 沢 茂
 秋の夜 山根 忠雄

清 澄 堀ノ内 歴
 季 節 福地 邦 樹
 落ちゆくものの 芳 野 清
 歴 史 田 中 克 己
 あるとき 美 堂 正 義
 断 章 浅 野 晃
 「墓碑銘」序 田 中 克 己
 「墓碑銘」評 諸 家

蓮田善明とその死 (田)

小高根 二郎



室内 立像一左、源豊宗講師。右、池田勉氏。
 〃〃 椅子一左、久松潜一博士。右、垣内松三教授
 〃〃 座像一左、清水文雄氏。右、斎藤清衛博士。
 室外 立像一左、蓮田善明。右、高藤武馬氏。

蓮田が上京してから三ヶ月を経た日、つまり、昭和十三年七月に、諸般の準備と同志の氣組が整ったのであらう。「日本文学の会」の名によって、つひに『文芸文化』が創刊されたのである。その母胎であった『国文学試論』が発行されたのは昭和八年九月であったから、まさに五ヶ年の準備期間を経たことになる。

創刊の辞を池田勉氏は次のやうに書いてある。

「伝統の権威地に墮ちて、古典を顕彰するの醇風も亦地を払って空しい。日本精神の声高く宣伝せらるるあれど、時に現実粉飾の政論にすぎず。芸文の古典は可惜、功利一片の具と化して、無法なる截断に任せられ、所謂国文学の研究は普及せるも、故なき分

析と批判とに曝されて、古典精神の全貌は顕彰せらるべくもない。嗚呼、古典の権威は地に墮ちたり。今にして之が復活を想ひ、古典の黎明を呼ぶにあらざれば、我が古典の精神は終に喪はれんのみ。

此に思を致し、我ら相寄りて「文芸文化」の創刊を以てその所信を述べんとす。蓋し、偉れたる古典は生命の頂点に於ける開花であり、高揚せる伝統は精神の醇化されたる成果であること、今更言ふを俟たない。かかる開花と創造とに払はれたる人間の営為と献身とは、之を計量する術もないが、その開花の古典は燦然として今日の我等を指導する。今や我等の義務と責任は、この伝統への心からなる感謝と安んじての信従とであらねばならぬ。寧ろ今日の日に在っては、伝統は神さびて厳しく命ずるを聴く。かく命ずる伝統の何ものであらうとも、内に命ぜらるる厳しさを我等は信ずる。(傍書)されば我等はもはや伝統について語る必要を認めない。伝統をして自ら権威を以て語らしめ、我等はそれへの信頼を告白し、以て古典精神の指導に聴くべきである。

伝統については屢々語られもした。然し伝統をして語らしめ、伝統の権威への信頼を語りしものは近來未聞に属する。これ今

日の義務ある營爲として我等に課題するところ、本誌の刊行によって、その達成を期しうれば、以て瞑するに足る。…後略…

この言辭には池田氏の署名が附いてゐるが、蓮田、清水、栗山三氏も日頃抱懐し、慷慨した志と見なければならぬ。特に冒頭の慷慨である「現実粉飾の政論」「功利一片の具」に化し去って「無法なる截断」に委ねられた古典ないし日本精神とは、三月十七日の蓮田日記に見える「哀れむべし。恐るべし。いきどほるべし。」の似非国粹主義に対する指弾と同じものであらう。古典への感謝と信頼と信従。それが同志四氏の結縁の場であり、悲願であつたのである。いや、この四氏の他に、伊東も参加、ないし、加担を要請せられてある。池田氏の文章に私が傍点を附した個所は、明らかに伊東の詩句に典拠してゐることが、その事実を物語つてゐる。即ち、

「かく命ずる伝統の何ものであらうとも、内に命ぜらるる厳しさを我等は信ずる。」

は、伊東の「わがひとに与ふる哀歌」の内の、誘はるる清らかさを私は信ずる」と、全く同じ心の姿勢と氣組とを現はしてゐる。つまり言へば「文芸文化」の四氏が日本文学に求めた道も、伊東が百合子さんに寄せ

た悲恋を通して求めた道も、全く軌を一にしてゐたとも言へるであらう。

この創刊号に、蓮田は「伊勢物語の『まどひ』を發表し、伊東は既述した詩「稲妻」を發表した。稲妻の照明で照らしたされる部落の少年群。稲妻が演ずる光と闇の鬼遊びを眺めやうとある有明海を距てた肥前と肥後の二少年は、互ひに相見ぬ日にすでに結縁してゐたのであり、その宿命を伊東は歌つたのだと私は解説したが、現に蓮田の「伊勢物語の『まどひ』は、さらに如実に二人の結縁の必然性を証明してゐる。

蓮田はの中で次のやうに論じてゐる。

「日本人の、『みやび』を思ふ美しい精神の尊い血統として伊勢物語が仰がれた疑ひなき事実は、古今集・源氏物語と、その王座に相並んで、日本文学の魅惑を三分し來つた事にうかがはれる。たとひ、現代——否、もはや前代とも言ひつべき現代の、單純な功利的な物質的実質主義の輩には、やゝ疎まれたとしても。思ふに今日、国文学者たちが、殆ど全く、実に殆ど全く、この文学の心をかへりみることを怠り、やゝもすると所謂文献学的基礎研究（そのことは尊敬すべきことだが）に名をかりて、それ

をふさがうとさへ敢てしてゐる冒瀆は、徳川時代の学者に対しても恥づべきである。」

この蓮田が「伊勢物語」に寄せる憧憬と、その真価を黙殺せる明治以降の文学者の不明に対する慷慨は、そのまゝ、伊東の憧憬と慷慨に通つてゐるからである。

蓮田は昨年の高野夏行で伊東の「水中花」の朗吟を聞いてゐたが、その「水中花」の構成こそ実に「伊勢物語」に典拠してゐたのである。つまり序詞一七四字。詩一六九字。詩自体よりも、その序詞の方が字数が多いといふ……現代詩としては未曾有な構成は、八むかしおとこ有けりVの序詩に始まり、在原業平の歌と若干の古今和歌集の歌で結んでゐる一二五話の形式を型つたものである。蓮田はその朗吟を聞いた時、伊東の原典である「伊勢物語」を直覺したに相違ない。伊東にしてみたら、この忘れられた序詩の起用こそ、伊東の詩精神の一部を形成する悲願であつたのである。

伊東は「水中花」を書く四年以上も前に、忘れられた序詩に関する愛着と憧憬を次のやうに書いてゐる。

「古今集が今の歌壇で重要視されること少いのは、反省的、意識的なその精神の表現手法が、日本人のさらりとした茶漬的嗜寄せる憧憬と、明治以来の国文学者や歌人の怠慢と不明に対する慷慨は、蓮田も伊東も全く同じであつたと見ねばならない。蓮田と伊東との結縁は、深くその文学観に於いて根を等しくしてゐたのである。

（昭和七年十二月「巨」伊東静雄—談話のかはり）

好にあくどく見えたかららしい。…中略…古今集のあの定型的な譬喩や序詞や、枕詞などを一度勉強し直す歌人の、明治以来少かつたことは、いかにも残念である。」

つまり、この古今和歌集の譬喩や序詞、とりわけ「伊勢物語」を構成せしめたほど魅惑ある在原業平のそれを、伊東は「水中花」に更生せしめて、明治以来の歌人達の不勉強を勉強してみせたのである。

この「古今和歌集」ないし「伊勢物語」に

白居易詩抄（二十九）

森 亮

秋

大夕焼のくれなゐは野火の炎をしのぎ、晴れ渡った空の蒼さは藍よりも濃い。獸の形をした雲をちこちにうづくまり、引き絞つた弓を思はせる三日月がその一つを狙ふ。

心づくしの雁が北から飛びおとなふ頃ほひ砧の哀しい音が川の南の水際にかしましく響きあふ。
うら寂びわたる秋の息吹ききびしさは、今ほど老けないうちから胸にこたへてゐたものと同じ類か。

新しく官に就く人に

思ひ叶つて新しく官に就く人は如何にも若々しい。

秋の氣澄み、君が身すくよかに、勇み立つて天顔を拝するといふ。

青ぞらに昇りおほせるのに幾つか特別の道がある訳ではない。

いちばん肝要なのは馬をゆっくり走らせ、穏やかに鞭を当てること。

註「秋」の原詩は秋思（四の一五九）で、白居易が六十一才の作。前年八月に親友元稹を失ひ、その年の八月には別の友人崔某を亡くした。秋の哀れひとしは身に染みるものがあつたのであらう。次の「新しく官に就く人」の原詩は送考功崔郎中赴四（四の二〇二）で、居易六十二才の作。年少の新任官者に贈つた勉生の訓へである。

「文芸文化」が創刊された七月の月末に、

昭和十一年十二月に引続き蓮田は伊東と三たび出会ふことができた。即ち、二十八日より三十一日までの四日間、「日本文学の会」が主催して高野山で日本文学講義を催したからである。講師は齋藤清衛博士、京大講師源豊宗氏、東大久松潜一博士、東京文理大教授垣内松三氏であつた。

齋藤博士は、宗祇より利休を経て芭蕉に至る探美の道を説かれた。源講師は、美術史から見た源氏物語を究明した。久松博士は、国文学の源流としての国学を論じられた。垣内教授は、日本文学精神史序説として漱石の間隔論につき論及された。聴講者七十名。伊東もその聴講の一人として加はつたのである。伊東はその講演の感想を、京都府与謝郡府中村に避暑してをられる恩師源原退蔵博士に次のやうに書き送つてゐる。

「…前略…七月の末からこの月の始めにかけて高野山に行きました。文芸文化といふ難

誌の主権で、久松・垣内・斎藤の諸氏が講習をなされたので、大へん誘はれて行きました。自分が勉強してゐませんのでエトランゼを感じました。…後略！

この書簡は八月七日に書かれてゐる。七月三十一日講筈が終了してから、三、四日、伊東は蓮田・清水・栗山・池田四氏と共に遍照光院に滞留したのであらう。その時、おそらく伊東は、頼原先生に書き送った不勉強を感じたほどのエトランゼぶりを蓮田に告白し、蓮田は既述した文学観の結縁から、理論ではなくその理論の体顕者としての詩人伊東を激励するところがあつたであらう。

蓮田は伊東・栗山・池田三氏と別れた後、清水氏と一緒に一端帰京し、十四日頃長男晶一君を伴つて再び西下帰郷してゐる。亡父の初盆だったからである。その帰郷中、植木と帰京途路、東京の敏子夫人宛に出された書簡が四通残つてゐる。

昭和十三年八月十六日熊本奥鹿本郡植木町より東京市世田谷区祖師谷二ノ四一九蓮田敏子さん宛はがき
「無事昨日ついた。戸畑から道明さん(註・次兄)と子供みんな来てゐた。今日帰られる。」

母はこのごろ割にいいさうだが、腹は太鼓のやうにふくれてゐる。大変よろこばれた。晶一は割に元気だし、昨夜トモヨさん(註・敏子夫人の妹)とねて二丁目(註・敏子夫人の夫家)にとまつた。今日はハダシで昭司(註・道明氏)たちとどこに行つてゐるやら。東京でも見られぬハツツさだ。やはりほんとにコダハリのない生活でうれしいらしい。二丁目もみんな元気。今夜丁度山鹿燈籠なので、晶一と昭司をつれて山鹿に行く。丁度いい機会だし、晶一もこれで一度は山鹿燈籠を見られるわけ。勿論泊らないで(註・山鹿市に長姉(註・道明氏)の長男)早く帰るこちらはよく照つて暑い。二人とも栄養とつてゐなさい。」

昭和十三年八月十九日植木より前掲宛はがき
はがき着きました。太ちゃん(註・次男)もさびしがつてゐるでせう。晶一も元気に遊び暮してゐます。頬べたや、腕の痛みは、お父さん(註・敏子夫人の)にみていたゞいたけれど、一寸分りません。大したこともなささうです。咳がやはりやみません。これもよく診ていただきましたが、三月よりもずっとよくなつてゐることは事実ですが、これもはつきりしません。西瓜がこちらはおいしいです。母も大



植木尋常小学校三年生の記念写真
生徒最上列左端の白矢印が蓮田善明。
椅子席中央の白矢印が横手(旧姓淵上)卯作先生

の方が近い。裏の御堂の脇に弓場が出来て朝晩町の人たちが来てやつてゐる。」

昭和十三年八月二十六日、大阪から前掲宛はがき
「今大阪に来た。明日奈良をめぐり、夜の十二時頃に祖師谷につく。」

蓮田は小学三年の晶一君と十一日間ばかり家郷に滞留したのである。

その間、二月に夫を亡くしてからめっきり老衰を深めた六十九歳の病母ふじさんねんごろに見舞つてゐる。又、練病質の晶一君を義父の医師井桂吾氏に幾度か診てもらつてゐる。ときを訴へる頬ツべたや腕の痛み。それとなく注意してゐると、気附かれる咳……

…。中学時代一年休学をしたことのある蓮田には、一つの心配の種であつたに相違ない。

体このごろいいやうですけど余りいいといへない工合です。女中が来ました。今朝は自動車隊が来て(二十五人)朝食をとつてゐます。晶一が表で「太ちゃんがゐたらどんなによろこぶだらう」と言つてゐるのはさすがに晶一らしいところですよ。二十五日ころまでゐて帰りませう。帰りに大仏(蓮田註・奈良)さんをみせてやらうかと思ひます。」

昭和十三年八月二十日植木より前掲宛はがき
「元気はいかゞ。太二にも目がはなせまい。さびしがつてゐることだらう。晶一と二人になると太ちゃんの噂や、母ちゃんの噂をしてゐる。昨日出征兵を送りに駅に行き、それからアブンダ川(註・龍田川)に行き、水も温いので泳がせた。とてもよるこんで、勇敢にとび込むのである。水の恐さをしらない勇気がうれしかった。三十分ほど帰つた。昭司、賢二(註・道明氏の次男)山鹿の子(註・長姉の次男)と四人なので、困る位に眠かたで、よく喧嘩もする。夜は四人の子供と一つ蚊帳に寝るが、四人の子が蚊帳の中を勝手にころげ合つて仲々の壯観である。今夜くらい晶一をクワツドウにつれて行かう。母には姉がつききりで看ごしてゐる。僕は

しかし、甥達と一緒に裸足のまゝ、田畑や山野を駆け廻つてゐる元気な姿に、安堵してゐる。とりわけ、泳ぎを知つてゐるわけでもないのに龍田川に飛び込んだ勇敢さに、蓮田は莞爾と微笑んでゐるやうである。それには理由がある。

蓮田自らが晶一君と同じ小学三年時代、剛胆さで全校を驚倒させたことがあつたからである。それは試胆会の夜のことで、小学校から二軒あまりの所にある新墓地。その墓前に花を捧げて帰るのが試胆の企劃だった。我と思はん者、各学年から数名づつの志願者があつた。出発は午後十一時半。木草も睡る沈々とした真夜中の徑を通り抜けて、無事に木の香も生々しい卒都婆に花を捧げ得たのはたった一人だった。六年、五年の高学年生ではなかつた。四年生でもなかつた。それは三年生の方が蓮田善明だった。これは当時十六歳の若さで担任だつた横手(旧姓淵上)卯作先生の懐旧談である。

盛んに水しぶきをあげる晶一君の勇敢さに己が少年時代を回想し、練病質とはいへ、さすがにわが子であると……、蓮田は微笑んだらう。
又、蓮田は八月十六日の夜、山鹿神社に紙だけで作つた燈籠を奉納する山鹿燈籠——景

行天皇が熊襲討伐に行幸あった日から今に伝へるといふ年中行事——を見せに晶一君を伴ってゐる。少年時代、尾上松之助の忍術物がかゝった活動写真館にも案内してゐる。帰京の途次には奈良の大仏も拜ませてゐた。

六月九日には、国民政府はすでに重慶に退避してをり、日本軍は一路漢口を目指し進撃し、戦線は拡大の一途を辿つてゐた。かゝる日、蓮田はいづれ遠からぬ応召の日を覚悟し、もしもの場合も予想して長男の晶一君だけには故郷を知らせておきたかったのであらう。

オウムがえし

池沢 茂

幸吉は学齡に達しても、会話が、全然できなかつた。日常生活にどうしても必要な意志を伝達するときにも、たいてい単語に「か」を加えるだけで、すましていた。お茶がのみたいときには「ブウカ、ブウカ」と連呼する。大小便を訴えるときにも「ウンか、ウンか」「シッコか、シッコか」と同様の語法で表現する。この「か」は本来、たずねる意味の疑問詞だろうが、幸吉は単に、強める意味の感

嘆詞に使っているのだった。はげしく求めるときには「ブウカアー」「シッコかアー」と、しりあがり「か」を張りあげ、引きのばして使用する。もつと文章の形をなすようになつてからも、こちらからたずねることをそのままくりかえすこの語法に、やはり変りはなかつた。サジがうまく使えなくて食事しにくいときなど、ほくか妻かにむかつて「ごはん、たべさせたげよか。たべさせたげよか」と言うのだ。おもちゃや菓子など、なにか買つて欲しいときには「買つたげよか」と言う。どこかへ連れていって欲しいときには「連れてたげよか」と言う。すべて、こちらからたずねることをそのまま、自分の意志表示に使つていたのである。でなければ、なんにも言わずに、実際の行為だけで表現した。大小便がしたければ、だまつたまゝ、ほくか妻かの手をひつぱつて、便所のほうへ連れてゆく。通りすがりに、たま／＼おもちゃなど欲しくなれば、やはり、だまつたまゝ、ほくか妻かの手を引いて、おもちゃ屋などへ入りこもうとする。

ほくにも妻にも、心配したり悲観したりするのを通り越して、たゞもう、ふしぎだった。世のなか一般の、おなじ年ごろの子供たちと比較して、ふしぎなだけではない。おなじ家

秋の夜

山根 忠雄

夜の机上に

ギリシア彫刻の写真集を見る

しめやかに肩をはづれたキトンから

ひそやかにあらはな乳房が覗く

水の流れ……

風のそよぎ……

ヴィーナスの美は

「清純」と「官能」とをあらはすといひ

ロダンの「接吻」には

「情熱」と「貞節」との二面があるといふ

生活の機微を掴むためには

やはりそのやうな秩序がなければならぬ

私は窓をあけて

沈静な秋の夜気にふれようとする

註 キトンはギリシアの着物である。

清 澄

堀ノ内 歴

登るにつれて草生が深うなる
紅葉した片側丘に
樵徑が見失われずにつづく
頭上で空の青が太陽を傾かせ
ひたきも囁らない
あるかなしの喘ぎ
背後の眼下が入江 小舟が一艘
こぎ寄ってくる
ふと腕時計が恥らわし気な音
いまや天地の真只中で
鳥獣には神々しい糧が
与えられていて
私が微生物の一種に転生を遂げている
ということを信じるのに
何の障りもない

で生まれ、おなじ家で暮らしている妹の梅子は、四つちかくも年下なのに、二つになるともう、ちゃんと、自分と他人を区別している。『ごはん、たべさせてちょうだい』とねがいを、『ごはん、たべさせて！』とせがむ。『アメちゃん欲がしい』と欲望を表現し、『アメちゃん買って！』『アメちゃん買いに行こ』とキヤラメルを要求する。人形に対しては『赤い洋服、着せたげよか』と言つて着替えをさせようとする。ときには、泣いている兄の幸吉の顔をのぞきこむようにして『泣いたら、あかんよ。おかしいからね』などと、ませたことを言う。近所の女の子たちのなかには、もつと知恵のすゝんだ子もすくなくないものゝかたことなりに、とにかく、語法には、あやまりがない。返事もあり、質問もあつて、簡単なことなら、会話も、もちろん成立する。上位、同位、下位などの他者に対する自分の家族やその周囲のなかの自分という形で、社会意識が、おさないながら、ふつどおり順調に、形成されつゝあるのだろう。幸吉にはこれがない。自分に対する他人や社会の関係が、全然といつていゝほど存在していない。カンや棒ぎれやビン、クギやカギや輪の形をしたものなど、奇妙なガラクタを収集し、取られまいとして守る欲望だけが目立って、そ

れ以上の精神はなか／＼宿らうとしない。よるこびや悲しみ、たのしみや苦しみ、満足や怒り、そういう感情はあつても、人間としての会話がな。近所の子供たちはもちろん、妹の梅子とさえも、この重要な一点で、まろきり違つている。

ほくも妻も、そういう一般の、幸吉とくらべて、あまりに違いすぎ、あまりに優秀すぎる子供からは、そつと目をそらせてしまふ。そらすまいとしても、そらさずいられなくなるのかもしれない。そして結局、しば／＼自分たち自身の影を、じつと見つめるようになる。ほくも妻も、幸吉と、いろんな点で、非常に似ているのだ。ふたりとも、口がへたで、たいていの人に圧迫感をおぼえ、人なかに出るのをこのまない。つきあいが極端にとほしく、団体生活ができない。ふいに、はしやいだり、ふさぎこんだりする。おぼえたり、なれたりするのが、非常におおくれる。おとなしく、やさしいようだが、へんにわがまゝで、とき／＼感情を爆発させる。それでも、ほくたちには、やっぱり、ふしぎでならなかつた。ほくも妻も、一般の人たちとおなじく、幼稚園や小学校なんかには、その年齢がくると、しぜんに引きあげられている。口がおもく人見知りをするといつても、おさない時代にふ

さわしく、たずねられれば答え、答を求めてたずねるのに、とりたてて不つごうがあったとは思えない。百人のうち、おそらく九十九人以上の者に当然な成育や会話だろうに、それが幸吉には、まったく与えられていない。

「遺伝かもしれないなあ。そういう劣性因子がぼくらのなかに潜在しているんだらう。でなかつたら、腹のなかにいるあいだから、なにか病気をしたのか。脳が出来るときに、ビタミンかミネラルかタンパク質か、なにかそういう、脳の成分になる重要な栄養素が欠乏していたのか。酸素が不足した場合にも、脳の発育がさまたげられるそうやが……とにかく、脳のどこかが故障してるんやなあ。それがどこかは、医者にも、はっきりとはわからない。現代医学には、まだそれだけの力がないんやから仕方がないけど、治療の方法も発見されていない。しかし、とにかく、脳のどこかの、ある一点が、へこんでいるか、穴が空いているか、マヒしているか、こわれているか、してるんやろなあ。生まれつき体のよい者があるのとおなじに、脳のよわい者もあるんや……」

結局ぼくは、そう言うより仕方がなかった。そして妻も、それに対して、反発も怒りもなく、たどたどしくより、仕方がなくなっていた。ところが、そう断念して、うなだれ、だ

まりこんでしまうと、ぼくたちはまた、はつとおどろかされた。幸吉はもつとおさないころから、文章の形にはならなくても、単語だけなら、わりに複雑な名称でも、案外多く言うことができていたのだった。

『墓碑銘』序

田中克己

この集は昭和十九年八月十五日にビルマのティディム附近で戦死したと、公報によって伝えられた兄君を悼んで、弟なるわが友岩崎昭弥君が涙もて綴った作品によって成った。私がこの兄弟の故郷なる彦根にゐた間はごく短かったが、ある日、昭弥君は私の宅へ来て、ビルマの地図を見せよといひ、見せるとさがしあててそこを指さして見せた。ビルマの西境チン丘陵を兩断して流れるマニプール河の東岸の小さい町で、河に沿って北に五〇キロもゆくとインドのアッサム州である。昭弥君の兄君はこの町の北一〇キロほどのところで戦死したといふのである。

私はビルマについても、ビルマ作戦についても、なに一つ知りはない。しかし戦争のはじめ行つたマライでは、後にこの方面の司

季節

福地邦樹

先輩達が真夏を愛したのは
不遇な時代の
自虐の精神がひそんでいたに違いない
はげしい陽光のもとに
彼らが好んだ忍従の美しさを
私はもうそのままには信じない
私はむしろ春を好む それも早春の時
耐えて来た冬の追憶のきびしさ
ゆるむ大気のおだやかさ
期待の思いの新鮮さ
すべて季節のはじまりには
おおらかな意志がある
私にもし漏れる本能があるとすれば
それは明日を願う心なのだ

落ちゆくものの

芳野 清

僕の中で絶えず崩れてゆくものがある
白ひ芙蓉の花のやうなものが

肯定の意志を喪ひ
呆然と佇む時に
歓楽の最中

さよめくものの空しさに気付く時に
それははら／＼と
胸の裏で散華する
白磁の輝きに似た

誰ともしない掌の招き
自らを朽ちさせる誘ひ
あゝなほも

うづ高く 僕の階の前に
落ちゆくものの残骸の確かさに
野分けよ 吹き去れ
涙の時雨を伴って

令官となつた將軍の勇猛果敢だつたことだけは十分きいてゐた。ビルマ作戦が失敗し、インド進攻どころか、ほとんど全滅に近くなつて退却しなければならなくなつた実状は、戦後をはじめ承知した。はじめから軍当局はそれを予想できなかったのか。それについての弁解はききたくないが、軍当局にはその義務があるといふ考へる。

辻政信氏の「十五対一」は再三読んで、同氏が軍参謀として、なすべきことはなしたとの説は承知した。はじめにインパール作戦に反対されたといふ小畑信良参謀長には、シベリアから帰られたあと、昨年をはじめ十数年ぶりにお会ひできたが、その時は、ビルマ作戦についての御意見を承るひまをもたなかつた。

ともあれ岩崎君の兄君の出征は十九年の三月で、これはおろかなる我々が陥落まぢかにありと考へたインパール攻撃の開始された直後である。インパール作戦に最初参加したのは「烈」「弓」「祭」の三箇師団で、このうち「祭」は京都師団であつたが、インパール作戦難しとみてか、増援されたも一箇の京都師団「安」に、兄君が配属された。インパールにまでせまつた三箇師の運命は説くまでもない。その潰滅のあと、敵と対した「安」部

隊も、同じく食糧、弾薬の欠乏に、敵襲よりもはなはだしく悩まされた。戦線に加はつてから八月十五日まで、もし実際に生きてゐたとしたら、兄君はおそらく半飢餓状態で戦闘しなければならなかつたらう。武器とても優勢な敵の兵器、さらには飛行機戦車の攻撃に對し、ただ銃剣あつたのみであらう。

これは肉親として、硝煙彈雨に斃られるより、さらになほしい、いたましい戦の図である。昭弥君の詩には、この肉身の慟哭がよく描けてゐると思ふ。しかし文学的にどう描けてゐるとかまはないと作者はいふであらう。ただ老母とともに、兄君の恋人とともに慟哭するだけで、気がすむのだと。思へば私も多くのよき友を失つた。肉親の慟哭はさらに声高いことを、この詩集は私にも思ひしらせてくれた。

ビルマにも、ガダルカナルにも多くの遺骨がその日のままに眠つてゐる。私どもは骨の納められてゐない墓を日本中のいたるところに見いだす。そしてその墓がみなそれぞれこのやうな墓碑銘を刻まれてゐるのだ。字で書いてないのは涙痕もて刻まれてゐるのだ。そして字で書いた場合は、みなこれと等しい聊々たる響きをつたへるにちがひない。それにしては昭弥君が兄君の死を聞いてから十年が

経過してゐる。この長、あひだ彼は、のりと種とを打ちつづけて来たのだが、その手が血まみれになり、そのひびきで彼の心肝が凍らせられたことは、鈍い私にもよく感じとられた。兄君の霊がこの贈物を享けられんことを。

詩集「墓碑銘」読後感

…御作拝読しながら、そこにこもったひたすらなものがそくそくとして感じられるのでした。墓碑銘とはよくつけてあると思ひました。私は読みつづくと万葉集の巻五の雑歌の中にある山上憶良の歌を思ひました。それは、肥後国益城の人、大伴君熊襲といふ一青年に代つてうたった歌で、長歌一、短歌五首ですが、この旅で病死した青年の気持をよくつたへてゐたからです。あなたの詩もあなたの兄さんそのものとなつてのかなしみが、苦しみが、やりきれなさが、つたへられてあつて、胸をうちます。

「月明」「道」そして「赤い花」いゝですね。ほんとにいゝものをいただきました。いつまでも愛蔵し、また友人にも見せたいと思つてゐます。

荒木 精之

の、かなしみが、今あなたの詩集の中に出口を見いだして、ふき出してきかたでした。熱涙のふき出すままに任せて、私は一瞬に十数年の鬱結を成仏させえたような、すがすがしい気持になりました。詩の冥加のありがたさというものでしょうか……

池田 勉

墓碑銘、拝受。病氣をしたりしてしまいましたので、お礼ものびのびになっておりました。

兄君のみならず、小生の戦歿した友人知人（その多くは、というより殆んどは、外地であります）の墓碑銘とも、読ませていただきました。合掌。

小生は関東軍直轄の鋭敏響導戦車旅団におりましたので、戦訓として、コヒマ、インパール、マンダレー等の全滅撤退のこと、図上でしばしば講義をうけたことでした。……機械化部隊にいたせいか、なまなましく貴詩の場面情況など、浮んで、胸のうずくのをおぼえました。……

火を吐く戦車へけふも突っ込んでゆく青春たち……

と貴詩にあります、たしかにそういう青春があったのだと、今は、なにか不思議な気さえます。だれにむかつて、投げつけてい

さつそくに拝誦し、身内にしみる深い感銘をうけました。私には二つの縁のような思いがしますが、昭和十九年三月下旬、あなたの兄さんが、インパール目ざして字品を出港された日、補充兵の私は召集をうけて、姫路へ入隊したのでした。そのとき、インパールへ征くという運命の中に私たちも、まきこまれていたのです。しかし病弱の私は、海をわたる前に帰されて、今日まで生き長らえることになったのですが、そうした共通の運命の中にいたもの一人として、御詩集を拝誦し、いい詩を書き、りっぱな詩集を作つて下さいましたと申し上げたいのです。あの頃に、私たちの胸をひたしていた感慨が、御詩の上にふたたび熱くふきかえしてくる思いがします。

あなたの兄さんをつれていった大きな運命のいぶきと、それをみずからの運命として征かねばならなかった人間のかなしみが、今もありありと、私の胸に目をさましてきます。人間のかなしき、この生きるものの哀しさのために、私は人間をいのちを、大事に、大事にしたいと念ずるのです。

あれから十数年、私の身内の奥ふかくに結ばれて出ようにも出る場になかった、熱いも

歴史

田中 克己

もう遠くなつてしまつた土地に大きな河があり、百千の小川を集めたといふので、女真語で Tumen (一万) 江と呼ばれてゐる。この大河の兩岸には十七世紀の初めまでは、女真族が住んでゐて、オランカイと呼ばれ、加藤清正の率ゐる日本軍もこれと遭遇した。しかし彼等の中に巨人が現はれ、来いと呼び、来させよと弟や息子を遣はし（巨人はその後、この弟や息子を殺したのだが、それ以来この地方は朝鮮人の地となつた。呼ばれたオランカイは瀋陽から北京に移り、やがて巨人の後裔とともに女真語を忘れ、女真の性格を喪失した。わたしは北京で会つた誰かれを思ひ出しながら、この話を論文に書いて秋の数夜をすごし、全く疲れてしまつた。疲れた理由は老年のせいだらうか、勉強不足からだらうか、私にはわからない。

い怒りなのか。……

貴詩は、私たちの青春の墓碑銘なのかもしれません。幸い、生き長らえてはおりますものの、私たちが三十五万両のお棺、と呼んでいた戦車の轟音が、まだ時折りきこえるような気がします。これは、決して勇ましいものはありませんでした。

墓碑銘、座右のものとして繰返し繰返し拝誦いたしたく思つております。

石浜 恒夫

過日は、御詩集「墓碑銘」を頂き、ありがとうございます。たいへん感銘深く読ませよう頂きました。

ぼくは中支に従軍しましたとき、南京地区の警備を「祭兵団」と交代した訳ですが、舟の上でビルマへ行くという「祭」の人とすれ違つたりしました。

それでビルマ方面戦闘のこの記録詩集といった感じのものに、特に心を惹かれた訳です。あなた御自身のことかと思つていました（果樹園で拝見しました時は）

戦後何年経つても、何らかの意味での戦争の傷痕は消えませぬ。時にはこれは甘美な痛みでさえあります。では今後の御清観を祈り上げます。

伊藤 桂一

…私は自分が兵隊にとられたせい、戦争物を読むと興味をそゝられます。そのくせ、戦争物を書く人を、なんとなく毛ざらいます。あまりに戦争がきらいなので、そのそばへ立ちよるのもいやなかも知れません。しかしこの「墓碑銘」のまえには頭をたれました。お兄上はしあわせだと存じます。この作品をまとめられた御心情を思うと、ありがたくて涙をさえおぼえます。

お兄上とおなじく、あほうな戦争に引きずり出され、遠い戦場に枯れ果てていった人は、どれだけ多いか知れません。しかもその大部分の人たちは、私を実際そうしているように、なんとなく毛ざらいます。かたずみに押しやられ、黙殺されています。そうして結局、そのまゝ忘れ去られるにちがひありません。そういう不幸な人々、それから、その周囲の人たちは、この「墓碑銘」に接したら、どんなによろこび、ありがたがることでしょうか。果樹園にはいろんな作品が発表され、詩集も幾冊か出ましたが、この「墓碑銘」のほうに後世に伝えられるものとなる気がします。……

池沢 茂

あなたの詩はこんどはじめて拝見したので
すが、すでに一家の風格をもつ力量ある方だ
と思えました。新らしいひとの詩集のなかで
近ごろまれな感銘と詩のよさを味わいまし
た。これはあなたが亡くなった兄君への愛の
深さと哀しみの重さが、詩としてこり、ひと
を打つのでしようが、それと共に、あなたが
詩人としての素質に恵まれ、表現の的確な技
術を身につけていることも疑いありません。
ところで田中さんの影響が色濃くでているよ
うに思いましたが、これも田中さんの傾倒ゆ
えであるかと私は納得いたしました。田中さ
んの序もこのころのこもったよいものです。：

大木 実

御高著「墓碑銘」拝受いたしました。

巻頭の序詩を読み、なにかジーンと胸にひ
びくものがあり、そのまま通読してしまいま
した。田中君の詩風に似たものがあり、清潔
な詩魂をうれしく思いました。

栗山 理一

詩集「墓碑銘」ありがたくいただきました。

「果樹園」で時々記憶に残ってゐたあなたの
詩と、これは、わるい言ひ方かもしれませんが
が——全くちがってゐました。感動をあたへ

る、その強さが、段ちがひです。原因は、詩
は、特に、今後は「詩集」といふ形が必要で
あるためでせう。なるほど「果樹園」の時
は、作者の意図が、全くかくされてゐたのだ
から——僕がわるいんではないでせう。よか
つたですね。立派な墓碑銘です。

小山 正孝

先日は「墓碑銘」有難く頂きました。御令
兄へ捧げられた挽歌、一つ／＼身にしみて読

あるとき

美堂 正義

降り止んだ木の葉の露に
太陽はキラキラと輝いてゐる
もう蟬が啼かなくなった山では
小鳥のいろいろな声が聞えてくる
鳶 目白 十四雀 かけす
私の足下から飛び立つ小鳥
ルリ色の羽を目に残したまゝいつてしま
った
黄櫨の紅い葉は

みました。

地図や戦記によって、兄君の歩き傷つき倒
れられたビルマの大地に、自ら身をおく思ひ
で追体験された悼歌の発想は未曾有のもの
とみえました。「ビルマの壟琴」の水鳥上等兵が、
ふと兄君ではないか——といふ幻覚にとらは
れたりしてゐます。この稀有の鎮魂歌をうけ
て、英霊よ、安らかに眠り給はむことを。

清水 文雄

「墓碑銘」感動して拝読しました。「親切
な嘘」のあなたにある兄君の真実を、移動す
る部隊と共に描いて行った強烈で特異な話。

「雲灼くる光うけとめてパゴダ立つここ過ぎ
征きて軍還らず」にはダンテの地獄の銘文を
さへ感じとりました。田中克己君の序文にあ
る「この長いあひだ彼はのみと槌とを打ちつ
づけて来た」が、一層作者の並々でない打ち
こみかたを伝えてをります。

まだお会いしたことのないあなたの御健勝
を祈りつつ。

寿岳 文章

ごぶさたしてをります。先日は御詩集「墓
碑銘」をお送り頂き有難う存じました。わた
しも、以前より田中克己氏の詩に傾倒してを

りましたので御詩境よくわかります。とくに
「イムパール」にて、叙事詩のような展開を
試みてをられるのを、感銘して読みました。
「西康省」を思い出すとともに、中勘助氏の
大別山の戦いをうたったものなどを思い合せ
ました。体験のないよさというものもあると
思います。ポキポキした記述風の展開は、や
さしいようでむつかしいですが、「調べられ
た詩」に、そのよさを発揮すると思ひます。
「道」における幻想との組み合せも内面に迫
ってよいものと思ひます。悼辭としての試み、
深い哀悼に詩以外に感動します。これだけの
持統は容易なことではありません。

杉山 平一

：田中克己さんの序文、貴君のあとがき拝
読。私はあの愚なる太平洋戦争を回顧し、憤
懣限りなきを又感じました。本当につまらぬ
ことでした。多くの人々——親しく敬うべき
人を喪ひました。御作品切々胸を打つものあ
り、とても一気によみきれません。「兄に」
の序詩、目がしらが熱くなりました。御兄君
の御冥福を祈ります。……

田中 冬二

戦場の御体験から滲み出た御指導により岩

再び会ふことのないひとの着物を
鮮やかに蘇らせる
風がざわめきながら過ぎ
すべてが遠い想ひ出のなかに埋められて
くり返し 悲しみだけが残り
傷いた私の心に激となって沈む
小さな木の実は熟れ
そこだけが傷痕のやうに浮んでくる
私は幸せであらうか
いつか私は幸せであつたらうかと問ふ
記憶がとぎれとぎれにひつかくる
素早く過ぎ去つた青春の日々の
星の月のやうな淡い色彩

崎君見事な詩集を完成し、亡き御令兄之英靈
も浮ばれる事と存候。

その御名前が正信さんであり同名之誼みと
ともに、筆には尽し難き御苦難之状が、あの
戦場を知る小生には、惻々として迫るもの有
之候。

犬死と考へられた太平洋戦の結果として、
アジアは六つの国々が、アフリカにも多くの
国々が雄々しく独立し、ことにインパール
の苦戦がインドの独立に何等かの因縁とな

り、正信君之上にビルマが新興の国として育
つてゐることで、同名之英霊に一片之回向を
捧げ度氣持に御座候。

しかし御自身之心はこれだけでは慰められ
るものではなく、生き残つたもの、特に私は
同じ戦場で安兵団と苦勞を共にしただけに、
御両親之思ひ、御令弟をまぶたにえがきなが
ら、若い生命を失はれた正信君之心中を人一
倍御察し致候。

戦争を再び起さない事、生残つた一人とし
て之使命を果して、御回向致度氣持に御座候。

辻 政信

：実の所、一作／＼果樹園誌上で拝してお
ります時は稍々安易な企ての如くにも、私の
愚識で、見過しがちのときもございましたが、
一卷と今成されてゐるものの、深い一すじの
ものに頭垂れ、熱いものを促がされ乍ら読み
及んでおります。不思議に存じますことは一
巻凡て、兄上の御体験は斯くありしか、との
御想像上の御創作詩と云う、作詩作法上嘗て
見ない不思議の手法——此れらはともすると
平俗の概念語の羅列になり勝ちと思われま
すのに、貴兄の場合は、それらの内容が御自身
の純粹体験からの展開としか思われないう
ら、強い現実感に依る迫真性を以て繋つてま

います。これが何としても不思議の所以です。思いますに、これは如何に貴兄が御令兄への御傾倒が深いかを証しておりましよう。追慕の情と云うものが斯くも岩壁であり得ますこと、現今世上に於ける不思議さと存じます。只序詩で気になりましたこと。親近の呼称を強めるための「お前」は、むしろやはり「貴方」にしてみられてはどうだったかと存じ、私勝手に心の中で「貴方」と直して読ませていただきました。これは私だけの愚見です。……

堀の内 歴

……「墓碑銘」は、一読して、非常に心うたれました。殊に「道」といふのが好きでした。ぼくは彦根も知ってをり——といつても戦後荒廢した駅前を通り、お城を見にいったことが一度あるだけなのですが、学生時代以来、鹿兒島・東京間で何度見たかもしれぬあの城のあの町を、これからは大兄や、いや、大兄の「墓碑銘」を思ひ出さずには通れぬことだらうなどと思つたりしました。小生は、愚弟をヒリッピンでなくしてをり、その弟の生年が、御令兄と御一緒だったことなども考へてみたりしました。

厚く御礼もうしあげます。……

前田 純 敬

昨日詩集「墓碑銘」手許にとどきました。御厚意、誠に有難う存じました。紙、印刷、装釘等、みな良好で、立派な内容を盛る器としてまづまづ満足していい出来栄えかと思ひました。順を追って読むのが本当でせうが、

断章

浅野 晃

かれらをつつむ悲運の外観を剥ぎとれよ
かれらに与へよ 清らかな泉と
山上のかくはしい朝の空気を
かれらを曠野の秋へといざなひ
その足でつめたい土をふませよ
つねに変わらずすこやかにあるものに
これら熟れた果実を取らせ
言葉のそとにのがれ 形もて語らせ
夕映の空に見えない炎をあげしめよ
海には重いとなみがある
星には天がある

森 亮

先日は御高著ありがとうございました。本日ようやく拝読。昭和十九年三月二十五日」という作品にひどく感動し、そのまゝ一気に拝読いたしました。全篇に肉親に対するはげしい愛情が流れていて、しかも作品としてのきびしさ、見返しや挿入図の配慮など、ちかごろ誠に完璧な詩集かと存じます。今後とも御健筆の程祈り上げます。

山中 散生

立派な御詩集「墓碑銘」を御恵送戴き誠に有難く感謝に存じます。失われた日本への美しい墓碑銘と感動深く拝読致しました。何時までも机辺に置かれてテルモビュライの詩碑

のように、私の心に祖国への思いと共に逝かれた人々の、その思いを伝えて呉れることと存じます。心から御礼を申し上げます。

吉本 青司

(アイウエオ順)

編輯 後記

十月十八日「古典と現代」といふ同人誌の寄贈を忝くした。内容を拝見すると東大系の若い国文学者の集団らしい。塚本康彦氏が「文芸文化」といふ主題で書いてゐる。

「戦時中情報局に勤めていた平野謙の回想に依れば、文学報国会の席上、時局的にいかがわしい作品を濫作していた舟橋聖一や丹羽文雄を蓮田善明という人物が一喝したという。如何なる一喝であったかは、その蓮田なる人物が終戦直後馬来のシヨホールバルで陸軍中尉の軍装で自決したというエピソード一つを得れば、容易に推測できるし、その人物像も忽ち結ばれよう。……

「文芸文化」——これは誌名であると念押さねばならぬ程それは古びてしまった。しかし奇妙なことに一旦雑誌の「文芸文化」と分ると、それに集まる憎しみの情は昨日の様に新しい。事態は何処の研究室、図書館でも同じであろうが、「文芸文化」は製本もされず

呼べ 呼べ

新たな日を新たな岸へ
永遠の韻律にあはせて
天の歌をひびかせるのだ
いま曠野が語る 海が語る
かれらも語る 形と影とで
この満ちてくるもの
そして溢れて迫るもの
不死なるものに道をひらくものでは
よごれた水を若返らせ
疲れた歳月から元気な生を呼び戻せ
ふかい眠りを眠れよ
うつくしい夕からうつくしい夜をつくれ
うつくしい朝をつくれ
大いなる真昼をつくれ

塵に埋れて眠っている。しかしそれが禁忌すべき採殺すべき類のものだという定説は打寄せる波浪宛らに鮮かであり厳しくある。考えてみればこれは戦慄に足ることではあるまいか。肝心の内容が不問に付された儘に、憎悪の情と定説が語り継ぎ言ひ継ぎ行かれるという事態は。僕は借用書に捺印をし、長い書架

の隅から雑誌を引っ張り出し、風呂敷に包んで研究室を出る間、(今更何の意味があるんだ)という好奇と嘲笑の眼を浴びたことを忘れないが、その時候の脳裏に浮べていたのは次の文章であった。

「私は誰に向つても説く必要を認めない。唯私はそんなことを無視して、幾百載を隔て、幾万人を超えて相通する高邁な智を信ずるのみである。私が茲に古今和歌集のことを言ふのも、古今和歌集を再認識すべしなどといふのではなく、私は唯古今集と相語ることに昂奮を感じるからである。」

これ余人ならぬ蓮田が、過ぐる日中戦争の断塚で蠟燭の灯を頼りに書き綴り、「文芸文化」に掲載された『詩と批評』——古今和歌集について——の一節である。国を挙げて「万葉」讚歌の時代に、優美と頹唐の『古今集』に生命の燃焼を賭け、分っている人、進んでいる人と「默契」することだけを希望したという心情は、既に容易に成った彼蓮田の人物像を大きく崩すと思われる。……文学者の市民としての資格は言う迄もなく、彼が書き綴ったものにこそ存するであろう。彼の功罪は生身の彼の嗜癖や行為から判ぜられはならず、生身の彼が文学によって鎮められ認められ、別種の人格の彼となつて創つた

仕事に於て云為されることが望ましいのである。……」

この文章は今年四月に書かれてゐる。拙論に先立つこと四月である。かうした正論が、この國の若い文学者の間に起つてきたことはうれしい。拙論の意図も強ひて蓮田を正当づけるためではない。敗戦によつて崩壊し埋没せしめられた真実を、もう一度掘り出して次代を継ぐ人々の正当な批判に委ねたいといふ悲願に発してゐる。

十月二十一日江藤淳氏よりおたよりをいただいた。氏は中学生時代に古本屋から伊東静雄の第二詩集『夏花』を偶然買ひ求め、集中の「水中花」その他を耽読したとあった。このおたよりの主旨を『中央公論』十二月号の「石原慎太郎論」の冒頭で、氏は次のやうに敷衍してゐる。氏は「水中花」を掲げ、

「かつてこの詩は私のなかにひとつの文学的体験をのこした。その体験はおのずとひとつの「美」の基準をかたちづくるほどに強烈であった。当時、私はこの詩人について何も知らず、彼が生きているのか死んでいるのかも知らなかった。時はすでに伊東静雄の時代ではなく、街には水中花のかわりに焼跡のほこりが散乱していたから、私はまったく個人的に彼の作品を読んだのである。

……このような体験は、いわば自分のなかに眠っている過去に逆照明をあてて、その意

味を啓示するといった性格を持つてゐる。伊東静雄の詩は、私の脳裏に刻みつけられていた敗戦直前の空の碧さの意味を教えた。そのころ、天は地上に降りて来ていた。時間は停止していた。いつさいは欠伸がでるほどのどろどろで、無責任で、性的な甘美さにみちみち、銀色の翼をかすかにふるわせて航跡を描いていく敵機の軽快な爆音が官能に媚びていた。その風景——見るまに山の縁から葉脈のひとつひとつがうかびあがつて来るほど鮮明な風景のなかに、「死」がかくされていた。私は、そのとき、当時の自分が意識の奥底で、
▲すべてのものは吾にむかひて
死ねといふ、
わが水無月のなかかほうつくしきゞ
という歌に唱和していたことを識つたのである。

……私は日本の詩歌の抒情がこれほど強いしらべを得た例はほかに知らない。」

江藤氏は精緻を極めた伝統のエキスのやうな伊東の詩を起用し、伝統を断絶したと偽称する粗奔な石原氏の小説のクセニエにしてゐる。先の塚本氏の蓮田論と共に、埋没してゐる真実の光彩を再発見するシンセリテイに敬礼する。

さう言へば「群像」十一月号で、井上靖氏も文学自伝「人と風土」で伊東とフィリップで戦死した中島栄次郎について触れて下さ

つてみた。

「伊東静雄の詩集は今でも時々繙いてみるが、曾てそれを読んだ時の驚きや怖れを、いまもそのまま思い出すことができる。詩的眞実というものがいかなるものであるかを、伊東氏の幾つかの作品から知つたことは、私にとつては大きなことであつた。……」

私は中島栄次郎の書くものからは何の影響も受けなかったが、彼に依つて小説を書く以外、もうこの世に何の面白い仕事もないのだということ知らされ、自分もまたいつかはそれを書いてみようかという気持をひき起されたのであつた。」

この井上氏の文章で、まだ掘り起すべき墳墓……いや、建てべき墓標があることを私に思ひ出させた。(O)

果樹園

第四十七号（毎月一日一回発行）
昭和三十四年十二月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 発行人 小高根二郎

京都府京区壬生川通五条下ル
印刷所 同 朋 舎

池田市野町一六八
発行所 果樹園社

定価 三十円